

県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告 3

乙 隈 天 道 町 遺 跡

福岡県文化財調査報告書

第 86 集

上 卷

1 9 8 9

福岡県教育委員会



60号竪穴住居跡出土銅型（ほぼ原寸）

序

福岡県教育委員会では、県道建設に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、企画・立案の段階から埋蔵文化財の保護について十分な配慮を頂くよう協議を重ね、関係各方面に御協力を御願ひしているところであります。県道久留米・筑紫野線建設に際して発掘調査を行い、ここに報告する乙隈天道町遺跡についても同様であります。

県道久留米・筑紫野線の発掘調査は昭和51年度から開始し、中断期間を挟んで13年目を迎え、従来から調査を実施した遺跡を含めて3冊目の報告書となります。この報告書が、社会教育及び文化財保護行政において広く活用され、さらに、学術分野での発展に寄与するところがあれば望外の喜びとするところであります。

調査及び報告書作成の過程で、尊い汗を流して頂いた地元の方々をはじめ、関係各位の皆様方の御協力に対し、深甚の謝意を表します。

平成元年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 竹 井 宏

例 言

1. 本書は昭和62年度に福岡県教育委員会が福岡県土木部道路建設課から委託を受けて実施した、県道久留米・筑紫野線建設に伴って破壊される埋蔵文化財の事前の発掘調査の記録で、県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告書の3冊目にあたる。
2. 本書に収録した遺跡は、乙隈天道町遺跡（上・下巻）である。出土遺物実測図・写真図版は下巻に収録している。
3. 遺構の実測図は調査担当者および調査補助員が主に作成し、製図は浜田信也・豊福弥生・原カヨ子・鶴田佳子・関久江氏の協力を得た。
4. 遺構写真は調査担当者が撮影し、遺物のうち上器の写真撮影等は九州歴史資料館技術主査石丸洋氏の指導のもとに矢野明美・須原悦子氏に御願した。石製品・鉄製品・土製品は調査担当者が撮影した。巻頭図版の鋳型の写真は石丸洋氏による。
5. 出土遺物の整理は岩瀬正信氏の指導のもとに九州歴史資料館で行い、実測は調査担当者・福岡県教育庁文化課水ノ上和同氏の他、平田晴美・大田育子・若松三枝子・鬼木つや子・原富子・佐藤みゆき氏、製図は豊福弥生・鶴田佳子氏の協力を得た。整理期間が短かったため、本書に掲載した図はごく一部である。出土遺物は九州歴史資料館で保管している。
6. 本文中、第1表に記載した面積はプラン・メーターによる計測値で、その際、縮尺1/20の原図を使用した。計測は関久江・原カヨ子氏の協力を得た。
7. 揮図で使用した方位はすべて真北である。
8. 本書の執筆は、スクレーパー（第121図-1）について、県文化課水ノ上和同氏にお願いし、他は児玉が担当した。
9. 本書の編集は児玉が担当した。

本文目次

第1章 はじめに

第1節 調査の経過と組織	1
--------------	---

第2節 遺構の説明の前に	4
--------------	---

第2章 位置と環境

第3章 調査の内容

第1節 遺跡と遺構の概要	13
--------------	----

(1) A地区	13
---------	----

(2) B地区	13
---------	----

第2節 遺構と遺物

(1) A地区	14
---------	----

1 掘立柱建物跡	14
----------	----

2 溝	15
-----	----

(2) B地区	15
---------	----

1 竪穴住居跡	15
---------	----

2 掘立柱建物跡	130
----------	-----

3 方形竪穴	136
--------	-----

4 周溝墓	138
-------	-----

5 円形周溝	143
--------	-----

6 祭祀土壇	145
--------	-----

7 廃棄土壇	162
--------	-----

8 土壇	169
------	-----

9 落し穴状遺構	170
----------	-----

10 溝	172
------	-----

11 その他の遺物	174
-----------	-----

第4章 おわりに

插图目次 (上卷)

第 1 图	調査風景	3
第 2 图	竪穴住居跡穴部模式図	4
第 3 图	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	折り込み
第 4 图	七板遺跡F区21号竪穴住居跡 (1/60)	10
第 5 图	大竹遺跡20号竪穴住居跡	11
第 6 图	乙限遺跡出土銅戈	12
第 7 图	1~3号掘立柱建物実測図 (1/100)	15
第 8 图	1号竪穴住居跡実測図 (1/60)	16
第 9 图	2号竪穴住居跡実測図 (1/60)	17
第 10 图	3号竪穴住居跡実測図 (1/60)	19
第 11 图	1号廃棄土拉・3~4号竪穴住居跡付近上層図 (1/60)	20
第 12 图	6~8号竪穴住居跡実測図 (1/60)	25
第 13 图	9号竪穴住居跡実測図 (1/60)	27
第 14 图	10号竪穴住居跡実測図 (1/60)	28
第 15 图	11号竪穴住居跡実測図 (1/60)	28
第 16 图	12号竪穴住居跡実測図 (1/60)	29
第 17 图	13号竪穴住居跡実測図 (1/60)	30
第 18 图	14・15号竪穴住居跡実測図 (1/60)	31
第 19 图	16号竪穴住居跡実測図 (1/60)	33
第 20 图	17・18号竪穴住居跡実測図 (1/60)	34
第 21 图	19号竪穴住居跡実測図 (1/60)	37
第 22 图	20号竪穴住居跡実測図 (1/60)	38
第 23 图	21号竪穴住居跡実測図 (1/60)	39
第 24 图	21号竪穴住居跡カード実測図 (1/30)	40
第 25 图	22号竪穴住居跡実測図 (1/60)	41
第 26 图	24号竪穴住居跡実測図 (1/60)	43
第 27 图	25~27号竪穴住居跡実測図 (1/60)	44
第 28 图	28号竪穴住居跡実測図 (1/60)	45
第 29 图	30号竪穴住居跡主柱穴 (P ₂) 実測図 (1/30)	46
第 30 图	30号竪穴住居跡実測図 (1/60)	47
第 31 图	31号竪穴住居跡実測図 (1/60)	50

第 32 図	32・33号竪穴住居跡実測図 (1/60)	51
第 33 図	34・35号竪穴住居跡実測図 (1/60)	53
第 34 図	36・37号竪穴住居跡実測図 (1/60)	54
第 35 図	38号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/40)	折り込み
第 36 図	39~41号竪穴住居跡実測図 (1/60)	折り込み
第 37 図	42~44号竪穴住居跡実測図 (1/60)	60
第 38 図	45・46号竪穴住居跡実測図 (1/60)	61
第 39 図	46号竪穴住居跡カメラ実測図 (1/30)	62
第 40 図	47・49A・B号竪穴住居跡実測図 (1/60)	64
第 41 図	51号竪穴住居跡実測図 (1/60)	66
第 42 図	52号竪穴住居跡実測図 (1/60)	68
第 43 図	53・54号竪穴住居跡実測図 (1/60)	70
第 44 図	55号竪穴住居跡実測図 (1/60)	72
第 45 図	56号竪穴住居跡実測図 (1/60)	73
第 46 図	57・58号竪穴住居跡実測図 (1/60)	75
第 47 図	59・60号竪穴住居跡実測図 (1/60)	77
第 48 図	61号竪穴住居跡実測図 (1/60)	79
第 49 図	62号竪穴住居跡実測図 (1/60)	80
第 50 図	66号竪穴住居跡実測図 (1/60)	81
第 51 図	67号竪穴住居跡実測図 (1/60)	83
第 52 図	68号竪穴住居跡実測図 (1/60)	84
第 53 図	69号竪穴住居跡実測図 (1/60)	87
第 54 図	70号竪穴住居跡実測図 (1/60)	88
第 55 図	71号竪穴住居跡実測図 (1/60)	90
第 56 図	72号竪穴住居跡実測図 (1/60)	91
第 57 図	73号竪穴住居跡実測図 (1/60)	92
第 58 図	74・75号竪穴住居跡実測図 (1/60)	折り込み
第 59 図	76号竪穴住居跡実測図 (1/60)	95
第 60 図	77号竪穴住居跡実測図 (1/60)	96
第 61 図	78号竪穴住居跡実測図 (1/60)	97
第 62 図	79号竪穴住居跡実測図 (1/60)	98
第 63 図	80号竪穴住居跡実測図 (1/60)	100
第 64 図	81号竪穴住居跡実測図 (1/60)	101

第 65 図	81号竪穴住居跡カマド実測図 (1/40)	102
第 66 図	82号竪穴住居跡実測図 (1/60)	102
第 67 図	83号竪穴住居跡屋内土壌実測図 (1/30)	103
第 68 図	83号竪穴住居跡実測図 (1/60)	104
第 69 図	84号竪穴住居跡カマド実測図 (1/60、1/30)	106
第 70 図	85~87号竪穴住居跡実測図 (1/60)	折り込み
第 71 図	88号竪穴住居跡実測図 (1/60)	111
第 72 図	89号竪穴住居跡実測図 (1/60)	112
第 73 図	90号竪穴住居跡実測図 (1/60)	113
第 74 図	91号竪穴住居跡実測図 (1/60)	114
第 75 図	91号竪穴住居跡屋内土壌実測図 (1/20)	115
第 76 図	92号竪穴住居跡実測図 (1/60)	折り込み
第 77 図	92号竪穴住居跡屋内土壌実測図 (1/20)	115
第 78 図	93号竪穴住居跡実測図 (1/60)	119
第 79 図	95号竪穴住居跡実測図 (1/60)	120
第 80 図	96号竪穴住居跡実測図 (1/60)	121
第 81 図	99号竪穴住居跡実測図 (1/60)	123
第 82 図	100号竪穴住居跡実測図 (1/60)	124
第 83 図	101号竪穴住居跡実測図 (1/60)	125
第 84 図	102号竪穴住居跡実測図 (1/60)	126
第 85 図	103号竪穴住居跡実測図 (1/60)	127
第 86 図	103号竪穴住居跡主柱穴 (P ₂) 土器出土状態実測図 (1/30)	128
第 87 図	106号竪穴住居跡屋内土壌実測図 (1/30)	129
第 88 図	掘立柱建物柱穴遺物出土状態 (1/30)	131
第 89 図	4~7号掘立柱建物実測図① (1/100)	132
第 90 図	8~13号掘立柱建物実測図② (1/100)	133
第 91 図	14~17号掘立柱建物実測図③ (1/100)	134
第 92 図	18~21号掘立柱建物実測図④ (1/100)	135
第 93 図	方形竪穴実測図 (1/60)	137
第 94 図	1・2号周溝墓実測図 (1/100)	139
第 95 図	3号周溝墓実測図 (1/100)	141
第 96 図	4・5号周溝墓実測図 (1/100)	142
第 97 図	1~7号円形周溝実測図 (1/80)	144

第 98 回	祭祀土壇跡実測図① (1/40)	146
第 99 回	祭祀土壇跡実測図② (1/40)	147
第 100 回	祭祀土壇跡実測図③ (1/40)	148
第 101 回	祭祀土壇跡実測図④ (1/40)	149
第 102 回	祭祀土壇跡実測図⑤ (1/40)	150
第 103 回	祭祀土壇跡実測図⑥ (1/40)	151
第 104 回	祭祀土壇跡実測図⑦ (1/40)	152
第 105 回	祭祀土壇跡実測図⑧ (1/40)	153
第 106 回	鹿棄土壇実測図① (1/60)	163
第 107 回	鹿棄土壇実測図② (1/60)	164
第 108 回	鹿棄土壇実測図③ (1/60)	165
第 109 回	鹿棄土壇実測図④ (1/60)	166
第 110 回	土壇実測図 (1/30)	169
第 111 回	落し穴状遺構実測図 (1/30)	171
第 112 回	2号溝土層図 (1/60)	173
第 113 回	遺構配置図	180
第 114 回	竪穴住居跡竪穴部集成図	182
第 115 回	甘木市宮原遺跡C地区3号竪穴住居跡	184

表 目 次

表 1	竪穴住居跡計測表	176
-----	----------	-----

第1章 はじめに

第1節 調査の経過と組織

調査の経過 1987年2月、筆者は吉井町で塚堂古墳・日岡古墳の調査を行っていたが、ここに報告する天道町遺跡の横を通った時、この部分に重機が導入され、擁壁工事のための掘削が行われていた。この部分は地形的にも遺跡の存在が十分予測される所であり、かつて、渡辺正気氏が銅戈の出土を報告された遺跡（註1）とは至近距離にあるため、急拠、福岡県甘木土木事務所と連絡を取り、分布調査を行った。その間、工事を中止して頂いたが、路線内は言うに及ばず、広い範囲に多量の土器片の散布が観察され、試掘調査の必要があり、甘木土木事務所と協議の結果、3月に試掘調査を実施した。その結果、路線内の内、南側には濃密な遺構の存在が確認され、北側はピットが散在する程度であった。よって、この部分の調査の必要性を甘木土木事務所に通知し、再度協議を行った。しかし、福岡県教育庁文化課で以前に行った分布調査の結果の回答文書では、ここは、要調査地点として上ってはおらず、これは文化財サイドの落ち度であり、協議は当初からつまずいた。が、埋蔵文化財が現実に存在するのであり、それを無視して県道建設を行うことは許されず、県道建設課・甘木土木事務所の深い御理解の上、発掘調査を行うこととなった。

調査は、試掘調査の結果ののっとり、1987年8月1日より南側から重機で表土剥ぎを開始し、盆明けから作業員を導入し、調査を開始した。調査面積に対して遺構の数が異常に多く、足の踏み場もない程であり、七砂の搬出にも苦慮し、ベルト・コンベヤー20台を導入して調査を行った。遺構が何層にも重なり、そのため、実測・写真撮影にも多大の日時を要し、調査が完了したのは1988年3月15日であった。出土遺物はバン・コンテナー800箱に達し、その他に重要遺物として別に取り上げた遺物はバン・コンテナー10箱に達する。以下、調査の経過を月を追っておおまかに振りかえってみよう。

8月1日から重機を導入して表土剥ぎを開始した。筆者は県道筑紫野・三輪線第2地点（森山地区）を調査中で、天道町遺跡の表土剥ぎ・調査を並行して行った。土置場の都合で南側から表土を剥ぎ始めたが、竪穴住居跡を中心におびただしい量の遺構が顔を見せ始めた。調査区の南側から北に向って100m程の間は足の踏み場もない程で、地山（黄色・チョコレート色）は僅かで、一面が真っ黒であった。試掘時にトレンチ調査で包含層と考えていた部分は竪穴住居跡で覆土であることが解り、その様な部分が2ヶ所あった。とりあえず、調査区の南側から北へ約100mまで表土剥ぎを行い、それ以北を土砂の仮置場とし、時期をみてそれ以北の表土剥ぎ

と調査を行うこととした。先述のように盆明けから作業員を導入し、調査を開始した。当初は調査区の脇に排土を置いていたが、土捨て場に困るようになり、やむをえず、ベルト・コンベヤーを20台導入して北側の仮置場とした部分に排土を捨てることにした。8月は遺構の切り合い関係を把握することに時間を費やした。

9月にはいり、調査区南側拡張部分の遺構検出を開始した。日照りと豪雨の繰り返しで調査は困難を極めたが、作業員を大量に動員して調査を続行した。遺構は、竪穴住居跡の場合は貼り床面を検出した段階でその面で確認できる遺構のみを掘り、独立柱建物跡と認定できたものは柱痕の検出に努めたが、その他の遺構については完掘した。以降、この方法で調査を行ったが、特に竪穴住居跡の切り合いが複雑な場合は困難を極めた。県文化課日高正幸氏により、実測用の10m方眼の杭打ちをして頂いた。一部、実測を開始した。

10月は竪穴住居跡の複雑に切り合う部分の調査に終始した。調査区中央部分は特に遺構の密集するところであり、頭の痛い日々であった。遺構の実測は南側から継続して行った。好天に恵まれ、調査は順調に進んだ。

11月は調査区全体の遺構検出を目標に調査を行った。空中写真を撮影することが最大の課題となった。写真撮影は個別の小さな遺構を除いて、遺構が密集するため写真撮影台を組み立てることは危険なので、一部の遺構を除いて空中写真を撮影することにした。よって、竪穴住居跡の床面は写真撮影まで下げることができず、この時期は竪穴住居跡の床面検出とその面での遺構実測に終始した。この月の下旬は雨の日が多く、何度かの天気待ちのあと2日間の撮影を行った後、南側から竪穴住居跡の床面下の調査にはいり、重機を導入して土砂の仮置場以北の表土剥ぎを開始した。

12月にはいり、竪穴住居跡の床面下の調査を続行し、竪穴住居跡の切り合い関係の不明な部分の補足調査、貼り床面下からの新たな遺構の検出、独立柱建物跡の不足した柱穴の確認等を行った。霜が降る季節ではあったが、新たな遺構の検出等で作業員の士気は上がり、12月を乗り切ることができた。土器の出土量は異常な程で、正月前に、バン・コンテナ500箱を九州歴史資料館に運び込んだ。

1月は正月明け後、すぐ発掘調査を再会した。12月と同様な天候で調査は困難を極めた。住居貼床面下の調査・実測、個別遺構の実測・写真撮影を行った。主に、住居の切り合い関係の再確認を行った。その過程で、遺構の切り合い関係の図面上の調整、出土遺物の再確認を行ったが、遺構があまりにも密集しており、整理の過程でも、ひとつの出土遺物の帰属関係について自信の持てないものもある。

2月も1月の調査の続行であった。初旬は住居貼床面下の完全検出を目ざしてその空中写真撮影を目的としたものであった。実測・写真撮影も並行して行った。天候は必ずしも最悪ではなかったが11日に無事に空中写真撮影を終了し、さらに、下層の遺構の調査を続行した。

3月は2月の調査の継続と現場の収束であった。本来は2月で調査が完了する予定であったが、調査担当者の個人的な理由により、調査をこの月まで延長せざるを得なかった。そのことについてはどうしようもないことであったが、とりあえず、不十分ながら遺構の最小限の図化はどうかすることができた。天道町遺跡の最終的な調査を終えたのは、筑後川に菜の花が咲く頃、3月15日であった。

調査の組織（昭和62年度）

総 括 福岡県教育委員会

教育長	友 野 隆
文化課長	窪 田 康 徳
文化課長技術補佐	宮小路 賀 宏
文化課記念物係長	栗 原 和 彦
文化課庶務係長(兼)	平 聖 峰
同事務主査	竹 内 洋 征
同主任主事	沢 田 俊 夫

調 査 北筑後教育事務所

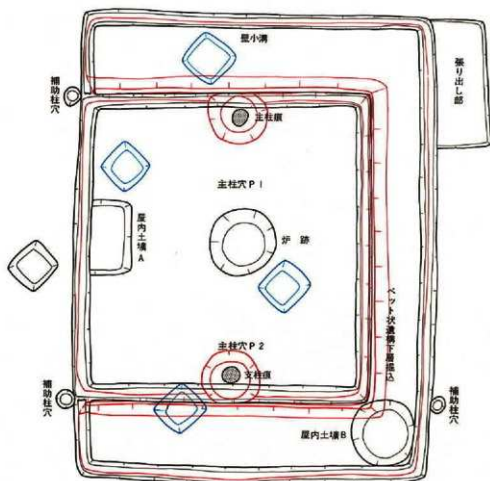
技術主査	児 玉 真 一
------	---------



第1図 調査風景

第2節 遺構の説明の前に

天道町遺跡では遺構が複雑に切り合っており、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壇・溝等の切り合い関係を示すために、3色刷りをする場合がある。また、各色で波線表示している場合もある。これらについて以下に説明を加え、遺構図の理解を容易にしたいと思う。ただし、遺構が複雑に切り合っており、竪穴住居跡の切り合い関係を正確に捕らえて図示できたか否か、掘り過ぎたり、掘り足りずに図化が混乱した場合もあり、それはこの報告書の中で不正確ながら修正している。それらのことを十分に踏まえて以下の模式図を見て頂きたい。



第2図 竪穴住居跡穴部模式図

この模式図は弥生時代終末期～古墳時代初期の土器を出土した竪穴住居跡から作成したものである。理想的に検出された遺構を想定して作成し、かつ、複数の遺構を合成したものであることを断っておきたい。

以下、具体的に説明を行う。

第2図は黒・赤・青の3色で図示している。黒・赤は竪穴部の構造上における作業過程上の新旧関係を示し、青は竪穴住居跡竪穴部に切られた古い遺構（掘立柱建物跡の一部）を示している。3色で図示した各部の個別の説明をすれば以下のようである。

竪穴部……通常の発掘調査で検出する遺構で、竪穴住居の主要部分である。種々の事例から、この外側まで竪穴住居は拡がるが、その範囲を確定できる具体的な遺構は検出していない。遺構検出面・貼床上の遺構は黒色で図化している。

(壁小溝) 周溝と一般的に呼ばれている遺構である。貼床を剥がすと壁小溝の下層の地山面に、径5～10cm程の浅いビット状の遺構が直線的に並ぶ。他の遺跡で板材をこの部分に打ち込んだ例があり、壁体保護を目的とし板、および杭等を打ち込んだ遺構であろうと考えている。

(主柱痕) 住居を廃棄する時、主柱を抜かない場合、柱が腐食して貼床面に普通径10～20cmの主柱痕を検出することができる。

(主柱穴) 厚さ1～2cmの貼床を剥がし、刺床と地山間の上(普通は黒褐色土に地山の黄色ブロックを含む)を除去すると径50cm・深さ30～50cm程のビットを検出することができる。これを主柱穴と呼び、貼床の下層で検出するので赤色で図示している。主柱が掘り抜かれている場合は主柱穴は原状を保たず貼床面から荒らされているので、黒色で図化している。

(炉跡) 貼床面から掘りこみ、内側に粘質土を貼ったと思われ、内側が赤く、硬化している場合が多い。

(屋内土壇) 普通、竪穴部長壁の中央部分にひとつ設置されるが、時として複数の屋内土壇を設置する場合がある。それらの性格については問題が残るが、一応屋内土壇A、同Bと使い分ける場合がある。屋内土壇Bは、その設置場所が一定しているわけではないが、図のように竪穴部の隅角部に検出されることが多い。

(補助柱穴) 上屋は基本的に2本の支柱で支えるが、補助柱を立てたと思われるビットを補助柱穴と呼ぶ。本遺跡ではベッド状遺構に沿ってその延長線上の壁際に検出した例(P₁・P₂)が多く、稀にP₃のよう

に、1個しか検出できなかった例もある。

(ベッド状遺構) 竪穴部の両短壁に設置する場合や“コ”字形に設置する場合が多い。時期がやや降る場合、本遺跡では、屋内土壌Aを除いた壁際全周に設置されている。本遺跡のベッド状遺構は竪穴部掘削時の土を盛り上げて造ったもので、地山削りだしのものは1例もない。

(ベッド状遺構下層掘込) ベッド状遺構・貼床を全て除去して地山面まで掘り下げた時、ベッド状遺構下層に断面が逆台形の掘込が検出できる。この掘込はベッド状遺構の下層だけに限って認められる。この掘込は生活面の下層にあり、生活時には床面の下にあるので赤色で図示している。その機能については検討課題として残る。

(張り出し部) 竪穴部の壁外に長方形の浅い遺構を検出することがある。あまり、例のない遺構であるが他遺跡の事例から、住居に伴うことが判明しており、本遺跡でも検出している。その機能については今後の検討課題として残る。

以上が乙限天道可遺跡の大部分の竪穴住居跡に伴う個別遺構である。3色のうち、基本的には黒色は現実の生活面に存在する遺構を示し、赤色はその竪穴住居に伴うが、生活面では貼床・ベッド状遺構の下層にあって目に見えない遺構を示している。青色は黒色で図示した遺構に切られた前代の遺構のうち、たとえば、竪穴部内の床面下の部分を示している。

しかし、本遺跡では遺構が複雑に切り合っており、発掘中に必ずしもその層位を正確に把握できなかった場合がある。よって、赤・青の線に多少の混乱が存在し、また、図が複雑になる場合は青で示すべき線を黒の破線で示した場合もある。

以上で、黒・赤・青線の意味を御理解いただけたと思う。

註 1 井上俊男・柴田泰典・渡辺正気「福岡県三井郡小郡町大字乙限発見の二口の銅戈」(『九州考古学』14 所収) 1962



- | | |
|------------|---------------|
| 1. 乙隈天道町遺跡 | 32. 横隈山古墳 |
| 2. 小郡正尻遺跡 | 33. 横隈狐塚遺跡 |
| 3. 小郡前伏遺跡 | 34. 伊勢山遺跡 |
| 4. 大板井遺跡 | 35. 西中限遺跡 |
| 5. 大板井遺跡 | 36. 小郡官街遺跡 |
| 6. 薬師堂遺跡 | 37. 向架地遺跡 |
| 7. 薬師東堂遺跡 | 38. 大崎小園遺跡 |
| 8. 宮巡遺跡 | 39. 井上庵寺 |
| 9. 春園遺跡 | 40. 干潟遺跡 |
| 10. 10地点 | 41. 東小田七板遺跡 |
| 11. 立野遺跡 | 42. 西下野1号墳 |
| 12. 宮原遺跡 | 43. 大師堂1号墳 |
| 13. 上々浦遺跡 | 44. 山隈窯跡群 |
| 14. 下原遺跡 | 45. 姥ノ峠古墳 |
| 15. 西原遺跡 | 46. 小隈1号墳 |
| 16. 高原遺跡 | 47. 小隈窯跡群 |
| 17. 口ノ坪遺跡 | 48. 大竹遺跡 |
| 18. 梶原遺跡 | 49. 栗田遺跡 |
| 19. 柿ノ上遺跡 | 50. 馬田りんりん石古墳 |
| 20. 行司田遺跡 | 51. 宮原古墳 |
| 21. 琴ノ宮遺跡 | 52. 神藏古墳 |
| 22. 江藤遺跡 | 53. 小田道遺跡 |
| 23. 大木遺跡 | 54. 大願寺遺跡 |
| 24. 宮ノ上遺跡 | 55. 小田小塚古墳 |
| 25. 杉野遺跡 | 56. 小田茶臼塚古墳 |
| 26. 中原前遺跡 | 57. 小田集落遺跡 |
| 27. 出口遺跡 | 58. 鬼ノ枕古墳 |
| 28. 東小田峯遺跡 | 59. 池ノ上墳墓群 |
| 29. 限遺跡群 | 60. 古寺古墳墓群 |
| 30. 津古墳群 | 61. 持丸古墳群 |
| 31. 三国の鼻古墳 | 62. 柿原野田遺跡 |

第3図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

第 2 章 位置と環境

乙隈天道町遺跡は小都市大字乙隈・朝倉郡夜須町大字四三島にまたがって所在する。すなわち、A地区が夜須町に、B地区が小都市に属し、B地区の調査区東端と北端が行政境である。

遺跡は宝満川の支流である草葉川北岸の低台地上に立地し、現状は水田である。南側の水田面との比高差は4m程で、遺跡の所在する部分は西・南に向ってわずかに傾斜している。この台地は三方を東の宝満川・南の草葉川・北の曾根田川に囲まれ、起伏が乏しく、北は群集墳が存在する三輪町栗田・森山、夜須町三牟田等、山麓部へ延びている。先述の3河川流域は古くから水田耕作の適地として利用されていたと思われ、この流域に面する台地縁辺部には弥生時代前期の遺跡が散在し、それ以降、この台地は居住地区・墓地として活用されていたようである。時として、縄文時代の遺物が出土することがあるが、弥生時代以降の遺跡が多く見受けられる。また、弥生時代中期の送葬儀礼に伴う丹塗磨研土器が多く出土する地域である。

天道町遺跡に関する周辺の遺跡を概観してみよう（第2図参照）。

乙隈遺跡（註1）……天道町遺跡の西側約100mの地点（乙隈字542番地）から、昭和36年に小能見正義氏が氏所有の水田から2口の銅戈を発見し、翌37年に学会に報告された。小能見氏の話によれば甕棺墓からの出土と思われる。天道町遺跡から甕棺墓は検出されていないが、それに伴う祭祀土壌が多数存在し、本調査区の西側に甕棺墓地があると想定され、祭祀の場所の一部が本調査区内にかかっているものと思われる。なお、本書に掲載した銅戈の図は片岡宏二氏による（第6図-註2）。

大竹遺跡（註3）……本遺跡と同じ台地上に立地し、同じく草葉川北岸の台地縁辺部に営まれている。74軒の竪穴住居跡を中心に16基の埋葬遺構等が出土している。出土遺物が遺構に伴うか否かの記述がないので判断しにくい。土器から見れば天道町遺跡とほぼ同時期で弥生時代中期の竪穴住居跡、同終末期～古墳時代初期の竪穴住居跡が検出されている。本遺跡と並行する時期の集落跡と考えられるが、土器の出土状態が報告されていないので細かくは判断できない。ただし、この遺跡で重要なことは武田光正氏によって明らかにされたように、「20号住居跡の周溝内施設について」（註4）である。氏は卓越した調査方法により、周溝内に幅20～30cmの羽目板痕と杭痕を明瞭に検出された。それまで、周溝を“壁小溝”と呼称してきたが（註5）、氏により、その機能が実証的に明らかにされた。

東小田遺跡部（註6）……天道町遺跡と同様に県道久留米・筑紫野線の事前調査によって明らかにされた遺跡である。峯遺跡では、夜須町が行った園場整備に伴う調査と同様に甕棺墓を中心とする遺構が検出されている。七板遺跡F区は集落跡で弥生時代の竪穴住居跡32軒、古墳

時代の竪穴住居跡7軒、奈良時代の竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡2棟の他に土壇・溝等が検出されている。天道町遺跡のような弥生時代終末～古墳時代初期の竪穴住居跡は検出されていないが、当該時期の溝があり、調査区外にはその時期の集落が展開するものと推察される。この遺跡で注目されるのは、弥生時代後期初頭に位置づけられている21号竪穴住居跡である。竪穴部の東側短壁に張り出し部を設け、方形の炉の周囲には北側で一部途切れるか溝を掘っている(第4図)。大型住居ではないが入念に造っている。天道町遺跡でも時期は降るか張り出し部を持つ例があり、貴重な比較資料である。

葦遺跡(註7)……上記東小田遺跡群の葦遺跡に北接する部分で、県営園場整備事業に伴ない夜須町が調査を行った。1985年から1988年の足かけ4年にわたる調査で、竪穴住居跡約550軒、甕棺墓約600基を検出し、弥生時代の社会を考える上で極めて重要な資料が検出している。中でも10号甕棺墓とその副葬品(前漢鏡2、鉄剣1・鉄矢1・鏃子1、ガラス璧を再利用した装身具2)は国の重要文化財に指定されている。他の甕棺墓からも副葬品が検出されており、竪穴住居跡の密集度や出土品から、葦遺跡はこの地域の拠点集落であろうと考えられる。

栗田遺跡(註8)……朝倉郡三輪町栗田に所在し、県営園場整備に伴って発掘調査がなされた。調査地点は広範囲にわたり、それぞれA～E地区にわけられている。本報告の出ているB地区では竪穴住居跡3軒・土壇墓(木棺墓を含む)11基のほか54基の甕棺墓が調査され、

- ① 甕棺墓地とそれに関わる祭祀遺構の検出。
- ② 甕棺墓・祭祀遺構への多量の丹塗磨研土器の供献行為。
- ③ 祭祀土器の再配置。

などの事が明らかにされた。A～C地区の出土品は昭和53年に国の重要文化財の指定を受けている。

城山遺跡群(註9)……朝倉地方の平野の真中に独立してそびえる城山(花立山ともいう)の北西側の丘陵に営まれている。1971・1972年に調査された。

1971年の調査では、焼ノ峠古墳・松尾古墳群が調査された。焼ノ峠古墳は南面する前方後方墳で、測量図によれば周濠を含めて全長43m程である。主体部は未調査のため不明だが、周濠には供献土器が転落した状況で出土している。調査担当者の柳田康雄氏は出土土器から4世紀中頃の年代をあてている(註10)。同時に調査された松尾古墳群では方形周濠墓(1号墳)・円形周濠墓(2号墳)が各1基ずつ検出されている。周濠内から土器が出土しており、時期は焼ノ峠古墳とさほど隔たりはないようである。

1972年の調査では、城山遺跡・金山遺跡が調査された。城山遺跡では弥生時代前期後半～中期前半の甕棺墓34基・土墓(木棺墓を含む)67基が検出されている。埋葬施設は相互に切りあう場合もあるが、配列状況は整然とし、墓域の中に「広場」的な空白地区がある。金山遺跡では顕著な遺構は検出されていないが、旧石器時代～弥生時代の遺物が出土している。

金山遺跡(註11)……先述した城山遺跡の北に位置する集落跡である。表採資料を含めて出土遺物は旧石器時代～古墳時代に及ぶ。検出された遺構は弥生時代中期末～後期の竪穴住居跡で他に土壌・溝等が検出されている。竪穴部床面の柱配置で興味深い竪穴住居跡があり、天道町遺跡の竪穴住居跡を考える上で極めて興味深い遺跡である。調査担当者の井上裕弘氏により、弥生時代中期末～後期の土器の編年案が提示されている。

干潟遺跡(註12)……天道町遺跡と同様に、泉道久留米・筑紫野線建設に伴って事前調査された村落跡である。遺構の主体は奈良時代にあり、竪穴住居跡36軒・掘立柱建物18棟の他に土壌・溝・ピット群等が検出されている。奈良時代の村落を考える場合、極めて重要な遺跡ではある。

干潟遺跡(註13)……主に甕棺墓・土壌墓(木棺墓を含む)からなる埋葬遺構である。甕棺墓32基・土壌墓10基が検出され、それらは、かなり整然と配列されている。

干潟遺跡(註14)……主に甕棺墓・土壌墓(木棺墓を含む)からなる埋葬遺構で、他に古墳が1基調査されている。甕棺墓29基・土壌墓7基等が調査され、墓地の形成について考える場合、重要な遺跡である。

以上が宝満川東岸側で発掘調査された遺跡の主なものである。発掘調査されながら、未報告のものが多々あるが、それらは割愛する。

宝満川西岸側でも小都市・筑紫野市教育委員会が精力的に発掘調査を行っている。なかには天道町遺跡を考えるうえで重要な遺跡もあるが、ここでは宝満川東岸側で発掘調査された遺跡に限って紹介するに留めておく。

以上の記述から、天道町遺跡周辺の状況をおおむね御理解頂けたと思う。弥生時代中期には夜須町峯遺跡・七板遺跡(未報告分あり-県営園場整備関係)、三輪町栗田遺跡等に見られるように丹塗磨研土器が甕棺墓へ大量に供献され、他地域と異なった状況がある。また、弥生時代終末期頃は三輪町犬竹遺跡のように竪穴部内で重要な遺構が発見されている。古墳時代にはいと夜須町焼ノ峠古墳の成立や、古式須恵器を焼いた竊跡が花立山の北側山麓にみられ、新たな文化の息吹きとともに、政治・経済・社会全般にわたる大変革の時代を迎える。

註 1 井上俊男・柴田泰典・渡辺正気 「福岡県三井郡小郡町大字乙隠発見の二口の銅戈」(『九州考古学』14 所収) 1962

2 片岡公二編 『大板井遺跡』 1984 小都市教育委員会

3 石山 熊編 『大竹遺跡』 1985 三輪町教育委員会

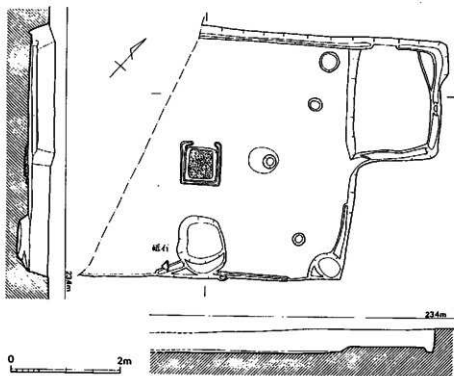
4 武田光正 「20号住居跡の周溝内施設について」 『大竹遺跡』 1985 三輪町教育委員会

5 福岡県教育委員会 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 2・5・8・14集

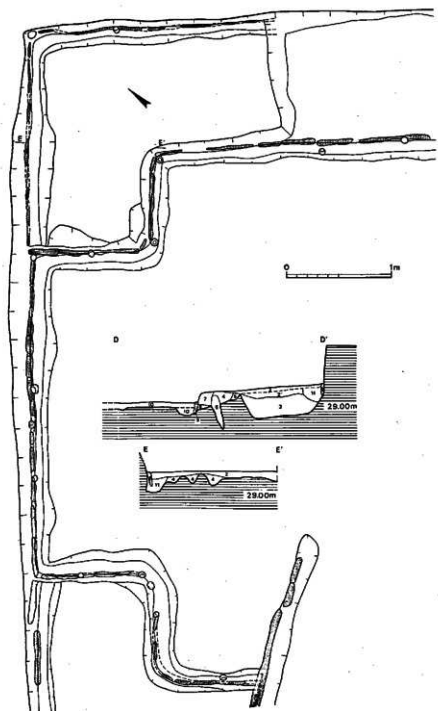
6 石山 熊編 『東小田遺跡群』(泉道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告 第2集) 1985

福岡県教育委員会

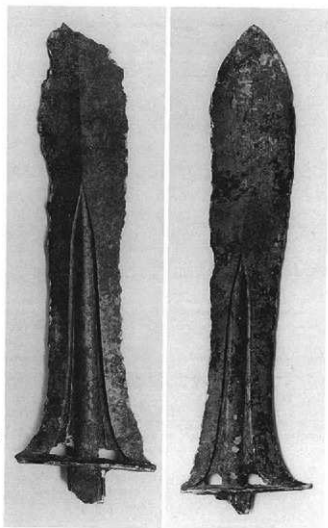
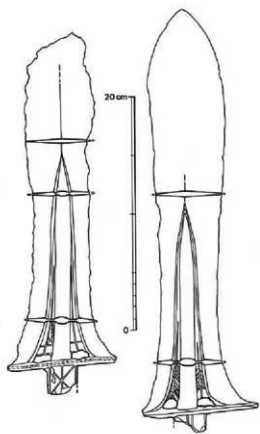
- 7 調査担当者の夜須町教育委員会佐藤正義氏の御教示に依る。
- 8 馬田弘穂編 『栗田遺跡 (A～C地区)』 1974 二輪町教育委員会
 " 『栗田遺跡 (D～E地区)』 1975 三輪町教育委員会
 " 『栗田遺跡 (B地区)』 1986 二輪町教育委員会
- 9 柳田康雄編 『城山遺跡群』 (図版編) 1971 夜須跡教育委員会
 橘 昌信編 『城山遺跡群発掘調査報告書』 (城山遺跡・金山遺跡) 1973 夜須町教育委員会
- 10 柳田康雄 『三・四世紀の土器と鏡』 (『森貞二郎博士古稀記念古文化論叢』所収) 1982
- 11 井上裕弘編 『金山遺跡』 1981 夜須町教育委員会
- 12 樋口達也編 『干潟遺跡』 (原道久・福米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告 第1集) 1980
 福岡県教育委員会
- 13 片岡弘二編 『干潟遺跡』 1983 小郡市教育委員会
- 14 速水信也編 『干潟下屋敷遺跡』 1987 小郡市教育委員会



第4図 七板遺跡F区21号竪穴住居跡 (1/60)



第5圖 大竹遺跡20号竪穴住居跡



第6图 乙限遗址出土铜戈

第 3 章 遺構と遺物

第 1 節 遺跡と遺構の概要

天道町遺跡は小都市と朝倉郡夜須町にわたって存在する(付図-1)。宝満川の支流の草場川右岸低台地上に営まれ、現在は田畑である。至近距離の乙隈遺跡では銅戈が甕棺から出土している。天道町遺跡では後述するように祭祀土壌を検出し、両遺跡は弥生時代中期頃の一定期間、埋葬関係遺構だけが営まれ、遺跡名は異なるが本来は一つの墓域を形成していたようである。天道町遺跡では甕棺墓は検出されていないが墓域の東側周辺部にあたり、祭祀関係の遺構が密に存在することから、葬送に際する「まつり」が執り行われた場所の一部であったであろうと考えられる。その後一時期、方形周溝墓が営まれるが、あまり時間をおかずこの地域は居住地として利用され始め、以降、集落関係遺構は間断的に営まれ、中世に至る。しかし、その中心は弥生時代終末～古墳時代初期の期間である。

以下に説明を加える遺構・遺物については整理期間の制約があり、図示した出土品や遺構について不十分な点が多々あるが、御容赦願いたい。

(1) A 地区 (図版 2、付図 1)

農道の北側を A 地区とし、夜須町に含まれる。中央に溝を 1 条(M1)、南西隅に掘立柱建物跡 3 棟(H1～H3)を検出した。その他、ピットがまばらに存在するが遺構としてのまとまりはない。弥生～古墳時代前期に含まれる遺構はない。試掘の結果、A 地区以北ではピットすら検出されず、この地区が遺構の拡がりの北限にあたる。

(2) B 地区 (図版 3・4、付図 1)

農道の南側を B 地区とし、小都市に含まれる。調査区の東側はすぐ夜須町である。遺構の殆どがこの地区に密集する。竪穴住居跡(107軒)、掘立柱建物跡(23棟)、祭祀土壌(44基)、鹿糞土壌(18基)、溝(6条)、周溝墓(5基)、円形周溝(7基)、落し穴状遺構(5基)等のほか、多数のピットが足の踏み場もないほど存在する。遺構どうしの切り合いがすさまじく、切り合い関係の無い遺構は五指に満たない。遺構の詳細は後述するが、B 地区の概要は下のようである。

- ① 弥生時代後期後半～古墳時代初期の竪穴住居跡の分布上の北限は 2・7号竪穴住居跡で、その北12mを東西に走る溝 2 は、この期間のどの時期か明確ではないが、集落の北を限る遺構であろうと考えられる。

- ② 弥生時代の内に含まれると考えられる掘立柱建物跡(H 5～H 23)も溝2の南側に存在する。
- ③ 方形周溝墓・円形周溝も溝2の南側にしか存在しない。
- ④ 古墳時代後期以降の遺構(具体的にはカマドを持つ6世紀後半以降の竪穴住居跡)は、同一時期どうしの遺構間の切り合いはなく、極めてまばらに存在する。
- ⑤ 奈良時代の廃棄土壌は溝5の外側にも拡がり、散漫なあり方を示すが、溝2が北限である。

以上は遺構についてであるが、本報告書の中では、調査中の遺構の切りあい関係の把握が不十分の場合が多々あり、推定復原して図示した遺構も多い。縄文時代の遺物が出土しているが、その時期の遺構は落し穴状遺構を除いて検出されず、理解に苦しむ。おそらく、弥生時代以降の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壌等に破壊され尽くされたと考えられるより他はない。また、弥生時代後期以降の各遺構からの出土遺物の総量は4トンのトラックに4台分あり、調査後の整理期間が短かったため、図示したのは極一部で、土器、石器の多くは写真図版だけの場合がある。しかし、これらの多くは遺構に伴わず、流れ込んだ状態で検出した。縄文時代の出土遺物は、その他の遺物として一括して後述する。

太平洋戦争の頃、この地区の南側をほぼ東西に飛行機の誘導路を造成している。その誘導路は大刀洗飛行場から延びてきたもので、調査区を斜断し夜須町の方角に向っている。その一部は夜須町西端部の調査においても認められ、さらに、筑紫野市側に延びているようである。この誘導路によっていくつかの遺構が破壊されている。

第2節 遺構と遺物

(1) A地区

1 掘立柱建物跡

調査区の南西隅に3棟(H 1～H 3)検出した。3棟は切り合っているが新旧関係は不明な部分を残す。西側は麦が植わっており、南側が使用中の農道の下にあるため調査ができず、規模等については明らかにし難い。

1号掘立柱建物跡(図版2・第7図) 東西2間、南北1間分を検出したが遺構はさらに西および南に延びる。建物の全容を明らかにできなかったので棟行方向は不明である。柱配置から判断して、この建物は総柱ではなく、倉庫棟ではなかろう。建物の一辺はほぼ真東西方向を向いている。

2号掘立柱建物跡(図版2・第7図) 1号に対してほぼ45°南(あるいは東)に主軸を振っ

て建てられている。1号と同様に遺構は西および南に延びる。柱配置から判断して、この建物は総柱ではなく、倉庫棟ではなからう。

3号掘立柱建物跡(図版2・第7図) H1と同様に建物の一辺は真東西方向を向いている。遺構は西および南に延びる。柱配置からこの建物は倉庫棟の可能性を否定できないが、1・2号と同様の建物であったと推定する。

2 溝(図版2、付図1)

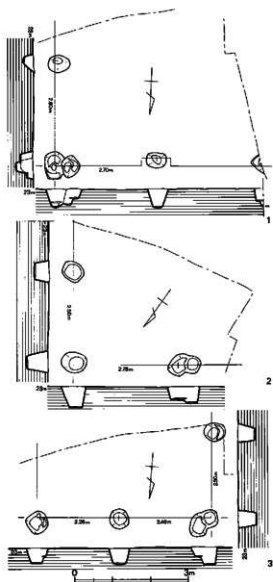
溝1 A地区の中央を南々東~北々西に走る溝である。近世以降のものが出土し、天道町遺跡では最も新しい遺構である。古老の話によれば、昔(その時期は不明)の行政境であろうということである。この溝はB地区では検出されておらず、おそらく農道の下で東側に曲がっているものと推測する。この部分の行政境は江戸時代以降、かなり変動していたようである。

(2) B地区

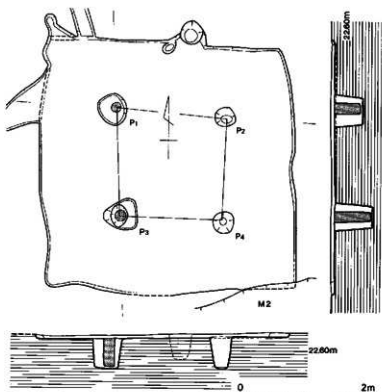
1 竪穴住居跡(付図1、表1)

天道町遺跡の竪穴住居跡の全てをB地区で検出した。その総数は107軒におよび、竪穴住居跡を検出した範囲はおよそ2,500㎡である。

この地区は表土剥ぎの段階から、一面真っ黒で地山が僅かしか視認できなかった。僅かの時期差のなかで住居が複雑に切り合っており、適切に状況を判断して調査することが困難であった。しかし、竪穴部床面下の遺構は経験的な視点から掲載図は推定復原している。この場合、問題となるのは主柱穴である。以下の図で主柱穴が不明な事例(調査担当者が判断・検出できなかった)がある。それは、地山まで掘り下げて不明な場合が多々あり、今後、竪穴住居跡の柱配置については竪穴部外のピットを含めて検討する必要がある。



第7図 1~3号掘立柱建物実測図(1/100)



第8図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)

なお、個々の竪穴住居跡の寸法・面積・主軸方位等は、特に必要と認めない限り本文中では記述しないので、それについては第1表に依られたい。

1号竪穴住居跡 (第8図)

溝2に切られてすぐ北側に存在する。4本柱ではあるが、カマドはない。遺存状態は悪く壁高は3～5cmで、貼床も遺存しない。

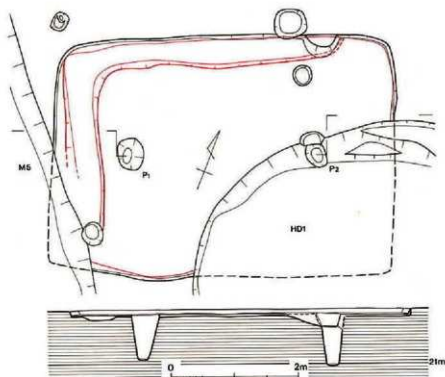
出土遺物 土器の細片が若干量出土したが、時期決定できるものではない。

2号竪穴住居跡 (第9図)

南西隅を溝5に、南東隅を後世の土壌に切られる。遺存状態は悪く、壁高は5cm程で貼床も残っていない。柱主穴はP₁・P₂で、竪穴部の両短壁にベッド状遺構が付設されていたと推定されるがすでに削平され遺存しない。

出土遺物 土器・鉄製品・石製品が出土している。

土器 (図版77、第128～129図) 図示したのは22個体で、壺・甕・鉢・高杯・脚台付甕である。他の器種は出土していない。完形品に近いもの。図上で完形に復原されるものがあるが、本住居に確実に伴うと判断される資料はない。すべ埋上中か、南東隅の後世の土壌に切られて



第9図 2号竪穴住居跡実測図(1/60)

1号廃棄土壌埋土上層から出土したものである。1～3は壺で、土壌埋土上層から出土した。口縁部と頸部にヘラで加飾され、内外面はハケ目調整が顕著である。なお、2・3の口縁部内面は指圧痕が目立つ。4～6は球胴のカメで4・6は覆土中から、5は下層埋土から検出した。完形に復原される5は口径14cm、器高15.8cmで胴部下半の内外面に煤が付着している。6は外面に粗いタタキ目が残し、その上に部分的にハケ目立調整を施す。3個体とも砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を呈する。7～10は長胴の甕で竪穴部南側中央の覆土中から出土した。内外面はハケ目が顕著である。小型の7・8は金雲母等の砂粒を多く含み、焼成は普通で褐色～黒褐色を呈する。9は大型品で口径50cm程に復原される。口縁部は大きく外反し、端部は僅かにツمام上げる。粗砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。10は口径20.5cm、器高32cmに復原される。底部外面は粗い磨きを施す。細砂を含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、胴部に黒斑がある。11～18は鉢で、14～17は外反する口縁部を有す。住居に伴う状況で出土したものではない。11は厚手の粗製の鉢で、外面はタタキ目の上からナデている。内面はハケ目が若干残る。砂粒を多量に含み、焼成は普通で暗茶～黒色を呈する。12は精製された胎土で作られた鉢で、内面に暗文を施す。13は小片の反転復原図である。胎土に金雲母等の砂粒を含み、焼成

は普通で茶褐色～暗褐色を呈し、外面に黒斑がある。14・15とも反転復原図である。形状がやや異なるが作り・調整は共通する。砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を基調とし、外面は黒ずむ。16・17は大きさが違うが形状・調整が共通し、胴部上半の外面に粘土の継ぎ目が残る。ともに反転復原図で、17は口径25cm、器高18cm程に復原される。砂粒を多く含み、焼成良好である。18は小片の反転復原図である。作りや調整は共通し、外反する口縁部がつけば、16・17と同じ形になる。細砂を多く含み、焼成良好で褐色～明茶褐色を呈する。19・20は覆土中で検出した高坏で脚部を欠失する。19は20比べてと坏部下半が深く、丸味を持った鉢状を呈し、口縁部は長く大きく外反する。20の口縁部は未発達である。磨き・暗文・ハケ目により調整を行う。砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色～黒色を呈する。21・22は甕か鉢の脚台で、覆土中から出土した。砂粒を多く含み、焼成は良好で明茶褐色～黒色を呈する。23は器台の破片資料である。小片のため、方形透かし孔は断面にしか図示できなかった。覆土中から出土し、本住居に直接伴うものではない。内外面はハケ目調整され、焼成良好で黄褐色～黒色を呈する。

鉄製品 (図版58、第120図-48) 覆土中から出土した鏝で、二つに折れていたが接合すれば、大きく折れ曲がる。本来は長さ15cmを超えるようで、木柄の着装部の幅は4cm程である。本住居が廃絶された後に捨てられたようである。

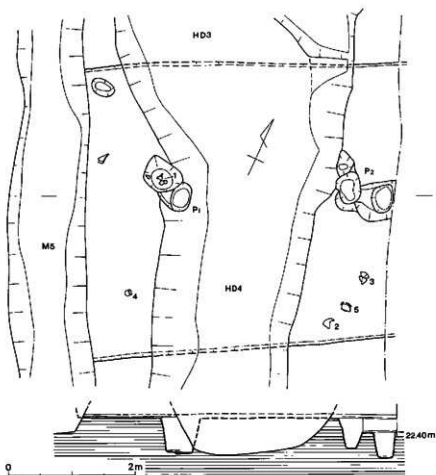
石製品 (第125図-47) 覆土中から出土した砥石である。二次的な加熱で赤化している。硬質砂岩製の仕上げ砥である。

3号竪穴住居跡 (第10・11図)

竪穴部の中央部の廃棄土壌3・4に西側を溝5切れ、東側は調査区の外に延びる。主柱穴は P_1 ・ P_2 で2本柱の住居である。東西の両短側壁に沿って“二”字形のベッド状遺構が存在したと思われるが、竪穴部の遺存状態が悪く、検出できなかった。主柱は引き抜かれていたようで、 P_1 から甕(第130図-1)が出土した。主柱を引き抜いた後の祭祀行為に依るものであろう。同様な行為は30号住居でも見られた。

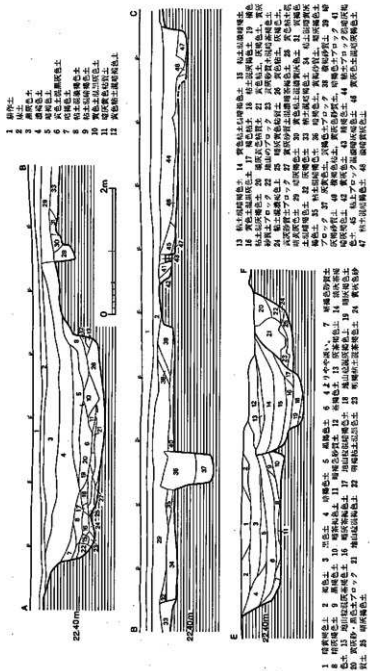
出土遺物 上器・鉄製品が出土している。出土状態から鉄製品はもちろん本住居に伴うものではないが、出土土器のうち、本住居に直接関係する資料は P_1 から出土した甕である。他の土器は床面に近い部分で検出したが、如何に図上で完形品に復原されようとも、層位的に判断して住居に伴う土器ではない。

土器 (図版77、第130図) 図示できるのは5個体である。1は P_1 内から出土したが、他の土器は住居床面近くから出土した。先述したように層位的に判断して2～5は本住居に伴う確証はない。1は意識的に破砕して主柱穴 P_1 に埋納された土器である。1は口径10cm、胴部最大径21.2cm、器高25cmを測る甕で、胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で暗褐色を基調とする。2・3・5は鉢で、ともに接近して出土した。2・5は反転復原図である。5の外面はナデ調



第10図 3号竪穴住居跡実測図 (1/60)

整だが、他は内外面を粗いハケ目調整を行う。2はハケ目調整の上をナデしており、ハケ目が目立たない。これらは胎土に雲母片等の細砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色を基調とするが、2は内底面が、3は外底面が黒色を呈する。4は完形品のまま、床面近くに転がっていた。しかし、床面との間には厚さ1cm程の間層があり、如何に完形品といえども本住居に確実に伴なうと言える確証はない。この間層についての判断が重要であるが、それは貼床面上に一般的に観察される薄い黒色の層の上層面（最終的な生活面）ではなく、流入土の上であった。それ故、この土器は本住居には伴わないと判断した。この土器は粗いタッチの手ズクネ風のもので、内外面はハケ目調整を施している。胎土に雲母等の細砂粒を含み、焼成は良好で明茶褐色～黒色を呈する。口径8.8cm、器高8.7cmである。



第11図 1号雑棄土拉・3~4号整木住居跡付近土層図 (1/60)

鉄製品(図版57、第118図-29) 住居の東半部の覆土中から出土した鉄先である。木質の遺存はなく、木柄から外して本住居に捨てたものであろう。

4号竪穴住居跡(付図1)

個別の図は作っていない、西壁を廃棄土壌4~6に壊され、住居の過半は東側調査区外に延びる。3号竪穴住居跡と同様な平面プランであったろうと推測する。遺存状態は良くないので図示しなかった。

出土遺物 土器以外は出土していない。鉢1は住居床面に潰れた状態で検出したが、他の土器は覆土中からの出土品である。本遺跡の竪穴住居跡の上器出土状態から判断して、鉢1はこの住居に伴うものであるが、他の土器は流入したか、意識的に投げ捨てられたものである。

土器(図版77、第130図) 1は口径29.8cm、器高9.6cmを測る完形に復原される鉢である。内外面ともハケ目の上から、暗文を施している。外底面は擦過痕がある。端正な土器である。細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。2・3の高坏は脚部は不明ながら口縁部が発達して長い。3は器面の摩滅が著しいが2はハケ目の上に暗文を施している。雲母等の細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。4は小型の深鉢で、外面は粗いハケ目調整、内面はナデ調整を行う。雲母等の細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。5は口径26.5cm、器高36.5cmの甕である。頸部直下に一条の突帯を巡らす。外面はタタキの技法を多用し、底部付近は擦過によりタタキ目をすり消している。胎土に砂粒を多く含み、器面に粗い砂粒が目立つ。焼成は良好で明茶褐色~黒色を呈し、胴部下半に黒斑がある。6は底部を欠く鉢で、反転図である。口縁部内外面、体部上半にハケ目が残りに、体部下半はワラ状のもので不定方向に調整する。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好で明茶褐色~黒色を呈す。7はほぼ直立する口縁を有する甕である。内外面はハケ目調整を行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通で明茶褐色~黄褐色を呈し、外面に黒斑がある。8は破片資料で反転図である。剥落が著しいが丹塗りされていたようである。胎土に細砂粒を多く含み、焼成は良好で明茶褐色を呈する。

5号竪穴住居跡(付図1)

西壁を溝5に、北壁を廃棄土壌7に切られ、東壁は調査区外に存在する。2~4号住居と同様に東西の短壁に貼ったベッド状遺構を有すると考えられるが、壁の遺存状態が悪く、貼り床面すら残っていない。支柱は2本で屋根を支えていたようである。

出土遺物 土器・鉄製品が出土した。すべて流入(投棄)したもので、本住居に直接に伴うものではない。

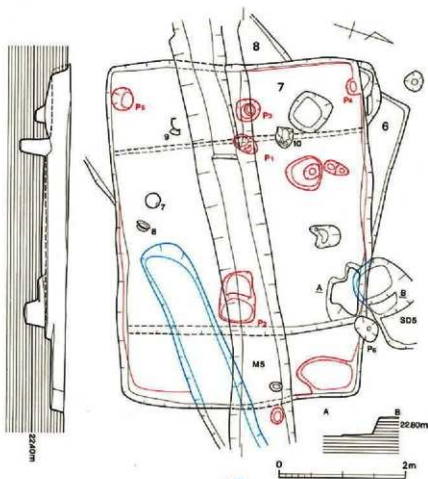
土器(第131図) すべて甕の破片資料である。1は小片からの反転図で、口径15.8cmに復原される。ナデ調整の際に口縁部は強く外側に折り曲げられ、端部を丸く仕上げている。残存部にハケ目は認められず、すべてナデ調整である。外面に煤が付着している。2・3は極小片

のため、傾きは正確ではない。3個体とも胎土に細砂粒を多く含み、焼成は良好で明茶褐色を基調とする。2は外面に煤が付着している。

鉄製品 (図版57、第 図-30) 横幅11cm、縦幅5.9cmを測る鉄先で、刃部の大半を欠失する。木質は遺存しない。

6号竪穴住居跡 (第12図)

溝2以南で最も北側に位置するが、ごく一部しか検出できず、実態は不明である。



第12図 6～8号竪穴住居跡実測図 (1/60)

7号竪穴住居跡 (第12図)

住居の中央部を溝5によって破壊される。また、本住居は弥生時代中期の祭祀土壇5・10を切っている。この時期の竪穴大部平面プランの全容の知れる住居では最北端に位置している。竪

穴部平面プランは略長方形を呈するが、西壁が30cm程長い。主軸は略東西で、支柱は2本(P₁・P₂)である。両短壁にベッド状遺構を配する。床面・ベッド状遺構は粘土で貼っており、これらを除去した下層から支柱穴を検出した。柱痕は遺存せず、柱は住居を廃棄する際に引き抜いたようで、その痕跡がP₂の西側が二段掘りになって残っている。また、P₃は支柱穴P₁・P₂の延長線上にあり、P₁に対する補助柱穴と推測する。P₂に対するものは検出していない。P₄・P₅は西側ベッドの長壁際の相対する位置にあり、その性格は明確に難しいが本住居に伴う補助柱穴と思われる。北側長壁の東側ベッドとその隅角部に不整形の地山の“たかまり”を検出した。この部分は祭祀土壇5と重複しており、この地山のたかまりの上に更に客土をしていたかどうかは明らかにできなかった。断面図A-Bで示したこの遺構は竪穴部への昇降施設であろうと推測する。その際、P₆は昇降施設に伴うピットであろうと推測するが、対になるもうひとつのピットは検出できなかった。次に、屋内土壇は、このタイプの竪穴住居跡では長側壁中央の壁際か、ベッド上の隅に存在するのが普通であるが床面では検出できなかった。ただし、北東隅のベッド貼床下で検出した土壇(赤線で図示)は、もしかしたら掘り間違えた可能性があり、屋内土壇の可能性を排除できない。

出土遺物 土器・鉄製品・石製品が出土した。図示した土器のうち、7・9・10は床面直上に潰れた状態で出土し、完形品に復原でき、本住居に伴うと考えられる。11は貼床下層から、その他の土器は住居廃棄後に投棄された状態で、その多くは住居中央部のレンズ状に堆積した覆土中から出土し、一部は完形品で床面直上に位置するものもあったが、層位的には流入・投棄されたものである。7・9・10の土器と流入・投棄された土器のあいだに明確な時期差は認め難い。また、鉄製品・石製品についても流入・投棄された状態で出土した。よって、本住居に伴う資料は7・9・10の土器だけである。

土器(図版78-80、第132・133図) 1-7・13は鉢で6・13には外反する口縁部がつく。1は全体の $\frac{2}{3}$ 程が残存するが底部を欠く。口径13.2cm、器高5cm程である。内面はハケ目調整され、外面に指圧痕が残る。内外面に煤が付着している。胎土に細砂粒を多く含む焼成良好で黄茶色～黒色を呈する。2は全体の $\frac{1}{2}$ 程が残存するが、図上で完形に復原でき、口径13.1cm、器高6.4cmを測る。内面はハケ目調整を行い、外面は上半部はヨコナデ、下半部はヘラ削りを施す。胎土に細砂粒を多く含む、焼成良好で黄茶色～黒色を呈し、外面の下半部に黒斑がある。3は体部が内傾するもので、全体の $\frac{2}{3}$ 程が残存するが、図上で完形に復原でき、口径10.6cm、器高6.6cmを測る。外底面はヘラ削りを行い、その他は調整を行うが外面にはハケ目が残る。胎土に細砂粒を多く含む、焼成良好で黄茶色～黒色を呈し、外底面に黒斑がある。4は略完形品だが口縁部のほとんどを欠失する。口径11.4cm、器高5.7cmを測る。外面の体部下半部はヘラ削りを行い、他の部分はナデ調整を施している。胎土に細砂粒を多く含む、焼成良好で黄褐色～灰色を呈する。5は口縁部の $\frac{2}{3}$ と底部を欠失するが口径15.6cmで器高7cm程に復原される。口縁

部は僅かに内湾したものをくり出している。外面の体部下半はヘラによりナデられている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は黄褐色～黒色、外面は黄褐色～暗灰色を呈する。6は全体の $\frac{1}{2}$ 程が残存し、口径17cm、器高9cm程に復原される。内面は暗文を施し、口縁部はその上からハケ目調整を行う。外面はハケ目調整の後、体部下半にヘラ削りを行う。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で黄茶褐色を呈する。7はほぼ完形品で口径21.4cm、器高8cmを測る。内面はハケ目調整を、外底面はハケ目の上からヘラ削りを行う。細砂粒を多く含み、焼成良好で黄茶褐色～黒色を呈する。13は完形の大型品で、口径31cm、器高18.8cmを測る。内外面の上半部にハケ目が残るが、下半部は内面はナデ、外面はヘラによる調整のため、ハケ目は消えている。なお、外面はヘラによる調整痕が残る。細砂粒を多量に含み、焼成良好で黄茶褐色～黒色を呈し、黒斑がある。8は脚台付鉢だが脚台が欠失している。調整は6と酷似するが、外面はヘラ削りではなくヘラでなでている。細砂粒を多量に含み、焼成良好で黄茶褐色～黒色を呈し、黒斑がある。内外面に丹塗りされていたようで、部分的に丹塗りの痕跡が残る。口径22.6cm、現存高10.6cmである。12は高坏の脚部で透し孔はない。内面はハケ目調整を、外面はハケ目調整の後に暗文を施している。細砂粒を僅かに含み、焼成良好で褐色～黒色を呈する。10は底部の一部を欠くがほぼ完形品で、口径21.3cm、器高29.3cmを測る壺である。内外面をハケ目調整し、外部下半は擦過痕がある。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で赤褐色～黒色を呈し、体部に大きな黒斑がある。9・11は器台である。9は一部を欠失するが、口径15.2cm、器高18.6cmを測る。ハケ目調整が全面に施され、外面はタタキの上から行っている。11は器高12.4cmで外面は粗いタタキ目が残る。ともに、胎土には細砂粒を多量に含み、焼成良好で茶褐色～褐色を呈する。14は全体の $\frac{1}{2}$ 程を欠くが口径16.8cm、器高30cm程に復原できる壺である。内外面は粗いハケ目調整を行い、口縁部は強いヨコナデにより、端文内面の厚味を減じ、僅かにくぼむ。細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～黒色を呈する。

鉄製品（図版57、第118図-24・27） 24は覆土中、27は投棄された土器群の中から出上した鉄先である。24は刃部の過半を欠くが、全形を何うことはでき、横幅11.2cm、縦幅5.9cmを測る。27は破損したために、土器とともに投棄されたものである。現存する寸法は横幅7cm、縦幅4.8cmである。

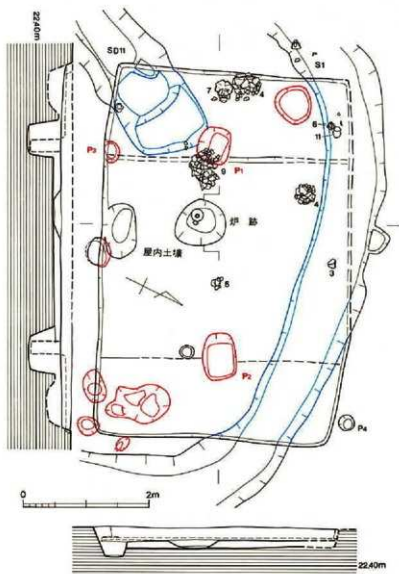
石製品（図版62、第123図-18） 完形の石庖丁で長さ11.9cm、幅4.8cmである。刃部の断面は左右均等ではない。小豆色をしているが、産地同定の分析は実施していない。

8号竪穴住居跡（図版13・14、付図1）

7号住居と重複して、その西南に存在する。切り合いが激しく実態は明確ではないが、7号住居と同様なものであろう。

9号竪穴住居跡（図版13・14、第13図）

7号住居の南側に平行して存在し、1mしか離れてない。よって、両者の共存は不可能で実



第13図 9号竪穴住居跡実測図 (1/60)

質的には切りあっている。本住居は1号周溝墓・11祭祀土壇を切っている。竪穴部は略長方形を呈し、東西の両短壁にベッド状遺構を付設していたようである。主軸は略東西で主柱は2本 (P_1 ・ P_2)である。床面・ベッドは粘土で貼っており、これを除去した下層から主柱穴を検出した。柱痕を確認できなかったが、 P_1 横の土器(9)の出土状態から判断して、柱は引き抜く(掘り抜く)ことはなかったようである。 P_3 ・ P_4 は補助柱穴であろうと推測する。しかし、各々、

対となるべき柱穴は検出できなかった。屋内土壌は南長側壁際のほぼ中央よりすこし西に寄った所に、炉跡はその北に、貼床面から切り込んで設置している。炉の底は地山直上で、貼床とその下層埋土を除去すれば炉はその痕跡を無くし、屋内上壤は20cm程の深さを残す程度になる。炉跡の周辺・内部から人工遺物は出土していない。ベッド状遺構は掘り間違えて、その一部を円化したにすぎないが、掲載図は他の竪穴住居跡から推定復原したものである。

出土遺物 石製品とかなりまとまった量の土器が出土した。出土状況から、後述する土器のうち、4・6・7・9・11が直接伴うが、他は投棄されたものであろう。この5個体の土器は床面上で潰れた状況で出土している。10は完形品だが覆土中から出土しているので、伴わない。石製品も同様である。

土器(図版80、第133-134図) 1は鉢部を欠失した脚台付鉢である。7号住居出土の脚部を欠失した脚台付鉢(8)と胎土・焼成・色調がよく似ており、同一個体の可能性が高い。2・3は高坏の脚部で、円形の透し孔を3ヶ所に配する。2はハケ目調整の後、外面の透し孔以下をへら磨きする。3は外面全体にへら磨きを行っている。両者とも胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好で明茶褐色～茶褐色を呈し、脚部外面は黒色を呈する。4は底部の一部を欠くが、口径24.6cm、器高29.2cmを測る胴が球胴に近い甕である。8・9は長胴の甕で完形品の9は口径26cm、器高38cmを測り、底部は凸レンズ状を呈する。これらはハケ目を多用し、胴部下半外面は擦過痕が、9はハケ目の下にタタキ目が残る。ともに、胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色～黄褐色を呈する。4は胴部下半外面に、9は外面全体に煤が付着している。5・6は埜である。5は小片の反転復原図で、口径12cm、器高9cm、6は略完形品で同じく9.9cm、9cmを測る。5は口縁部が大きく丸底部が大きく丸底を呈するようであるが、6は口縁部が短く、平底風で安定性がある。5は内面をへら磨きし、外面はハケ目調整を行っているが、風化してハケ目は一部しか残らない。6はハケ目調整の後、外底面はへら削りする。ともに、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好で褐色を呈し、外面に黒斑がある。7は二重口縁の壺で底部を欠失するが、口径25.8cm、器高32cm強を測る。口縁部と頸部にへらで刻んで加飾し、ハケ目調整をきれいに行う。胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好で黄褐色を呈し、外面に黒斑がある。10・11は完形の鉢である。10は口径13.3cm、器高6cm、11は同じく14.7cm、5.6cmを測る。調整は共通し、内面はハケ目・ナデ調整、外面はナデ・へら削りを行う。ともに胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で、10は淡褐色を呈して外面に黒斑があり、11は黄褐色を呈する。

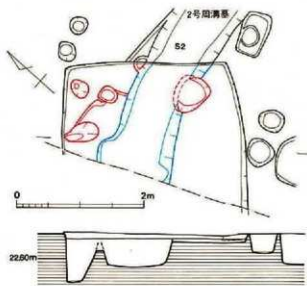
石製品(図版62・63、第123図-24) 石庵丁2点、縄文時代の石斧1点が出土している。縄文時代のものはまとめて後述する。石庵丁24は全体の刃を欠失し、ふたつに折れて覆土中から出土した。他の1点も覆土中から検出した。小豆色を呈するが石材の供給地については石材の同定分析を行っていないので慎重を期したい。

10号竪穴住居跡（図版13・14、
第14図）

9号住居の南西に1.2m離れて建てられ、大半は西側の調査区外に延びる。2号周溝墓を切って重複しており、支柱穴は検出しきれなかった。主軸方向は7・9号住居とは若干異なり、8・18号や、これらより古い11～13号住居にはほぼ平行している。2～9号住居と同様に両短壁に平行してベッド状遺構を付設していたと推測する。

出土遺物 若干の土器が出土した。出土遺物は全て投棄・流入したもので、本住居に直接伴うものない。

土器（第134図） 長銅の甕の小片である。ともに床面近くの覆土下層から検出した。口縁部の作りや、端部のクセは酷似し、ハケによる調整の仕方もよく似ている。1は復原口径24cm、2は27cmである。胎土に金雲母片等の細砂粒を含み、焼成良好である。1の内面は白黄色～黄褐色、外面は暗茶褐色を呈する。2は内面が黄褐色、外面が赤米色である。



第14図 10号竪穴住居跡実測図（1/60）

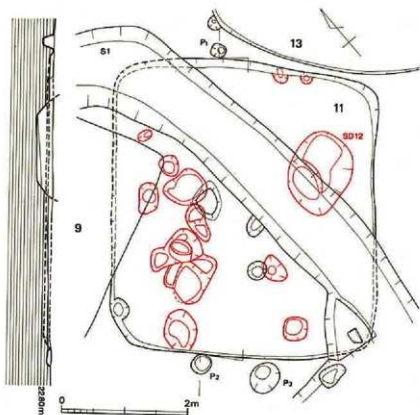
11号竪穴住居跡（図版13・14、第15図）

10号住居から3m離れて、東側に存在する。大部分を9号住居・1号周溝墓に切られている。隅円の正方形に近いプランを呈するが、細かく見ると遺存状態の良い東・西壁は弧を描いている。竪穴部内にはしっかりした支柱穴はなかった。とりあえず、P₁・P₂で断面図を作成したが、P₃を含めて、本住居の支柱穴と考えるには積極的根拠を欠く。床面は粘土で僅かに貼床をし、貼床下の地山ブロックを含む黒褐色土を除去し、住居の南東側に周溝墓に切られて、祭祀土塊12を検出した。なお、ベッド状遺構は持たないと考えられる。

出土遺物 鉄製品・石製品はもちろん、図示できる土器もあまり出土していない。

12号竪穴住居跡（図版13・14・17、第16図）

11号住居から3m離れて東側に存在する。すぐ南に近接して13号住居がある。溝5に東隅を切られるが、竪穴部の全形を知るには支障はなく、プランは隅円の長方形に近く、短壁が弧を描いている。本集落跡ではこのような平面プランを呈する住居は少ないがその代表例である。

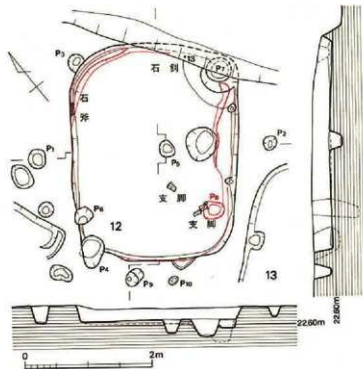


第15図 11号竪穴住居跡実測図 (1/60)

規模は最小の部類に含まれる。床面の貼床はさして顕著ではなく、床面と地山との高低差はごく僅かである。主柱床は竪穴部内では検出されず、竪穴部外の P_1 ・ P_2 が主柱穴ではなかろうか、と推測されるが、他の案として、 P_3 ・ P_6 (P_4)・ P_7 ・ P_8 の4本柱を考えることもできよう。柱配置の問題は上屋の構造と密接な関係があり、ここでは判断を控える。また、南西の短壁から20~30cm程離れ、住居の推定中軸線をはさんで対称の位置にある P_9 ・ P_{10} は、補助柱穴であろうと考える。北東の短壁側の補助柱穴については溝5に切られているので存否は不明である。なお、ベッド状遺構は持たないと考えられる。

出土遺物 土器・石製品が出土した。土器では支脚が3点出土したが、脆くて、取り上げる時に原形を損ねたので図示できなかった。石製品では、砥石・石剣・石斧(鐵)が各1点ずつ出土している。石斧は縄文時代のものである。縄文時代のものは、まとめて後で説明する。

土 器 (第134図) 甕の小片で、流入したものである。ともに反転図で復原口径は33cm程である。内面と口辺部はナデ調整し、外面はハケ目調整を行う。砂粒を多く含み、焼成良好で1は茶褐色、2は明茶褐色を呈し、煤が付着している。



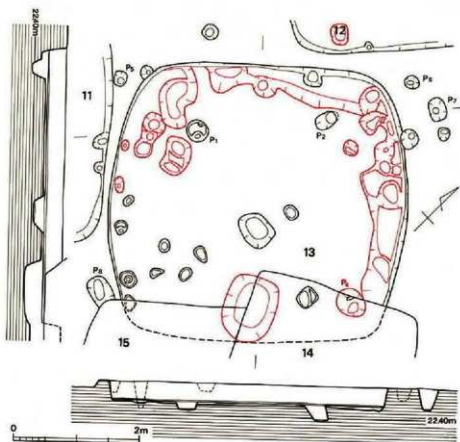
第16図 12号竪穴住居跡実測図 (1/60)

石製品 (図版60、第122図—13・第126図—56) 石剣は北東短壁際の覆土中から出土した。身の大半を欠失し、現存長9.3cm、茎長6.9cm、最大幅3.2cmを測る。関部は平面観では不明確で、刃の有無で身と茎を区別される。粘板岩製である。砥石も覆土中から出土した。砂岩製の仕上げである。中央に蛇行して幅8mm程の浅い凹みがあり、研ぐべき道具を或る程度立てて研いだ跡であろう。

13号竪穴住居跡 (図版13・14・17・第17図)

11・12号住居と接近する位置に存在し、南東側長側壁を14・15号住居から切られている。平面プランは12号住居を幅広くしたような形で、各壁は弧状を呈し、隅四方形ではない。支柱穴は12号住居と同様に地山を掘り下げたが、明確にそれと判断できるビットはなく、以下のよう

- ① 竪穴部内で、 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3$ (検出していないので図示していない。一応15号住居に削平されたか、浅かったと、ここでは想定しておく。)・ P_4 の4本柱を想定する。
- ② 竪穴部外の西・北隅の $P_5 \cdot P_6$ (P_7)、同様に14・15号住居から切られている東・南隅にもビットが存在したと想定し、やはり、4本柱を考える。



第17図 13号竪穴住居跡実測図 (1/60)

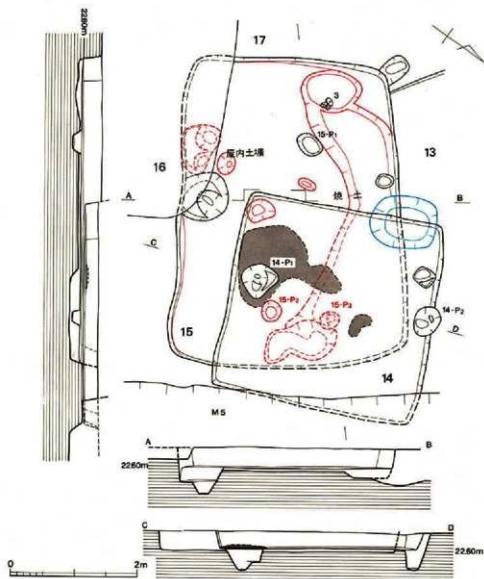
以上の案は各々にピットを欠くため積極的な根拠に乏しいが、②の場合は P_3 ・ P_4 のピットが小さく、深さが15~20cmと浅いので、①のほうが可能性が高いのではなからうか。もし、そのように考えることが許されるならば、②で想定したピットは補助柱穴と推測する。この場合、 P_3 を想定する位置は15号住居によって、 P_1 の底面(標高23.516m)よりも深く掘り下げられており(標高22.486m)、 P_1 と同様な深さであるならば削平されていたことになる。そうであるならば、北東短壁側の主柱穴が深く、南西側短壁の主柱穴は浅いという規則性を考えることができる。床面は12号住居のようにあまり明確ではなかったが、僅かな貼床をし、地山面までの深さは3~4cmであった。ベッド状遺構は付設されていなかったようである。

出土遺物 土器のほかに石製品が出土している。覆土の堆積状況等より判断して、出土遺物はすべて投棄されたか、流入したものであり、本住居に直接的に伴なうものは出土していない。

土器 (第134図) 1は脚台付鉢で脚裾部を欠く。口径・現存高とも10.8cmである。内外面

は細・粗2種のハケ目調整を行う。胎土に砂粒を含み、焼成良好で淡黄褐色を呈する。2は高坏の脚柱部である。短脚で円形の透し孔を3ヶ所に配する。ハケ目調整を行い、外面はへら磨きされている。胎土に砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。

石製品（図版60、第122図-6・7） 6・7とも偏平磨製鉄鏃である。6は長さ4.4cm、基部の幅3cm、厚さ2.5mmである。7に比して刃部を幅広く研ぎ出している。基部の内湾は極く僅かで目立たない。7は長さ5.5cm、基部の幅3cm、厚さ2.5mmである。6に比して基部の内湾度は



第18図 14・15号竪穴住居跡実測図（1/60）

明瞭である。石材は粘板岩であろう。

14号竪穴住居跡（図版13・14・17、第18図）

13・15号住居を切り、東北壁を溝5に切られる。平面プランは隅円の正方形を呈する。主柱穴は P_1 ・ P_2 のふたつで、2本柱の住居であろう。その場合、住居の範囲は確実に竪穴部の外に拡がり、竪穴部の外はベッド状になる。貼床は顕著ではないが、13・15号住居の掘り込みが深いので、床面を水平にするためにこの部分に土砂を入れ、その上に砂を混えた粘土で僅かに貼床をする。貼床上に焼土があるが、投棄されたもので、この住居が焼失したわけではない。

出土遺物 土器・鉄製品が出土している。覆上の状況と出土状態から判断して、本住居に伴う出土品は皆無である。

土器（第135図） 弥生時代中期と終末期頃のもが出土している。1・8は甕小片で反転復原因である。1は口径34cm、8は18cmに復原される。ともに胎土に多量の細砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈する。8は丹塗研磨されている。2は口縁部下の部分に丸味がなく、直線的に延びるので、高坏ではなく開口壺になるだろう。胎土に多量の細砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈する。外面は器面が剝離しているが、内外面とも丹塗りがされていたと思われる。なお、口辺部の平坦面にへらによる6本の線刻状のものがある。3は甕の底部を焼成後に搾孔して甕としたもので底部に煤が付着している。4は高坏の脚部であろう。反転復原因で裾部径12cmを測る。胎土に多量の細砂粒を含み、焼成良好で明茶色を呈する。5は口径13cm、器高5.2cmの鉢である。外面の上半はハケ目調整、下半をへら削りしている。内面はナデ・ヨコナデ調整である。胎土に多量の細砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、体部下に黒斑がある。6はほぼ直行する口縁の壺で、口径16cmに復原され、現存高11.6cmを測る。薄手の土器である。内外面をへらでハケ目調整し、一部はヨコナデにより消えている。胎土に多量の細砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、体部には煤が付着している。7は長胴の甕小片で反転復原因である。口径29cm、現存高9.7cmである。ハケ目を多用する。胎土に細砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、内外面には煤が付着している。

鉄製品（図版54、第117図-12） 銹のため不明瞭だが未製品か鉄鎌の茎だと思われる。

15号竪穴住居跡（図版13・14、第18図）

13・17号住居を切り、14・16号住居に切られる。平面プランは隅円の不整形長方形を呈し、主柱穴は P_1 ・ P_2 と推定するが、 P_3 も関係あるかもしれない。 P_1 ～ P_3 は深さ10cmに満たず、浅い。基本的には2本柱の住居である。貼床面から地山までは浅く、黄褐色土を詰めている。貼床を行った後、南東長壁際の中央部に屋内土壇を設置している。

出土遺物 土器・土製品・鉄製品が覆土中から出土している。土器はすべて小片の反転復原因

である。

土器 (第135・136図) 1は口径9.2cm、現存高7cm強を測る鉢である。外面は丹塗磨研され、内面は口縁部付近に丹塗りし、丹が垂れている。2・3は無頸壺である。2は表面が摩滅しているが、丹塗りされていた可能性がある。3は内面の頸部以下を除いて、きれいに丹塗りしている。3は復原口径20cmである。ともに、胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好である。4・5は開口壺で4は丹塗磨研されている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好である。6～8の甕は外面をハケ目調整し、内面はナデ調整を行う。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で、黄褐色～茶褐色を呈する。

土製品 (図版52) 投弾が1点出土した。

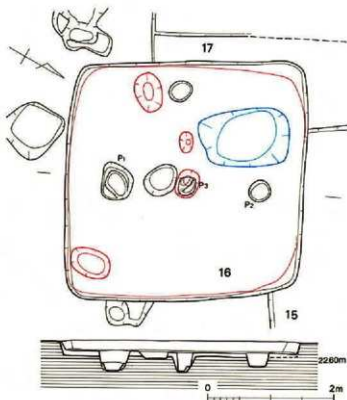
鉄製品 (図版54、第117図—16) 破片資料である。現存長4cm、幅1.7cmで図の下方は基状を呈し幅1cmを測る。幅広の部分は厚さ7mmの台形の断面を呈する。錆で不明瞭であるが製品とは考え難く、未製品であろう。

16号竪穴住居跡 (図版13・14、第19図)

15・17号住居を切る。隅円方形を呈し、各辺はゆるい弧を描く。支柱穴はP₁・P₂のふたつである。その中央、すなわち竪穴部の中央にビットP₃がある。これも屋根を支える補助的な役目を果たしたものであろう。貼床面から地山までは浅く10cmに満たない。炉はない。

出土遺物 土器・土製品・鉄製品・石製品が出土している。本住居に伴う状況で出土したものはない。また土器は極小片で本住居に直接関係ないので図示しなかった。

土製品 (図版52) 投弾が

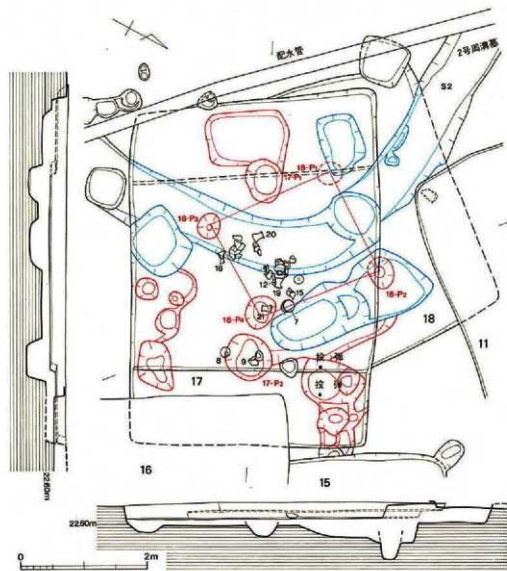


第19図 16号竪穴住居跡実測図 (1/60)

3点出土した。

鉄製品 (図版54、第117図-15) 破片資料である。鉄鎌の茎のようでもあるが、錆のため不明である。現存長4.3cmである。

石製品 (図版64、第124図-38) 破片資料で、幅3.7cm程の小型の仕上げ砥である。粘板岩製と思う。



第20図 17・18号竪穴住居跡実測図 (1/60)

17号竪穴住居跡(図版13・14・18、第20図) 15・16号住居に切られ、18号住居・2号周溝墓を切っている。また西短壁の一部を現代の配水管付設溝によって破壊されている。平面プランは隅円長方形に近い形を呈し、長側壁は南壁の寸法がすこし短いようである。竪穴部内では両短壁に客土してベッド状遺構を付設している。主柱穴はP₁・P₂であるが補助柱は明瞭ではない。貼床は白色砂粒を多く含んだ粘土で行い、その下層は地山との間に地山の黄褐色土ブロックを含む黒褐色土を充填していた。が・屋内土壌はなかった。

出土遺物 多量の土器と土製品が出土している。第20図に遺物の平面的な出土状態を示したが、調査的の土層断面によれば覆土中からの出土である。土器は竪穴部の中央付近に群をなして集中的に出土し、各々が間に土を噛んでおり、本住居の中央部の床面が完全には埋没しない時点で意識的にまとめて投棄したようである。その他のものでは、もちろん、自然的な流入もあったであろう。完形品が床面中央にごろごろと転がっており(図版18)、本住居に直接伴うもののように見受けられるが、他の住居(付近の例では7・9・19号)では直接伴う土器は、床面に潰れた状況で出土し、その上層に土を噛んで(1~2cmしか土を噛まない場合もある)完形品が検出されるので、潰れずに完形品に近い状態で床面からやや浮いて出土した土器は多くの場合伴わない。以下に説明する土器はそのような土器である。

土器(図版81・82、第136・137図) 1~7・9は鉢である。1は弥生時代中期の祭祀土器で、丹塗磨研される。2は口径11.1cm、器高7.3cmの深めの鉢で外面はハケ目調整後へら削りを行う。3は口径12cm弱、器高5.5cmで外面はタタキの後、底部をへら削りする。4は口径14.5cm、器高6.1cmに復原される。底部はハケ目調整後にへら削りを行う。5は口径15.5cm、器高7.7cmで内面はハケ目調整、外面はへらナデ、へら削りを行う。6は外反する口縁を持つ鉢で口径19.2cm、器高8.8cmに復原される。内外面ともハケ目調整を行い、部分的なヨコナデでハケ目が消える。7は口径19cm、器高11.7cmを測る。外面の下半はへら削り、上半はナデ調整である。内面はハケ目調整の後、部分的にナデている。9は明確な口縁を持つ鉢で口径22.9cm、器高16.9cmを測る。調整は7とほとんど同じだが、内面のハケ目はよく残る。これらは、胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色~淡茶灰色を呈し、黒斑がある。なお、7は外面の大半に煤が付着している。8は埜で、口径11.8cm、器高11.9cmを測る。薄手の優品である。外面はハケ目調整の後、下半をへらナデしている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色~褐色を呈し、黒斑がある。10は口径13.6cm、胴部最大径25.6cm、器高30.3cmの直口壺である。胴部最大径はほぼ中位にあり、底部は僅かに凸レンズ状を呈する。ハケ目を多用し、胴部中位以下はハケ目調整に先立ちへら削りを行う。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を呈し、黒斑がある。11・12は匙状のもので柄の部分だけ存在する。手ずくぬ風の作りで、ナデで整形している。11は口径9cm、柄の長さ6.4cm、全長13程である。12は同じく10cm、16cm、22.7cm程である。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で灰褐色~明茶褐色を呈し、12は黒斑がある。13~15

ほぼ同大の小型の甕で完形に復原される15は、口径15cm、器高18.5cmである。13は内外面ともハケ目調整し、胴部内面はナデている。14は内面の調整は13と同様だが、外面は粗いタタキ目が残し、下半はヘラによる擦過痕がある。15は内面はナデ、外面は上半にハケ目残り、下半はタタキ目・ヘラによる擦過痕がある。また、外面の口縁部と胴部中に粘土の継ぎ目が残る。胎土の砂粒の含有量は13は多く、15は若干量であり、ともに焼成良好で褐色を呈し、13・15は黒斑があり、14は煤が付着している。16・17は高坏で坏部はない。坏部ははずして投棄したものであろう、内面はハケ目残り、外面はハケ目の上からヘラ磨きを行う。胎土に砂粒を若干量含み、焼成良好で褐色～黒色を呈する。煤が一部に付着している。18～21は器台で18は裾の一部を欠くが他は完形品である。17は全面をナデ調整し、18～21はハケ目とナデ調整を併用しタタキ目が残る。18は上部径11.1cm器高12.2cmを測る。19・21は形・大きさとも酷似し、19は口径11.8cm、器高15.2cmで、21は同じく12cm、14.8cmである。ともに胎土に砂粒を若干量含み、焼成良好で褐色～黒色を呈する。

土製品（図版52） 投弾が3点出土した。

鉄製品（図版54、第117図-15） 破片資料である。鉄鐮の茎のようでもあるが、鐮のため不明である。現存長4.3cmである。

石製品（図版66、第125図-48） 破片資料で、長さ10cm、幅4.9cm程の仕上げである。粘板岩製と思う。

18号竪穴住居跡（図版13・14、第20図）

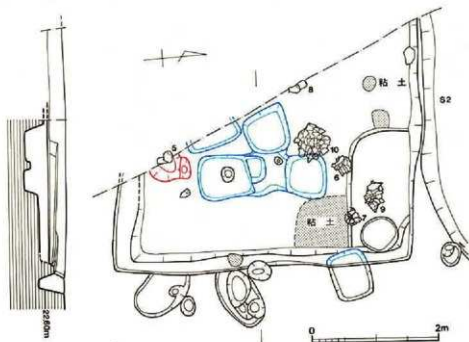
11・17号住居に切られ、1・2号周溝基を切っている。複雑に遺構が切り合っており、不明な部分があるが、平面プランは方形を呈するようである。主柱穴はP₁（検出していない）・P₂・P₃・P₄で4本柱の住居だと思われる。貼床は僅かに行っている。

出土遺物 土器が出土している。が、本住居に直接伴う状態で出土したわけではない。

土器（第138図） 図示できるのは2個体で他は小片である。1・2とも壺で同一個体かと思え、見まごうばかりの土器で、ともに胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好で茶褐色～黒褐色を呈する。1・2ともヘラ状器具による擦過痕が底近くに認められる。2の底部は凸レンズ状を呈する。

18号竪穴住居跡（図版19・20、第21図）

2号周溝基に南接して調査区の西壁に存在し、過半が調査区外に延びる。北東隅にベッド状遺構があり、その南・西で床面と1cm程の間層を噛んでネズミ色の粘土を検出した。また、東・南壁沿いに幅20cm程、高さ10cm強の帯状の高まりがある。これは図のように、貼床下から地山が直接続いたものであり、竪穴部掘削時に掘り残したものであろう。主柱穴については、はっ



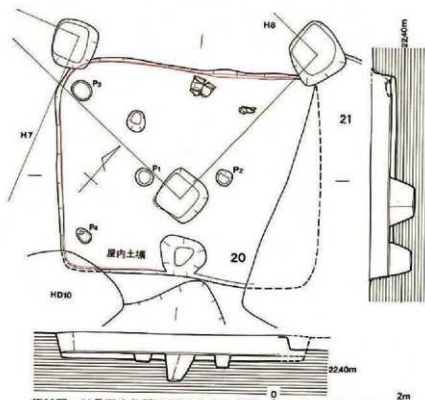
第21図 19号竪穴住居跡実測図 (1/60)

きりしない。

出土遺物 土器が出土している。5～10が床面にほぼ密着して潰れた状態で出土した。図示した土器のうち、上記6個体が確実に本住居に伴うと判断できる。

土器 (図版83、第138・139図) 1は口径13.8cm、器高9.2cmの甕で焼成後に底部を穿孔する。ハケ目調整された後、内面はナデ、外面下半はヘラ削りする。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。2は底部付近を欠失する口径12cmの甕である。ハケ目を多用するが、内面の頸部以下はナデ調整である。胎土に砂粒を多く含み、焼成普通で明茶褐色を呈する。3は全体の $\frac{1}{2}$ 程度残存し、口径11.4cm、器高19.4cmを測る直口壺で僅かな底部を有する。ハケ目を多用し、内底面に指圧痕が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で褐色～黒色を呈し、黒斑がある。7も底部を欠失するが、3とほぼ同様の壺である。4・5は鉢で、4は口径17.6cm、器高8.2cm、5は深目で同19.4cm、12.7cmを測る。内面はハケ目が残るが、外面はナデ、ヘラ削り等を行う。ともに胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で4は茶褐色、5は淡茶色～黒褐色を呈し、黒斑がある。6・8～10は甕で8は調査区外に体部が存在するため、上述のように本住居に伴う状況で出土したが、完形品として図示できなかった。8～10は大型の甕である。6は底部を若干欠くが口径18.1cm、復原高28cm程のハケ目を多用する甕である。僅かな底部を有すると思われる。8は口径23.2cmに復原される。9は口径19.6cm、復原高29.7cmで僅かな底部を有すると思われる。10は口径29.2cm、器高44.9cmで僅かな底部を有する。これらの甕はともに

胎土に多量の砂粒を含み、煤が付着するため黒っぽい色である。



第22図 20号竪穴住居跡実測図 (1/60)

20号竪穴住居跡 (図版19、第22図)

竪穴部が隅円の略長方形を呈する住居である。東壁を21号住居に、南隔壁を10号廃棄土壌に切られる。西隔壁は7号掘立柱建物、北隔壁と屋内土壌の北には8号掘立柱建物の柱穴が掘り込まれている。支柱穴はP₁・P₂と推定する。竪穴部の西・南隅のP₃・P₄は床面から10cm未満であるが柱配置に規則性があり、21号住居に切られた部分にP₃・P₄に対応するビットがあった可能性がある。4つのビットの存在を考慮することができれば、これらを補助柱穴とすることもできよう。屋内土壌は南長側壁中央に設置されるが、出土遺物はない。これらの遺構は貼床面から切り込む切り込んでおり、貼床下層面は平坦で、地山の土に近い土を入れていた。

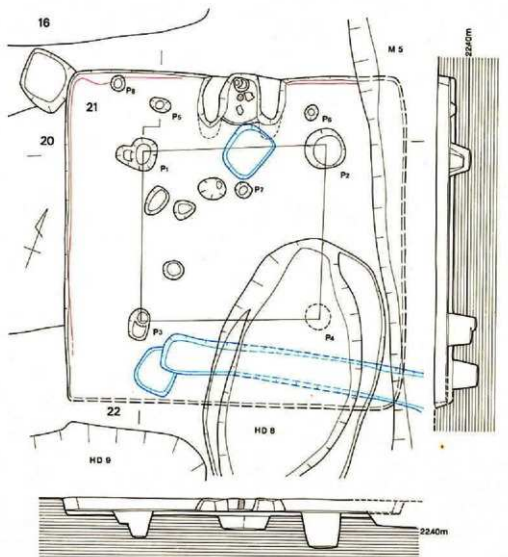
出土遺物 土器・鉄製品・石製品が出土している。土器は床面真上にて潰れた状況で本住居に伴う状態で検出したが、実測が間にあわなかったため図示していない。弥生時代中期後半の竈である。鉄製品・石製品は覆土中からの出土である。

鉄製品 (図版56、第119図-39) 鉋の茎尻の破片である。幅15mm、現存長44mmである。断面は浅い蒲鉋型(逆U字型)を呈する。北部九州タイプの弥生時代の古式の鉋である。

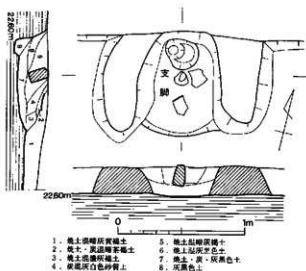
石製品 (第124図-39) 仕上砥の破片である。頁岩か硬質砂岩製である。

21号竪穴住居跡 (図版18、第23・24図)

20・22号住居、8・9号掘立柱建物を切り、溝5・8・9号廃棄土壌に切られる。遺構の重複が複雑であったためプランを間違え、南壁を実際より1m程北側だと思って撮ったので写真が図と異なる。竪穴部が隅円方形を呈する4本柱 (P₁~P₄、P₄は遺存しない) の住居で北壁中



第23図 21号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第24図 21号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

で、床面が住居床面より高くなっている。支脚は円柱状の土製品で、壁から38cm離れて設置されていたが、カマドの奥に向かって倒れている。覆土中から燻の破片が2点出土したが、流入品である。また、支脚の奥の壁際に径25cm、深さ5cm程のビットがある。後から掘り込まれたものではないが、カマドとの関係は不明である。ただし、 $P_5 \sim P_6$ との配置状態から、カマド設置以前に住居の上屋を作る時に何らかの役割を担った可能性も考えておく必要がであろう。

出土遺物 出土品は少ない。

土器 (第139図) かなり火を受けた支脚でもろく、取り上げる時にうまくいかず、破片としてしか図示できない。径7.9cmほどで、検出時の器高は16cmであった。

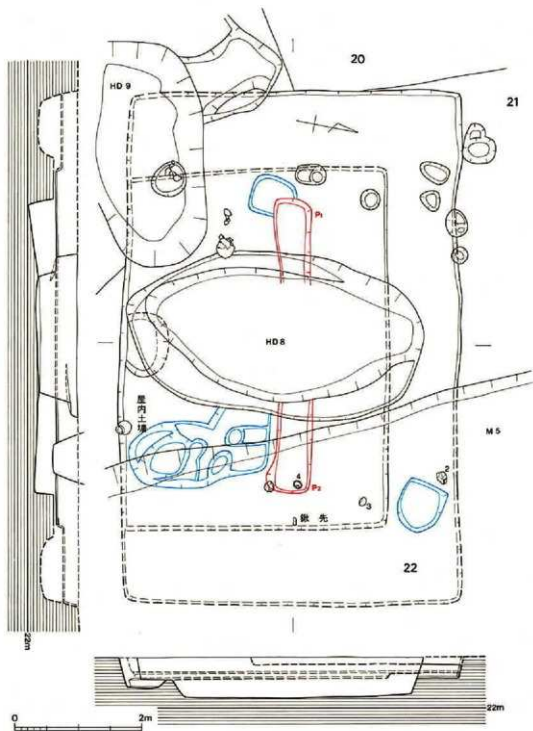
石製品 (図版64、第124図-30) 貼床下層から出土した上砥の破片である。緻密な砂岩製である。

22号竪穴住居跡 (図版14、第25図)

21~24号切居と重複し、21号住居、5~10号廃棄土、溝5に切れ、23・24号住居、8・9号掘立柱建物を切っている。よって、遺存状態は極めて悪い。僅かに残る部分から復原して図示した。本遺跡では大型の部類に属する。“コ”字型のベッド状遺構を付設し、南壁際中央に屋内土壌を設ける。屋内土壌からは何も出土していない。主柱穴は通常のビットではなく、布掘りだが中央部を8号廃棄土壌によって破壊されている。貼床は僅かに遺存していた。

出土遺物 土器・土製品・石製品が出土している。が、本住居に伴うものは少なく、土器のうち、2だけである。1は完形品で壁際で出土したが、土器底部と住居床面との間に明らかに

尖にかマドを設置する。主柱穴は貼床面で検出され、柱は抜かれていた。 P_5 (深さ11.6cm)・ P_6 (同10.1cm)は北壁からほぼ等距離にあって、かマドをはさんで対の位置に存在し、かマドの部分の上屋に関する補助柱穴であろうと推測する。 P_7 もかマドの中軸線にあり、あるいは P_5 ・ P_6 と同じ機能を有した可能性を考えておきた。 P_8 は東・南壁付近が遺存しないので対となるべきビットが検出できず、補助柱穴と考えるには多少無理がであろう。かマドは作り替えたよう



第25图 22号整穴住居跡実測图 (1/60)

土を嚙んでおり、他の土器も同様であった。投棄されたものであろう。

土器 (図版83、第139、140図) 1は口径10.9cm、器高25.3cmを測る完形の壺である。ほぼ球胴で底部は凸レンズ状の平底である。ハケ目を多用し、底部付近はへら削りを行う。器面にあまり砂粒は目立たず、焼成は普通程度で明茶褐色を呈し、黒斑がある。2は口径15.6cm、現存高23.5cmの底部を欠失した甕である。ハケ目を多用し、外面の口縁部・肩部にはハケ目調整後、へら状器具で格子状や波型に施文している。胎土に小砂粒を若干含み、焼成良好で褐色を呈し、外面は煤が付着したり、黒斑があって黒ずんでいる。3は口径15.7cm、器高6cmの鉢である。内底面は工具痕が残り、外底面はへら削りを行った後、底部中央付近をナデている。器面に著しくヒビ割れが認められる。胎土に小砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。4は上縁部径8.5~9.2cm、器高9.1cmを測る器台である。内面はナデ調整し、外面はタキ目が目立つ。胎土に小砂粒を多く含み、焼成良好で明褐色を呈し、煤が多量に付着している。

土製品 (図版52、第116図-2) 貼床下層から投弾が1点出土している。長径4.3cm、短径2.7cmの完形品である。17号住居出土品(第52図-1)と同様に器面に稜線がある。

第23号竪穴住居跡 (付図1)

22・24号住居、8・9号廃棄土壌、1号円形周溝に切られ、ほとんど遺存しない。出土品より、弥生時代中期末~後期初頭頃の住居か、と推定するが詳細は不明である。

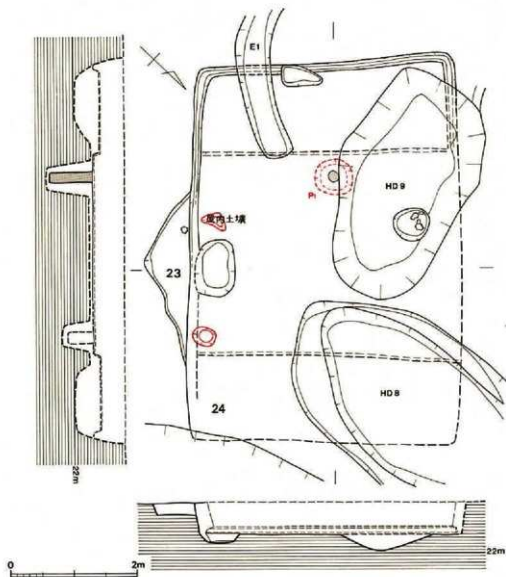
出土遺物 土器が出土しているが、図示できるのは3点である。本住居に伴うものではない。

土器 (図版84、第140図) 1は小型の壺で、現存高8.7cm、胴部最大径10cmに復原される。器面が荒れているが、本来は丹塗磨研されていたであろう。胎土に小砂粒を若干含み、焼成良好で淡茶色~褐色を呈する。2は鉢の小片で終末期のものである。3は甕の小片の反転図で、復原口径28cmである。外面に煤が付着している。

24号竪穴住居跡 (図版19、第26図)

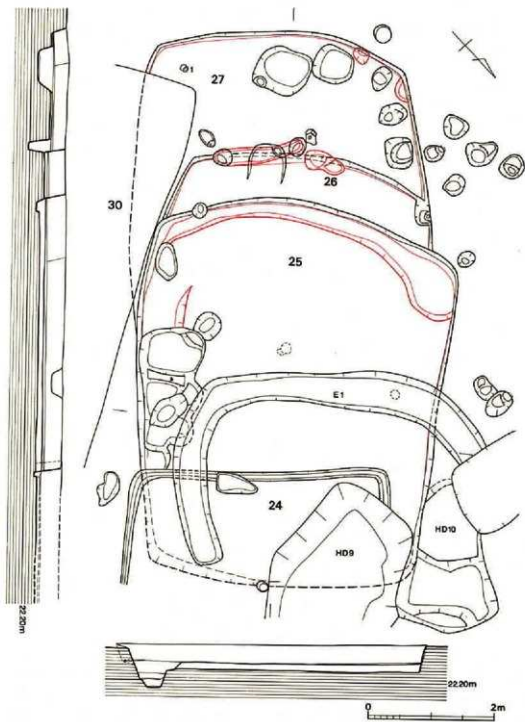
1号円形周溝、8・9号廃棄土壌、に切られ23号住居を切る。24~27号住居は27号住居→24号住居と順次、北東側に平行移動しているが、それが、建て替えを意味しているのかどうかは不明である。遺構の重複が激しいため、竪穴部の遺存状態は極めて悪く、推定復原した部分がかかりある。短側壁にベッド状遺構を付設し、遺存状態の良い部分には壁小溝を検出した。支柱穴は一つ(P₁)しか検出できなかったが、それと対にな支柱穴は8号廃棄土壌に破壊されている。P₁で支柱痕を検出したが、それは、床面近くで切られたものか、朽ち果てるまで放置されたのかは不明である。南西の長側壁中央に屋内土壌を検出したが出土遺物は皆無であった。

出土遺物 土器が出土しているが、すべて、投棄・流入品である。



第26図 24号竪穴住居跡実測図 (1/60)

土器 (図版84、第140図) 1は弥生時代中期末～後期初頭の甕片である。復原口径31cmを測る。2は長頸壺で口径15.8cmに復原され、現存高22cmである。口辺部内外面はハケ目調整の後へら磨きし胴部は内面をへら削り、ナデ調整、外面はへら磨きとハケ目がすこし残る。底部は丸底を呈すると思われる。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～黒色を呈する。



第27图 25~27号竖穴住居跡実測图 (1/60)

25～27号竪穴住居跡（図版19、第27図）

24号住居の説明で、建て替への可能性について言及した。それ程整然と住居が北東側に移動している。しかし、調査の過程で掘り方を間違え、十分に図化できなかった。推定復原したものを図示したが、主柱穴等は把握しきれなかった。よって、不十分な図である。説明もしづらい。

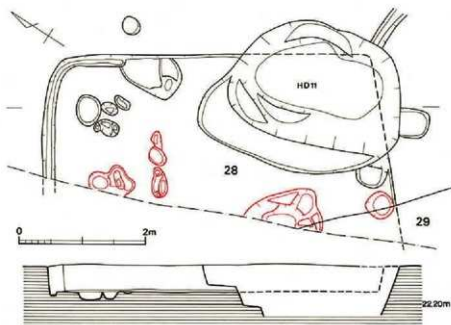
出土遺物 27号住居から出土した土器のみ図示した。しかし、住居に伴うものではない。

土器（図示84、第140図） ほぼ完形品で、光景9.6cm、器高8cmを測る丹塗磨研の甕である。口縁部に径4mm程の孔を4ヶ所に穿つ。蓋をして紐で留めるためのものであろう。胎土は精選され、焼成良好である。

28号竪穴住居跡（図版19、第28図）

27号住居の1mほど西にあり、過半が調査区外に延びる。南側の部分を、11号廃棄土壇・29号住居によって切られている。北壁と東壁の北側に壁小溝がある。検出した部分が狭いので柱配置は明確にしがたい。

出土遺物 土器が出土しているが、本住居に伴うものではない。1・2は住居の覆土・貼床下層・11号廃棄土壇から出土した破片が接合したものである。3は覆土中から出土したものである。



第28図 28号竪穴住居跡実測図（1/60）

土 器 (第141図) 1は鉢の脚台部であろう。脚裾部径17.2cm、現存高5cm程である。内面はハケ目明確、外面はヘラ磨きを行い、暗文状に見える。胎土に小砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。2は光景16cm、器高13cm程に復原される壺で、ハケ目調整後にヘラ磨きを行う。内面の頸部以下はナデ調整を行っている。胎土に砂粒はあまり目立たず、焼成良好で茶・黄褐色を呈し、黒斑がある。3は高杯の脚部を欠失したもので、丹塗磨研されている。胎土は精選され、焼成は良好である。

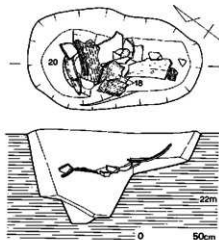
29号竪穴住居跡 (付図1)

28号住居を切って南側に位置する。2号円形周溝と重複し、大半が調査区外に延びるため、詳細は不明である。土製紡錘車が1点出土している (第116図-10)。

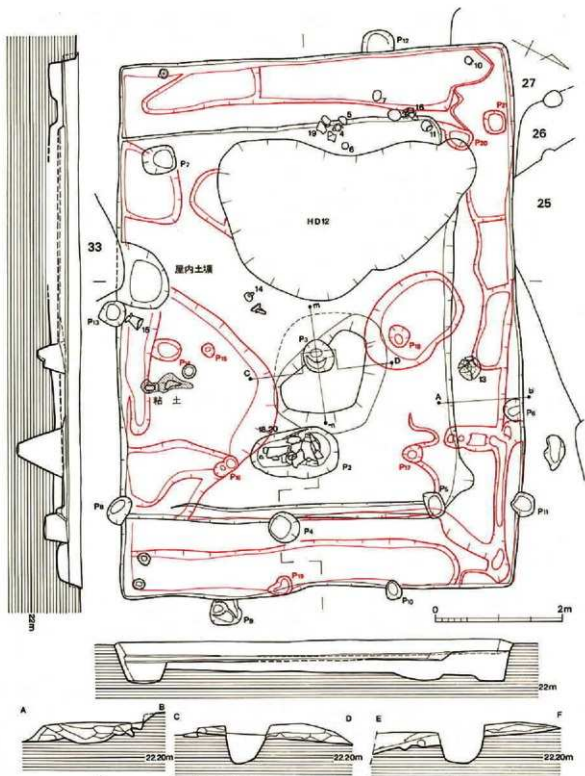
30号竪穴住居跡 (図版20・21、第29・30図)

調査区のはば中央で検出した、本遺跡最大の竪穴部を有する住居である。25~27号住居を切り、主柱穴 P_1 が存在すべき部分に奈良時代の12号廃棄土壌が掘り込まれていたが、遺存状態が良さそうだったので重点的に調査した。長方形プランの住居で、竪穴部床面は貼床され、南東壁を除いて幅1~1.2mの“コ”字型のベッド状遺構を付設する。ベッドの下層は一段深く溝状に掘り込まれ、黒色土や地山の黄褐色粘質土等で客土してベッドの形を整え、ベッドの表面には黒褐色土を貼っている。南東壁際に、貼床面から掘り込んで屋内土壌を設けている。が、内部から人工遺物は出土していない。また P_2 の西に東西2m、南北1.7m、高さ10cm程の“たかまり”があり、そのほぼ中央に深さ40cm程のピット (P_3)がある。この“たかまり”は床を貼る前に

暗褐色土や黄灰色砂を使って造られ、ピットはその後に掘られている。この遺構の性格については、類例を待って判断したい。柱配置については、かなりの数の補助柱穴の存在が想定される。まず主柱穴は西側の P_1 は上述のように廃棄土壌12に破壊され、現存しない。東側の P_2 は柱を掘り抜いて土器を埋置している (左図)。図で、北西側の深い部分 (左側) が主柱穴で、浅い部分が主柱を掘り抜く時に掘った掘り方である。柱を引き抜いた後、地ならしをして大小の甕を割って埋めている。甕は復原しても完形品にならず、全体の片も残っていない。他の破片は違う所に捨てられたものであろう。住居を廃棄する際のマツリに関わる遺構である。補助柱穴と考えられるピットは竪穴部内外や貼



第29図 30号竪穴住居跡主柱穴 (P_2)
実測図 (1/30)



第30图 30号竖穴住居跡实测图 (1/60)

床下層で検出した $P_9 \sim P_{21}$ の19中小のビットである。これらのうち、補助柱穴とするには、対となるビットがない場合があり、やや不安なものも含まれる。性格（機能）については明らかにし難いものが多いが、ほぼ、以下のことが言えるのではなからうか。

- ① $P_9 \cdot P_{11}$ は東側ベッド内側の壁小溝のラインの延長線上に位置し、このライン上に P_7 がベッドの隅角部にあり、 P_{11} との距離はベッドの幅に相当する。 $P_7 \cdot P_9$ の丁度、中間に P_8 がある。 P_8 は径が大きく、深い。
- ② P_{10} は廃棄土壌との関係で分かりにくく、下層で検出したが、あるいは床面で検出できた可能性がある。 P_7 とほぼ同様にベッドの隅角部にあり、両者の性格の共通性を示唆していると推測される。また、 P_7 と P_9 の関係は、 P_7 と P_8 のそれに通じるのではなからうか。
- ③ P_{13} は南東壁の中央にあり、それと対になるべきビットを北西壁に検出していない。 P_8 との関係も無視できない。
- ④ $P_9 \cdot P_{11}$ は各々、竪穴部の東西隅からほぼ当距離にあり、その配置に一定の規則性がある。
- ⑤ $P_{10} \cdot P_{16}$ は北東壁の、およそ三等分された位置にある。
- ⑥ $P_{16} \cdot P_{17}$ は主柱穴 P_2 を挟んで、 P_2 からほぼ当距離にある。 P_2 に柱を立て、屋根を葺く時のものであろうか。
- ⑦ $P_{15} \cdot P_{19}$ も P_2 を挟んで、 P_2 からほぼ当距離にある。
- ⑧ $P_{14} \cdot P_{21}$ は不明な部分を残すが、前者は P_2 と、後者は P_{11} と関連するかもしれない。

調査中、土の見分け方が難しかったので、各ビットの検出層位に多少の混乱があるかもしれないが、上記のビットは各々の配置に一定の規則性を認めることができる。数個でセットになるこれらの補助柱穴の各セットの機能については、ここで詳しく述べることはできない。しかし、住居の建設過程や完成後の住居の中で何らかの役割を果たしたであろう。

出土遺物 土器・土製品・鉄製品・石製品が出土している。石器は縄文時代の凹み石で、別に後述する。土器のうち、18・20の大小の甕は先述したように主柱穴 P_2 に埋置されたもので、本住居の廃棄時を示す資料である。13の高杯は脚部をはずして杯部だけ伏せて置かれており、潰れた状態で検出した。脚部14は床面に転がっていた。16の甕もベッド床面に潰れた状態で検出した。他の土器は覆土中や投棄された状態で出土したものである。土製品・鉄製品も同様の出土状態であった。

土器（図版84・85、第141・142図） 1～8は鉢で、1はテズクネ風である。1～3は小型の浅いもので、口径と器高は、1が5.6cm・2.6cm、2が6.6cm・2.4cm、3が7.4cm、2.2cmである。2・3は若干ハケ目が残るが、ナデ調整によって消えている。3点とも胎土に多量の砂粒

を含み焼成良好で黄褐色～暗褐色を呈し、2・3は内外面に1は口縁の一部に煤が付着している。4～7は通有の大きさの鉢で、口径と器高は、4が10.3cm・4.1cm、5が14.8cm・5.4cm、6が11cm・5cm、7が16.4cm・5.5cmである。調整は6・7が全面にハケ目を残さずにヨコナデ・ナデ調整がされているのに対し、4は内外面にハケ目残り、5は口縁内面にハケ目を残し、下半部の内外面に粗いヘラ磨きを行う。ともに胎土に砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～暗褐色を呈し、4は内外面に煤が付着し、5～7は黒斑がある。8は大き目の深鉢で口径20.9cm、器高10.5cmに復原される。内外面にハケ目残り、内底面はナデている。胎土に砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈する。9は長頸壺の破片で精製土器である。外面はヘラ磨きされ、内面はハケ目調整を行う。焼成良好で黄褐色を呈する。10は埴で口径4.3cm、器高8.1cmである。外面はハケ目調整の後、口縁部と体部上半をヘラ磨きし、下半はヘラ削りを行っているように見受けられる。内面はヨコナデ・ナデ調整である。胎土に砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、黒斑がある。11は壺で、口径12.7cm、器高16.5cmを測る。ハケ目調整後、外面は幅広いヘラ磨きにより、内面はヨコナデ・ナデ調整により、ハケ目を消している。胎土は雲母を中心に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、2ヶ所に黒斑がある。12・13・14は高坏で13・14は同一個体の可能性が強い。12は坏部内面と外面をヘラ磨きし、脚部内面はハケ目調整を行う。13・14はハケ目調整後、坏部内面に暗文を入れ、脚柱外面はヘラ磨きを行っている。13は径32cm、14は脚部径17cmである。12～13とも胎土にあまり砂粒を含まず、焼成良好で黄褐色～暗褐色を呈し、13の口縁部には煤が付着している。15は器台で、口縁部を内側に強く折り曲げている。口径15.6cm、器高21.8cmを測る。ハケ目調整が目立ち、頸部内面はナデしており、指圧痕が残り、口縁部はヨコナデ・ナデ調整である。胎土に砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。外面は煤が付着し、底部は二次加熱のため赤変する。16～20は甕で18・20を除いてほぼ完形である。先述のように18・20は住居を廃棄した後、支柱穴P₂に埋置されていた。16は口径13.5cm、器高17.8cmである。底部は凸レンズ状を呈する。ハケ目調整の後、口縁部はヨコナデし、胴部中位以下の内面はナデ、外面はヘラ削りを行う。胎土に雲母等の砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色～黒色を呈する。17は頸部の締りがゆるく深鉢状の甕で、口径17cm、器高17.4cmを測る。内面はハケ目がよく残るが、外面は口縁部から頸部にかけてタタキ目が目立ち、以下はヘラ削りを行い、僅かにハケ目が残る。胎土に雲母等の砂粒を多く含み、焼成は普通で、茶褐色を呈し、黒斑がある。18は口径22.8cm、器高33.2cmに復原される。ハケ目がよく残り、胴部中位以下の外面はナデ調整により、ハケ目が消えている。胎土に雲母等の砂粒を多く含み、焼成は普通程度で明茶褐色を呈するが、煤が多量に付着し、黒ずんでいる。19の底部は凸レンズ状を呈し、全体に粗い作りの土器である。ほぼ完形に復原できるが、破片は広い範囲に散乱していた。内外面はハケ目調整するが、外面の胴部下半はまばらなハケ目の下にタタキ目が見える。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で淡茶褐色～茶褐色を呈し、黒斑がある。20は破片の

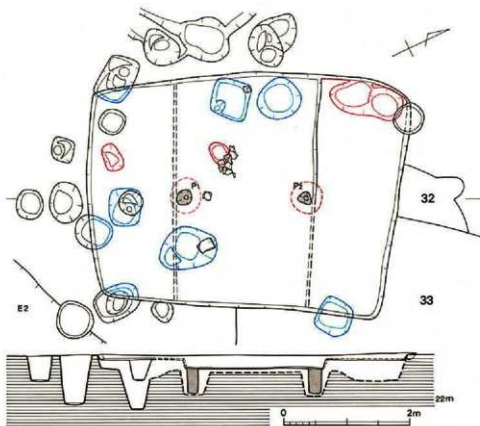
反転復原図で、口径50cmを測る。口縁端部に「×」字状の刻み目を巡らす。頸部は刻み目を付した2条の突帯を巡らす。頸部以下の外面はタタキ目が目立つが、ヨコナアされた口縁部を除き、全面をハケ目調整している。胎土は雲母等の砂粒を多く含み、焼成は普通程度で、暗茶褐色を呈する。

土製品（図版52） 覆土中から出土した小型の投弾で、長さ3.76cm、径1.81cmの完形品である。黒褐色を呈する。

鉄製品（図版55、第119図-34） 床面から10cm程浮いて、覆土中から出土した。袋部と刃部の一部を欠くが全形を何うことができる。小型の鉄斧で全長5.3cm、幅2.7cmを測る。肩は明確な段をなさず、なで肩である。

31号竪穴住居跡（図版22、第31図）

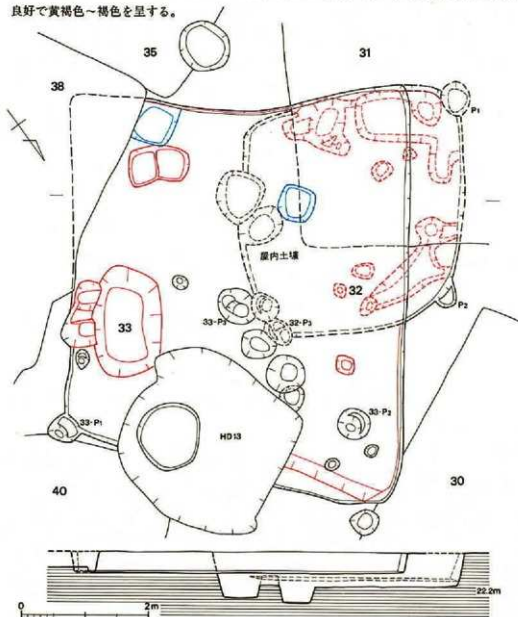
30号住居の1m西に位置し、32・33号住居と重複している。両短壁にベッド状遺構を付設する。竪穴部に占めるベッド状遺構の面積の割合は、他の「二」字型ベッド状遺構を持つ住居と比べて高い。床面は貼床をし、ベッド際に主柱痕が残る。



第31図 31号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物 覆土中から土器が出土している。

土器 (図版86、第143図) 1・2・7・8は本住居とかけ離れた時期の土器である。3は口径3.2cm、器高2.7cmのデズクネ土器で外面は指圧痕が残り、内面はナアている。4は一部を欠くが口径12.5cm、器高4.9cmの鉢で底部は高台状に作る。内面はハケ目が残る。5は鉢か甕の脚台で内外面にハケ目が残る。6は壺片で頸部に丹塗りする。ともに、砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～褐色を呈する。



第32図 32・33号竪穴住居跡実測図 (1/60)

32号竪穴住居跡 (図版24、第32図)

31・33号住居に切られ、僅かに残る。平面プランは13号住居に似て隅内の方形を呈し、各辺は弧を描く。主柱穴は四隅に配置されたと考えるが、南隅を除いてP₁~P₃を検出したにとどまった。南東壁中央に屋内土壌を検出したが、それに伴う出土品はない。

33号竪穴住居跡 (図版22・24、第32図)

31・32号住居、16号祭祀土壌を切り、38号住居、13号廃棄土壌に切られる。竪穴部の過半が他遺構と重複しているわけである。平面プランは異形の台形を呈し、南西壁は内側に張り出した弧を描き、北東壁は張り込み面はほぼ直線的だが貼床下のライン(赤線で図示)は南西壁と同様に内側に張り出した弧を描く。主柱穴を中心とした柱配置は不明瞭だが、P₁~P₃が候補に入るだろう。他遺構との重複が激しく、個別遺構の確認に失敗した部分があり、柱配置等は明確にし難い。

出土遺物 若干の土器片と土製品が出土した。土器は図示していない。

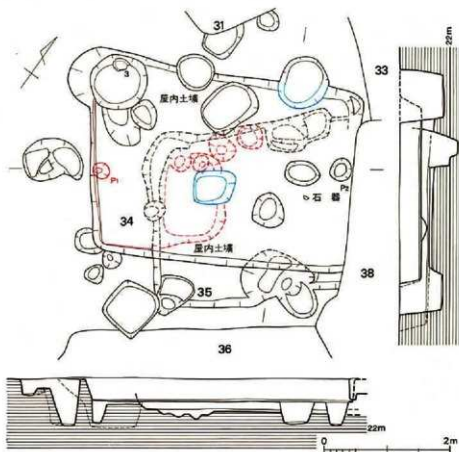
土製品 (図版52、第116図-7) 貼床下層から出土した土玉で、31・32号住居のいずれかに伴う可能性が高い。充形品ではないが、長径3.5cm、短径3.4cm、孔は径6mm程である。

34号竪穴住居跡 (図版23・24、第33図)

35号住居を切り、38号住居に東壁を切られる。竪穴部は長方形を呈し、小型である。貼床面は不明瞭な部分もあったが、35号住居と重複した部分は厚く、かなりしっかりしたものであった。西隅に貼床面から掘り込んだ、略円形の屋内土壌があり、壁の一部は竪穴部の壁と一致する。土壌の床面から22cm浮いて高坏の破片が出土した。主柱穴は短壁際のP₁・P₂と考える。P₁は貼床面の下でしか検出できなかったが、柱痕は残っておらず、注意しておれば床面で検出できたかもしれない。この柱配置と屋内土壌の位置から、住居の範囲はさらに外側に拡がることは明らかであろう。

出土遺物 屋内土壌を含めて、土器・石製品が覆土中から出土している。本住居に直接伴う状況で出土したものはない。

土器 (図版87、第144図) 1はアズクネ風の無頸の壺で、 $\frac{1}{2}$ 程残っている。器肉は厚く、全面をナデ調整するが粗い作りである。底部は凸レンズ状を呈する。口径4.3cm、器高6cmを測る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を呈し、黒斑がある。2は口縁部の $\frac{1}{2}$ を欠失するが、口径16.2cm、器高9.1cmを測る鉢である。外面はハケ目が残る、内面はナデ調整し指圧痕が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色~茶褐色を呈し、黒斑がある。3は脚部を欠失した高坏で、復原口径27.2cmを測る。器面の風化が進んでいるが、丹塗磨研されていたようで、内面は丹の残りがかなり良いが、外面も僅かに丹が残っている。胎土は精製されており、



第33図 34・35号竪穴住居跡実測図 (1/60)

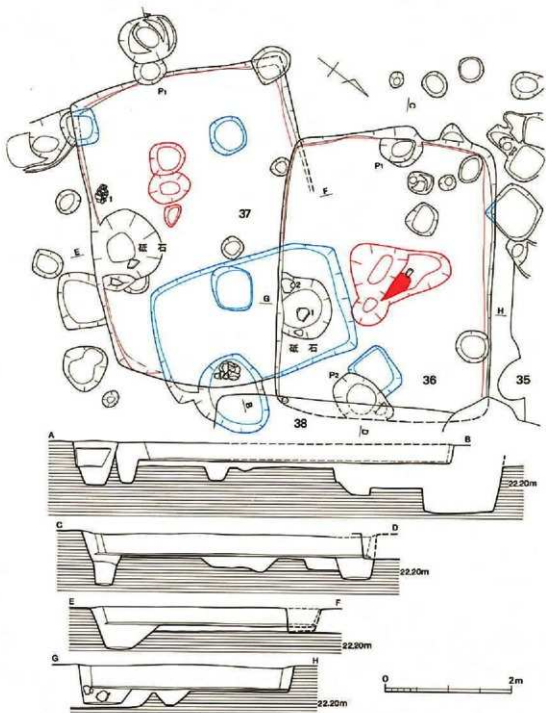
焼成良好で生地は明るい黄褐色を呈する。4は $\frac{1}{2}$ 程残った破片からの反転復原図で、口径22cm、器高6.7cm程の鉢である。ハケ目調整の後、外底面はへら削りを行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で淡黄褐色を呈し、口縁部付近に黒斑がある。

石製品 (図版62・63、第123図-26) 石庖丁の破片が2点出土した。26は灰色で粘板岩質の石材で作られている。図示していない他に1点は貼床下層から出土したものである。小豆色をしている。

35号竪穴住居跡 (図版23・24、第33図)

34・38号住居に竪穴部のほとんどが切られる。極めて小型で、隅円の長方形プランを呈する。柱配置は不明である。南東壁の土塊状の遺構を屋内土境としたが、確信はない。竪穴部の規模から、方形竪穴の可能性を留保しておきたい。

出土遺物 特に図示して説明できるものはない。



第34图 36·37号竖穴住居跡实测图 (1/60)

36号竪穴住居跡（図版22～25、第34図）

南の37号住居、1号方形竪穴を切り、東壁を38号住居に切られる。隅内の長方形プランを呈し、竪穴部の短壁は僅かな弧を描く。床面は貼床をしており、南東壁のやや東寄りに、貼床面から屋内土壌を掘り込んでいる。屋内土壌の西辺は南東壁のほぼ中央に位置する。主柱穴は南東・北西の各短壁際に貼床面で検出した。主柱痕は残っておらず、柱は引き抜かれたようである。主柱穴の柱配置から、34号住居と同様に住居の範囲はさらに竪穴部の外に拡がるのが考えられる。補助柱については、規則的な配置を示すピットを認定することができず、不明である。

出土遺物 土器と砥石が出土している。ともに屋内土壌への流入・転落品であり、伴なうものではない。

土器（図版87、第144図） 1はほぼ完形の甕で、口縁部に蓋を留めるため、4孔を穿つ。口径15cm、器高16.9cmを測る。器面は剝離がはげしく、調整痕は内部下半のナデ、外部下半のハケ目調整が残る程度である。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。2は甕の底部で外面にハケ目がよく残る。内面はナデ調整である。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～暗褐色を呈する。

石製品（図版67、第 図-58） 仕上砥に近い砥石で、硬質砂岩製であろう。

37号竪穴住居跡（図版23・24、第34図）

北側36号住居に切られ、北東短壁が1号方形竪穴、20号祭肥土壌を切っており、13号掘立柱建物とも重複している。竪穴部の平面プランは36号住居と酷似し、主柱穴配置も同様のことが考えられる。P₁と対になる主柱穴は遺構の重複が激しい部分であったため検出できなかったが、おそらく、東北短壁にP₁と対になるP₂があったのではなかろうか。P₁は南西短壁の中央ではなく、やや南に寄った位置にあり、それは上屋との関係であろう、また、P₁は竪穴部に接するが外に位置することは重要である。屋内土壌は南東壁際のほぼ中央に設置している。

出土遺物 土器と砥石が出土している。砥石は屋内土壌への流入品であり、上器は1は屋内土壌の西際の床面に潰れた状態で出土し、完形品に接合されるので、本住居に伴う資料と考えてよからう。2は流れ込んだ状態で出土しており、本住居に伴うものではない。

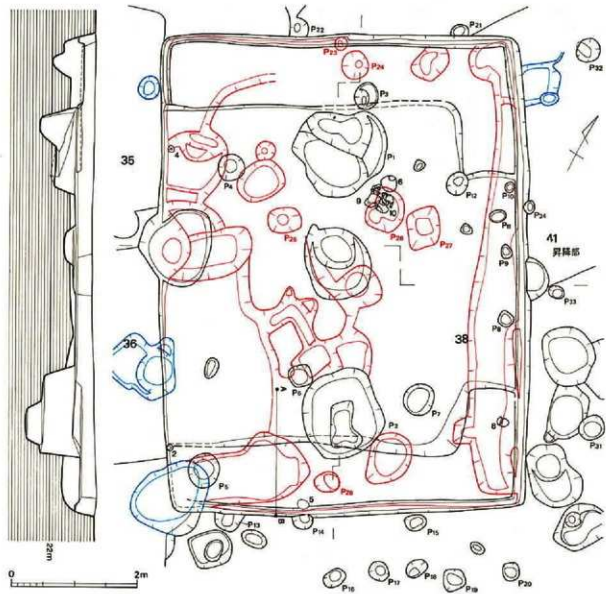
土器（第144図） 1は口縁を一部欠失するが、口径26cm、器高26cmを測る甕で、底部が異常に大きい。口縁部はヨコナデされ、内面はナデ、外面はハケ目調整し、外底面は擦過痕がある。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。2は通常に見られる甕で、復原口径31.8cm、器高33.8cmを測る。口縁部はヨコナデされ、内外面はハケ目調整される。外底面はナデている。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。

石製品（図版67、第126図-51） 砂岩製の完形品で、仕上砥よりもやや粗い。表面に鉄製品の先端部でつけたか、とおもわれるような、刺突痕状のものがある。

38号竪穴住居跡（図版23～24、第35図）

本遺跡最大の30号住居の南東6mの位置にあり、30号住居の主軸に対して90°東に振れている。本住居は30号住居に継ぐ規模であり、竪穴部内外の個別遺構に見るべきものがある。この住居は周囲の遺構（33～36・41号住居、12～15号獨立柱建物、20号祭祀土壇）をすべて切っている。竪穴部の平面プランは隅円長方形を呈し、各壁は僅かに外側に膨らんだ弧を描く。両短壁側に“L”字型のベッド状遺構を付設し、北東壁の中央は3.2mの幅でベッドが途切れる。ベッドは土層断面（A-B）によれば、他の住居の覆土・地山・表土等で客土し、その表面を地山の黄灰色砂質土・黄褐色粘質土で貼っている。南西壁のほぼ中央に貼床面から屋内土壌を掘り込んでいる。土壇一部が竪穴部の外に張り出している。規模は上端で長径1.2m、短径1.14m、深さは貼床面から22cmである。床のほぼ中央に炉がある。主柱穴は $P_1 \cdot P_2$ の二つで、柱はすでに掘り抜かれていた。検出した主柱穴は当初の規模を保っているのか、掘り抜く時に掘り広げたかは不明だが、ともに径1.5mに及ぶ大きなものである。主柱穴の他に補助柱穴かと思われるピットが竪穴部外、床面、貼床下層に30個（ $P_3 \sim P_{32}$ ）存在する。これらの全てが本住居の建築時、使用時に関係していたとは言えないが、以下のように考える。

- ① 北東壁のベッドが途切れた中央部分にある径65cm程のピット状の遺構を竪穴部への昇降施設ではないかと想定するが、ここに小ピット（ $P_8 \sim P_{11} \cdot P_{22} \cdot P_{24}$ ）が規則的に並ぶ。なかでも $P_8 \sim P_{10}$ は壁小溝に沿って一直線に並び、深さも15cm前後で一定している。 P_{22} と $P_8 \cdot P_9$ は二等辺三角形の頂点に位置するような配置状況で、この二等辺三角形の中に昇降施設ではないかと想定する遺構が存在する。これを昇降施設と考えることが許されるならば、これらの小ピットのうちのいくつかは、昇降施設に伴うものと考えられる。
- ② $P_{24} \cdot P_{25}$ はベッド下層で検出したが、僅かにずれるものの住居中軸線にほぼのっており、主柱を立てて上屋を造る時の補助柱を立てたピットではなからうか。
- ③ $P_{22} \cdot P_{23}$ も貼床下層で検出したが、上屋を造る時の補助柱を立てたピットではないかと考える。
- ④ P_{14} と P_{22} 、 P_{13} と P_{21} がほぼ対応する位置にあり、竪穴部壁際になんらかの施設があったのではないかと想定する。
- ⑤ $P_{16} \sim P_{20}$ は南東壁にほぼ沿って並び、壁との距離は約1mである。また P_{16} は住居の中軸線にほぼ乗り、 P_{20} は北東壁の延長線上にほぼ乗るように位置し、意識的にこのように配置されたと思われる。よって、この柱列は本住居に伴うものとする。このような柱列は本住居ではこの部分だけに存在し、竪



1. 黄灰砂質、灰河粘質、褐色粘質土混合
2. 褐色粘土層
3. 時灰河褐色土、褐色粘土粒混入
4. 時灰褐色土に褐色粘土、赤色土ブロック混入
5. 褐色粘土ブロック
6. 時灰褐色土
7. 黄灰砂、褐色粘土、赤色土ブロック混合
8. 時灰褐色土に褐色粘土、真灰砂混入
9. 褐色粘質土
10. 時灰河砂質土(黒色土粒混入)
11. 赤土粒混入
12. 土に散る小砂粒多し
13. 土に散る遺物を多し
14. 時灰褐色土に褐色粘土粒を混入
15. 時灰褐色砂
16. 土に散る
17. 時灰褐色土に褐色粘土粒、黄灰砂を混入
18. 土に散る
19. 褐色、褐色黄褐色、黄褐色土ブロック混合
20. 褐色、黄褐色、黄灰砂質土混合

21. 土に散る
22. 土に散る
23. 黄褐色粘土ブロック層
24. 時灰褐色土、時灰黄褐色粘土ブロック混入
25. 土に散るがブロックが少しい
26. 土より若干厚い
27. 時灰褐色土
28. 時灰河砂質土に褐色粘土粒をわずかに含む

第35図 38号竪穴住居跡実測図 (1/60, 1/40)

穴部の壁との関係から、長方形の区画を想定でき、78号住居のような“張り出し部”の存在を推測する。

- ⑥ 北東壁から1m程離れた位置にあるP₂₉・P₃₀は、壁との距離がベッドの幅とはほぼ一致し、径・深さも差がないので本住居に係るピットであろうと推測する。他の壁の外にはこのようなピットは検出していない。

以上、推測の域を出ないが、竪穴住居の竪穴部と竪穴部外のピットから、一定程度の規制性を持ちそうなピットを抽出して、補助柱穴の存在と機能について考えたが、遺構の激しい切り合いや調査のまずさから、補助柱穴の存在と認識できなかつたり、検出面の認識に間違いがあることも考えられるが、調査結果から、考えられることは上述のようなことである。

また、南西壁とベッド状遺構の床面側を除いた壁際に沿って壁小溝を検出した。壁小溝は本遺跡では、貼床面では明瞭に確認できるわけではないが、貼床面をすこし削って下げた面ではっきりと検出される。壁小溝を検出できなかった部分に、この種遺構がなかったとは言いきれず、掘り間違えた可能性もある。土層断面図(A-B)では、杭・板等を打ち込んだ痕跡をみとめることはできないが、上述の遺構の検出状況から、さらに他遺跡の例から排水溝の機能は排除してよからう。

出土遺物 土器・土製品・石製品が出土している。土器のうち、3は南東側ベッド上で覆土を5cm程噛んで浮いた状態で検出し、同じベッドの壁際に検出した2は住居を焼棄した直後に投棄したか落ち込んだようで同じ覆土を1cm程噛み、壁に持たれかかった状況であった。4も2と同じ状況で検出した。これらの3個体は本住居に伴わない。6・9・10はP₁は横の床面上で潰れた状況で検出した。本住居に直接伴う土器は6・9・10の3個体で、他に図示した土器も流入・投棄品である。土製品として、紡錘車が覆土中から出土している。石器は縄文時代の凹石であり、一括して後述する。

土器(図版87・88、第145図) 1～7は鉢で、4は蓋の可能性がある。1はデスクネ風の作りで口縁の一部を欠くが、口径7.5cm、器高3cmを測る。2は口径10.1cm、器高3.3cmの小型の浅鉢である。外面はへら削り、内面はヨコナデ調整を行う。3は口径10.2cm、器高4.7cmで内外面ともへら磨きを行う。5は口径16.3cm、器高7.1cmを測る。口縁部の外面にハケ目が残るが、内面はナデ、外面はナデ・へら削りにより消えている。口縁部は強いヨコナデのためくぼんでいる。6は口径20.9cm、器高8.7cmの完形品である。内面はハケ目をナデ消すが、外面は体部中位にハケ目が残るが、口縁部はヨコナデにより底部付近はへら削りとその後のナデにより、ハケ目を消している。7は口縁部を一部欠くが、口径13.3cm、器高10cmを測る。外面の一部にハケ目が残るが、他の部分はヨコナデ・ナデ調整により消している。これらの鉢は胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈し、6は外底面に黒斑があり、7は内外面に煤が付着している。4は鉢として図示したが、蓋かもしれない。口径10.5cm、器高5.8cmである。外

面にへら磨き・ハケ目が残し、内面は口縁部・底部にハケ目が残るが他の部分はナデ消している。胎土に砂粒をすこし含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、黒斑がある。8は脚台付きの鉢で、口縁部を欠失する。推定口径17cm、器高14cm程であろう。ハケ目が目立ち、脚裾端部にまでハケ目調整を行う。鉢部内面は底部を残してハケ目をナデ消している。胎土に砂粒はやや多めで、焼成良好で黄褐色を呈し、黒ずんでいる。9は底部を欠くが口径11cm、器高20cm、ほどに復原される。口縁部の内外面と外面の体部中位までハケ目残り、それ以外の内面はナデ、外面は藁かへら状器具による擦過で消している。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～暗灰黄色を呈し、煤が付着して黒光りする。10は口径21.3cm、器高26.5cmのほぼ完形の甕である。内外面にハケ目が目立ち、底部付近はナデ消している。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で淡茶褐色を呈するが、外面は全面に煤が付着し、黒い。

土製品(図版51、第116図-15) 径3.7cm、厚さ1.2cm程の紡錘車である。中央の孔は径6mmである。胎土に石英粒が目立ち、焼成良好で淡茶灰色を呈する。

39号竪穴住居跡(図版22、第36図)

竪穴部の壁が完全に削平されており、主柱穴(P_1 ~ P_4)とカマドの痕跡が39号住居の壁近くに残っていた。柱配置は整然とし、正方形の各隅に主柱穴が位置するように配置している。詳細は不明である。

40号竪穴住居跡(図版22・24、第36図)

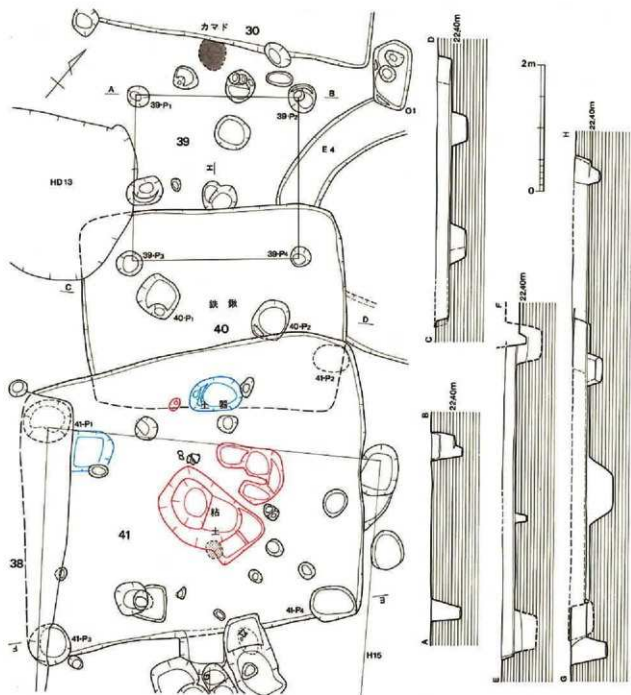
西隅を13号廃棄土壌に、南東壁41号住居に切られる。土の見分け方がむつかしく、不明瞭な部分を多く残した。主柱穴は、竪穴部長壁と平行しないが、 P_1 ・ P_2 であろう。このズレは住居の掘り方を竪穴部の外まで考慮すれば、さして問題ではなからう。南東壁中央際に屋内土壌を設置する。

41号竪穴住居跡(図版22・24、第36図)

南西壁を38号住居に切れ、南東壁中央付近はビットに攪乱される。平面プランは不整平行四辺形を呈する。床はあまり明確ではないが貼床をしている。主柱穴は明瞭でないが、ひとつの可能性として、竪穴部四隅の P_1 ~ P_4 (P_3 は検出していない)を想定するが、 P_3 は15号獨立柱建物の柱穴にも使われるので、今ひとつ確信がもてない。この住居についても不明な部分を多く残した。

出土遺物 僅かな土器、鉄製品、石製品が出土した。土器は図示していない。すべて、本住居に伴う状況では検出していない。

鉄製品(図版54・55、第117図-6、第119図-43)



第36図 39~41号竪穴住居跡実測図 (1/60)

6は葦尻を欠くが大型の鉄鎌である。現存長10.4cm、身部最大幅3.2cmを測る。鉄錆のため不明な部分も多いが、敢えて大胆に推定図示した。43は鉄製穂摘具の破片で、木質は残らない。現存する寸法は、図の横幅3.5cm、縦幅2.3cmで素材は薄い鉄板である。鉄製品すら捨てたようである。

石製品(図版60、第122図-1) 細身の石鎌で長さ4.1cm、幅1.6cmの完形品である。石材は緑泥片岩である。

42号竪穴住居跡(第37図)

38号住居の東に位置する。43・44号住居に大きく切られ、多数のピットと重複するため、遺構検出が困難であった。調査時点で時点相互の切り合い関係を明確に把握できず、不明な部分を多く残した。図示した43・44号住居との切り合い関係は遺構検出後に検討したもののだが、自信はない。南壁にベッド状遺構を検出したが、北壁側には残っていなかった。主柱穴は不明瞭である。

43号竪穴住居跡(第37図)

42・44号住居や多数のピットと重複するため、遺構検出が困難であった。調査時点で住居相互の切り合い関係を明確に把握できず、不明な部分を多く残した。図示した切り合い関係は上述のとうりである。多数のピットがあるが、主柱穴は床面下で検出したP₁・P₂であろうと考える。また、ベッド状遺構の痕跡を北東壁で検出したが南西壁側では検出しきれなかった。

出土遺物 土器・石製品が出土している。石製品は縄文時代のもので後述する。土器は、伴なう状況で出土したものはなく、第37図の出土状態図のものも、すべて、床面から浮いている。

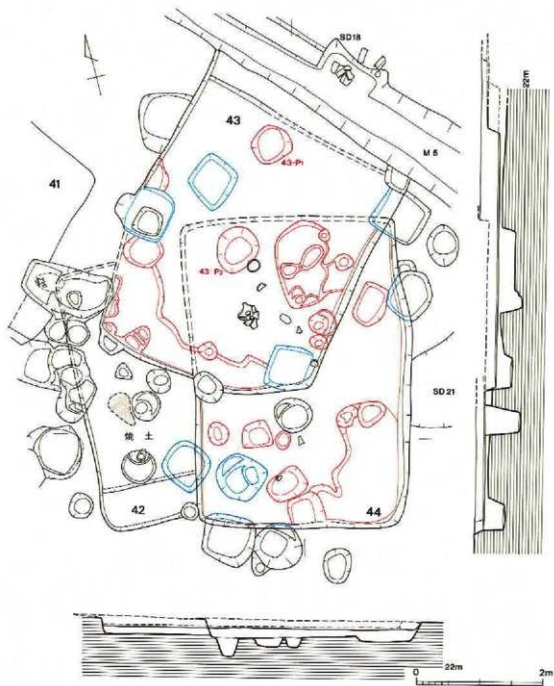
土器(第145図) 口辺部のほとんどを欠く鉢で、テズクネ風である。口径8cm、器高2.6cmである。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で黒色を呈する。

44号竪穴住居跡(第37図)

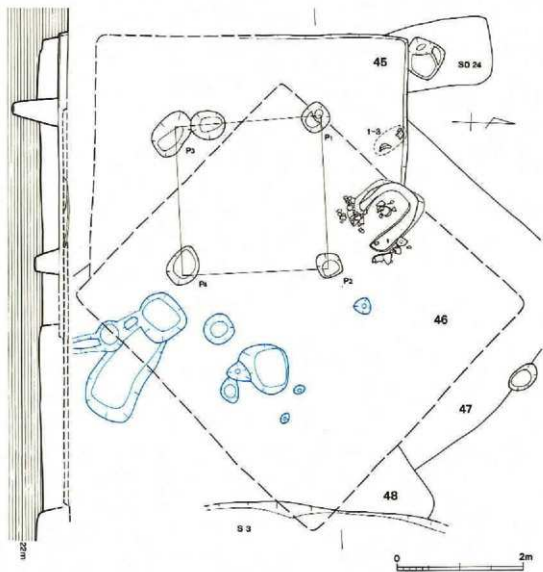
42・43号住居や多数のピットと重複するため、遺構検出が困難であった。調査時点で住居相互の切り合い関係を明確に把握できず、不明な部分を多く残した。図示した切り合い関係は上述のとうりである。多数のピットがあるが、主柱穴配置は不明である。

出土遺物 石製品が2点、土器が若干量出土しているが、43号住居と同様で本住居には伴わない。なお、整理期間の関係で土器は図示しきれなかった。

石製品(図版51、第116図-17、第125図-45) 17は紡錘車で二つに割れており、半分は本住居から、他の半分は21号祭祀土壇から出土し、接合して完形品になった。径5.4~5.6cm、厚さは穿孔部で5mm、孔径7mmを測る。石材は雲母片岩である。45は砂岩製の仕上砥である。使い込まれており、側面に刃部を研いだ跡がある。



第37图 42~44号竖穴住居跡実測图 (1/60)



第38图 45·46号竖穴住居跡実測图 (1/60)

45号竪穴住居跡 (図版26、第38図)

46号住居、14号廃棄土壌等に大きく切られ、北西隅だけが残る。他の住居の例から判断すれば、カマドは北壁に付設されていたと思われ、46号住居に破壊されたものであろう。支柱穴P₁～P₄である。貼床面で検出し、支柱痕は当然残っていなかった。

出土遺物 住居がすこし埋った後、北壁から投棄・流入した状態で土器が出土している。また、貼床下層で石炭丁が出土した。

土器 (図版88、第145図) 1は須恵器の坏蓋で、口径12.2cm、器高3.9cmを測る。天井部外面は時計廻りのへら削りをし、同内面はナア、他の部分はヨコナエを行っている胎土に細砂粒を含み、焼成良好で外面は灰黒色、内面は黄灰色を呈する。2は土師器の坏身で、口径11.4cm、器高4.3cmを測る。口辺部の内外面はヨコナエ、内底面はナエ調整を行い、外面は丁寧に静しへら削りをしている。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で明黄茶褐色を呈し、外面は黒漆を塗ったと思われ、黒色を呈する。3は小形の甕である。口辺部の破片があるが、接合しないので推定復原図である。口径12cm、器高9cm強に復原される。カマドの支脚に使用され、二次加熱のため、器面が変色し、煤が付着している。

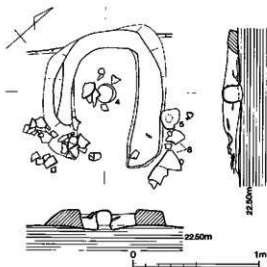
石製品 (図版62、第123図-23) 横幅9cm、縦幅5.1cmの破片である。小豆色である。

46号竪穴住居跡 (図版26、第38・39図)

掘り方を間違えたため、竪穴部の壁を飛ばしてしまった。貼床面も完全に検出していない。

支柱穴は地山面まで掘り下げたが、はっきりとせず、深さは地山に及んでいないようである。よって、支柱穴の配置は図化できない。北西壁付近にカマドを付設している。支脚に小型の甕を倒立して使い、その中心は壁推定線から40cm未満の部分に位置する。袖部は住居の覆土と見分けるのがむづかしい、暗褐色上系の土を使って造っている。右袖側には甕と支脚に使った小型の甕があり、左袖側とカマド内には甕の小破片が散乱する。

出土遺物 カマド周辺や覆土中から土器が出土している。支脚は確実に本住居に伴ない、カマド周辺の土器も支脚用の甕と甕であり、伴なうだろう。



第39図 46号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

土器 (図版88・89、第145・146図) 1・2は須恵器を擬した土師器の坏セットである。1は口径13.3cm、器高4.2cmに、2も各々、12.8cm、3.6cmに復原される。口縁部を除いた外面は静止ヘラ削りを行い、口縁部内外面はヨコナデ、他はナデ調整を行っている。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で明黄茶褐色を呈するが、内外面に黒漆を塗っていたようである。3も須恵器を擬した土師器の脚台付鉢である。岡上で、口径12.6cm、器高16.3cmに復原される。器面の風化が著しく、調整は不明である。胎土に砂粒をすこし含み、焼成良好で明黄茶褐色を呈する。4は支脚に使用された甕で、使用時の状態で図示した。口径13.1cm、器高14.9cmの完形品である。口辺部付近はナデ消すが、ハケ目がよく残り、内面はヘラ削りを行う。内面には黄褐色粘土が付着しており、支脚として固定し、割れないように中に粘土を詰めていたようである。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で明茶褐色を呈するが、煤が多量に付着する。5も支脚として使用された甕である。内面はヘラ削りされるが、外面は風化して調整痕は残らない。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で明茶褐色を呈するが、煤が多量に付着する。6は口径18cmを測る甕で、胴部下半を欠く。口縁部の内外面はヨコナデし、頸部以下の内面はヘラ削り、外面はハケメ調整を行う。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で黄褐色を呈する。7は甕である。内面はヘラ削り、外面はハケ目調整を行う。胎土に砂粒を多量に含み、九州で明茶褐色を呈する。8は大型の甕で、口径は40.2cmに復原される。風化し、外面のハケ目が部分的に残る程度である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。

47号竪穴住居跡 (図版27、第40図)

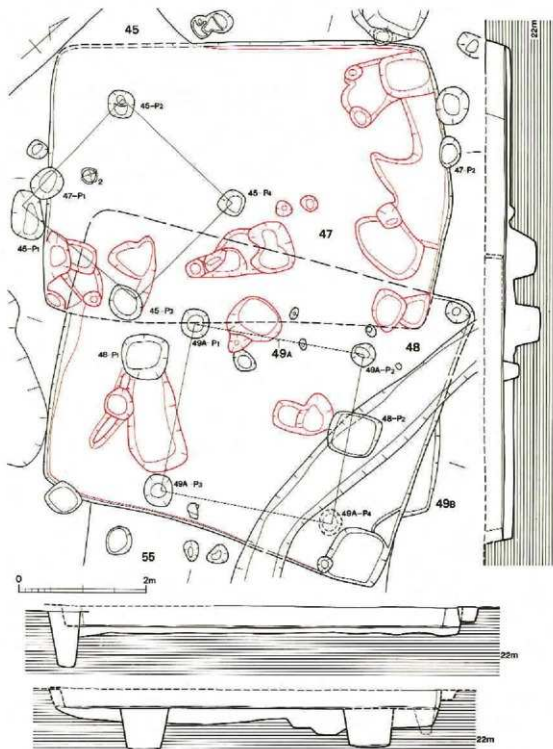
周囲の住居に大きく切られているため、不明な部分が多い。竪穴部の平面プランは隅円の長方形で、北東短壁は外側に膨らんで弧を描く。主柱穴は $P_1 \cdot P_2$ であろう、と考える。両短壁のベッド状遺構存否については確認できなかった。屋内上壁についても同様である。

出土遺物 土器、土製品、石製品が出土している。土器のうち、1は覆土下層から、2は床面に潰れた状況で出土した。また、投弾、石庵丁、凹石が出土しているが別に後述する。

土器 (図版89、第146図) 1は半分程遺存する鉢で、口径17.5cm、器高10cm程に復原される。風化が著しいが内面には指圧痕、ヘラ痕が残る。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で灰黄褐色を呈し、外面は二次加熱のため黒変する。2は脚部をとりはずした丹塗磨研の高坏で、口径24.1cm、現存高6.8cmを測る。風化しており、調整痕は外面の下部に僅かに残るだけである。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で生地は黄褐色を呈する。

土製品 (図版52) 小型の投弾で、一部を欠く。表面は風化し、黒褐色を呈する。

石製品 (図版63) 小破片の石庵丁で、石材は片岩で、灰黄色を呈している。



第40图 47·49A·B号竖穴住居跡実測图 (1/60)

48号竪穴住居跡 (図版27、第40図)

住居が幾重にも重複し、3号周溝墓にも切られているため、詳細は明瞭ではない。主柱穴は P_1 ・ P_2 であろうと考える。床は貼床していたが、ベッド状遺構は検出しきれなかった。

出土遺物 覆土、貼床下層から、土器・鉄製品・石製品が出土している。いずれも、本住居に伴うものではない。

土器 (図版89、第147図) 1～3は鉢である。1はテズクネ風の作りで、口径11.2cm、器高5.1cmを測る。口縁部付近はココナデ、他の部分はナデている。2は口径11.8cm、器高5.2cmを測る。ハケ目が残り、外底面はヘラ削りするが、器面が剥落して一部にその痕跡をとどめる。3は大型の鉢で、口径46.8cmに復原され、現存高28cmを測る。ハケ目調整後、体部に一条の突帯を巡らし、刻目を入れる。外面はタタキ目の上からハケ目調整し、内面はハケ目調整の後、頸部をココナデする。3個体とも胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈し黒斑がある。

鉄製品 (図版56、第119図版-38) 銚の茎部分の破片である。断面は逆U字形を呈し、幅1.4cm、現存長2.4cm、厚さ1mm弱を測る。裏面に柄の木質が僅かに付着している。

石製品 (図版64・66、第124図-34・41、第126図-55) 34は仕上砥で四面とも使用している。石材は硬質の砂岩である。41も仕上砥の破片で、表面に刃部を研磨した跡がある。石材は硬質の砂岩である。55は軟質砂岩製の仕上砥で表面に刃部を研磨した跡がある。四面とも使用している。

49-A号竪穴住居跡 (図版27、第40図)

4本柱(P_1 ～ P_4 、ただし P_4 は検出していない)の竪穴住居であるが、48号住居の調査の過程で気づかず、竪穴部を検出していない。重複する他の住居の外側までは竪穴部が延びることはなく、前代の住居の埋土の範囲内に新たに張り込んだものである。カマドの痕跡はなかったし、古墳時代後期の土器も出土していないので、他のカマドを有しない4本柱の竪穴住居と同様なものであろう。

49-B号竪穴住居跡 (図版27、第40図)

48号住居の北東壁に僅かに竪穴部を残している。大きく切られており、主柱穴を含めて詳細は不明である。

50号竪穴住居跡 (付図1)

51・52号住居、3号土壇、3号周溝墓、溝6に大きく切られ、主柱穴を含めて詳細は不明である。

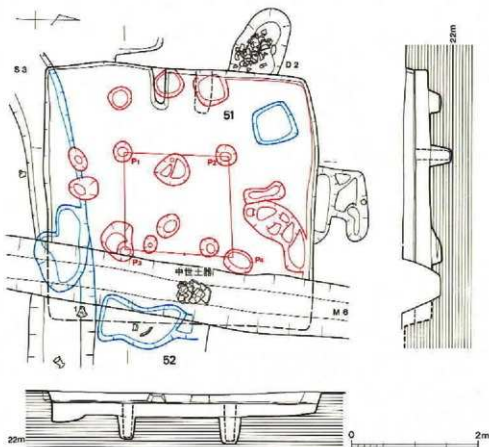
出土遺物 土器・土製品が床面、貼床下層から出土している。土器のうち、3は床面から、1・2は貼床下層から出土した。また、投弾も貼床下層から出土した。

土器 (図版、第4図) 1は口辺部の $\frac{1}{2}$ を欠く鉢で、口径15.6cm、器高8cmを測る。外面はハケ目調整を行い、口辺部はヨコナデ、内面下半はナデ調整を行う。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で黄褐色を呈する。2は $\frac{1}{2}$ 程残存する丹塗磨研の高坏の坏部で、口径32cmに復原される。3は $\frac{1}{2}$ 程欠く丹塗磨研の高坏の脚部で、現存高15.6cmを測る。ともに、胎土は精選され、焼成で生地は黄褐色を呈するが、3は煤が付着して黒光りする。

土製品 (図版) 小型の投弾で、両端部が摩擦して丸くなっている。

51号竪穴住居跡 (図版26、第41図)

本集落でも最も新しい住居で、中世に完全に埋没した溝6には切られるが、周囲の遺構を切



第41図 51号竪穴住居跡実測図 (1/60)

っている。竪穴部は略正方形を呈し、西壁中央にカマドを付設する。カマドは掘り方を間違え、右袖部を飛ばしてしまった。主柱穴は $P_1 \sim P_4$ で4本である。貼床はしっかりしたものではなく、床面下層の埋め土の上に薄く白色の砂質土を敷いた程度であった。よって、主柱痕は平面的に確認しずらく、引き抜かれたものと思って調査を進めたが、実は残っており、主柱痕は復原した図である。竪穴部の各壁は真東・南・北にはほぼ合致する。

出土遺物 須恵器・鉄製品が出土し、東壁を切る溝6の最上層から中世の土器が出土している。

土器 (図版89、第147図) 1は坏蓋で、 $\frac{1}{2}$ 程欠くが口径15.2cm、器高2.3cmを測る。天井部外面は逆時計廻りのへら削りを行い、同内面はナデ、他の部分はヨコナデ調整を行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で暗青灰色～黒色を呈する。

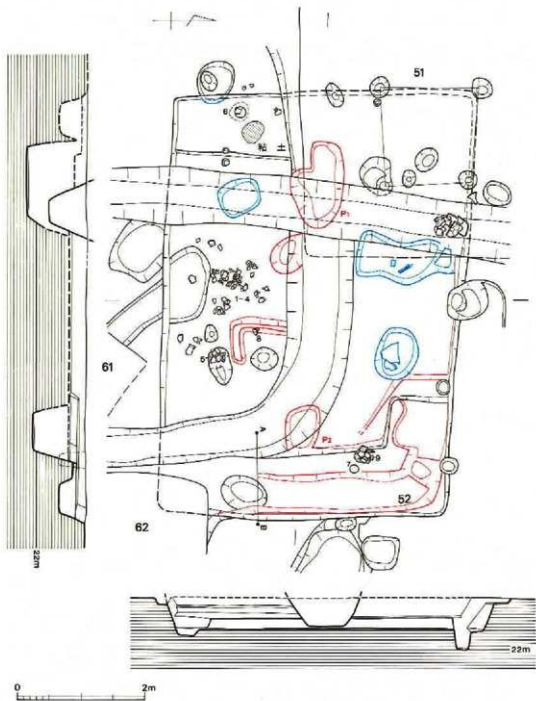
鉄製品 (図版54、第117図-11) 全長6cmの細身の鉄鏝である。

52号竪穴住居跡 (図版25～27、第42図)

51・62号住居、3号周溝墓、溝6に切られ、50・61号住居、22・23祭 土壌を切っている。竪穴部は隅円の略長方形プランで、周壁は真東・西・南・北の方位とはほぼ一致する。東西の両短壁に“L”字型のベッド状遺構を付設する。床面は貼床を行い、南壁中央に貼床面から屋内土壌を掘り込む。主柱穴は $P_1 \cdot P_2$ であるが、3号周溝墓に切られているため主柱痕については不明である。竪穴部内の付属遺構のあり方は38号住居に酷似する。ベッド状遺構は図示した土層断面A-Bによれば、幅85cmのベッドの壁側の地山を、幅60cm、深さ20～25cm程の溝状に掘って、主柱穴側に幅25cm程の地山を掘り残して土塊状にし、掘った部分に地山や暗褐色土等を客土し、その後、ベッドの表面に地山の粘質土を貼っている。上記の土塊状の部分は客土した土砂が床面に流出しないよう、土留めの機能を果たしている。他の住居のベッド状遺構もおおむね、このような造り方をしているものが多い。

出土遺物 土器・鉄製品・石製品が出土している。図示した土器はベッド上面と屋内土壌周辺の貼床面からの出土である。屋内土壌周辺の土器は5を除いて、置かれていたものが潰れた状況ではなく、破片がもたまりなく散乱しており、住居の廃棄直後に無造作に投げ込んだような状況である。よって、1～4・8は本住居の廃棄時に近い時期の土器と思われる。5～7・9は本住居に伴う可能性の高い土器である。鉄製品・石製品は覆土中や貼床下層の出土品である。なお、石製品のうち、縄文時代の偏平打製石斧は別に後述する。

土器 (図版89・90、第147・148図) 1～7は鉢で大きさ、形態にバラエティがある。1は $1/4$ 程欠くが、口径13.1cm、器高5.5cmを測る。口縁部内面に僅かにハケ目が残るほかは、ナデ消している。2は口縁の一部を欠くが略完形品で、口径14.2cm、器高4.4cmを測る。外底面はへら削りされ、内底面は強いナデにより、器肉が極端に薄くなる。3も完形品で、口径12cm、



第42图 52号整穴住居跡実測图 (1/60)

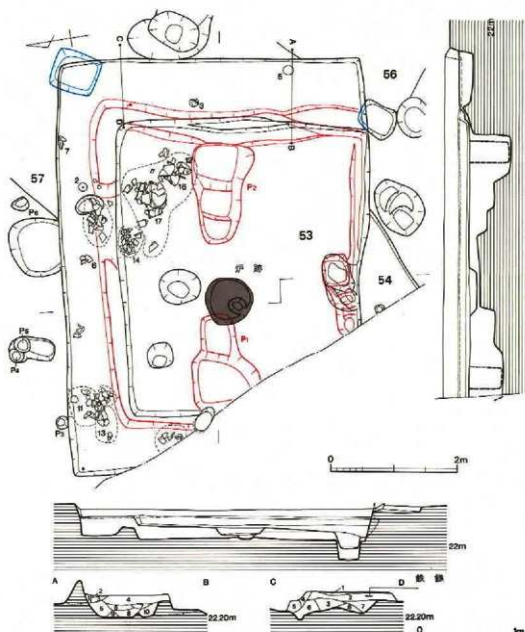
器高4.7cmを測る。外面の下半にハケ目が残るが、他の部分はナデ消している。4は底部をすこし欠くが口径12cm、器高5.5cmを測る。口縁端部は外側に僅かに折り曲げる。口縁部内側にハケ目を残すが、他の部分はナデ消している。5は $\frac{1}{2}$ ほど欠くが、口径22.5cm、器高11.5cmに復原される。内面に粗いハケ目残り、上半部にタタキ目残り、下半部はヘラ削りを行っている。6は僅く一部を欠くが、口径17.7cm、器高7.6cmを測る。内外面にハケ目残り、外面下半は部分的にヘラ削りを行う。7は完形品で、他の鉢より深めである。口縁部の内面にはハケ目残り、他の部分はナデ消している。これら7個体の鉢は、胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好黄褐色を呈し、2・5を除いて黒斑がある。8は脚台付鉢で、口縁部は僅かしか残らない。復原口径20cm弱、現存高11cmである。口縁部の内面と鉢部の底部付近にハケ目が残っている。外面はタタキの後、ナデている。口縁部付近に黒斑がある。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好で、黄褐色を呈する。9は略完形の甕で、口径17.8cm、器高23.5cmを測る。内外面にハケ目がよく残り、外面にはハケ目に下にタタキ目が僅かに残る。底部外面には擦過痕が観察される。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈するが、体部下半に煤が付着し、黒色を呈す。

鉄製品(図版57、第118図-31) 西側ベッド南部の直上から出土した鍬先の破片である。どうしようもなく破損している。住居廃棄直後に捨てられたものである。

石製品(図版62・64、第123図-19・124図-29) 19は石庵丁の破片で、両側に刃がある。現存する横幅は5.7cm、縦幅は3.7cmである。小豆色をした石材である。29は小型の仕上砥である。長さ5.9cmで断面は一辺が1cmの平行四辺形を呈する。石材は硬質の砂岩である。

53号竪穴住居跡(図版25・28・29、第43図)

54・56・57号住居を切る。竪穴部の平面プランはほぼ長方形を呈し、南西隅は調査区外に延びる。*コ*字型のベッド状遺構を付設し、貼床面から炉・屋内土壌を掘り込んでいる。主柱穴は P_1 ・ P_2 のふたつで、掘り方に段を有する。 P_1 の上に炉が旧状を保って残っており、貼床もしっかり残っていたので、この段は柱を引き抜く時に掘り込んだものではなく、当初からのものである。主柱穴の掘り方としては、本遺跡では異例のものである。主柱底は確認できなかった。なお、 P_2 から甕が出土している。柱を立てる時のマツリに関係するものであろう。ベッドは七層断面(A-B、C-D)によれば、地山の土を主に黒色土を客土し、最後に地山の砂質土を上面に貼っている。竪穴部の北壁外に小ピット(P_3 ~ P_6)があり、補助柱穴だと推測する。 P_6 と対になるのは P_4 か P_5 で、北壁をほぼ三等分した位置にあり、壁からの距離も僅かに違う程度である。深さは15cm程度である。機能については、不明だが、張り出し部のようなものがあつたのかもしれない。 P_3 は西側ベッドのほぼ延長線上にあり、他の住居でも見られるように、上屋に関係したものであろうか。



1. 灰褐色
2. 灰褐色に黄褐色粘土粒
3. 黄褐色土ブロック層
4. 灰褐色に黄褐色粘土ブロック層
5. 暗灰褐色に砂粒、褐色粘土、黒色土粒混入
6. 土より2.5倍多い
7. 土より層上ブロック多い
8. 土より砂粒が多く白味が強い
9. 地山の砂層に粘土粒が混入する
10. 土より砂粒が少なく、粘土を多く含む

1. 灰褐色土、灰黄砂の混合
2. 灰褐色土、黄褐色粘土ブロック混入
3. 灰褐色土に灰黄、灰黄色粘土、地山砂ブロック混入
4. 灰褐色土
5. 灰黄色粘土、褐色粘土ブロック層
6. 灰黄色砂、褐色粘土、灰黄色粘土ブロック層(多い)
7. 白色砂層下黄褐色土
8. 黒色土層底砂

第43図 53・54号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 土器・土製品・鉄製品が出土している。土器は床面、ベッド上面で潰れた状態で破片も散乱せずにまとまって出土したものがかなりある。すなわち、6・11～14・16・17がそうで、これらは本住居に伴う。また、15は主柱穴P₁の中から出土し、住居を建てる過程に行った祭祀用の土器である。2・3・5・7は完形品も含まれるが、本住居に伴うか否か、判断にくるしむ。鉄製品はベッドの客土中から出土し、他の住居のものが混入したものである。土製の紡錘車は覆土下層で検出した。

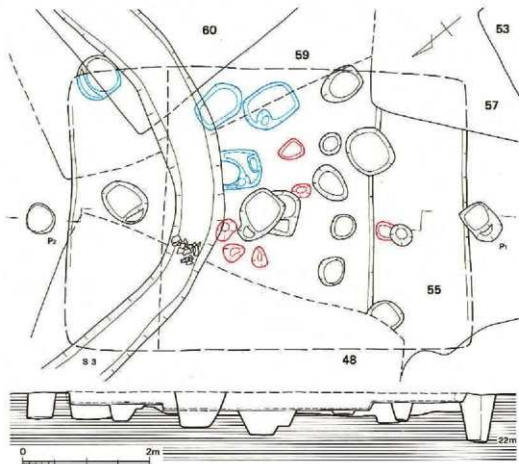
土器 (図版90・91、第148・149図) 1・2は脚台付の鉢で別個体である。1は復原口径17.2cmである。内面は口縁部から頸部付近に暗文を入れ、底部はヘラ磨きを行う。外面はハケ目の上からナデしており、下半はヘラ削りを行っている。2は図示した状態で完形であり、脚部径13.4cmを測る。ハケ目調整され、外面はナデしており、僅かに残る程度である。3～6は鉢である。3は口径12.4cm、器高5cm、4は12.8cm、5.9cmに復原され、5は14.3cm、5.5cm、6は18.5cm、6.6cmである。ハケ目はヘラ削りやヨコナデ・ナデにより、消されているものもある。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、3・5には黒斑がある。7・8は埴で、ともに底部に欠く。7は口径12.5cm、器高13cm程に復原され、8は口径12.9cm、で器高は14cmに復原される。ハケ目調整されるが、7はハケ目の上から暗文を入れ、外面の胴部下半はヘラ削りし、胴部内面はナデている。8も胴部内面はナデしており、底部にハケの工具痕が残っている。胎土は精選され、焼成良好で、7は黄褐色を呈し 8は褐色で黒斑がある。9は大型の鉢で、口径26cm、器高19.5cmに復原される。内外面ともハケ目調整され、口縁部はヨコナデにより、外面の胴部下半はヘラ削りする。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を呈し、黒斑がある。10～17は甕で、11～15の小型品と16・17の大型品がある。11～15は口径14～17cm、器高は20cm程で、14が26cm強に復原される。ハケ目を多用し、15は外面の底部付近をヘラ削りする。12・13はハケ目の下にタキ目が残り、胴部をヘラ削りしている。底部はほぼ、丸底である。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈し、11～13には黒斑がある。16は口径26cmに復原され、現存高23cmである。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈するが、外面に煤が付着する。17は底部を欠くが、ほぼ完形に復原され、口径36cmを測り、器高44.5cmに復原される。全面にハケ目調整を行い、その後、頸部と胴部に突帯を貼り付ける。口縁端部と頸部の突帯は刻み目を入れ、加飾する。胎土の砂粒は多くなく、焼成良好で黄褐色を呈し、大きな黒斑がある。

土製品 (図版51、第116図-14) 完形の紡錘車で径3.8cm、厚さ1.5cm、孔径6mmである。

鉄製品 (図版54・55、第117図-8・23) 8は全長11.5cm、身の最大幅3.6cmの鉄鎌で、身の中央に楕円型の透孔がある。23は未製品の破片である。横幅3.5cm、縦幅3.2cm、厚さ2mmである。

54号竪穴住居跡 (第43図)

53号住居に大きく切られ、西側の調査区外に延びる。詳細は不明である。



第44図 55号竪穴住居跡実測図 (1/60)

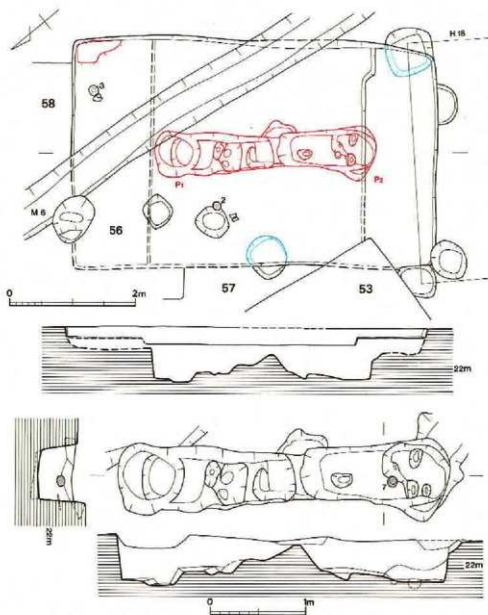
55号竪穴住居跡 (図版25、第44図)

多くの遺構と重複し、調査の最終段階まで、住居のプラン・規模等がわからなかった。図は他の住居を参考にして推定復原したものである。支柱穴はP₁・P₂だと推測する。詳細は不明である。48・59・60号住居を切り、57号住居・3号周溝墓に切られる。

出土遺物 図示できるものは出土していない。遺構図の土器は3号周溝墓のものである。

58号竪穴住居跡 (図版25、第45図)

57・58号住居、18号獨立柱建物を切り、53号住居に切られる。竪穴部は長方形プランで、両



第45図 56号竪穴住居跡実測図 (1/60)

短壁にベッド状遺構を付設する(北東側のベッドは掘りすぎてしまった)。主柱穴は布掘りである。西隣の53号住居の主柱穴が完全な布掘りではないが、それを意識したような掘り方をしていいる。南側の柱が立つ位置に、土器を埋納している。住居を建てる過程での祭帳に関するも

のであろう。53号住居の東側主柱穴でも、同様に土器に埋納されており、主柱穴掘り方の類似性ととも、両住居の親近さを伺うことができよう。30号住居例を含めて、竪穴住居の新築・廃棄の際の祭祀行為を考える上で貴重な資料である。

出土遺物 土器・石製品が出土している。土器は完形かそれに近く復原されるものもあるが、本住居に確実に伴うのは7で、1は主柱穴内に混入した破片で、他は覆土中から出土した。石庵丁も覆土中から出土した。

土器 (図版92、第150図) 1～5は鉢である。1は反転原因で口径12.4cm、器高6cm弱程である。外面はタタキ目が、内面がハケ目がよく残る。2は $\frac{1}{2}$ 程欠くが、口径14.5cm、器高7.4cmを測る。内面はハケ目調整され、外面はナデ、ヘラ削りを行う。3は $\frac{1}{4}$ 程残存し、口径17.2cm、器高5cmに復原される。外面にハケ目が僅かに残るが、ナデ消されている。4は $\frac{1}{2}$ 弱残るが、口径14.6cm、器高6.5cmに復原される。外面はハケ目が残り、底部はヘラ削りする。内面はナデている。5は $\frac{1}{4}$ 程遺存し、口径27.3cm、器高8.6cmを測る。内面に暗文を施し、外面はハケ目調整後、底部をナデている。これらは、胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈し、2は黒斑があり、5は煤に濃密に付着しているのか、黒漆を塗ったか判断できないが、黒ずむ。6は口径16.4cm、推定器高14cm程の甕である。粗いハケ目調整後、外面下半はヘラ削りを行う。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈し、大きな黒斑がある。7は甕であろう。粗いタッチの土器である。胴部最大径10.8cm、現存高5.8cmを測る。外面はヘラ削りを行い、ハケ目が僅かに残る。内面は粗いナデである。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で緑灰色を呈し、黒斑がある。

石製品 (図版63) 石庵丁の破片である。小豆色の石材で作っている。

57号竪穴住居跡 (図版25、第46図)

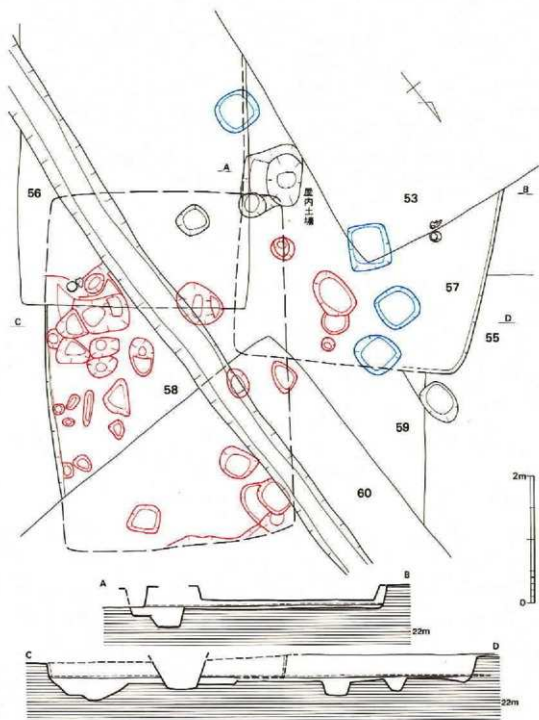
53・56・58・60号住居、溝6に切られ、55号住居を切っている。残りが悪く、不明な部分が多々ある。図も推定復原因である。よって、当然あるべきベッド状遺構は自信がないので図示しなかった。主柱穴についても同様である。

出土遺物 土器が少量、出土している。直接、本住居に伴うものはない。

土器 (図版92、第150図) 1は器台で裾部を欠く。口縁部付近はヨコナデし、外面はハケ目が残る。口径11cmに復原され、現存高13cmを測る。

58号竪穴住居跡 (図版25、第46図)

56・59・60号住居、溝6に切られ、55・57・58号住居を切っている。残りが悪く、不明な部分が多い。図も推定復原因である。よって、当然あるべきベッド状遺構は自信がないので図示しなかった。主柱穴についても同様である。



第46图 57·58号竖穴住居跡実測图 (1/60)

出土遺物 若干量の土器片と石製品が出土した。土器は図示できるのがない。

石製品 (図版63) 石庖丁と砥石が1点ずつ出土している。石庖丁は貼床下層から出土した片程度の破片である。現存部分の寸法は横幅7.1cm、縦幅4.7cmである。石材は小豆色を呈する。砥石は覆土中から出土した破片で、石材は砂岩である。

59号竪穴住居跡 (図版26、第47図)

この住居を含め、3号周溝墓の南側は「暗黒地帯」であったため、切り合った部分の壁を把握できなかった住居が多く、本住居も推定復原図である。隅円長方形のプランを呈し、両短壁にベッド状遺構を付設したようである。主柱穴は P_1 ・ P_2 である。東側壁の中央に屋内土壇を設置する。

出土遺物 覆土中から土器が出土している。本住居に伴う出土品はない。

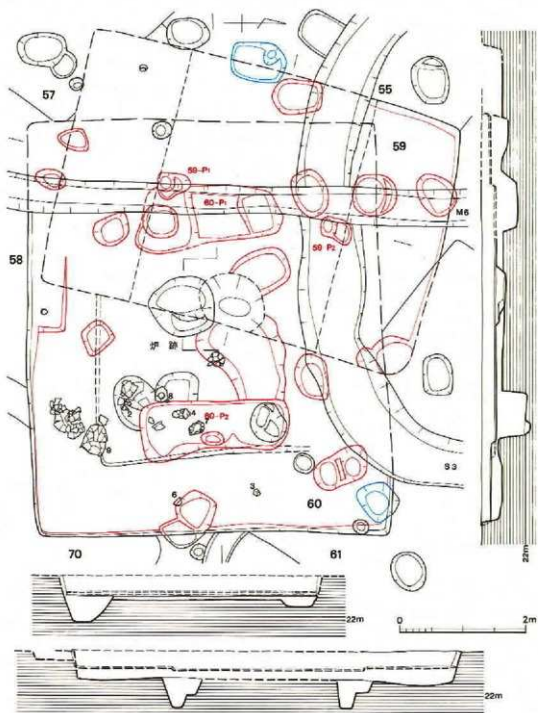
土器 (第150図) 1・2は同じ作りの甕で、完形の2は口径16cm、器高23.3cmを測る。口辺部内面と胴部外面はハケ目調整され、胴部内面はへら削りを行う。内底面、口辺部はヨコナデをしている。1は底部を欠くが、2と酷似している。ともに、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、煤が付着している。

60号竪穴住居跡 (図版26、第47図)

周囲の住居を切り、3号周溝墓・溝6に切られる。遺構が重複しない部分は極く僅かで、掘り間違えたところもある。竪穴部のプランは幅広く、正方形に近い。ベッド状遺構は東側の一部を確認しただけだが、「コ」字型のものであろうと推測する。屋内土壇を検出できなかったが、あるとすれば、3号周溝墓に切られた北壁側であろう。主柱穴は P_1 ・ P_2 である。通常の主柱穴と異なり、住居の主軸に対して直交する土壇状の掘り方である P_1 は不整長方形で、床面の南北両側に、貼床面からの深さ70cm程のピットがある。 P_2 は略長方形の掘り方で床面までの深さは貼床面から50cm程である。掘り方の北側に主柱痕が残る。すべての主柱痕を検出したわけではないが、 P_1 ・ P_2 の状況から、掘り方の両端に柱を立てたようで、本住居の主柱は4本であろう。このような柱配置の住居は、本遺跡に残らず、極めて異例である。

出土遺物 土器、石製品 (鋳型・砥石) が出土している。土器は1・3を除いて、床面から出土しているが、3・6は他の床面上出の土器とは出土状態が異なり、完形品ではないが、細かく割れずにベッド上面に転がっていた。2・4・7～9はきれいに潰れた状況で出土し、この5個体と図示していないが、9の南の甕、8の北の甕が本住居に伴う。石製品 (鋳型・砥石) は貼床の下層から出土した。

土器 (図版93、第150・151図) 1は口径8.2cm、器高2cm程に復原される小型の鉢で、底部にハケ目が残り、口縁部はヨコナデ、他はナデ調整を行う。胎土は精選され、焼成は良好で



第47图 59·60号竖穴住居跡实测图 (1/60)

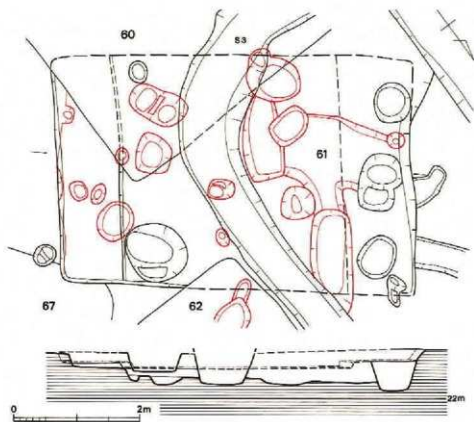
黄褐色を呈し、底部に黒斑がある。2は脚裾部径17cm、現存高16cmの高坏である。ハケ目調整後、脚柱部外面はへら削りし、他はヨコナデ、ナデでハケ目を消す。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を呈する。3・4は脚台付鉢である。3は鉢部を欠き、脚裾部径13cm、現存高4cmを測る。ハケ目調整されるが、外面はへら磨きにより、僅かに残る程度である。4は口径23cm、器高17.7cmに復原される。ハケ目調整されるが、鉢部外面はへら磨きにより、内面の頸部以下や脚部外面はナデにより、ハケ目は僅かに残る程度である。ともに、胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で、3は褐色～茶褐色、4は明茶褐色を呈する。5・6は図上で完形に復原される鉢で、底部の形状に畿内の影響が認められる。5は口径16.2cm、器高11cmに復原される。しっかりとした略長方形の底部の上に半球状の鉢が乗り、内面は丁寧なハケ目調整を行い、外面は上半部はナデ、下半部はタタキ目が残る。外底面はナデ調整である。また、内底面の中央はナデ調整のため、窪んでいる。6は口径17cm、器高8.8cmに復原される。5と比べて底部は台形状で、口縁部が直線的に外開きである。内外面のハケ目は繊細で方向に統一性がない。外面の底部付近にはタタキ目が観察され、外底面はナデ調整である。ともに胎土に金雲母・角閃石や赤褐色粒を含み（胎土は肉眼で見ると他の土器と大差はない）、焼成良好で5は褐色～黒色、6は明茶褐色を呈する。7・8は壺である。7は口径13.6cm、器高15.5cmに復原される。ハケ目調整され、胴部内面はナデ調整である。8は口径12.6cm、現存高19.2cmである。ハケ目調整されるが、口縁部はヨコナデ、胴部下半の外面はナデ調整によりハケ目は消えている。ともに、胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で明茶褐色を呈するが、7は黒斑があり、8は煤で黒ずむ。9は長調の甕で僅かな底部を有する。口縁部は刻目があり、内外面はハケ目調整され、外面はハケ目の下にタタキ目が残る。外面の胴部下半はへらによる擦過痕が残る。

石製品（巻頭図版2・図版61・64、第122図—15・第124図—32） 15は砥石に転用された鋳型の破片で、石材は砂岩である。現存する部分の寸法は、最大幅10.6cm、同厚さ3cmを測る。後に砥石として使われたため、型の部分は研磨され、鉄器の刃部を研いだためか、本来なかるべき所に沈線がある。鋳型の鋳型であろう。32は硬質砂岩製の仕上げ砥である。鉄器を研いだものであろう。

61号竪穴住居跡（第48図）

遺構が複雑に切り合っているため、本住居の全貌は掴み得なかった。図は推定復原図である。多分、竪穴部は長方形プランであろう。また、両短壁に“ニ”字型のベッド状遺構を配すると考えらる。支柱穴・屋内土壇・炉跡については、不明である。

出土遺物 土器・石器が出土している。図示した土器は貼床下層の出土品で、他の出土土器は小片で覆土中から出土している。石器は石斧と砥石があるが、石斧は別に後述する。砥石は覆土中、床面から1点ずつ出土しているが、投棄されたか流入品である。



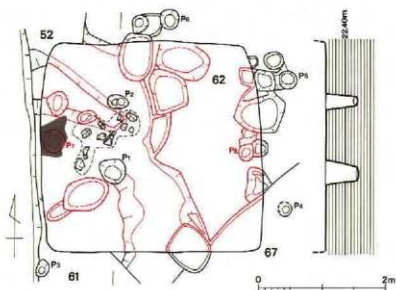
第48図 61号竪穴住居跡実測図 (1/60)

土 器 (図版94、第15図) 口径11.4cm、器高5.1cmを計る鉢である。口縁部はヨコナデ、他の部分はナデ調整を行っている。胎土は砂粒を含み、焼成良好で黄褐色しを呈する。

石製品 (図版68・第125図-46・第126図-57) 砥石が2点出土している。46は砂岩製の仕上げ砥の破片である。表面に煤が付着している。57も砂岩製の仕上げ砥で、折損後、本住居に捨てられたものである。

62号竪穴住居跡 (図版26、第49図)

3号周溝墓の東溝に接し、52・61・67号住居を切っている。竪穴部は方形プランを呈し、壁は全く残らず、貼床面が僅かに遺存するだけである。カマド痕跡が西壁中央に残っていた。本柱穴の配置は明瞭ではなく、 P_1 ・ P_2 と検出できなかったが他に二つのピットの存在を考慮して4本柱とするが、竪穴部外に主柱穴を求めるしかなかろう。前者の場合、貼り床をはずして地山まで掘り下げたが、 P_1 ・ P_2 に対応すべき P_3 ・ P_4 を検出できなかった。後者の場合、小ピット



第49図 62号竪穴住居跡実測図 (1/60)

が竪穴部の周囲にあり、そのうち P_2 ・ P_6 は本住居の竪穴部と関係がありそうな配置をしている。ただし、遺構が重複しているため、 P_3 ～ P_5 に対応するであろうピットは検出していない。 P_4 ・ P_5 は、両ピットの中点と竪穴部東壁の中点がほぼ一致し、壁から等距離に存在し、本住居に関係する可能性は高いと推測する。これに対応するピットが西壁側に存在すれば都合がいいのだが、3周周溝基があり、このような柱配置を考えずに調査したので、検出していない。南西隅の P_3 それに対応するピットが北西隅に存在したかもしれないが、上記の理由で検出してない。 P_6 は、これに対応すべきピットが南壁側で検出してないで、あるいは無関係の可能性はある。なお、貼床下層で検出した P_7 ・ P_8 は各々東西両壁際の中央に位置し、上屋の建築時に関係するものではなかろうか P_7 の上にカマドを付設しているので、生活時には埋っている。上述したことは、主柱欠配置が不明確なので、あくまで可能性の問題として考えたわけである。

出土遺物 P_1 ・ P_2 とカマドに囲まれた部分の床面上に土器の細片が出土したが、図示できなかった。また、貼床下層から甕棺祭に使用したと思われる丹塗磨研土器が出土した。

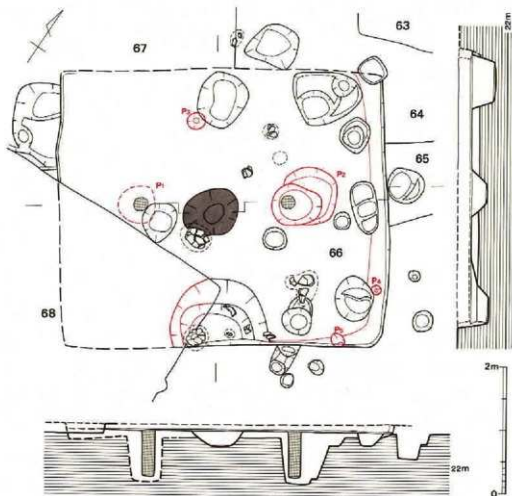
土器(図版94、第151図) 1は丹塗磨研土器で、口径12.5cm器高2.7cmの蓋で、2孔一對の小対を4個穿つ。胎土は精選されて砂粒をほとんど含まず、焼成良好で生地は黄褐色を呈する。完形品の優品である。

63～65号竪穴住居跡（付図1）

66号住居の東にあり、住居のほとんどが調査区外に延びるので、詳細は不明である。

66号竪穴住居跡（図版30・31、第50図）

南西隅を68号住居に切られている。竪穴部の平面プランは、遺構が重複しているため、しっかりと掴んではいない。図は整理時の推定復原図であり、写真図版と異なる部分がある。床面は貼床をしているが、あまり、しっかりとしたものではない。東南壁中央に屋内土壇があり、住居廃棄後に土器が流れ込んでいる。直径20cm程の支柱痕が床面に明確に残っていた。支柱穴はP₁・P₂の二つであろうと考える。また、南東側の竪穴部外の小ピットのいくつかは本柱居



第50図 66号竪穴住居跡実測図（1/60）

に伴う補助柱穴であろう。なお、貼床の下層の小ピット(P₃~P₅)も、補助柱穴的な可能性が高いと推測する。

出土遺物 土器・土製品・石製品が出土している。土器は、一定の形をなすものは床面でほぼまとも出土しているが、完形品がそれ近くに復元できるものは1だけで、1すら屋内土壌への流入品である。本住居に伴う土器はない。その他の出土品も同様である。

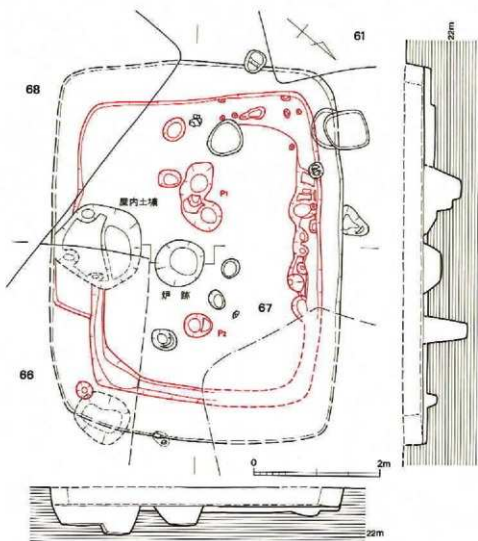
土器 (図版94、第153図) 1は完形の無頸壺のミニチュア品で、口径4~4.5cm、器高5.3cmを測る。分厚い底部がつく。外面の下半は僅かにハケ目が残し、多くはナデ消されている。粗いタッチのデスクネで、指圧痕が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。口縁部の外面に粗く丹塗りし、体部に黒斑がある。2~7は甕で4は口縁部~体部上半の一部を欠く程度で他は反転復原図である。4は口径19.4cm、器高24.7cmを測る。内外面ともナデ調整を行い、器面は平滑である。底部はしっかりした平底である。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で内面は黒褐色、外面は淡茶色である。他の甕は反転復原図で、口径は16.8~24.5cmである。ハケ目調整されるものが多い。底部は皆、平底のようである。

土製品 (図版51、第116図) 本遺跡の出土品の中では大型の紡錘車である。全面をナデ調整し、側面は凹線風にくぼむ。直径5.5cm、厚さ1.2cmである。胎土に石英粒を多量に含み、焼成良好で茶褐色を呈する。貼床下層からの出土品である。

石製品 (図版60・68、第122図-11・第127図-61) 11は石剣の切先片である。現存長7.9cm、幅3.2cmを測る。刃部は刃こぼれしている。覆土上層からの出土品である。61は砂岩製の仕上げで、各面を使用している。表面に刃部を研いだと思われる、細い条痕が残る。

67号竪穴住居跡 (図版30、第51図)

竪穴部の平面プランは隅円の長方形を呈し、各壁は外膨らみの弧状を呈する。北隅は調査区外に拡がり、各隅角部は他の住居に切られている。この住居は主柱穴の位置をそのままに、拡張して建て替えたと思われ、貼床下層からさらに1軒分の竪穴部を検出した。新旧住居の各壁は各々平行であり、屋内土壌も拡張した分、南東側に寄せている。炉は1軒分しか検出しておらず、下層の住居と同じ位置に炉を掘り込んだためであろうか。ここで注目すべきは、主柱穴の位置を変えていないことと、さらに、柱を一度抜いて同じ位置に再度、柱を立てたと考えられるように主柱穴掘りの乱れがないことである。このことは、主柱をそのままにして、竪穴部だけを拡張し、新たに床を貼ったことを示しているのではなからうか。その場合、屋根を葺き変えることがあったかもしれないが、住居の枠組は大きくは変わらなかったであろう。図示した屋内土壌は掘り間違えたため、新旧のものを同一平面上に書いている。図では二段掘りになっているが、北側の深い方が下層の屋内土壌で、南側の浅い方が拡張された住居のものである。床面、貼床下層に小ピットがあるが、補助柱穴としては不明部分が多い。

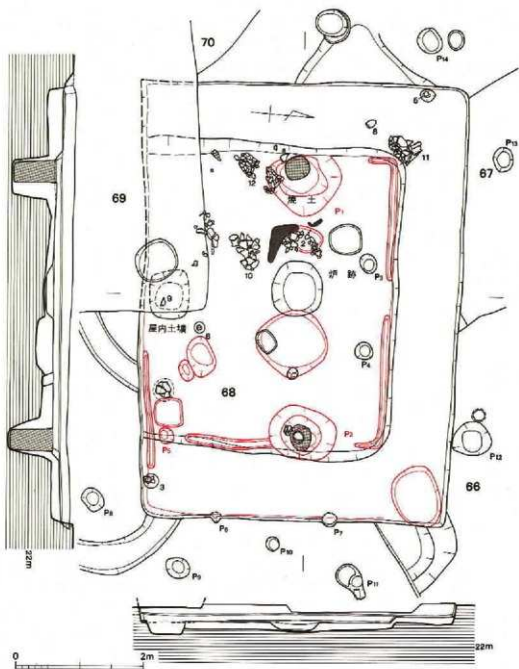


第51図 67号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 弥生時代後期の土器が出土している。破片資料のため、時間の都合で図示していない。だが、本住居に直接伴うものはない。

68号竪穴住居跡 (図版30~32、第52図)

69号住居に切られる他は、周囲の遺構を切っている。竪穴部のプランは隅円長方形を呈し、"コ"字型のベッド状遺構を付設する。主柱穴は P_1 ・ P_2 で、主柱痕が残っていた。床面は貼床され、その面から炉と屋内土境を掘り込んでいる。全てを検出したわけではないが、壁小溝は



第52图 68号竖穴住居跡实例图 (1/60)

貼床下層のベッド際に間断的に検出され、 $P_3 \cdot P_4$ の間で切れている。竪穴部内外に一定程度規則的に配置された小ピット ($P_3 \sim P_{14}$)がある。これらは、ピットの大小・深淺の相違があるものの、およそ、以下のような組み合わせを考えることができよう。

- ① $P_3 \cdot P_4$ は心々距離が1.4mで、両ピット間の中点と北壁の中点がほぼ一致する。また、 $P_3 \cdot P_4$ は北壁からの距離が1.4mで極めて計画的な柱配置であることがわかる。
- ② 南西隅は69号住居に切られて不明だが、他の3隅には2個ずつのピットが存在する。すなわち、南東隅には $P_9 \cdot P_{10}$ 、北東隅には $P_{11} \cdot P_{12}$ 、北西隅には $P_{13} \cdot P_{14}$ が配置される。このように2個のピットが一對となって、壁に対して「はず」の方向に規則的に配置されており、住居の竪穴部外への拉がり、住居の本来の平面プラン、屋根構造や支え方を考える際に示唆的な資料となろう。
- ③ 東壁際の $P_6 \cdot P_7 \cdot P_{10}$ の配置は、 P_{10} にやや疑問が残るが壁際に小ピットが並ぶ例が他の遺跡においても報告例があり、本住居では全部の壁に検出したわけではないが、やはり本住居に伴なうものであろう。

このように、本住居は竪穴住居跡を考える上で重要な要素を含んでいる。

出土遺物 土器・鉄製品・石製品が出土している。土器は北壁側から大量に投棄され、破片となって散乱するものが多く、また、完形品のまま転がっているものもある。これらとは異なり、床面に潰れた状態で出土する土器があり、出土状態に大きな差がある。図示した土器のうち、2・10～12は伴なうが、3・5・6・8については伴なうとは言い難く、9は屋内土壌への流入品である。鉄製品2点は床面、ベッド上から出土し、石器は覆土下層から出土した。なお、縄文時代の石斧は後にまとめて説明する。

土 器 (図版95、第151・152図) 1は二重口縁の甕で、口径12cm、器高6cmに復原される小片である。口縁部はヨコナデされるが、頸部以下は摩滅して調整は不明である。小砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。2の壺は底部は接合しないが、口径15.7cmを測り、器高は35cm程と思われる。口縁部は外湾気味で、胴部最大径は中位にある。内外面をハケ目調整し、内底面は強いナデのためくぼむ。外面下半はヘラ削りし、底部は丸底ではなく、凸レンズ状を呈する。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。3も壺で、口径13.2cm、器高27cmを測る。底部は丸底ではない。ハケ目調整されるが、底部付近はナデ消される。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を呈し、黒斑がある。5・6は鉢で6は脚部を欠失する。ともに外面のハケ目はナデにより僅かに残る程度で、内面は5はヘラ磨き、6はナデている。砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。7は壺か鉢の底部でタキ目残り、外底面はナデしていると思われるが、風化しており、調整痕は残らない。畿内系の七器である。胎土

は金雲母等の砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。8は小型の甕で口径11.4cm、器高17cmの完形品である。ハケ目調整をるが、胴部上半にタタキ目が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で淡茶色～赤褐色を呈し、外面は煤が付着している。9は壺で口径13.6cm、器高13.6cmに復原される。僅かにハケ目が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。10～12は長胴の甕で入念なハケ目調整を行う。10は口径22cm、現存高22.3cmに復原される 胴部下半は擦過痕があり、工具痕が残る。11は口径29.4cm、器高40.3cmで、底部には凸レンズ状を呈する。ハケ目の下にタタキ目が残る。12は口径20cmで、器高26.5cmに復原される。底部付近は摩滅し、調整は不明である。ともに胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で褐色～暗褐色を呈し、煤が付着している。

鉄製品（図版54・55、第117図-14・17） 14は現存長3.9cm、幅8mmの鉄片であるが、製品か未製品か判断できない。17は長さ5.3cm、幅8～13mmで、断面は方形である。未製品であろう。

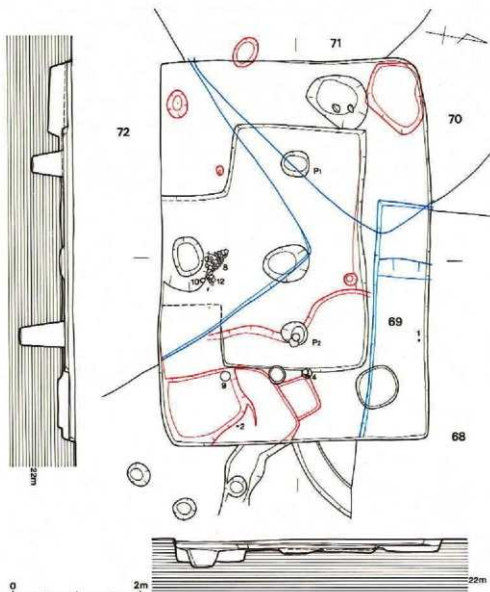
石製品（図版73） 自然石状に見える。砥石であろう。

68号竪穴住居跡（図版30・31・34、第53図）

68・70・71・72号住居を切っている。遺存状態が悪く、竪穴部の壁高は10cmに満たない。竪穴部の平面プランは隅門の長方形を呈する。南壁中央を除いた部分にベッド状遺構を付設し、ベッドが途切れた部分に屋内土壌を設置する。竪穴部のベッドに囲まれた床面は“凸”型を呈する。床面の中央に浅い炉を掘り込んでいる。ベッドから40cm程離れた所に支柱穴（P₁・P₂）を配置する。屋内土壌は貼床面から切って設置され、そのすぐ北の床面で、甕が潰れた状況で出土したが、土壌内部から人工遺物は出土していない。

出土遺物 土器と縄文時代の石製品が出土した。土器は屋内土壌の北側で検出した8・10・12は本住居に伴う。他は覆土中からの出土品である。

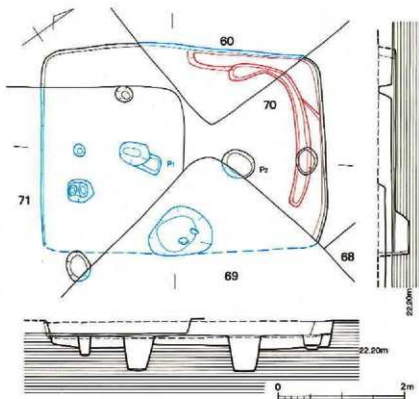
土 器（図版96、第154図） 1～3ははアスクネの土器である。1は口径2.1cm、器高2cmで粗い作りのものである。内外面はナデ調整を行い、工具痕が残る。2は口径3.6cmに復原され、器高2.5cmを測る。内外面はナデ調整を行い、工具痕が残る。3は口径5.2cm、器高3.2cmで、内外面はナデ調整を行い、工具痕が残る。ともに、砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を呈する。4は口径5.2cm、器高3.2cmの鉢で、内外面はナデ調整を行い、外面に工具痕が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、外面に煤が付着している。5は二重口縁の壺で、口径25.2cmに復原される。胎土は金雲母等の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈するが口縁部内面は黒色顔料を塗装されたのか、一部黒光りする。6～8は庄内型の甕である。完形の8は口径14.9cm、器高19cm、胴部最大径18.1cmである。口唇部は僅かだが上方につまみ上げられている。口縁部の内外面はヨコナデされ、僅かにハケ目が残る。胴部外面は上半部に左下がりのタタキ目、中程度にハケ目と擦過痕があり、底部はナデ調整を行う。内面は頸部以下をヘラ



第53図 69号竪穴住居跡実測図 (1/60)

削りし、器壁は薄い。5・6も基本的に同じ作りだが、外面にタキ目が残らず、ハケ目調整を行っている。ともに、胎土に多量の砂粒を含み、焼成は良好で6・8は黄褐色、7は白黄褐色を呈し、8は底部に黒斑がある。9も甕で口辺部を欠く。復原高は11.3cmを測る。内外面をハケ目調整し、内底面はヘラ削りを行う。器面にあまり砂粒が目立たず、焼成良好で茶褐色を

呈す。内面上半部に煤が付着する。9は甎で、口径16.5cm、器高12.6cmである。口縁部はヨコナデシ、以下はヘラ削り、ハケ目調整を行う。砂粒を多く含み、焼成良好で内面は黄褐色、外面は褐色を呈し、黒斑がある。11・12は高坏で、ともに坏部を失っている。11は脚柱部から脚裾にかけてラップ状に開くが、12は透し孔の上で大きく屈折する。ヘラ削り、ハケ目調整を行う。砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、12の外面は丹塗りされる。13・14は器台で、13は器高23cm、器高13.9cmに、14は同じく19.6cm、12.6cmに復元される。口縁部と脚裾部はヨコナデシ、内面はハケ目が残り、外面はナデ消している。鉢部底面の穿孔は、13は径3cm、14は0.6cm程である。あまり砂粒を含まず、焼成良好で13は明茶褐色、14は黄褐色を呈し、黒斑がある。



第54図 70号竪穴住居跡実測図 (1/60)

70号竪穴住居跡 (図版30、第54図)

60・69・70号住居によって大きく切られている。竪穴部の平面プランは隅円長方形を呈する。床面は貼床をして、その面から屋内土壌を掘り込んでいる。主柱穴は P_1 ・ P_2 である。北東壁側の貼床面下に、壁から20cm程離れて幅15cm前後の“L”字型の溝があり、また、北隅から北西壁際が高く、掘り残されている。その理由・機能については明らかにし難い。屋内土壌から、床面より15cm浮いて自然石が二つ出土している。

出土遺構 土器・土製品(投弾)と縄文時代の石斧が出土している。すべて流人品であり、本住居には伴わない。

土器 (図版97、第154図) 1は P_1 から出土した壺の破片で丹塗磨研されている。内面は丹が垂れている。小片のため反転図である。胎土に金雲母等の砂粒を含み、焼成良好で、明茶褐色を呈する。2も蓋で、口径31.6cmに復元され、現存高11cm程である。口縁部と突帯はヨコナデ、他の部分はナデ調整である。胎土に金雲母等の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈する。

土製品 (図版52) 貼床の下層から出土した投弾で、完形品である。

71号竪穴住居跡 (図版30、第55図)

69・72・73号住居に大きく切れ、不明な部分を多く残している。主柱穴は P_1 ・ P_2 で P_3 寄りの貼床面に炉を切っている。東西の両短壁にベッド状遺構を付設していたと思われるが、掘り方を間違えたため、図は推定図である。また、西短壁に小規模な張り出し部を検出した。

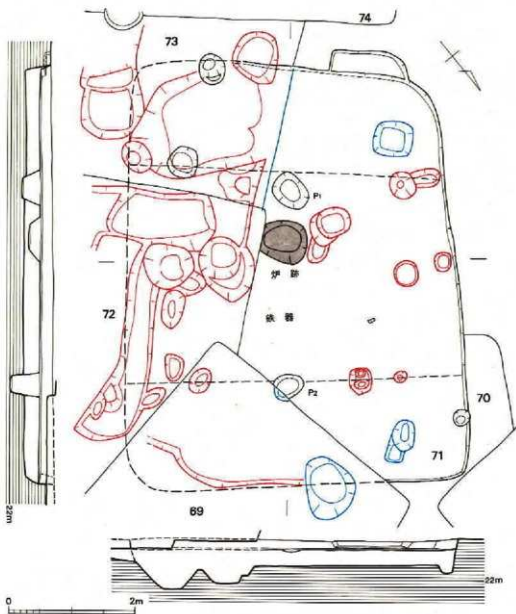
出土遺物 若干量の土器片、不明鉄片・投弾が出土している。土器は小片のため図示していない。弥生時代終末期の土器片である。

土製品 (図版52) 貼床の下層から出土した投弾で、完形品である。

72号竪穴住居跡 (図版30、第56図)

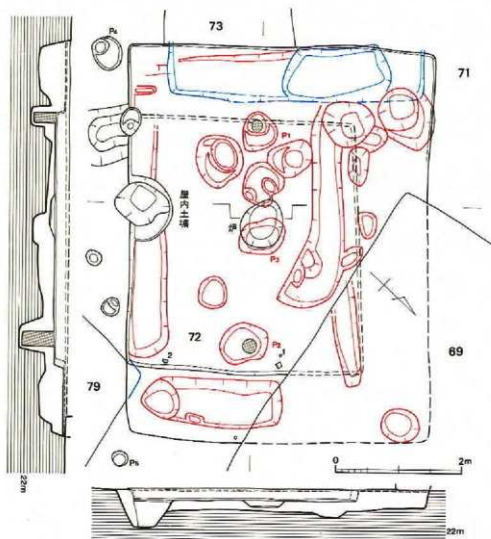
北側を69号住居に切れ、71・73号住居を切る。竪穴部は69号住居より幅が広い。ベッド状遺構は“コ”字型であろうと考える。床面は貼床される。屋内土壌・炉は貼床面から切り込んでおり、また、主柱痕も残っていた。主柱痕は径20cmほどであり、柱の下端部は主柱穴底面より浮いている。粘土をガチガチにつき固めで、その上に柱を立てるからである。主柱穴は貼床の下層で検出した。床面下では、壁に平行に溝状の掘り込みが認められる。また、炉の下にピット(P_3)があり、これらは、極めて面白い下層遺構である。竪穴部の東・南隅の外にある P_4 ・ P_5 は補助柱穴の可能性があり、他の二隅は住居が重複しており、検出できなかった。

出土遺物 土器・石製品(石剣・石庖丁)が出土している。土器3・石剣は貼床下層から出土したが、他の遺物は覆土中、床面から出土した。土器は1・2は床面で検出したが、伴う可能性があるのは1である。



第55図 71号竪穴住居跡実測図 (1/60)

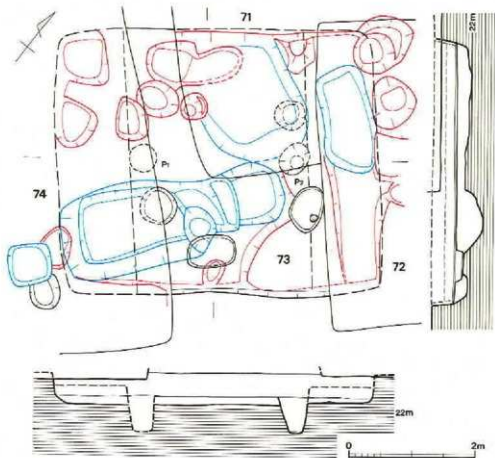
土器 (図版97、第155図) 1は完成品で口径5.4cm、器高5cmを測る尖底の深目の鉢である。アズクネ風の土器で、内外面に指圧痕が残る。胎土は割と精製され、焼成良好で灰褐色を呈し、黒斑がある。2は口径15.2cmに復原され、器高5.2cmを測る鉢である。内面はハケ目調整され、外面はヘラ削りを行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で灰褐色を呈する。3は織内



第56図 72号竪穴住居跡実測図 (1/60)

第5様式的な底部を持つ鉢で、僅かに内湾する口縁部を有する。外面と内底面はナデ調整を行い、内面の体部上半はハケ目調整を行っている。器肉は薄く、口縁部は特に薄く作り、口唇部を欠き、ゆがんでいる。口径は14cm弱、器高は7.5cm程である。胎土は精製され、金雲母・角閃石を若干量含み、焼成良好で淡黄褐色～茶褐色を呈する。4は口縁部の残程を欠くが、口径18.5cmに復原され、器高24.1cmを測る甕である。底部は凸レンズ状を呈する。内外面はハケ目調整され、外面はハケ目の下にタタキ目が残る。下半部は、外面に擦過痕があり、内面はネデている。

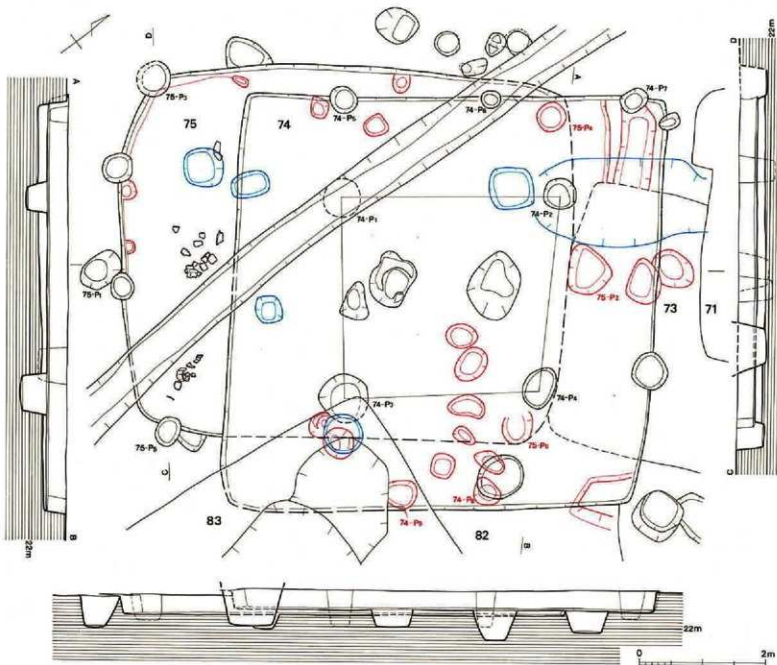
石製品 (図版60・63、第122図-14) 石剣 (14) は、身と茎の一部が残る破片で、現存長8.5cm、関部幅3.7cmを測る。関部から茎にかけて、左右に二つずつのくり込みがある。茎は茎尻に向かって次第に幅を減ずる。身の断面は中央に鑊を作らず平坦で、刃を研ぎ出している。石包丁は小片で、小豆色を呈する。



第57図 73号竪穴住居跡実測図 (1/60)

73号竪穴住居跡 (第57図)

竪穴部の両短壁を、72・74号住居に切られ、北西壁は71号住居を切っており、著しく重複するため、掘り方を間違え、不明な部分を多く残す。また、27～29号祭祀土壇を切っており、遺構が何層にも重なっている。竪穴部の平面プランは長方形であろうと考えられ、主柱穴は P_1 ・ P_2 であろうと推測するが、 P_1 は確認していない。ベッド状遺構も推定図である。



第58图 74·75号竖穴住居跡実測图 (1/60)

出土遺物 若干量の土器片と縄文時代の石斧が出土した。

74号竪穴住居跡 (第58図)

竪穴部は隅円の菱形に近い方形を呈する。そのほとんどが、他の遺構と重複し、83号住居・溝6に切られ、73・75・82号住居、28・29号祭祀土壇を切っている。主柱穴は $P_1 \sim P_4$ で4本柱であるが、 P_1 の位置するであろう部分は溝6が切っているので、実際には検出していない。主柱穴の中心を結んだラインは、各々、竪穴部の壁とほぼ平行である。また、 $P_5 \sim P_7$ は心々距離は各2.1m等間であり、ピット全体が北隅に偏った位置にあるが、一直線に並ぶことも勘案して、本住居に関するものだと推測する。貼床下層で検出した $P_8 \cdot P_9$ も位置関係から、本住居に関するものだと推測する。ただし、それらの機能については明らかにし難い。屋内土壇や炉は検出してない。

出土遺物 若干量の土器片と鉄製品、石製品が出土している。すべて流入品で本住居に伴うものはない。

土器 (図版97、第155図) 1は床面から25cm浮いて覆土中から出土した鉢である。ほぼ完形で、口径7.8cm、器高3.9cmを測る。口縁部はヨコナデ、内面はハケ目の上からナデ、外面は底部付近は擦過痕がある。胎土は、あまり砂粒を含まず、焼成良好で黄褐色を呈し、外底面に煤が付着している。2は蓋で、丹塗磨研される。口径12.7cm、器高2.6cmに復原される。胎土は精選され、焼成良好で生地は黄褐色～褐色を呈する。

鉄製品 (図版56、第119図-37・42) 鋳の破片が2点出土している。37は幅1.6cm、現存長4.8cmで、茎を欠失する。断面形は浅い逆U字型である。木質の付着はない。42は茎の破片で、幅1cm、現存長4.9cmである。断面形は浅い逆U字型を呈する。木質の付着はない。

石器 (図版60・62・63、第122図-12・第123図-20) 12は石刻の破片で切尖部を欠失する。断面は菱形である。石包丁20は刃部を一部欠くがほぼ完形品で、横幅11.1cm、縦幅4cmである。小豆色の石材である。他の1点は図示していないが、破片である。石材は20と同質だが、暗灰色である。

75号竪穴住居跡 (第158図)

74号住居に大きく切られ、さらに溝6が中央部を斜断するため、竪穴部の遺存状態はよくない。竪穴部の平面プランは隅円の長方形を呈し、各壁は弧を描いて外に膨らむ。調査中は2軒が重複していると考えて遺物を取りあげたが、柱配置と床面の状況から、1軒の住居と判断した。床は貼床を行い、主柱穴は竪穴部内にはない。両短壁中央の壁に接して外にある $P_1 \cdot P_2$ が主柱穴であろうと推測し、竪穴部四隅の内外にある $P_3 \sim P_4$ は主柱穴と考えても差支えないほどしっかりとしたピットであるが、一応、補助柱穴と考えておく。 $P_1 \cdot P_2$ を抜きにして $P_3 \sim P_4$ 。

だけでも住居は建ちそうではある。屋内土壌は検出してない。

出土遺物 主に、他の遺構に切られなかった南西壁側で検出した。土器・土製品・石製品が出土しているが、流入・投棄品で、本住居に直接に伴うものではない。

土器 (図版98、第155図) 1・2は壺で、別個体である。1は口径31cm、現存高14.2cmを測る。鑷先状口縁で頸部に断面が三角形の突帯を巡らす。調整はナデ・ヨコナデによる。口縁部に煤が付着し、黒ずむ。胎土は精選されて砂粒をあまり含まず、焼成良好で褐色を呈する。2は胴部最大径28cm、現存高15cm強に復元される丹塗磨研土器である。外面は底面を除いて全面に丹塗りされていたようだが、内面は口縁部～頸部まで、胴部の丹は垂れたものである。胴部最大径の部分に口唇状突帯を巡らす。胎土は精選されて砂粒をあまり含まず、焼成良好で生地は褐色である。3は口径33cm、現存高16.3cmの甕である。胴部外面に粗いハケ目が残る、口縁部はヨコナデ、内面はナデ調整を行う。4は $\frac{1}{2}$ 程欠くが、口径18.5cm、器高5.1cmを測る蓋である。2個一対の穿孔が2ヶ所にある。内外面にハケ目が残るが、多くはナデ調整により消えている。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈する。5は口径10.9cm、底径14cm、器高16.7cmを測る完形の器台である。外面は粗いハケ目調整を行い、口縁部、底部はヨコナデし、内面は指でナデた痕跡が残る。胎土は精選されて砂粒をあまり含まず、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、内外面の一部に丹が付着している。

土製品 (図版51、第116図-12) 径4.5cm、厚さ1.6cmを測る完形の紡錘車である。

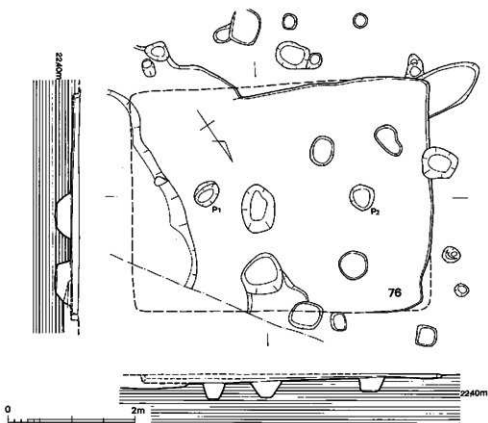
石製品 (図版68、第127図-60) 花崗岩製の粗砥で、二次加熱のため赤変し、割れている。割れ面を除いて全面を使用している。

76号竪穴住居跡 (図版30、第59図)

太平洋戦争時の太刀洗飛行場からの戦闘機の誘導路建設により、竪穴部は大きく削平されており、遺存状態は悪く床面も残らない。図は推定復原図である。竪穴部の平面プランは長方形を呈するようである。支柱穴はP₁・P₂であろう。両短壁にベッド状遺構が付設されていた可能性はあるが、詳細は不明である。また、炉は床面が削平されているため、当然残っていないが、屋内土壌はその痕跡が残ってもいくらかの削平の深さでありながら、痕跡すら遺存しない。屋内土壌は当初から存在しなかった可能性が高いと思われる。

出土遺物 削平された時に他の場所に移動しており、出土品は極く僅かである。若干量の土器片が出土したのみである。床が削平されており、貼床下層からの出土品ばかりである。

土器 (第155図) 1は口径17.4cmに復元され、器高9cmを測る鉢である。口縁部はヨコナデされるが、体部・底部はナデ調整で指の跡が残る。胎土は精選されて砂粒をあまり含まず、焼成良好で明茶褐色～暗褐色を呈する。他にも土器片が出土しているが、図示にたえるものはない。



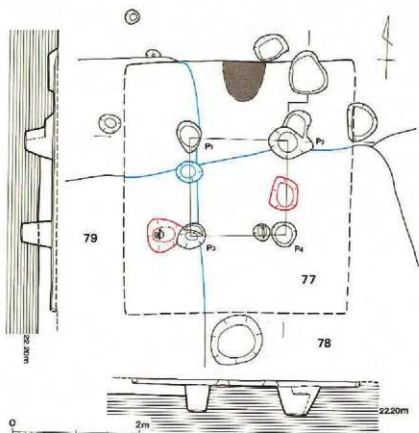
第59図 76号竪穴住居跡実測図 (1/60)

77号竪穴住居跡 (図版30、第60図)

不幸なことに、偶然にも、77～79号住居3軒の丁度切り合った部分に試掘トレンチを設定した。トレンチ内が真っ黒であったため、包含層と誤認して掘り過ぎてしまい、肝心な部分の切り合い関係は床面を検出するまで層位的にも不明確であった。また、77号住居は竪穴部の壁がほとんど残存せず、貼床面もすでに削平されてカマドの痕跡をとどめる程度であった。よって、主柱穴 P_1 ・ P_2 を結んだ線と、カマド側の残存する竪穴部掘り込み線との距離から、平面プランを復原したものである。竪穴部は主柱穴 P_1 ・ P_2 を結んでできる四角形とはほぼ相似形の平面プランを想定している。

出土遺物 出土品は少量で図示できるのは、貼床下層から出土した須恵器1点だけである。

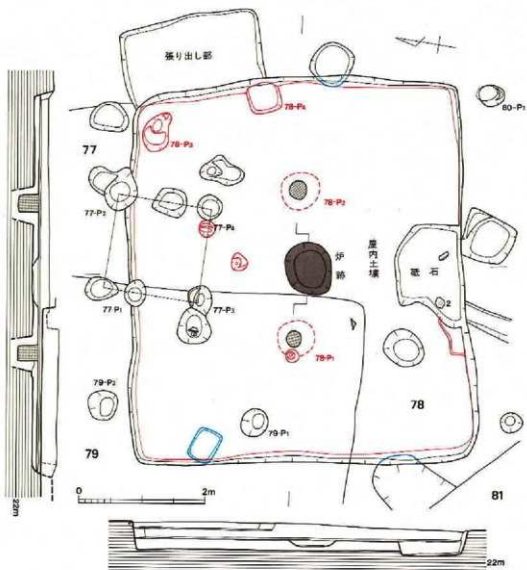
土器 (図版98、第156図) 口縁部の $\frac{1}{2}$ ほどを欠く須恵器の坏壺で、口径13.1cm、器高3.1cmを測る。つまみの天井部にはヘラ記号らしきものがある。砂粒を含み、焼成はあまく、内面は灰色、外面は黄褐色～黄灰色である。ロクロの回転方向は時計廻りである。



第60図 77号竪穴住居跡実測図 (1/60)

78号竪穴住居跡 (図版30、第61図)

77・79・80号住居に大きく切られるが、竪穴部の主要な部分は残っていた。平面プランは隅円の長方形で東壁の北側に“張り出し部”を持つ。床は貼床され、その面から南壁際中央に屋内土壌を、竪穴部の中央に炉を切り込んでいる。屋内土壌に流入した人工遺物はあるが、それに直接伴う（関係する）出土品はない。炉の東西に支柱痕を検出した。検出面で想定される支柱の直径は25cm～30cmである。ベッド状遺構には明確ではない。なお、“張り出し部”は、本遺跡で検出したこの種の付属遺構としては、最もしっかりとしたものである。幅2.2m、奥行き1.1m、深さ4～7cmで、東側短壁の北側に位置する。幅は竪穴部長壁の幅狭は $\frac{1}{2}$ である。“張り出し部”の床面には柱穴はない。しかし、貼床面の下層で検出したP₃・P₄は“張り出し部”の両短壁の前面に位置し、両者の関係は強いと思われる。“張り出し部”の住居全体の中での機能については、この部分での出土遺物もなく、明確にはし難い。

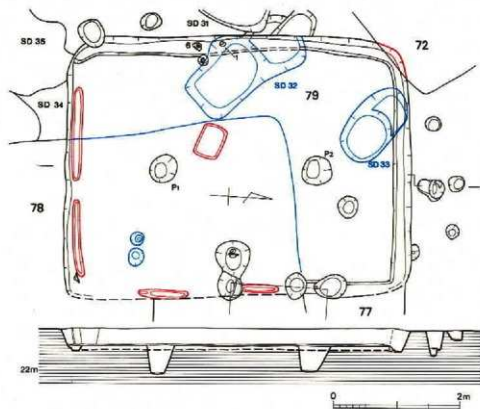


第61図 78号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 屋内土壇に流入して土器2・砥石54が出土した。他の出土品はすべて覆土中から出土した。

土 器 (第156図) 1は壺の小片で、口径17cmに復原される。調整はヨコナデである。胎土に金雲母等の砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。2は壺の底部で、粗いハケ目が残る。胎土に金雲母の砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。

石製品（図版64・65・66、第124図-31・126図-54） 砥石3点、縄文時代の偏平打製石斧がある。石斧は後述する。31は砂岩製の仕上げ砥で、4面とも相当に使込まれている。54も砂岩製の仕上げ砥で、4面とも使われている。使用面は鏡のようになめらかで光沢がある。図示していない他の砥石は粗い砂岩製のものである。



第62図 79号竪穴住居跡実測図（1/60）

79号竪穴住居跡（図版37、第62図）

竪穴部は隅円の長方形プランを呈する。住居の過半が他の遺構と重複しており、当初、78号住居との切り合い関係が不明であった。床面は貼床され、その面が竪穴部全面に及んだため、78号住居より新しいことがわかった。主柱穴はP₁・P₂であり、主柱痕は残ってなかった。壁に沿って壁小溝が巡る。掘り過ぎたため、一部は床面で幅広く図示している。屋内土壌は検出していないので、存在しないのであろう。

出土遺物 土器が出土している。1・6は西壁際の床面上で検出した。たぶん、本住居に伴うものと思われる。2・7は試掘調査のトレンチからの出土品で貼床下層のもので、あるいは78号住居のものかもしれない。他は覆土中から出土した。

土器(図版98・99、第156図) 1は口径8.4cm、器高2.7cmの坏で、全面をナデ調整している。2はテズクネ土器で外面に指圧痕が残るが、内外面ともナデ調整を行う。ともに、金雲母等の砂粒を多く含み、焼成良好で、1は茶褐色、2は黄褐色を呈する。3は口径11.5cm、器高7.3cmの甗である。丁寧な作りで、細かいハケ目調整を行い、外面下半も丁寧にへら削りをしていいる。胎土に金雲母等の砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。4は二重口縁の甗である。口縁部の下半はへらによる調整痕がある。頸部内面はハケ目が残るが、外面はナデ調整により僅かに残る程度である。頸部以下の内面はへら削りを行う。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。5は口径17.6cmで復原される甗で内外面にハケ目が残る。内面は頸部からすこし下からへら削りを行う。胎土に金雲母等の砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈する。6は鼓型、7は高坏状を呈する器台である。6は口径13.8cmに復原され、器高9.2cmを測る。内面はハケ目が残るが、外面はナデ消している。7は口唇部を欠くが、口径は14cm、器高は10.7cm程に復原される。脚柱部外面にハケ目が残るが、他はヨコナデ・ナデ調整を行う。ともに砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。

80号竪穴住居跡(図版30、第63図)

竪穴部の壁は戦国機の誘導路のため、過半が削平され、貼床も全く残ってなかった。主柱穴は P_1 ～ P_4 である。カマドは遺存しないが、ほかの住居の例から、北西側壁に付設したものと考える。

出土遺物 著しく削平されているので出土品は少ないが、土製品・鉄製品が出土している。

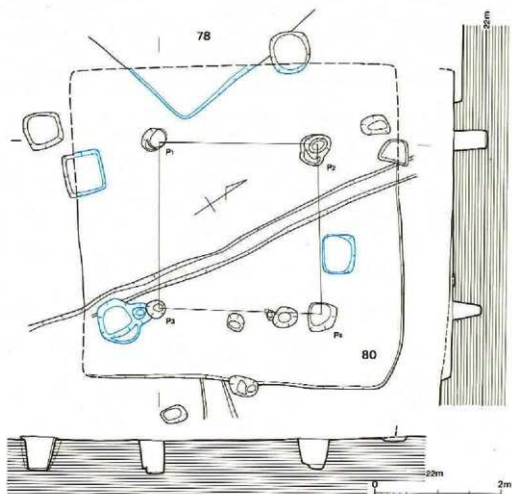
土製品(図版51、第116図-5) 長径2.1cm、短径1.7cmの土玉である。穿孔はされてない。

鉄製品(図版55、第119図-44) 摘み鎌の破片である。現存する横幅は4.2cm、縦幅は1.2cmである。木質は付着していない。よく使い込まれている。

81号竪穴住居跡(図版30・33、第64・65図)

竪穴部は隅円のほぼ正方形の平面プランを呈し、北西壁の中央にカマドを付設する。南東壁は4号周溝基を切っている。床面は貼床をし、主柱痕が残る。貼床の下層で主柱穴 P_1 ～ P_4 を検出した。また、各主柱穴を結んだラインと壁の間に深さ10cm～20cmの掘り込みを検出したが、中央土壌はなかった。

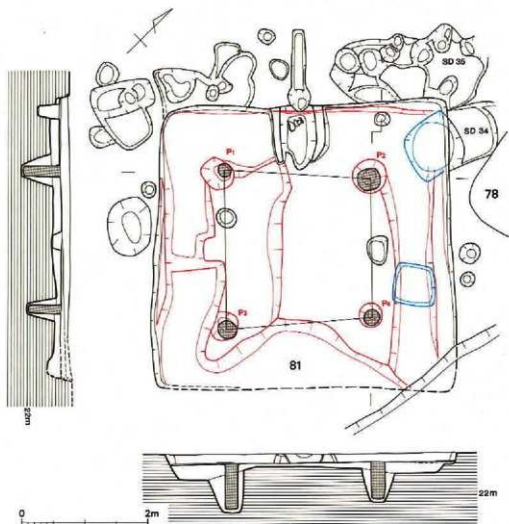
カマドは遺存状態がよく、煙道まで残っていた。作り替えたようで、支脚はカマド底面から12cm浮いており、その部分に作り替える前のカマドの袖部の土等が詰め込まれていた。支脚は傾いているが原位置を保ち、奥壁から30cm弱の部分に据えられている。焚き口付近には多量の焼土を検出した。



第63図 80号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 カマドから甕の破片が、覆土中から土器が出土している。他に土製品・石製品が出土した。これらは投棄・流入品であり、本住居に直接に伴なうものではない。

土器 (図版99、第156図) 1～3は須恵器の坏蓋で口径14～14.6cm、器高は4cm前後である。1・3はほぼ完形品だが、1は口唇部を小刻みに打ち欠く。3個体とも口唇部に古式の様相を留めている。天井部は回転へら削りを行い、内天井はナデ、他はヨコナデを行っている。胎土に小砂粒を含み、焼成良好で、内面は灰色、外面は灰をかぶり黒色を呈する。4は高坏で口径13.2cmを測る。整形・調整は坏蓋と同様である。5はテズクネ土器で、口径6.5cm、器高3.4cmのはほぼ完形品である。内面は指圧痕の上から一部へら削りを行う。胎土は小砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。6・7は須恵器を擬した土器である。7は身として図示したが

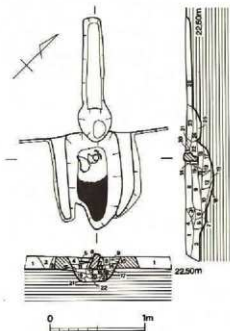


第64図 81号竪穴住居跡実測図（1/60）

蓋かもしれない。風化のため調整は不鮮明だが、7はへら削りされている。砂粒を多量に含み、焼成良好で黄褐色～明褐色を呈する。8はカマドの支脚で裾拉がりの円柱形である。一部に指圧痕が残る。

土製品（図版51、第116図-11） 貼床下層から出土した紡錘車である。直径3.8cm、厚さ1.6cmで、中央の孔は径5～6mmである。

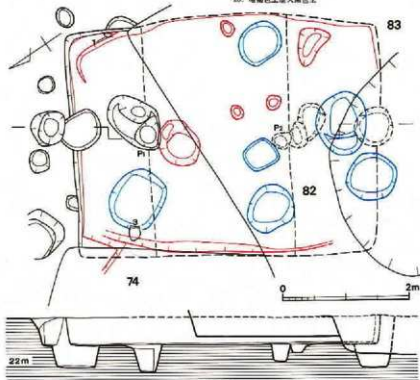
石製品（図版63～66、第124図-33、125図-48） 砥石3点、石庵丁1点が出土しているが図示したのは砥石2点（33・48）である。33は砂岩製の仕上砥で表・裏の2面を使用している。



第65図 81号竪穴住居跡カマド実測図 (1/40)

1. 暗褐色土混入黄白色粘質土
2. 黒色土(砂粒多)
3. 暗黄白色粘質土混入黒灰色土
4. 暗赤褐色粘質土混入黒灰色土
5. 暗褐色土混入赤色粘質土(アロック状)
6. 暗赤色粘質土
7. 黒色土
8. 暗黄白色粘質土
9. 暗赤褐色土混入赤色粘質土
10. 暗赤褐色土混入赤色粘質土
11. 暗赤褐色土混入赤色粘質土(アロック状)
12. 暗褐色土混入白黄色粘質土(アロック状)
13. 暗赤褐色土混入赤色粘質土(アロック状)と同七
14. 暗赤褐色土混入赤色粘質土(アロック状)
15. 暗赤褐色土
16. 白黄色粘質土混入黒灰色土
17. 暗赤褐色土
18. 暗赤褐色土混入黄白色粘質土
19. 暗赤褐色土混入黄白色粘質土
20. 白黄色粘質土混入暗赤褐色土
21. 黒色土
22. 赤色土混入黄白色粘質土
23. 暗褐色土、混入暗赤褐色土

1. 暗赤褐色土
2. 暗赤褐色土、黄白色粘質土(アロック状)
3. 暗赤褐色土混入黄白色土
4. 暗褐色土混入黄白色土
5. 暗褐色土に黄白色粘質土がアロック状に混入
6. 黄白色粘質土
7. 黄白色粘質土混入暗赤褐色土
8. 暗赤褐色土
9. 暗赤褐色土に赤褐色粘質土(粘土)がアロック状に混入
10. 暗赤褐色土混入暗赤褐色土
11. 暗赤褐色土
12. 暗赤褐色粘質土
13. 暗赤褐色土混入暗赤褐色土
14. 暗赤褐色粘質土
15. 白黄色粘質土混入黒灰色土
16. 暗赤褐色土混入黒灰色土
17. 白黄色粘質土混入暗赤褐色土
18. 暗赤褐色土の土
19. 黒色土(炭が主)
20. 暗赤褐色土混入暗赤褐色土
21. 暗赤褐色土混入赤色粘質土
22. 赤褐色土
23. 暗赤褐色土
24. 暗赤褐色土混入暗赤褐色土
25. 暗赤褐色土混入暗赤褐色土
26. 暗赤褐色土混入暗赤褐色土



第66図 82号竪穴住居跡実測図 (1/60)

刃部を研いだと思われる細い溝が2条認められる。48も砂岩製の仕上げで割れた面を除いた3面に使用痕が残る。図示しなかった砥石は砂岩製の仕上げで表面に異物が黒く付着している。石庖丁も図示していないが、貼床下層から出土した小片で、小豆色をしている。

82号竪穴住居跡 (第66図)

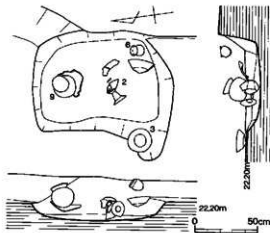
74・83号住居・18号廃棄土壌に大きく切られている。竪穴部は隅円の長方形プランを呈し、長壁が外に膨らんで弧を描く。両短壁にベッド状遺構を付設していたと推測するが、遺構として検出できなかった。主柱穴は P_1 ・ P_2 である。炉・屋内土壌は検出していない。

出土遺物 土器だけが出土している。1・3はベッド状遺構と想定する部分の床面で検出した。出土位置が P_1 を挟んで対称的な位置にある。土器と床面の間に流入土を噛んでおらず、2点とも伴う可能性がある。2は明らかに覆土中からの出土品である。

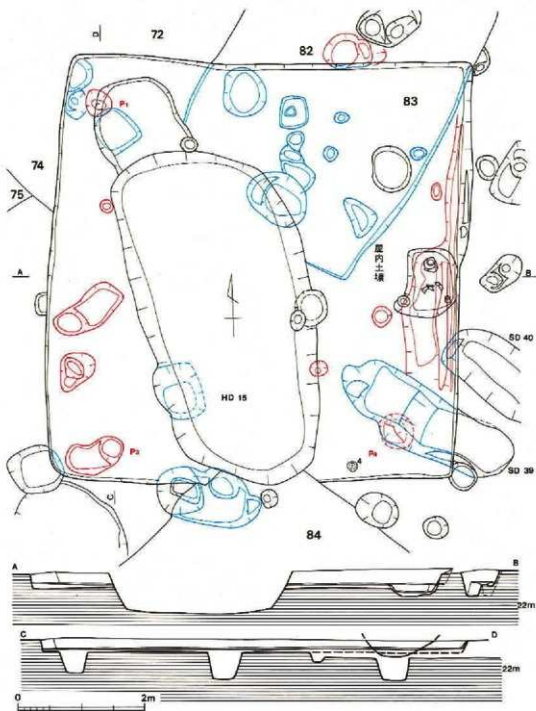
土器 (図版99・100、第157図) 1は具形の土器で、おそらく、アワビを擬したものであろう。テズクネ土器で完形品である。指圧痕が残るが、ナデ調整を行う。横幅14.7cm、縦幅12.4cm、深さ2.7cmである。胎土は金雲母等の砂粒を多く含み、焼成良好で淡明茶色を呈し、黒斑がある。2はほぼ残存するが、口径11.8cm、器高13cmを測る埴である。外面はハケ目が僅かに残るが内面はヨコナデ、ナデ調整で消えている。胴部外面下半はヘラ削りされる。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。3は口径16.4cm、器高21.6cmの甕である。底部は凸レンズ状を呈する。内外面にハケ目が目立ち、外面はハケ目の下にタタキ目が残る。内底面は指圧痕が残る。胎土に砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈する。

83号竪穴住居跡 (第67図)

竪穴部は隅円方形のプランを呈する。ほぼ中央を15号廃棄土壌に、南壁の一部を84号住居に切られ、74・82号住居、37~40号祭祀土壌、19号掘立柱建物と切っており、各時代の遺構が重複している。床は貼床を行い、東側壁際の中央に屋内土壌を掘り込んでいる。炉の存否は不明である。屋内土壌は角のとれた長方形で深さ20cm弱の浅いものである。出土した土器はすべて流入・投棄された状態で、浮いており、また、高環はその時の衝撃で坏部がはずれている。これらの土器は



第67図 83号竪穴住居跡屋内土壌実測図 (1/30)



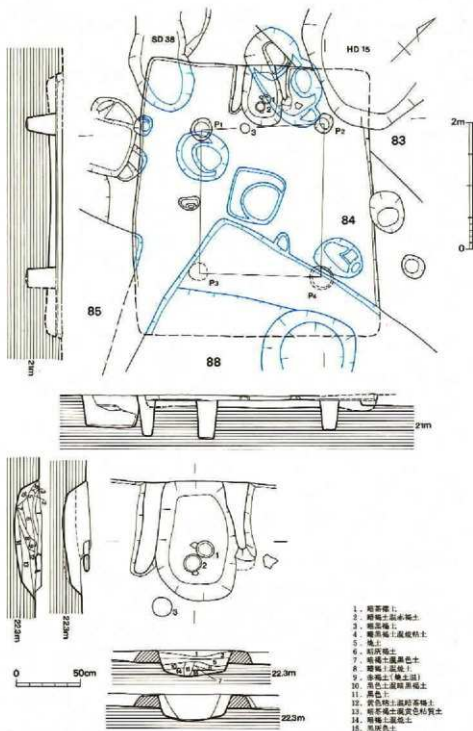
第68圖 83号整穴住居跡実測図 (1/60)

この土壌に直接伴うものではなく、土壌木蓋を被せていたと想定すれば、木蓋が腐った後に落ち込んだ可能性が高い。その場合、当初から木蓋の上に置かれていたのか、木蓋が腐る前にこの住居に捨てられたものか、が問題となる。土器6は浮いて確実に覆土中にあり、これらの土器が一括のものならば、住居廃棄後に捨てられたものであろう。主柱穴は、貼床下層で検出したP₁~P₄と想定するがP₅に相当する柱穴は検出していない。

出土遺物 土器と石製品(石庖丁)が出土した。屋内土壌周辺で検出した土器は上述のとおりである。他に図示した土器は4が床面から出土したが、他は覆土中から出土したものである。

土器 (図版100-101、第157-158図) 1~4の高坏は、ほぼ同様の作りで、4だけが小型で坏部の形態が異なる。ほぼ完形の2は口径17.8cm、器高14.3cmである。小型の4は口径15cmで、器高は14cmであろう。口縁部・脚裾部付近はヨコナデ、他の部分はナデ調整を行っている。胎土は細砂粒を含み、チ密であり、焼成良好で明茶褐色を呈する。5は口唇部を欠くが、口径10cm、器高8cm程に復元される。胴部下半の外面にハケ目が残るが、ヨコナデ、ナデ調整により、ハケ目の多くは消えている。胎土は細砂粒を含み、焼成良好で茶褐色を呈し、頸部に黒斑がある。6は口径9.3cm、器高8.6cmを測る完形の甕で、底部は僅かに認められる。外面はハケ目が残るがヨコナデ、ナデ調整により、ハケ目の多くは消えている。胎土は細砂粒を含み、焼成良好で茶褐色を呈し、黒斑がある。7は口縁部を半分欠くが他は完存する。口径17.8cm、器高10cm程に復元される。風化が著しく調整は不明だが、内面の頸部~底部はへら状器具でナデられたようである。砂粒を多量に含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。8は口径14.8cm、器高7.8cmに復元される鉢である。ハケ目が若干残るが、ほとんどナデ消されている。底部外面はへら削りを行う。砂粒を多量に含み、焼成良好で黄茶褐色を呈する。9は口径12.8cm、器高18.8cmを測る完形の壺である。胴部外面はハケ目調整し、内面はへら削りを行う。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で黄茶褐色を呈し、黒斑がある。10は口径17.3cm、現存高22.5cmの壺で整形・調整は9と同様である。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で黄茶褐色を呈し、胴部下半の内外面は二次加熱のため黒変し、煤が付着している。11は1/2強を欠くが図上で復元でき、口径27.2cm、器高67.7cmを測る、二重口縁の壺である。胴部外面はハケ目が目立ち、同内面は底部付近はへら削りするが、他はナデ調整しハケ目が残る。口縁部~頸部はヨコナデ調整である胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で黄茶褐色を呈し、黒斑がある。12は長胴の甕で口径30cm、現存高27cmを測る。内外面全体に洗いハケ目調整を行う。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。

石製品 (図版62、第123図-25) 1/2程を欠く。現存横幅9.3cm、縦幅4.5cmである。石材は片岩で、緑灰色を呈す。



第69図 84号竪穴住居跡カマド実測図 (1/60、1/30)

84号竪穴住居跡（図版35、第69図）

竪穴部のプランは長方形気味の方形を呈する。北隅を15号廃棄土壌に切られ、南東壁は85～86号住居を、西隅は38号廃棄土壌を切っている。床は貼床をし、北西壁にカマドを付設する。支柱穴はP₁～P₄であるが、P₃は88号住居と重複し検出できなかった。P₄は一部を検出した。カマドは支脚を取り外されており、内部および前面で土器を検出した。1・2はセットになるもので、カマドの埋土上に座った状態で検出した。支脚が取り外されていることから、カマド上部を壊した後に、置かれたものではなかろうか。3は床面に伏せた状態で検出した。この3点は須恵器坏を擬した土師器であり、カマドに関わる何らかのマツリに関するものであろうと推測する。

出土遺物 上述の土師器、須恵器を検出した。須恵器は坏身だけで蓋を伴わない。図示していないが、床面に置かれた状態で検出した。これらの土器は本住居に直接伴うと考えられる。他に、縄文時代の石製品が出土している。

土器（図版101、第159図） 1～3は須恵器坏を擬した土師器で完形品である。1は口径14.2cm、器高4.5cmの坏蓋である。2は口径12.3cm、器高4.5cmの坏身で両者はセットである。2は内外面をへら磨きし、底部の広い範囲をへら削りする。1も同様だと思われるが風化のため外面は不明な部分が多い。3はへら磨きはなされないが、2と同様である。3点とも胎土は精製されて砂粒をあまり含まず、焼成良好で淡茶色を呈するが、黒漆を塗ったのか、一部が黒光りする膜状の異物が付着している。4・5は須恵器の坏身で、口径11cm、器高3.8cmである。底部のへら削りの範囲は狭い。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で暗灰色を呈する。

85号竪穴住居跡（図版35、第70図）

覆土中に多量の土器が投棄されており、86号住居とともに「土器溜」であろうと考えて調査をした。とにかく、レンズ状の覆土中、土器だらけであった。住居は切り刻まれており、実態は不明である。

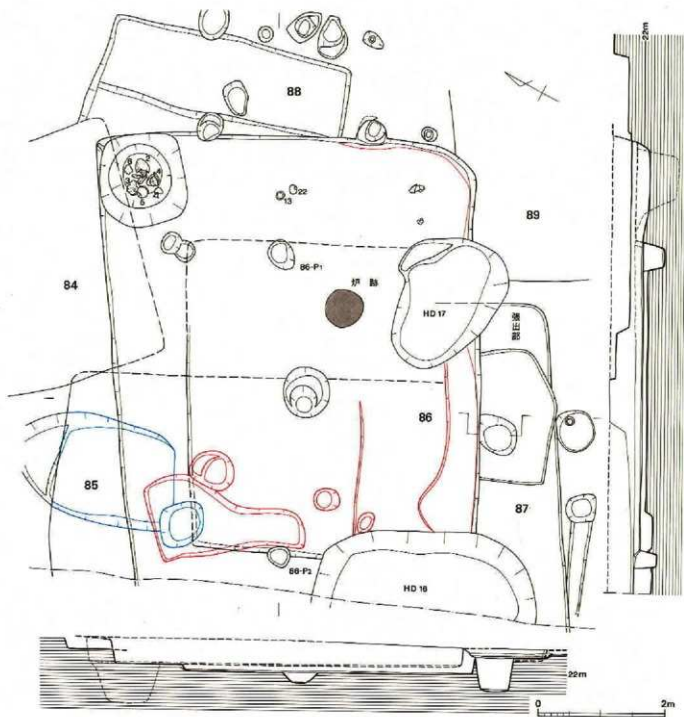
出土遺物 多量の土器と鉄製品、石製品が出土しているが、すべて投棄されたもので、本住居に伴うものではない。住居を建てる時、下層の42号祭祀土壌を破壊しており、その土器も出土している。

土器（図版101～102、第159～162図） 図示できたのは51個体で、出土総量の極く僅かである。1～19は鉢で、16は底部を穿孔し、17・19は脚台付である。底部は丸底が多いが、凸レンズ状を呈するもの（8・11・18）、平底のもの（9・16）、畿内第5様式に似た底部のもの（13～15）などバラエティに富む。ハケ目を残すものが多いが、完全にナデ消したもの（2・6・9）、タキ目が残るもの（10・12・13・18）、へら削りされたもの（6・9・13・14・18）、テズクネ土器（1・3・5）などもある。最も小型の1は口径5.4cm、器高3.1cmで、大型の18は口径18.

2cm、器高17cmである。最内第5様式的な13-15は、基本的な作り、整形・調整は同じである。器面の風化が著しいため、調整痕が残りにくい。13は内面はナデ、外面はタタキ目が残る。図上で完形に復元できる15は口径14.4cm、器高8.7cmである。19は脚部と鉢が直接には接合しないが、図上で推定復元した。その結果、口径21.2cm、器高16.4cm程になる。1-19は胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈するものが多い。1・3・4・12・13・18は黒斑がある。20は完形の壺で口径13cm、器高13.7cmである。外面に丹が付着する。胎土は精選され、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。21も壺でハケ目が目立つ。砂粒を多量に含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。22は略完形の深鉢で器高の風化が著しいが、内底面にハケ目が残る。砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。23は埴で口径9.5cm、器高11.8cmに復元される。砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。24は壺で内外面にハケ目が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通で淡褐色を呈する。25は口径26cmに復元される壺で内外面にハケ目が残る。胎土・焼成等は24と同様である。26-28は小型の甕である。内外面にハケ目が残る。ほぼ完形の28は、口径12.3cm、器高16.3cmである。ともに、胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、26・28には黒斑がある。29-35は長胴の甕で、32・33・35の大型品には口唇部や頸部の突帯に刻み目を入れ、加飾する。33は外面が風化しているが、他はこの種の變特有のハケ目が目立つ。総じて胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈する。35-39は、本来は住居下層の42号祭祀土壌のものである。37を除いて丹塗磨研されている。36・37は壺、38は筒型器台、39は高坏の各々小破片である。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成良好で37は暗茶褐色、他の生地は黄褐色である。40-49は器台である。40-42と、43-49の二種がある。前者はハケ目が、後者はナデ・タタキ目が目立つ。中でも44は中実で把手状のものを作り出した器台で異形である。これらは『器台』とされるが、所謂『器台』ではなく、二次加熱を受けたものが多い。総じて、胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で、黄褐色～茶褐色を基調とし、黒斑があるもの、二次加熱で変色するものが多い。50・51は高坏だが坏部を欠く。50は外面をへら磨きする。ともに砂粒を多く含み、焼成良好で、明茶褐色を呈する。

鉄製品(図版55、第119図-45) 摘み鎌で、一部を欠くが遺存状態は良好である。図示した平面図の他は復元模式図である。横幅は刃部側で10.7cm、木柄側で10.4cm、縦幅2.2cmである。鉄板の両側を折り曲げて木柄を挟んでおり、木柄は背部から1cm程挿入され、木目は刃部と平行に走る。木柄の厚さは3mmで横幅10.2cmであるが、背部からどの程度の出があるかは不明である。しかし、穂摘み作業を石庵丁から類推すれば、それは数cmであろう。摘み鎌では本遺跡の一級資料である。

石製品(図版60、第122図-10) 石剣の尖先部付近の破片である。断面は菱形を呈し、中央に鑄が通る。幅4cmで現存長9.8cmである。



第70图 85-87号型穴住居跡実測图 (1/60)

86号竪穴住居跡（図版35～37、第70図）

85号住居と同様に「上器溜」だと思って調査をした。図版36上の写真は出土土器の8割程を取り上げた後のものである。おそらく、この住居は廃棄後に「ゴミ捨場」になっていたと思われる。あとから考えれば、88号住居と16・17号廃棄土壌に切られた部分を除いて、土器の隙間に覆土があるような状況であった。85号住居と同様、凄じい程の土器の量であった。当初は竪穴住居という意識のもとに調査をしてなかったので、不明確な部分を多く残した。よって、屋内土壌の図も個別に図示しえない。

本住居の竪穴部は長方形を呈し、南西側の短壁は調査区外に延びる。床は貼床である。ベッド状遺構は全部を検出していないが、「コ」字型だと考える。支柱穴は P_1 ・ P_2 であろう。炉は P_1 寄りの偏った所に検出した。屋内土壌は通常検出される南東長側壁際にはなく、北隅のベッドの上から掘り込んでいた。所謂、B型の屋内土壌である。この埋土上層で土器を検出した。木蓋の上に置かれ、蓋が腐食して落ち込んだ状況であった。この住居に伴う数少ない資料である。南東壁中央付近に「張り出し部」を持つ。

出土遺物 上述のように、屋内土壌や覆土中から莫大な量の土器が出土したが、伴う可能性のあるのは屋内土壌上層の土器だけだろう。他に、投棄された土器の中から鉄製品・石製品が出土している。

土器（図版103～106、第163～169図） 1～6は上述の屋内土壌埋土上層から出土した甕・壺である。底部は完全な平底ではなく、凸レンズ状に近い。基本的にハケ目調整され、3・5は外面の胴部下半をへら削りする。ほぼ完形の4は口径18cm、器高26.5cmである。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～淡茶褐色を呈し、2～6は黒斑がある。7～22は鉢型の土器であるが、17は飯で、19～22脚台が付く。7～11・14・15の内、最も小型の7は口径9.6cm、器高3.8cmで大型の14は同じく14.3cm、11.9cmである。10は畿内第5様式のな底部の鉢で口径12.4cm、器高7.6cmである。これらの土器の調整痕は様々で、14はハケ目、へら削り、指圧痕、ナデ、ヨコナデの痕を全て残す。総じて、胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、9・11は黒斑がある。12はやや変わった形態の鉢で、口径10.8cm、器高6.8cmに復原される。内外面にへら磨きの痕が残る。胎土は細砂粒を多く含み、焼成良好で淡黄色を呈し、内面は黒色を帯びる。13・16・18は明確な口縁部を持つ鉢である。ともにハケ目が目立つ。19～21は脚台の付く鉢である。20は口径19.4cm、器高16.7cmのほぼ完形品である。器高にハケ目を残すが、多くはナデ消されている。13～16・18～21は総じて、胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。23～33は壺である。23は口径14cmで、外來系の土器である。24は完形品で口径9.2cm、器高10.3cmである。25～30はほぼ同形の壺で完形に復原される28は口径30.6cm、器高44.7cmである。ともにハケ目が目立ち、30の口辺外面は櫛状器具で加飾している。この壺だけ、口縁部の加飾と大きさが他の壺と異なる。これらは、胎土に多量の砂粒を含み、焼

成良好で黄褐色～茶褐色を呈する。26・28は赤色顔料が付着し、丹を塗っていた可能性がある。31～34は、ほぼ同型の甕である。31は外面に僅かにハケ目を残す。32・33は大きさが違うだけで同じ作りであり、頸部に突帯を巡らし、刻み目を施して加飾する。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈する。34・35は小型の甕でほぼ完形品である。口縁部を除いてほぼ同型で、底部は平底に近い。35は胴部下半の外面をへら削りする。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で34は黄褐色、35は暗茶褐色を呈し、双方とも黒斑がある。36～39は中型の甕で、ほぼ完形の38は口径17.6cm、器高23.1cmである。各々形態が異なり、37は口縁部を折り曲げず、直立している。底部は37・38は凸レンズ状である。内外面をハケ目調整するが、37の外面はハケ目が見られず、タタキ目が残り下半をへら削りする。36はハケ目の下にタタキ目が残り、胴部下半はへら削りを行う。これらは胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色～褐色を呈し、黒斑があり、36・38は煤が付着している。40・41は大型の甕で、内外面をハケ目調整する。ともに、頸部と胴部下半に突帯を巡らし、40の頸部突帯びを除いて刻み目を入れる。完形に復原される40は口径33.8cm、器高45.3cm、41は口径49.7cmである。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で40は黄褐色で丹らしきものが付着し、41は淡茶色を基調とするが、大きな黒斑がある。42～44は長胴の甕で、小片の反転復原図である。ハケ目が目立つが42は外面の頸部以下にタタキ目が、43は頸部以下のハケ目の下にタタキ目が見られる。胎土に多量の砂粒を含み、焼成普通程度で明茶褐色～暗茶褐色を呈する。45は床面下層の42号祭祀土壇のものが現位置から遊離して、流入したものであろう。甕の大型品で丹塗磨研土器である。46は高環状の器台で、口径19.5cm、器高12.3cmを測る完形品である。内外面とも摩滅してハケ目が残る。細砂粒を多く含み、焼成はややあまく、黄褐色を呈するが、二次加熱を受け赤変する。47～48は器台でハケ目が目立つ。47は口径18.1cm、器高23cmである。ともに、胎土に多量の砂粒を含み、黄褐色を呈するが47は黒斑がある。50～56は高環である。ミガキや暗文のはいるものと、ハケ目調整のものがある。前者は大小があり、環部は丸味を帯びるが（51は摩滅してミガキや暗文が残らない）、後者（53）の環部は直線的である。52の脚部は他のものと形態が異なる。56は実際は接合しない同一個体を図上で復原したもので、口径36.6cm、器高25cm強ほどである。ともに、胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色～褐色を呈し、黒斑がある。

鉄製品（図版54・57・58、第119図-1・119図-32・120図-49） 1は弥生時代終末期頃に一般的に見られる無茎の鉄鍔で、逆刺を欠くが、全長6cmほどに復原され、幅は2.6cmである。矢柄の緊縛孔は錆のため不明である。基部は矩形をなせずに円弧を描く。32は鍔であるが他の出土資料と比べて横幅が狭い。図で左側の折り返しを欠き、横幅は5.6cmに復原され、縦幅は5.2cmである。49は本遺跡で唯一の鎌の完形品である。刃部側で長さ17.4cm、幅は3.5cm前後である。右利きの人用のものである。

石製品（図版62、第123図-21） 緑泥片岩製の石庖丁の破片である。

87号竪穴住居跡 (図版35、第70図)

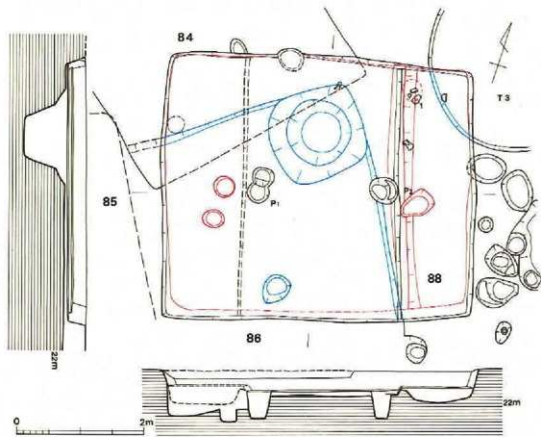
85・86号住居に大きく切られて、詳細は不明である。

88号竪穴住居跡 (図版35・37、第71図)

西北隅を84号住居にきられる。86号住居の大量の投棄土器等はこの住居に含まれていない。86号住居との関係で掘り間違え、西側のベッド状遺構は実際には検出してない。竪穴部のプランは西壁が東壁より長い台形状の長方形で、「ニ」字型のベッド状遺構を配すると思われる。床は貼床を行う。炉・屋内土壇は検出してない。

出土遺物 土器・土製品・鉄製品・石製品が出土しているが、本住居に伴うものはない。

土器 (第170図) 1は裾径24cm、器高9.6cmで、天井部に径4.2cmの孔がある。一応、蓋であろうと考えている。内外面をハケ目調整するが、外面は目が粗い。胎土は砂粒をあまり含



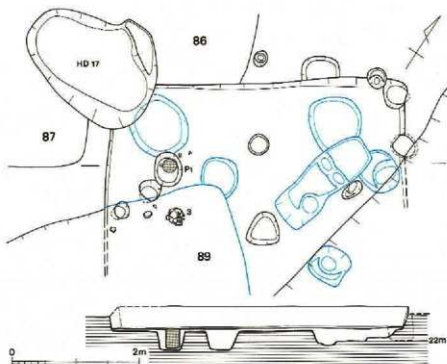
第71図 88号竪穴住居跡実測図 (1/60)

まず、焼成良好で茶褐色を呈し、黒斑がある。2は畿内系の甕で、微妙な土器である。小片の反点復原因で、口径14.4cmである。ハケ目調整され、内面の頸部以下はへら削りを行う。砂粒をやや多く含み、焼成良好で黄土色を呈し、黒斑がある。3は甕の小破片で口径14.2cmほどに復原される。ハケ目調整され、外面はへら削りされる。胎土は細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。

土製品（図版52、第116図-6） 直径26mmのほぼ正球の玉で、偏った部分に径5mmほどの穿孔を行う。

鉄製品（図版54、第117図-2・3） 2は基の大部分を欠く。現存長は4.3cm、幅1.4cmである。3は茎尻を欠くが、長さ7cmに復原され、幅1.7cmを測る。ともに、北部九州の弥生時代の鉄製の矛譜に乗らないもので、畿内系の鉄器であろう。

石製品（図版63） 図示していない。石彫丁の小破片である。小豆色をした石材で作っている。



第72図 89号竪穴住居跡実測図（1/60）

89号竪穴住居跡 (図版37、第72図)

106号住居と重複し、南半部を戦闘機の誘導路建設の際に大きく削平されている。プランは方形を呈すが、規模等と支柱穴配置は不明である。が、P₁は支柱穴の一部であろうと推測する。床は僅かだが貼床を行っている。

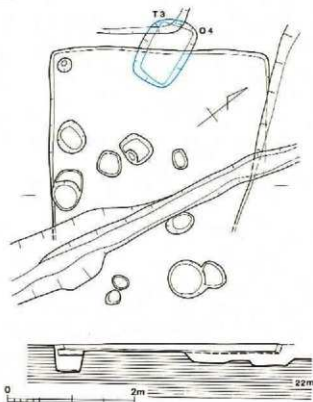
出土遺物 土器と磁石が出土しているが、本住居に伴なうと思われるのは土器3だけである。

土器 (図版106、第170図) 1はテスクネ土器で口径8.4cm、器高6.8cmを測る。指圧痕の上からナデている。2は口径16.2cm、器高6.3cmに復原される鉢である。ハケ目が僅かに残るが、ナデ調整等で消えている。ともに、胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、1は黒斑がある。

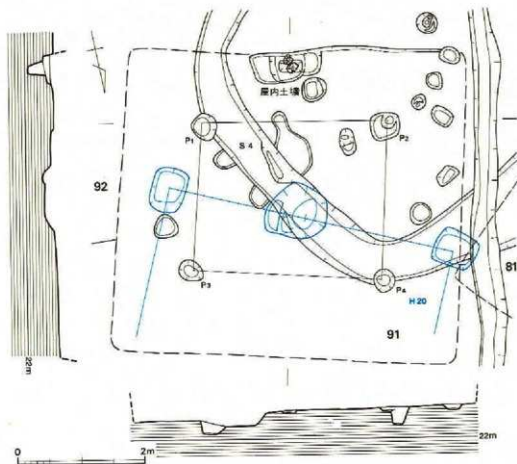
石製品 (図版64、第124図-37) 砂岩製の仕上砥の破片資料である。

90号竪穴住居跡 (図版37、第73図)

南半部を戦闘機の誘導路建設の際に大きく削平されている。竪穴部のプランは方形を呈するようであるが、規模は不明である。床は貼床を行っている。詳細については不明な部分を多く残している。



第73図 90号竪穴住居跡実測図 (1/60)

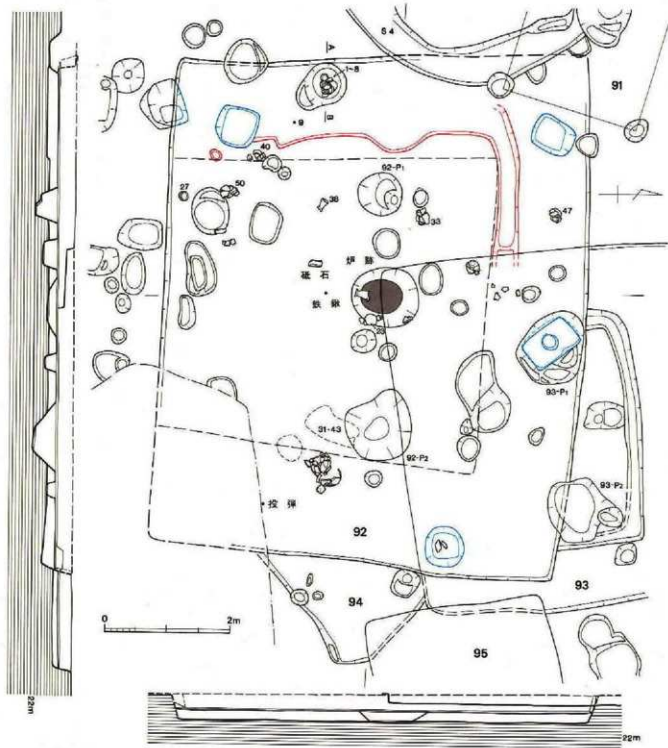


第74図 91号竪穴住居跡実測図 (1/60)

91号竪穴住居跡 (図版37、第74・75図)

戦闘機の誘導路により、竪穴部の壁はほとんど削平されていた。よって、貼床面も残らない。支柱穴はP₁～P₄であろうと思われ、それらを結んだ線と、南西に僅かに残る竪穴部の壁とから、推定復原したのが掲載図である。プランは隅円の長方形を呈するようで、南壁際の中央付近に屋内土境を掘り込んでいる。ベッド状遺構はもちろん検出していないが、当初から付設していなかったと考える。本遺跡の4本柱の住居はこの種遺構を併設しないし、ベッド下層の溝状の掘り込みも検出していないからである。また、小ピットが多く認められるが、整然とした配置は示さず、補助柱については不明である。

屋内土境は一辺が50cm程の隅円方形のプランを呈し、深さは現状で10～15cm程度である。底面の中央に深さ28cmのピットがあるが、屋内土境より古いものである。屋内土境で土器を検出したが、土境の底面から5～10cm浮いており、土器の下は自然堆積土であった。すなわち、土

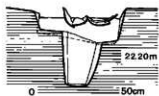
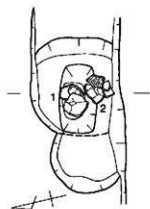


第76图 92号整穴住居跡実測图 (1/60)

器は屋内土壌の木蓋が腐食した後に落下した状態である。よって、土器は屋内土壌に直接伴うものではない。この土器自体も、生活時に木蓋の上に置かれていたものか、住居を廃棄した後に投棄・流入したものかは判断に苦しむ。土器以外の出土遺物はない。

出土遺物 上述の土器が出土しただけである。

土器(第170図) 1は口径14.3cmに復原され、器高14.4cmを測る甕である。底部の器内は厚く、口縁部に向かって次第に薄くなる。内面は粗いハケ目調整を行い、底部をナデている。外面はタタキ目が残ри、下半はタタキ目をナデ消している。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を呈するが、二次加熱により変色している。2は胴部下半だけを残す。甕であろうと考える。底部の形状が特異で、底部外面の中央をへら状器具で削って上げ底風になっている。外面はタタキ目がよく残り、内面はナデ調整を行い、へら状器具によりナデた跡がある。胎土・焼成色調は1と同様で二次加熱により変色している。

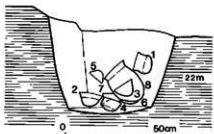
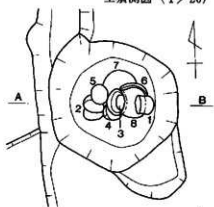


第75図 91号竪穴住居跡屋内土壌断面図(1/20)

92号竪穴住居跡(図版37~39、第76・77図)

竪穴部は91・93号住居・4号周溝墓、20号掘立柱建物に切れ、昭和にはいって戦闘機の誘導路建設の際に西壁側を大きく削平されている。竪穴部の遺存する壁から推定復原すれば、プランは台形気味の長方形を呈するようである。この住居も86号住居と同様に、廃棄後に大量の土器が竪穴部内に投棄されていた。床は貼床を行い、中央に炉を切り込んでいる。屋内土壌は通常検出される部分、本住居では南壁中央にはなく、西短壁際の南に偏した所に掘り込んでいる。ベッド状遺構は実際にはすべてを検出したわけではないが、他の例から“コ”字型を呈すると推測する。主柱穴はP₁・P₂で柱底は残っていないかった。

屋内土壌は不整の矩形で、径68cm、深さ50cmである。中には8個体の完形の土器が落ち込んでいた。



第77図 92号竪穴住居跡屋内土壌断面図(1/20)

その内訳は埴(1)、鉢(2~7)、甕(8)である。これらは墳底に土砂が堆積した後に落ち込んだようで、すべて底から浮いて出土した。また、畿内第5様式に近似した底部を持つ鉢3が甕8の中から割れずに検出されている。鉢の口径と甕頸部内径は2cmほどであり、偶然、落ち込んだと考えるよりも、最初から中に納めていたと考える。甕の内部で鉢が浮いた状態だが、中にナニカが入っていたものかも知れない。他の鉢とは作りの違う鉢3だけは特別の扱いを受けたのであろう。これらの土器はその出土状態より、屋内土壌の木蓋の上に置かれていたものであろうと推測する。

出土遺物 土器・土製品・鉄製品・石製品が出土している。屋内土壌の土器(1~8)は本住居に伴なうと考える。24・32・41・42・44の5個体は主柱穴P₂から出土した。この土器群は主柱を引き抜いた後に埋納したものとと思われる。また、床面でかなりの量の土器を検出し、本住居に伴なう可能性が高いと現場で判断した土器が遺構図に図示したものである。すなわち、9・27・38・40・43・50(33は不明確)の6個体である。以上、19個体の土器が本住居に伴なうだろうと考える。他に図示した出土品は覆土中で検出し、鉄製品や石製品も同様である。

土器(図版106~109、第170~174図) 1は口径10cm、器高8cmの埴である。口縁部はヨコナデし、外面はハケ目が残る。細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。2~7は鉢で、2は口縁を外側にかかるく折り曲げる。3は畿内第5様式的な底部で、4は平底である。この3個体はハケ目調整されるが、底部付近にタタキ目を残す。砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。5はテズクネ風の土器で、底部は尖る。全面、ナデ調整である。胎上は精選され、焼成良好で明茶褐色を呈する。6・7はよく似た鉢である。ともに外面をへう削りするが、7はハケ目が残る。大型の7は口径16.4cm、器高6.7cmを測る。ともに細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。8は口径15.8cm器高17.8cmの完形の甕で外面はハケ目の下に僅かにタタキ目残り、内面は頸部以下は強いナデ調整を行う。砂粒を多く含み、焼成良好で、黄褐色を呈する。以上の屋内土壌出土の土器のうち、6・7を除いて黒斑がある。9~14はテズクネ風の鉢である。9は口径2.2cm、器高1.9cmの極小品である。11は口唇部をつまみ上げて薄くし、直立気味の口縁部につくっている。口径6.2cm、器高5cmである。14は先述の5と極似している。これらは胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色~明茶褐色を呈し、12~14は黒斑がある。15~23も鉢である。15・23はハケ目がよく残るが、他の土器はナデやへう削りにより、ハケ目を消しており、残っていても15・23ほどではない。これらのうち、最小の15は口径11.8cm、器高6.5cm、中型の20は15cm・5.6cm、大型の23は21cm・11.6cmである。17は口縁部直下の内外面に赤色顔料を塗布している。17の胎土は精選されているが、他は砂粒を多量の砂粒を含み、焼成良好で明黄茶褐色~茶褐色を呈し、黒斑がある。24は口縁部が直立する甕で、口径11.5cm、器高13cmを測る。口縁部はヨコナデを行い、外面は上半部に粗いタタキ目を残して下半部をへう削りする。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。

25～30は外反する口縁部を持つ鉢である。形状は各々、変化に富む。29は脚台が付くものであろう。26・27は甕に近い。ハケ目の上からナデしており、ハケ目の残らないものもある。小型品の27は口径11.7cm、器高8.8cm、中型品の28は20.3cm・11.2cm、大型品の30は24.6cm・24cmである。26は胎土が精選されるが、他は砂粒を多量に含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、黒斑がある。31は高坏の坏部に酷似した鉢で、口径30.7cm、器高11.9cm、を測る。器面は摩滅気味で、屈折部と底部付近にハケ目が僅かに残る程度である。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、黒斑がある。32は高坏で脚部を欠き、口径25.1cmを測る。内外面をハケ目調整し、内底面はナデ調整を行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。33は脚台付きの甕で脚台を欠く。口径15.8cm、現存高18cmを測る。口縁部はヨコナデを行い、以下の内外面はハケ目調整を行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通で淡茶褐色を呈する。34～36は壺である。34は口縁部と底部を欠くが、弥生時代前期のものであろう。外面は胴部中位以下にハケ目が残る。また、同内面にも工具の跡が残っている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、黒斑がある。35は二重口縁の壺であらう。頸部は突帯を巡らし、刻み目を入れて加飾する。胎土にあまり砂粒を含まず、焼成良好で褐色～黄褐色を呈する。36は胴部の破片で内外面に細いハケ目調整を行う。外面の下半は工具によりナデしている。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。37・38は器台で本住居では多量の器台が投棄されていた。37は口径16.9cm、器高20.9cmを測る。内外面を丁寧にハケ目調整する。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で灰褐色を呈し、煤が付着している。38は口径10.2cm、器高16.8cmを測る。下半部にハケ目が残るが、多くはナデ消されている。細砂粒を多く含み、焼成良好で明赤茶褐色を呈する。39～48は球胴の甕である。39は外面に粗いハケ目が残り、内面に工具痕が残る。40は口径12.7cm、器高13cmである。器肉が厚い。全体に器面が摩滅しており、外面にハケ目が僅かに残る程度である。41・42は口唇部を欠くが、ほぼ全形を伺うことができる。41は口径14cm弱、器高12.5cm程に推定復原される。ハケ目が残るが、内面の頸部以下はナデ消している。42は口径11cm、器高13cm程である。ハケ目が残るが、内面はナデ消している。43は底部を欠くが、口径12.5cm、器高15cmを測る。内外面をハケ目調整し、内面は胴部上半を、外面は下半をナデてハケ目を消している。44は底部が凸レンズ状に近い形をし、口縁部～頸部の外面はハケ目の下にタタキ目が見られる。胴部下半の内外面はへら削りを行っている。口径15.9cm、器高15.1cmのほぼ完形品である。45は口径15.2cm、器高15.7cmである。口縁部はヨコナデ、頸部以下はナデ調整を行うが、内面にハケ目が残る。46は底部が厚く平底の甕である。口径14cm、器高18.1cmを測る。内外面をハケ目調整するが外面にタタキ目が残る。47は口径15.4cm、器高20.2cmで内外面を丁寧にハケ目調整を行う。48は口径17.3cm、器高18.9cmである。内外面はハケ目調整するが、内面の頸部以下はナデ調整により、外面の底部付近はへら削りにより、消えている。39～48の甕は、胎土に多くの砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈し、

黒斑がある。49～52は長胴の甕である。49は底部が凸レンズ状を呈し、完全な丸底ではない。口径15.7cm、器高17.2cmである。胴部下半の外側はへら削り、内側はナデにより、ハケ目を消している。50は口径14cm、器高18.6cmである。外側はハケ目がよく残るが、内側は口縁部を除いてナデ消している。51は底部を欠くが口径19cm、器高24.5cmに復元される。内外側はハケ目調整するが、胴部下半は擦過痕が認められる。52は大型の甕で底部を欠くが、口径39.2cm、器高47cmに推定復元される。頸部と胴部に突帯を巡らし、口唇部とともに刻み目を入れて加飾する。全体にハケ目調整を行うが、外側の底部付近はへら削りを行っている。なお、ハケ目の下に僅かにタタキの痕跡が残っている。これらの甕は胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈し、黒斑がある。

土製品 (図版52) 覆土中から検出した投彈で、完形品である。

鉄製品 (図版54・57、第117図-4・7・10、第118図-26) 鉄鏃2点、鋏先1点、不明鉄製品が1点出土している。4は身幅2.6cm、現存長5cmの鉄鏃で茎の部分が折れ曲っている。7は大型鉄鏃で身幅3.9cm、現存長10.5cmである。10は不明鉄製品で側面観は湾曲している。断面は矩形を呈し、図の上方は細く作り、折れ曲った部分は板状である。26は鋏先で片方の折り返し部分を欠くが、横幅12.3cmに復元され、縦幅6.3cmである。床面から3cm浮いて出土した。

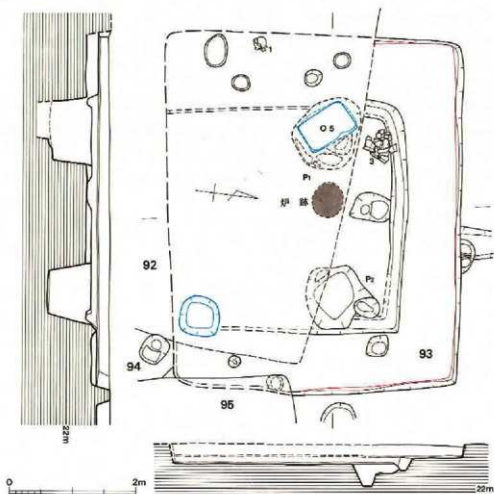
石製品 (図版67-69、第126図-52、第127図-63) 52・63は砂岩製の仕上げである。52は割れており、現存長19cm、同幅10.7cmである。63も割れており、現存長29.7cm、同幅7.2cmの大型品である。

93号竪穴住居跡 (図版37～40、第78図)

92号住居と重複しており、調査中は両者の切り合い関係を把握しきれなかった。92号住居への投棄土器が93号住居の範囲にはなく、本住居の掘削時に掘りあげられたようで、掲載図は竪穴部の南東隅を利用して推定復元した。本住居は92・94号住居を切り、95号住居に切られている。竪穴部のプランは正方形を志向した長方形を呈する。床は貼床で「コ」字型のベッド状遺構は客土して造ったものである。支柱穴は P_1 ・ P_2 で、 P_1 は前代の落とし穴状遺構(O3)を切っている。床面中央付近に炉を切り込んでいる。屋内土壌は検出していない。また、ベッド際に壁小溝を検出した。

出土遺物 土器の他に、土製品・鉄製品・石製品が出土している。土器は、1が西側ベッド上に密着して、3は壁小溝の北西隅付近の床面に、各々、潰れた状態で出土しており、本住居に伴うものとする。その他の出土品は覆土中から出土した。

土器 (図版110、第174図) 1は球胴の甕で、口径13.5cm、器高14.5cmを測り、ほぼ完形品である。器内が厚く、安定感がある。内外側ともハケ目は見られず、口縁部はヨコナデ、頸部～胴部中位はナデ、それ以下はへら削りを行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色



第78図 93号竪穴住居跡実測図 (1/60)

を呈する。2は口径13.1cm、器高17.9cmの甕で外面はタタキ目が残り、胴部下半はヘラ削りを行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。3は口径27.2cm、器高34.8cmの甕で外面は頸部付近にハケ目を残すが、以下はヘラ磨き風の調整を行い、胴部下部はナデている。内面は胴部下半の器面が剥落しているが、全面にハケ目調整を行っている。胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通低位度で茶褐色を呈するが、外面は煤が全面に附着し、黒ずんでいる。

土製品 (図版52) 覆土中から出土した投弾の破片である。

鉄製品 (図版57、第118図-28) 床面から20cm程浮いて覆土から出土した鋏先である。片方の折り返し部分を欠くが横幅11.5cm、縦幅5.9cmを測る。

石製品 縄文時代のもので、まとめて後述する。

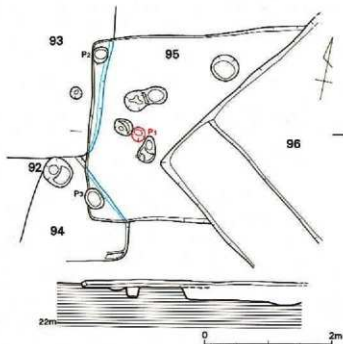
94号竪穴住居跡 (付図1)

92・93・95号住居に大きく切られ、南側は調査区外に延びるため詳細は不明である。

95号竪穴住居跡 (図版40、第79図)

東側を96号住居に大きく切られ、西壁は92～95号住居を切っている。竪穴部のプランは長方形を呈し、床は貼床である。主柱穴は明瞭ではないが、一応、 P_1 と96号住居に削平されて遺存しないが、2本柱であろうと推測する。また、竪穴部の隅に主柱穴配置を想定すれば、 P_2 ・ P_3 も候補に上る。いずれにせよ、東半部が不明なため、主柱穴について不明である。炉や屋内土壌は検出していない。

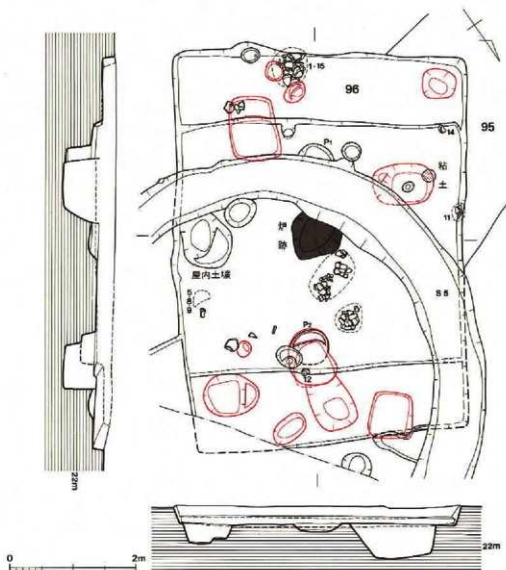
出土遺物 (図版51) 図示できるものはない。覆土中から把手であろうと思われる、破片が出土している。長さ14cm、径4cmでへら削り後、ナズている。



第79図 95号竪穴住居跡平面図 (1/60)

96号竪穴住居跡 (図版40、第80図)

竪穴部の中央を5号周溝墓に大きく切られ、97号住居を切る。平面プランは、台形状を呈し、北西壁が南東壁に比べてやや短い。床は貼床で、量短壁にベッド状遺構を付設する。床面の中央に炉を切り込み、南東壁際中央に屋内土壌を掘り込んでいる。屋内土壌からは何も出土していない。主柱穴は P_1 ・ P_2 で床面で検出した。また、北西壁寄で灰白色の粘土を検出した。



第80図 96号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 まとまとった量の土器と、鉄製品・石製品が出土した。土器は炉と主柱穴P₁の間で検出したもの(図示していない)、匙状土器8・7、甕15が本住居に伴うが他は覆土中から出土した。これらの土器以外は鉄製品・石製品も含めて本住居に伴わない。

土器(図版111、第175図) 1～6は鉢で2だけは鉢である。大型品の1は口径20cm、器高10cm程度に復原され、内外面にハケ目が残る。完形の2は口径14.8cm、器高7.5cmで内面はハケ目調整されるが、外面は上半部はナデ、下半部はヘラ削りを行っている。図上で完形

に復原される深目の鉢4は口径12.8cm、器高6.6cmを測るが、全体に風化が著しく調整は不明である。1～6の鉢は胎上に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～褐色を呈し、2は黒斑がある。7は全体の $\frac{1}{4}$ 程を残し、口径12cm、に復原される。ハケ目、ヘラ削りの後にヘラ磨きを行っている。細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。8・9は匙状の上器ではほぼ完形品である。出土地点を詳しく図示していないが、土器5の横で床面に置かれたと思われる状況で検出した。8は径8cmの皿部に3.4cmの柄がつき、9は同7.7cm・4cmである。柄の形状が少し異なるが、作りはテズクネ風でよく似ている。内面はハケ目調整され、外面と柄はナデにより、ハケ目が僅かに残る程度である。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を呈する。10は口径28cmに復原されている二重口縁の壺の、小破片である。内外面のハケ目はヨコナデ、ナデにより、かなり消えている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を呈する。11は脚台を欠く無頸壺で、口径8.4cm、胴部最大径18.9cm、現存高17.7cmを測る。内外面をハケ目調整し、外面はハケ目の上からヘラ磨きを行う。なお、内面下半のハケ目は細いものである。胎土は砂粒を若干含む程度で精選され、焼成良好で褐色を呈し、胴部最大径部分に黒斑がある。12は脚台の破片である。13は高杯の脚部でハケ目調整の後、外面はヘラ磨きを行っている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で赤褐色を呈し、脚基部に黒斑がある。14は器台の小破片である。15は底部を欠くが、口径22.2cm、現存高29cm強を測る長胴の壺である。内外面はハケ目調整されるが、下半部はナデ消されている。

鉄製品 (図版55、第117図-21) 小型の刀子で、茎は鹿角装である。茎尻は錆で不明確だが、完結しているように見える。全長9.2cm、刃部長5.2cm、同幅1.4cmで4mmほどの関があり、柄に続く。

石製品 (図版64・66、第124図-35・36、第125図-50) 3個体とも砂岩製の仕上砥である。35はベッドの客土中から出土した。図の表裏・側面を使用する。36は図の左側面に径12mm程の、断面が半球状の割り込みがある。50は薄い砥石で図の表裏・側面を使用する。刃部を研いだと思われる、幅2mm、深さ1mm、長さ4.3mmの細い溝状のものがある。すべて、流入、投棄品である。

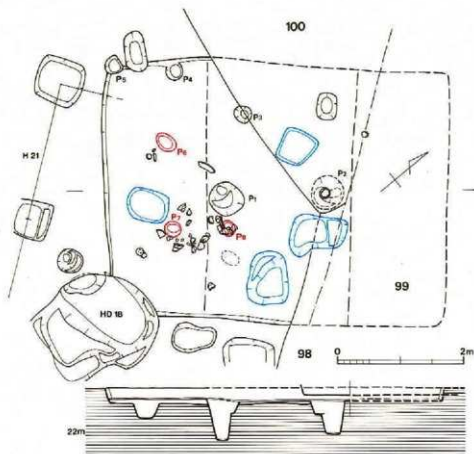
97号竪穴住居跡 (付図1)

調査区東南隅に検出した住居で、96号住居の東側の僅かに顧を出すだけである。大半は調査区外に延びるようで、詳細は不明である。

98号竪穴住居跡 (付図1)

99号住居、5号周溝墓に切られ、大半は調査区外に延びるようで、詳細は不明である。

出土遺物 土器を若干量検出したが、本住居に伴うと確信できるものはない。



第81図 99号竪穴住居跡実測図 (1/60)

土 器(図版110、第176図) 1は口辺部を欠く甕で、内外面を丁寧にハケ目調整する。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、二次加熱により変色する。

99号竪穴住居跡(第81図)

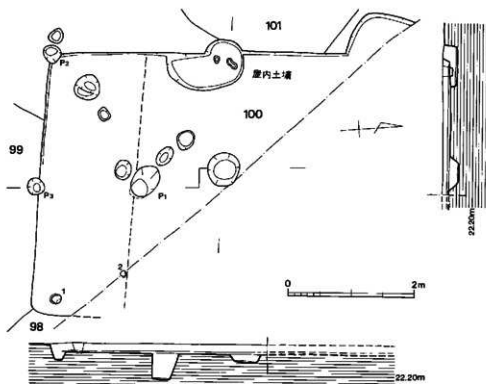
南隔を18号廃棄土壌に、北西壁を100号住居に切られ、北東短壁側は調査区外に延びる。竪穴部は隅円の長方形プランになるようである。支柱穴は P_1 ・ P_2 で掘り方は床面で検出した。南西側短壁にベッド状遺構を付設しており、東北壁側でも同様であったろう。竪穴部内、同壁際に小ピットを検出した。 P_3 は100号住居に伴なうものであろうが、 P_4 ・ P_5 はベッドを取り除いた下層で検出し、その心々距離は1.4m程でベッドの幅とほぼ同じで、ふたつのピットを結んだ線は短壁に平行する。北西壁の P_4 は、それに対応するピットが南東壁際にないので積極性に欠けるが、本住居に伴なうものであろうと推測する。 P_5 についても同様である。 P_6 は貼床下層で検

出し、ピットの上に土器を検出しているので、明らかに本住居内で生活している時は床面下に埋っていたらう。本住居は全体像が不明なため、P₂に対応するピットの存否について確言はできないが、本住居に関係するのではなかろうか、と推測する。

なお、屋内土壇・炉については検出していない。

出土遺物 土器・土鈴が出土している。ともに、覆土中からの出土品であり、本住居に直接伴なうものではない。よって、土器は図示していない。

土製品 (図版51、第116図-3) 土鈴の $\frac{1}{2}$ 程の破片である。全体に摩滅している。直径3.6cm、器高4cm程に復原される。



第82図 100号竪穴住居跡実測図 (1/60)

100号竪穴住居跡 (第82図)

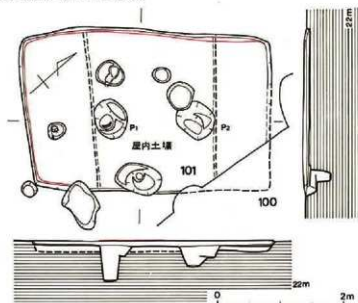
過半が調査区の外に延び、西壁が101号住居を切る。竪穴部のプランは長方形を呈するよう
で、主柱穴は二つと思われるが、実際はP₁しか検出できなかった(P₂に相当するピットは調査
区外にある)。短壁にベッド状遺構が付設されると思われるが、掘りすぎたため、想定図を示し
ている。床は貼床され、炉は検出していないが、西壁際に屋内土壇であろうと思われる掘り込
みを検出した。調査区内で小ピットP₂・P₃を検出した。南東隅では遺構が重複するため、隅角

部にピットを検出しきれなかった。可能性の問題として、南短壁にP₂を中心に小ピットが並ぶかもしれない。このような遺構は出来うれば切り合い関係のほとんどない遺跡で確かめるべきであろう。

出土遺物 土器・鉄製品が出土している。ともに、出土状態は覆土中からであり、本住居に伴なうものではない。

土器 (図版110、第176図) 1は小型丸底壺(埴)で、口径8.6cmに復原され、器高は8.7cmを測る。外面の頸部に僅かにハケ目が残るが、ヨコナデ・ナデにより消えている。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。2は無頭の甕で、口径11.1cm、器高16.2cmを測る。内外面にハケ目調整が目立ち、口辺部と底部にナデ調整を行う。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する

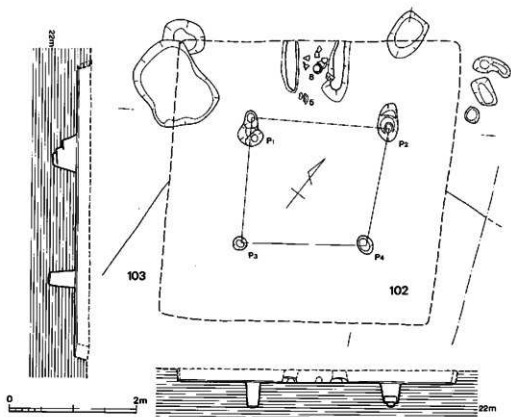
鉄製品 (図版56・58、第117図-20、第120図-47) 20は刀の先端部のように見えるが、刃部はない。未製品であろう。長さ3.3cm、幅1.8cmである。47は、やはり未製品であろうと思われ、刃部はない。長さ10cm、幅2.8cmである。



第83図 101号竪穴住居跡実測図 (1/60)

101号竪穴住居跡 (第83図)

北東隅を100号住居に切られる。竪穴部のプランは隅円長方形である。本遺跡で検出したこの時代の住居の竪穴部としては小型ではある。両短壁にベッド状遺構を配すると想定するが、実際には検出していない。主柱穴はP₁・P₂で、貼床面で検出した。炉は検出していないが、東南壁際に屋内土壌を検出した。出土品もあまりない。



第84図 102号竪穴住居跡実測図 (1/60)

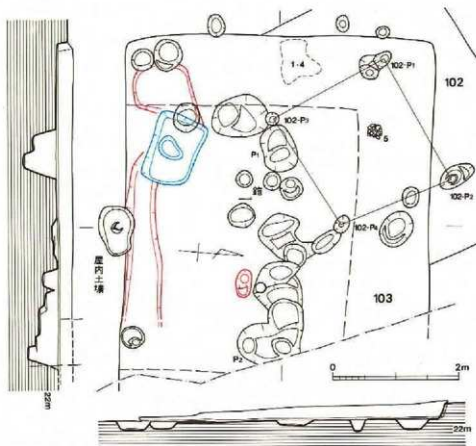
102号竪穴住居跡 (第84図)

カマドを持つ住居では最南に位置する。試掘時に竪穴部の東側にトレンチが入り、包含層と誤認したため、下層の103号住居とともになりにかなり破裂してしまった。本住居はもともと貼床面がほとんど残らず、調査は一気に下層まで掘り下げた。よって、図は81号住居等と違って貼床下層と図示していない。下層は極めて浅かった。竪穴部は残らないので支柱穴 P_1 ~ P_4 の配置状況とカマドの位置から推定復原したものである。竪穴部のプランは方形で、北西壁中央にカマドを設置する。カマドの奥壁は遺存しないが、両袖部は僅かに残っていた。支脚は小型の甕を倒立して使い、カマドの底より3cmほど浮いた状態で設置していた。この甕の底部(支脚の上端)が割れて、カマド内に散乱していた。

出土遺物 カマド周辺と床面が僅かに残る住居の西半部から出土している。出土品は須恵器と土師器で、3・5・7が伴う。8はカマドの支脚で当然伴う。

土器(図版111、第176図) 1は甕の破片で後継25.6cmに復原される。風化が著しく、器面

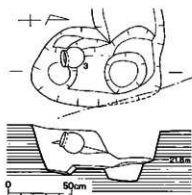
が荒れており、調整は不明である。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈する。2は須恵器を模した土師器坏身の破片で口径11.2cm、器高4.7cmに復元される。風化が著しく器面が荒れており、調整は不明である。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。3・4は須恵器の坏蓋で、完形の3は口径12.8cm、器高4.9cmである。天井部は時計回りの回転ヘラ削りを行い、内面はナア、口辺部はヨコナアを行う。胎土に細砂粒を含み焼成良好で灰色である。5～7は坏身で5は口径12.3cm、器高3.5cmである。7は外底面にヘラ記号がある。胎土・焼成とも坏蓋と同様だが、5は灰色、6は灰黒色、7は紫灰色である。8は口径13cm、器高15.8cmの甕である。口辺部はヨコナアされ、外面はハケ目調整。内面はヘラ削りを行う。支脚に使用されていたため、火を受けており、もろい。



第85図 103号竪穴住居跡実測図 (1/60)

103号竪穴住居跡 (図版37・41・42、第85・86図)

102号、104号住居と重複し、試掘時のトレンチで荒らしたため、調査は困難を極めた。東側は調査区外に延びるが、竪穴部は長方形を呈し、*コ*字型のベッド状遺構を付設する。床は貼



第86図 103号竪穴住居跡主柱穴
(P₂)土器出土状態実測図(1/30)

住居に伴いながらも、出土土器にはそのような差がある。鉄製品は覆土中、石製品は貼床下層からの出土である。

土器 (図版111、第176・177図) 1は高坏で脚部は外されていたようである。口径20.3cm、現存高9.4cmである。ハケ目調整されるが、外面の上半部はナデ消されている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は灰茶褐色、外面は黄褐色を呈する。2は小片で、鉢状のものが乗る高坏であろう。風化が著しく、調整は不明である。胎土に細砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色～黄褐色を呈する。3は主柱穴P₂内で検出した甕で、口径13cm、器高17cmを図る完形品である。底部は僅かに平底状を呈し、丸底ではない。胴部外面はハケ目調整され、同内面はナデ、口縁部はヨコナデされている。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。4は口唇部を欠くが口径・器高とも12.7cmに復原される。底部は完全な丸底ではない。外面はハケ目調整が目立つが、内面はナデ消されている。砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、黒斑がある。5は口径13.8cm、器高19.4cmを測る甕である。底部は凸レンズを呈し、完全な丸底ではない。内外面をハケ目調整するが、ナデにより消えている部分がある。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～赤褐色を呈し、全体に黒ずむ。6～8は鉢で7は口縁部を折り曲げる。6は貼床下層、7・8は覆土中からの出土である。ハケ目調整されるが多くはナデ消される。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈する。9・10は器台で、10は外面にタキ目がよく残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄色褐色～明茶褐色を呈する。11は多分甕で、口辺部を欠く。内外面は丁寧にハケ目調整を行う。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色を呈する。

鉄製品 (図版55～57、第118図-25、第119-33・36・40) 25は鋳先の破片である。現存する横幅8.9cm、縦幅5cmである。木質の付着はない。33は両横に折り返しがなく、鋳先ではないかと想像するが確証はない。ただ、手に持った感じが他の鉄製品と比べ重い感じがするようである。

床される。主柱穴はP₁・P₂で、P₂内には甕が埋納されていた。主柱痕が残っていたか否か確認していないので断言しかねるが、おそらく、主柱を立てる際(棟上げ?)のマツリに関わるものであろう。炉は検出しておらず、屋内土壌は、あるいは、南壁中央の竪穴部壁にかかるものが、それではなかろうかと推定する。

出土遺物 土器・鉄製品・石製品が出土している。図示した土器のうち、2を除いて、本住居に伴うものである。3はP₂からの出土品で住居を建てる時点のものであるが、1・4・5は生活に供されたもので、出土状態から判断して、住居廃棄直前のものである。本

現状で横幅10.2cm、縦幅7cmである。36は鉄斧で刃部を欠く。袋部長径3.3cm、同短径1.4cmである。復原長9cm、同刃部幅5.3cmである。40は床面から7cmほど浮いて出土した埴である。細身で茎の長いタイプで、断面は逆U字型を呈す。幅1cm、現存長15cm程である。

石製品（図版63）2点出土している。石庖丁の破片である。石材の産地は不明だが色調は小豆色である。

104号竪穴住居跡（図版42、付図1）

戦国期の誘導路で削平され、実態は不明である。

105号竪穴住居跡（図版42、付図1）

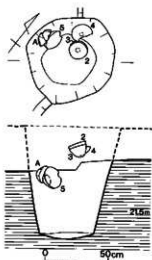
住居であろうと思われるが、戦国期の誘導路で削平され、実態は不明である。

106号竪穴住居跡（図版42、第87図、付図1）

89・105号住居と重複するが、新旧関係は明らかにし難い。竪穴部は長方形プランを呈すると思われるが、壁が残っておらず、推定の域を出ない。北東壁際に屋内土壌があり、土器が落ち込んだ状況で出土している。出土土器は鉢ばかりである。

出土遺物 上述の鉢が、屋内土壌の木蓋が腐食して落ち込んだ状況で出土している。出土状況から、これらの土器は木蓋の上に置かれていたか、近い所に置かれていたと思われる、本住居に伴うものと考えられる。

土器（図版111、第177図） 1は口径6.1cm、器高2.6cmの小型鉢（皿）である。内外面とも風化が著しく調整は不明である。2は口径14.1cm、器高6.2cmで、一見テズクネ風である。内外面とも風化が著しく調整は不明である。3は口径14.5cm、器高7.6cmで内面にハケ目が残るが、外面はナダ消される。4は口径15.9cm、器高6.3cmでハケ目調整の後、外底面付近をへら削りする。5は底部に特徴があり、丸底ではなく、凸レンズ状である。畿内第5様式の底部に通じる部分がある。これらの土器はともに細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、1を除いて黒斑がある。なお、1は外面に丹塗りの可能性がある。



第87図 106号竪穴住居跡
内土壌実測図（1/30）

2 掘立柱建物跡 (付図1)

B地区では20棟の掘立柱建物跡(4~23号)を検出した。遺構の切り合いが激しいため、調査時に建物だと確認してから調査をしたものは1棟もない。ただし、22・23号建物は可能性の問題として図示しただけで、建物であるか否かについての確証はない。4号建物はA地区の1~3号建物と同様な円形の掘り方であり、5号以下の建物の掘り方が方形を呈するのと比較して、対称的である。もっとも、1~4号建物は確証はないが古墳時代後期以降のものであろうと考えられるのに対して、5号以下の建物は住居との切り合い関係から弥生時代後期後半~古墳時代初期頃のものであろうと考えられ、両者の時期差が柱穴の掘り方の形態差となったのであろう。4号建物は溝2と接近しすぎ、主軸方向も違うので両者の同時併存は考えられないが、5号以下の建物は十分にその可能性がある。5・7・15・19号建物は溝2とほぼ平行か直交している。また、建物相互の棟方向が平行、直交するものがあり、いくつかのグループ分けができそうである。8・13号建物の柱穴では各1点の上器が検出され、建物を建てる時の祭祀行為の存在を示唆している。

以下、説明を行う建物以外にもまともではないが、掘立柱建物跡の柱穴ではなからうか、と思われるしっかりとした方形のピットがあり、さらに建物が建つ可能性がある。しかし、他の遺構に削平されて岡上での判断には限界があり、一応、B地区では4~23号建物について、掘立柱建物として説明を行う。

4号掘立柱建物跡(第89図-4) H4

4間×2間の建物と想定する。柱間寸法はまちまちで、棟行方向はほぼ真南北である。

5号掘立柱建物跡(図版14、第89図-5) H5

1間×2間の建物で柱間寸法はまちまちである。棟行方向はほぼ北東~南西である。柱穴の一部は2号周溝墓に切られている。

6号掘立柱建物跡(図版14、第89図-6) H6

調査区外に延びるが、1間×2間の建物であろうと想定する。棟行方向はほぼ東西である。

7号掘立柱建物跡(図版14・19、第89図-7) H7

1間×1間の建物である。対応する辺の柱間寸法は、各々3.6m・4.2m等間である。

8号掘立柱建物跡(図版14・112、第88・90図-8、第177図) H8

1間×1間の長方形プランの建物である。西側の二つの柱穴は17号住居・2号周溝墓に切られる。P₁の埋土中で完形の甕1点を検出した。先述のように建物を建てる時の祭祀行為を示すものであろう。この土器は口径11.6cm、器高12.7cmの完形の甕である。ハケ目調整されるが、口縁部外面はヨコナデされ、外面の胴部下半はへら削りにより、ハケ目が消えるか薄く残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色~黄褐色を呈し、黒斑がある。この形態の甕は住居

跡から検出していないが、胎土等は生活用土器と大差ない。

9号掘立柱建物跡 (図版14、第90図) H 9

8号建物の東3.2m離れて建てられた1×1間の建物である。両建物の柱列はほぼ一直線上に乗る。当初、両者を東西に長い1×3間の1棟の建物と考えたが、2間目の柱間寸法が、1・3間目の寸法より1mほど短いため、1×1間の別個の建物と判断した。柱穴は4・21・22号住居の貼床下層で検出し、これらの住居より古い。

10号掘立柱建物跡 (第90図) H 10

30号住居の東側にある1×2間の建物で、11号建物と重複し、15号祭祀土壌を切っている。ただ、5号住居との切り合い関係は定かではない。

11号掘立柱建物跡 (第90図) H 11

30号住居の東側にある建物で、東側は調査区外に延びるが1×2間の建物であろうと推測する。10号建物と重複するが新旧関係は不明である。また南西の柱穴は溝5に切られている。

12号掘立柱建物跡 (図版24、第90図) H 12

34~36号住居を切り、38号住居に切られた1×1間の建物である。棟行方向は6・8・9号建物とほぼ平行である。8・9号建物と比べて平面プランは、より正方形に近い。

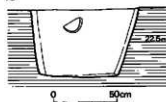
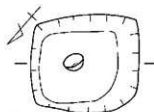
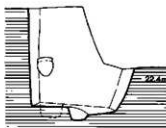
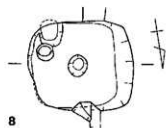
13号掘立柱建物跡 (図版24・112、第88・90・117図) H 13

37号住居・1号方形竪穴を切り、38号住居に切られた1×2間の建物である。近くに存在する建物遺構の中では、10・17号建物と棟行方向はほぼ直交している。柱穴P₁から、鉢が出土している。8号建物と同様に、建物を建てる時の祭祀に關係するものであろう。この鉢は畿内第5様式に似た底部を持ち、

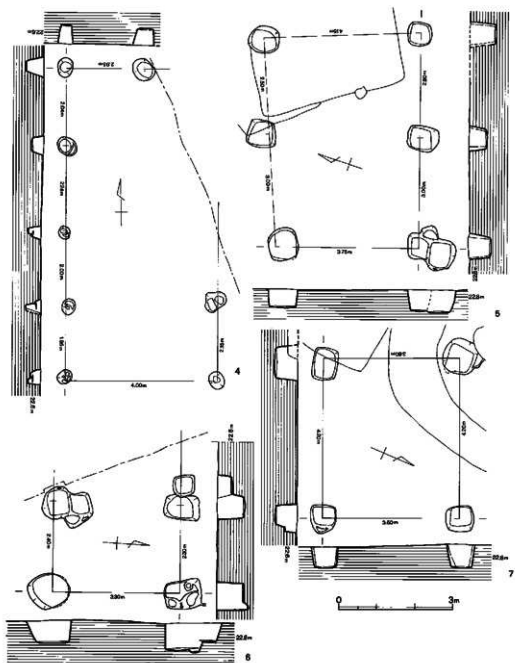
体部は半球状のものである。口縁部は器肉の薄い部分があり、後に粘土を補強している。口径16.4cm、器高8.2cmを測る。タタキ目の跡は見られず、ナデ調整を行い、外面の底部付近と内面にハケ目が残る。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。

14号掘立柱建物跡 (図24版、第91図) H 14

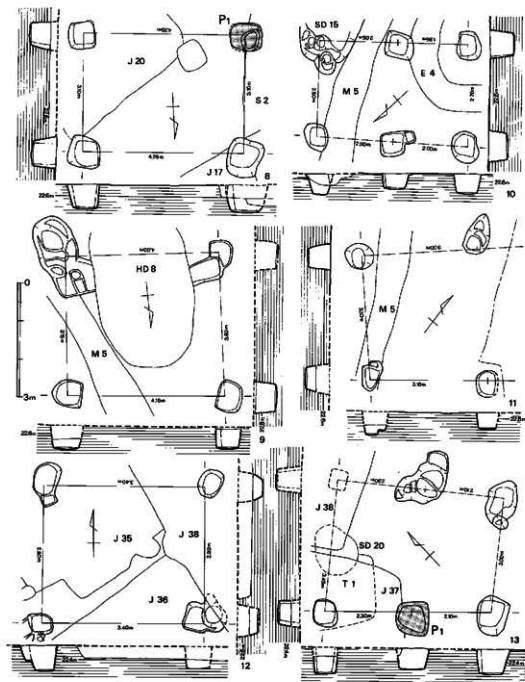
13号建物の東側に存在し、38号住居に切られた1×1間の建物である。12号建物をひと回り小型にした規模の建物である。



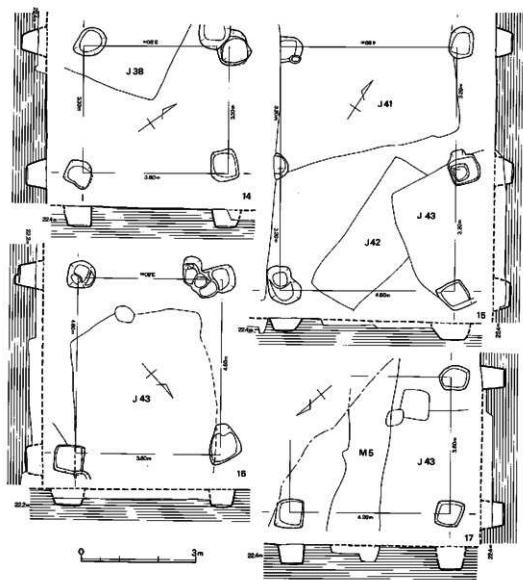
第88図 8・13号掘立柱建物
柱穴遺物出土状態 (1/30)



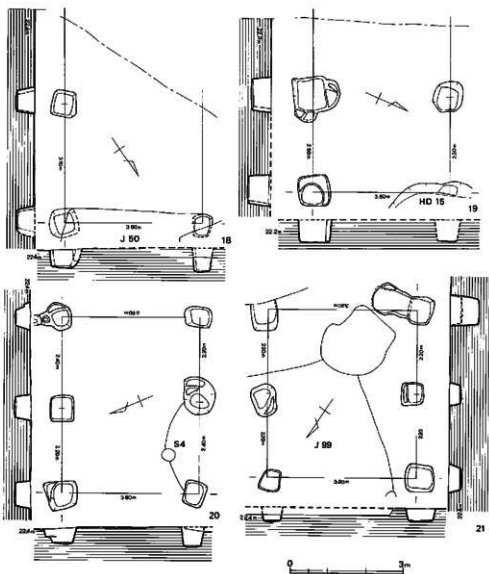
第89图 4~7号据立柱建筑物实测图①(1/100)



第90图 8~13号独立柱建物实测图② (1/100)



第91图 14~17号掘立柱建物实测图③ (1/100)



第92図 18~21号張立柱建物実測図④ (1/100)

15号獨立柱建物跡 (図24版、第91図) H15

38号住居の北東側にある1×2間の建物である。弥生時代終末期前後の建物の中では、本遺跡最大の建物である。ただ、西側柱列のうち、真ん中の41号住居の壁にかかる柱穴は住居の主柱穴の可能性も残していることを付記しておく。

16号獨立柱建物跡 (第91図) H16

15・17号建物、42～44号住居と重複する1×2間の建物である。住居には切られているようだが、建物どうしの新旧関係は明確にし難い。

17号獨立柱建物跡 (第91図) H17

43・44号住居の北東側にある1×1間の建物である。東隅の柱穴は調査区外にある。

18号獨立柱建物跡 (第91図) H18

56号住居の南西側に位置し、調査区外に延びるが1×2間の建物であろうと思われる。北東側柱列のうち、北から2番目の柱穴は検出していない。56号住居に切られる。

19号獨立柱建物跡 (図版35、第92図) H19

83・84号住居、15号廃棄土壌に切られる。建物の一部は調査区外に延びるが1×2間の建物であろうと考えられる。

20号獨立柱建物跡 (図版37、第92図) H20

80・91号住居、4号周溝墓に切られた1×2間の建物である。太平洋戦争の末期に戦闘機の誘導路建設により削平されており、柱穴は浅くなっている。

21号獨立柱建物跡 (図版37、第92図) H21

東側柱列が99号住居、5号周溝墓により切られている。1×2間の建物である。建物のプランは正方形に近い。

22号獨立柱建物跡 (付図1) H22

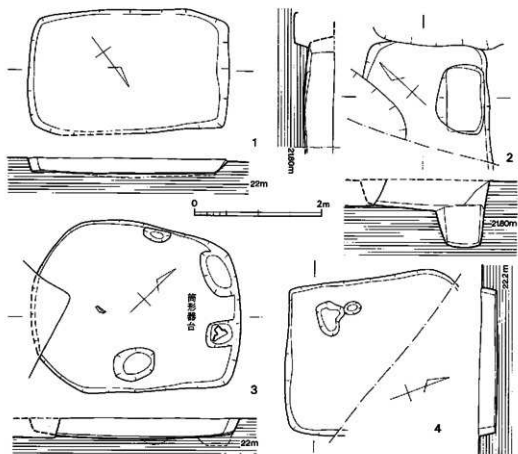
西側の柱列だけ検出した。東側の柱列は調査区外にあると想定し、建物と考えた。

23号獨立柱建物跡 (付図1) H23

二つのピットの存在から、大胆に建物であろうと考えたが確証はない。

3 方形竪穴

調査区の中央部以南において、方形に近いプランを呈する竪穴状遺構を4基検出した。4号竪穴を除いて、他の3基は祭祀土壌・竪穴住居に切られている。また、出土遺物がほとんどないことが、この遺構の特性でもある。床面は地山のままである。



第93図 方形竪穴実測図 (1/60)

1号方形竪穴 (第93図) T1

36・37号住居、20号祭祀土壇に切られる。長軸3.17m、短軸1.95mである。現状で深さ20cmほどである。

2号方形竪穴 (第93図) T2

西半部が調査区の外に延びる。北壁を溝6に、東壁を39号祭祀土壇に切られる。長軸は不明だが、短軸2mほどである。1号竪穴と同規模であろうか。

3号方形竪穴 (第93図) T3

方形と円形が組み合わさったプランを呈し、長軸3.3mほど、短軸2.65mである。北東短壁際のピットから箭形器台の破片が出土している。

4号方形竪穴 (第93・181図) T4

北東側が調査区の外に延びるが、プランは3号竪穴に似ているようで北側は円形状である。

規模も3号竪穴と同じ程度であろう。覆土中から、土器が出土している。181図に図示した壺は丹塗磨研され、口径35cmほどのものである。

4 周溝墓

溝2以南において、5基(S1～S5)検出した。埋葬施設は検出していない。たぶん、盛土中に埋葬施設を構築していたものと思われる。また、土器の出土状態から「周溝墓」と判断してよからうと考えた。1～4号は方形周溝墓であるが、5号は円形の周溝を巡らす。1号と2号は、連結して造られており、1号の南溝は掘られておらず、2号の北溝を利用しているように見受けられる。よって、両者の関係は、まず1号が造られた後に2号を構築したものであろうと考えられる。1・2号を除いて、周溝墓は散在的な在り方を示している。

1号周溝墓(図版8、第94図) S1

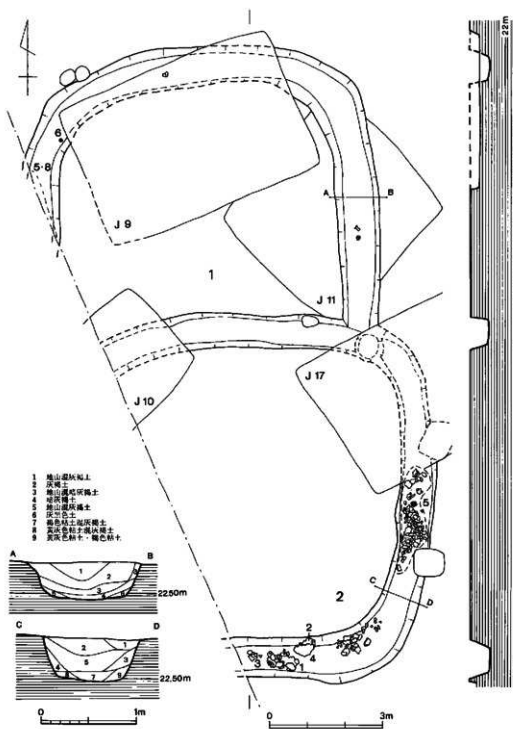
平面プランは方形に近いが、溝のラインは弧を描く。上述のように南溝は掘られておらず、2号周溝墓を意図の内において造られたものであろう。規模は北溝で東西8.3m、東溝で南北7.5mである。埋葬施設は検出していない。11号住居を切り、9号住居に切られている。

出土遺物 土器・石製品(石廬丁)が出土している。土器は弥生時代中期のものが含まれるが、これは石廬丁とともに混入品である。本周溝墓は住居と切り合っており、土師器については出土位置から4・7を除いて伴なうだろうと言える程度である。

土器(第178図) 1～3は弥生土器で本遺構に直接伴なわない。2・3は丹塗磨研土器である。4は東溝から出土した壺の破片で口径10.6cmに復原される。外面の頸部下にハケ目を残すがハダにより、多くは消されている。細砂粒を多く含み、焼成良好で褐色～灰褐色を呈す。5は埴の $\frac{1}{2}$ 程の破片で残りの部分は調査区外に残る。口径11cm、器高9.5cm程に復原される。頸部外面、胴部内面はヘラ磨きを行う。また胴部外面～底部はヘラ削りを行っている。胎土は砂粒を若干含む程度で精選され、焼成良好で淡黄褐色を呈し、黒斑がある。一部に赤色顔料と思われるものが付着している。6は高環の脚部のようだが、環部を欠く。脚部径17.3cmで、ハケ目調整されるが、ナダられて消えた部分もある。砂粒を少し含み、焼成良好で茶褐色を呈する。7は伴なう可能性もあるがはっきりしない土器で、11号住居覆土中の破片と接合した。口径18.8cmに復原される壺である。内外面にハケ目調整の跡が残り、胴部にはタキ目が認められる。また、口縁部内面には指圧痕が残っている。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色～茶褐色を呈し、黒斑がある。8は5と同様に西側調査区の壁際で検出し、残りの部分は調査区の外にある。口径28.4cmで、内外面にハケ目調整する。7と比べて頸部は短い。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。

石製品(図版64、第123図)

石廬丁の破片で現存横幅6.6cm、縦幅4.2cmを測る。刃の一部は研磨によりえぐれている。



第94图 1、2号周溝墓实例图(1/100)

2号周溝墓（図版8、第94図）S2

1号周溝墓の南に接続して営まれている。西溝と南溝の西半部が調査区外に延びている。先述のように2号が先行して造られたと考えられる。北溝は1号を造る際に掘り広げたり、掘り込んだりした形跡はない。規模は1号よりも一回り大きく、南北9.5mを測り、東西もほぼ同程度であろう。東溝何部の土層（C-D）によれば、7・8・9が埋った後に、周溝の両側から土砂（3・4）が流入し、さらに、盛土が流れ込んでいる。土器は土層の5（地山混灰褐色土）とともに周溝内に落ち込んでいる。

出土遺物 東・南溝から土器が出土している。土器の出土する部分は東溝中央部と南溝に限られている。これらの土器を転落品と考え、土器を供献した場所をおおむね特定することができる。すなわち、東・南溝に面した部分に土器を供献したと考えられる。

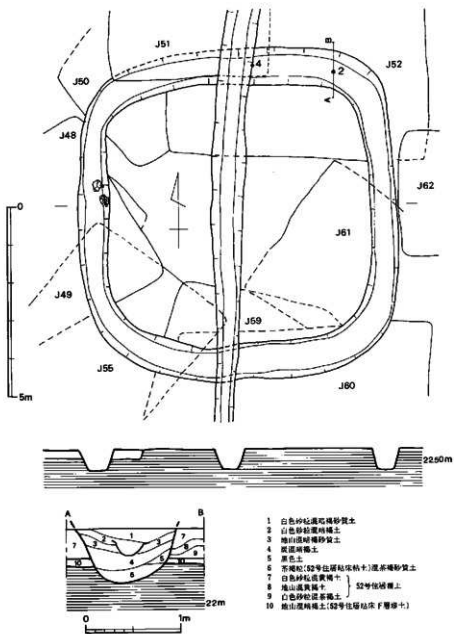
土器（図版112、第178・179図） 1は長胴の甕で、口径25.2cm、現存高34cmを測る。口縁部はヨコナデされ、胴部はハケ目調整を行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～灰黄褐色を呈し、部分的に煤が付着している。2は底部を欠き、胴部も $\frac{1}{2}$ 程を失う。口径14.6cm、現存高30cmほどの壺である。口縁部はヨコナデされ、胴部はハケ目調整を行う。胎土の砂粒を多く含み、焼成良好で黄灰色を呈する。3は長胴の甕で、頸部直下に突帯を巡らす。口縁部はヨコナデにより、ハケ目がほとんどナデ消されるが、頸部以下はハケ目が残る。胎土に砂粒を含み、焼成良好で白黄色～淡明茶褐色を呈し、部分的に煤が付着している。4は口径51cm、現存高48cmを測る肩の張った長胴の甕である。口縁端部は面をなし、刻み目を入れる。頸部にも刻み目を入れた突帯を巡らしている。肩部以下はハケ目が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を呈し、黒斑がある。5は口径47.5cm、器高65.8cmに復原される長胴の甕である。口縁端部は面をなし、刻み目を入れる。頸部・胴部にも刻み目を入れた突帯を巡らしている。底部は平底に近い凸レンズ状をなす。内外面をハケ目調整し、胴部上半と底部にはタタキ目が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～赤褐色を呈し、器面が黒ずんでいる。

3号周溝墓（図版11・12・25・26・27・112・113、第95・180図）S3

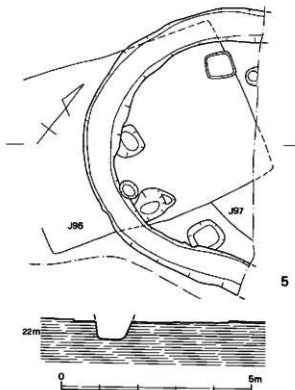
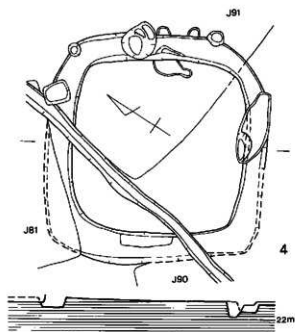
B地区のほぼ中央部に検出した周溝墓で、周溝の方位はほぼ磁北にのる。中央部を南北に溝6が縦断し、北溝西半部は51号住居が切っている。周溝のその他の部分は、周囲の住居をすべて切っている。規模は東西8.4m、南北8.7mほどである。全面を検出したが陸橋部はない。先述のように、周囲の住居を切って周溝墓を造っているため、盛土には住居覆土や貼床の粘質土も使われていたようで、周溝埋土の土層図（A-B）では、そのような土が流入していた。土器は周溝が一定程度埋った後に流れ込んだ（落ち込んだ）ようである。

出土遺物 土器・鉄製品（鉄斧1・鉄鎌2）が出土している。図示土器は全て伴うが、鉄製品は住居に周溝を切り込んだ時に掘り上げ、その後流れ込んだ可能性を残している。

土器（図版113、第180図） 整理期間の都合上、土器は一部しか図示していない。1は口径



第95图 3号周濠墓实例图 (1/100)



第96図 4、5号周溝墓実測図 (1/100)

14.4cm、器高6.8cmを測る鉢で、底部は平底気味である。全面、ナデ調整される。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。2・3は口縁部が外反する大型の鉢である。2は口径35.2cm、器高15.6cmを測る。内面は口縁部～頸部直下までハケ目が残るがそれ以下はナデ消されている。外面は口縁部～頸部はヘラ状工具による擦過痕があり、頸部～体部中位はナデ、そり以下はヘラ削りを行う。2は口径42cm、器高18.8cmである。口縁端部は刻み目を施し、内外面はハケ目調整を行う。2個体とも砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈するが、黒斑がある。4・5は高杯で完形の4は口径34.3cm、器高22.7cmである。器面が摩滅するため調整が不明な部分が多いが、脚柱部はヘラ磨きしているようである。5はハケ目の上からヘラ磨きしている。ともに砂粒を含み、焼成良好で4は赤明茶褐色を呈し、黒斑があり、丹塗りされた可能性がある。5は明茶褐色を呈し、黒斑がある。6は口径13.8cm、器高28.8cmを測る壺である。口縁部を除いてハケ目調整が目立つ。ハケ目の下に一部タタキ目が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で赤褐色～明茶褐色を呈し、二次加熱のため器面の

剥落が著しい。7・8は長胴の甕である。7は口径26.6cm、器高29cmである。内外面はハケ目調整されるが、後にナデによりハケ目が消えた部分がある。8は底部を欠くが口径26.1cmで現存高27cmほどである。内外面はハケ目調整されるが胴部中位以下は工具により、ナデ消されている。ともに胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈し、煤が付着して黒ずむ。7は黒斑がある。

鉄製品（図版55・58、第119-35、120図-50・51） 35は完形の鉄斧で側面に僅かな肩を有する。全長7.4cm、刃部幅3.9cm、袋部長径2.7cmである。50・51は鎌とともに先端部を欠く。50は現存長11.8cm、幅3.5～4.5cmで、50は同12.7cm、3.5～5.5cmである。

4号周溝墓（図版37、第96図）S 4

B地区の南で検出した。太平洋戦争時の戦闘機の誘導路建設により削平され、それ以前は81号住居に北西溝の立ち上がりを削られている。90・91号住居との新旧関係は不明である。規模は、ほぼ6m四方である。出土品はない。

5号周溝墓（図版40、第96図）S 5

B地区の南端で検出した唯一の円形を呈するものである。東側の半分は調査区外に延びる。また、96～98号住居を切っている。現状で、周溝の立ち上がりでの直径は7.5mほどである。この遺構に伴う出土品はない。

5 円形周溝

25号住居から69号住居までの間で検出した。円形～楕円型を呈し、直径は5mを超えることはない。また、これに伴う出土遺物は皆無である。

1号円形周溝（第97図）E 1

この部分は遺構の切り合い関係が複雑であったので、切り合いとプランは正確ではない。

2号円形周溝（第97図）E 2

3号円形周溝、29号住居を切る。大半は調査区外に延びるため詳細は不明である。

3号円形周溝（第97図）E 3

11号廃棄土壌、2号円形周溝、28・29号住居に切られる。本遺跡で検出した円形周溝の中では溝の幅が狭く、唯一プランは正円を呈するようである。

4号円形周溝（第97図）E 4

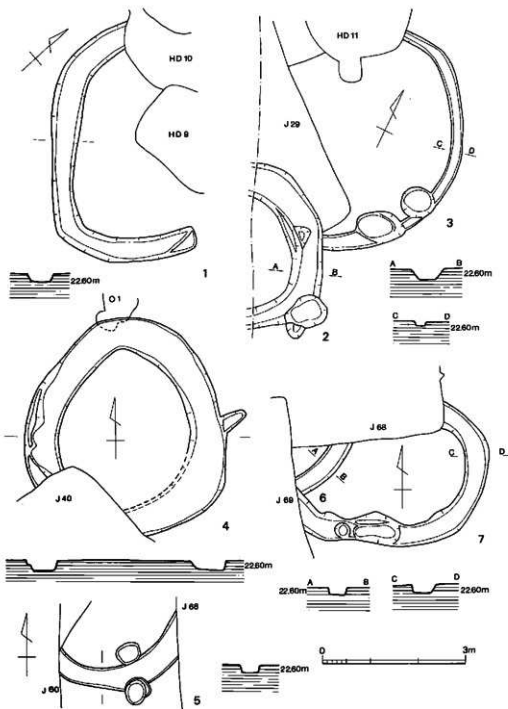
39・40号住居に切られ、1号落とし穴状遺構を切る。溝は幅広く、プランは不整形である。

5号円形周溝（第97図）E 5

60・68号住居に切られる。極く一部しか残存しないので詳細は不明である。

6号円形周溝（第97図）E 6

68・69号住居、7号円形周溝に切られる。僅かに遺存するのみで詳細は不明である。



第97图 1~7号円形周溝実測図 (1/80)

7号円形周溝（第97図）E7

68・69号住居に切られる。プランは楕円形を呈するようである。

6 祭祀土壌

B地区全面にわたって検出した。溝2の北側にある1号は祭祀土壌としたが疑わしい。2号以下は溝2の南側に限って存在する。その多くが竪穴住居の床面下で検出される。土壌の形態は、細長い溝状のもの（9～11・38～40号）、竪穴状のもの（6・8・15）などバラエティに高んでいる。これらは散漫なあり方を示すが数基ずつまとまっており、互いに平行・直交に近い分布状況を示している。これらの遺溝からの出土品は甕棺祭祀に関係するものと考えられるが、調査区内では甕棺墓は検出していない。甕棺墓はさらに西側に存在すると考える。

1号祭祀土壌（図版113、第98図）SD1

溝2の北側に1基だけ存在する。弥生土器が出土したが祭祀土壌と考えるのに疑問がある。

2号祭祀土壌（第98図）SD2

調査区西側の溝5の北に検出した。長径1.56m、短径1.1mの楕円形を呈し、二段掘りで深さは0.8mである。丹塗磨研土器を含めて、少量の土器が出土した。

3号祭祀土壌（図版113、第98図）SD3

7号住居の北側に4・5号祭祀土壌と並んで存在する。長径1.72m、短径0.67mの長楕円形を呈し、深さは0.4mほどであるが、後にピットが2つ掘り込まれている。出土遺物は丹塗磨研土器等がある。

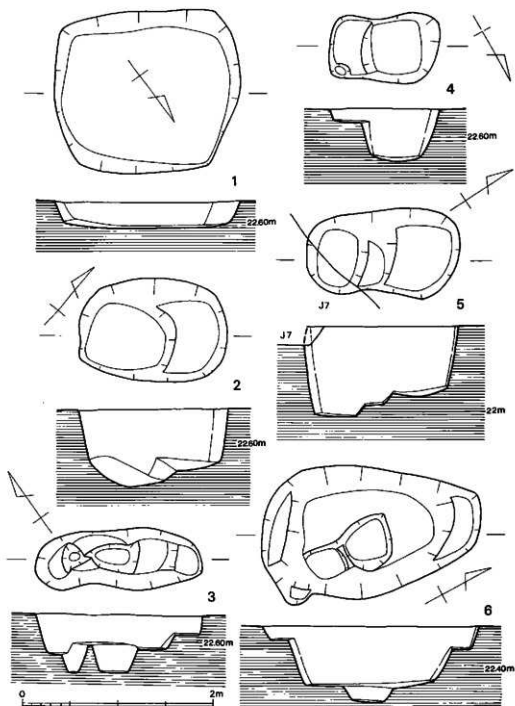
4号祭祀土壌（第98図）SD4

3号祭祀土壌の東側に接するように掘り込まれている。長径1.38m、短径0.68mの長方形に近い楕円形を呈する。二段掘りで深さは0.57mである。丹塗磨研土器を含めて、少量の土器が出土した。

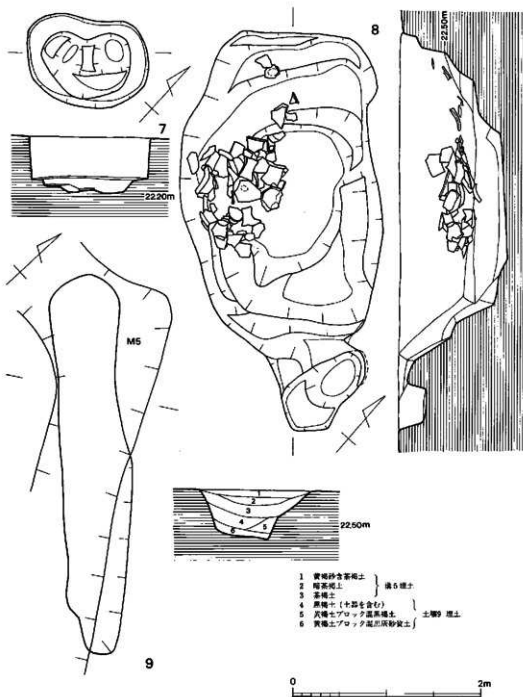
5号祭祀土壌（図版45、第98図）SD5

4号祭祀土壌の東側に掘り込まれ、一部を7号住居に切られる。長径1.6m、短径0.6mの楕円形で、三段掘りで深さは0.95mである。多量の祭祀用土器が出土している。

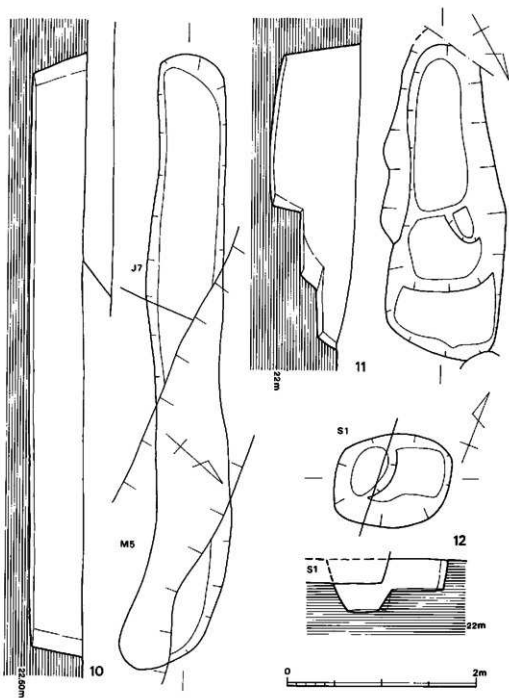
土器（図版114、第181図） 図示できたのは極く一部である。1は口径32.7cmを測る。丹塗磨研された開口壺である。胎土は精選されて砂粒をあまり含まず、焼成は良好である。2～4は鋤先状口縁の壺で、小型の4は口径20.7cm、器高22.4cmを測るほぼ完形品である。2・3は口径26.4cm、32cmである。ヨコナデ、ナデによりハケ目が消されるが、4は口頸部に若干残る。また4は底部付近をヘラ磨きする。3～5は胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、2・4は黒斑がある。5は高坏で脚部を欠く。残存する杯部は口径26.8cmで丹塗磨研されている。口縁平坦部はヘラで細い線を容れる。胎土は精選されてあまり砂粒を含まず、



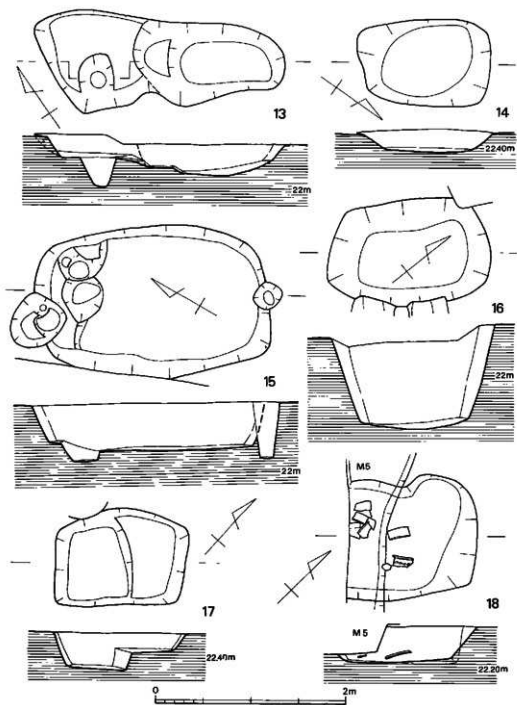
第98図 祭祀土壇実測図① (1/40)



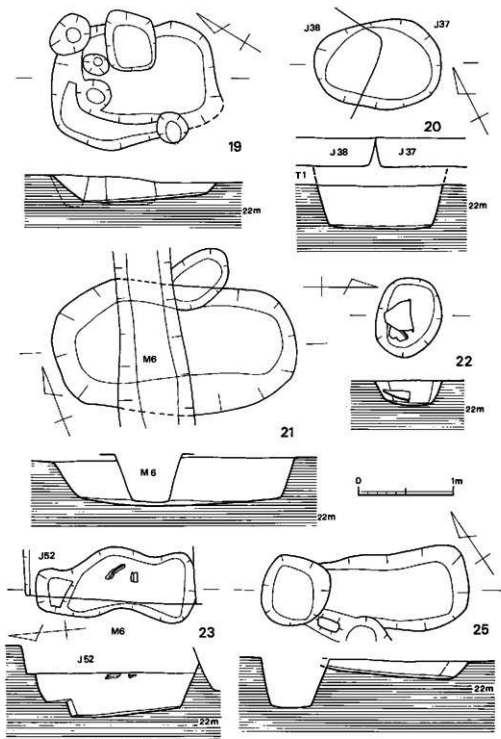
第99図 祭祀土墳実測図② (1/40)



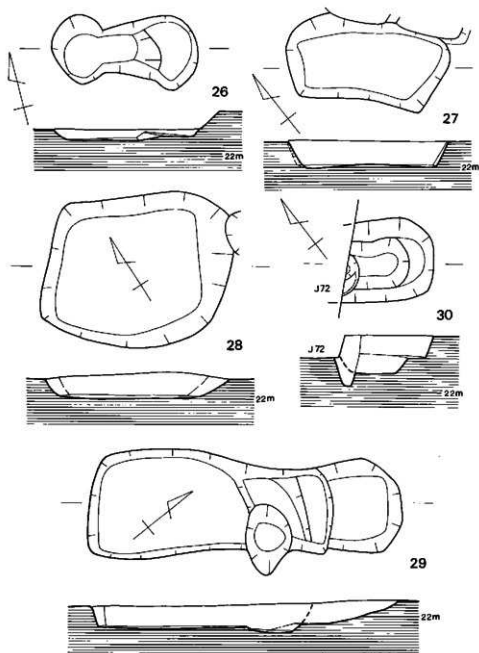
第100图 祭祀土坑实测图③ (1/40)



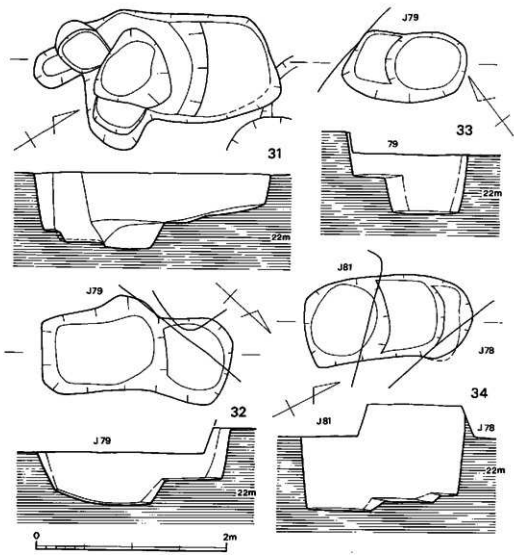
第101図 祭祀土坑実測図④ (1/40)



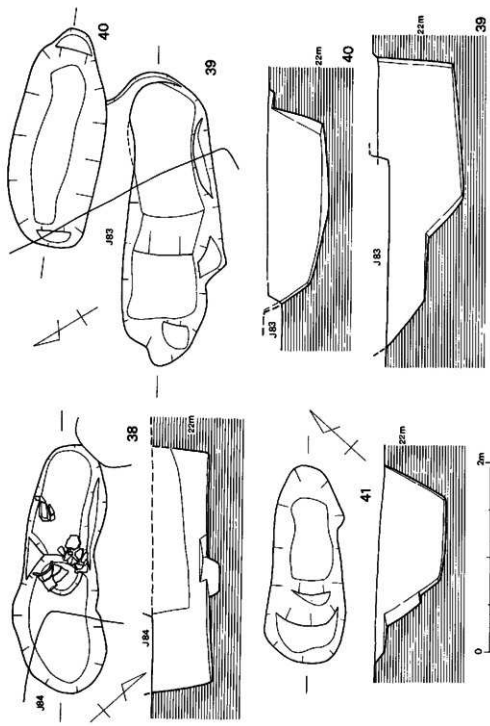
第102図 祭祀土壇実測図⑤ (1/40)



第103图 祭祀土坑实测图⑥ (1/40)



第104図 祭祀土壘実測図⑦ (1/40)



第105図 祭祀土壇実測図③ (1/40)

焼成良好である。6は甕で頸部の下に突帯を巡らす。小片の反転復原因で口径28cmほどである。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を呈し、煤が付着している。

6号祭祀土壺 (第98図) S D 6

溝2の南にある。長径2.3m、短径1.4m、深さ0.65mの二段掘りで、底面に深さ15cmのピットがある。土器の出土量は少ない。

7号祭祀土壺 (第99図) S D 7

6号祭祀土壺のすぐ南に掘り込まれている。長径1.28m、短径0.9mの不整楕円形を呈し、二段掘りで深さ0.6mである。壁を直に掘っており、他の祭祀土壺と異なる。土器は若干量出土している。

土器 (図版114、第181図) 口径33.5cmの甕で、胴下半を次ぐ。外面の頸部以下にハケ目が残るが、他の部分はナデられて消える。胎土は精選され、焼成良好で白黄褐色～褐色を呈する。

8号祭祀土壺 (第99図) S D 8

4号建物のすぐ南に位置する。長径2.6m、短径1.55mで、三段掘りで深さは0.8～0.85mである。土器は底面から20cmほど上に、割って投げ込んでいる。壺内の全面に散乱せず、中軸線より西側に一定のまとまりを持って検出された。

土器 (図版114・115、第181・182図) 1はほぼ完形の鉢で口径27cm、器高18.3cmである。外面は細ハケ目が部分的に残る。口縁部はヨコナデ、ほかはナデ調整である。胎土は精選され、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈し、部分的に煤が付着する。2～4は同一個体の壺であるが接合しない。口径33.2cmで、器高は30cmほどであろう。胴部に口唇状突帯を2状巡らせる。上段の突帯の上の一箇所に長さ5cmほどの粘土を断面三角形の突帯状に貼り付いている。頸部は暗文を入れるが、器面が荒れており、下半部は遺存しない。ほかの部分はヨコナデ、ナデ調整を行う。胎土は砂粒をやや多含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈する。5・6は甕と甕で、5は口径26.4cm、器高26.4cmで、6は同31cm、36.1cmを測る完形品に復原される。口縁部はヨコナデされ、外面の頸部以下はハケ目調整される。内面はナデ調整である。細砂粒を多く含み、焼成良好で5は淡黄褐色、6は黄褐色を呈し、黒斑がある。7～9は器台である。口径10cm前後、器高12cm前後である。外面はハケ目調整されるが、口縁部・裾部はヨコナデされて消えている。内面は強いナデによる指圧痕が残る。胎土は細砂粒を少し含む程度で、焼成良好で黄褐色を呈する。10も器台で、中実の円柱形を呈する。直径は6.7cm～8cm、器高は13.6cmである。表面は強いナデによる指圧痕が残る。胎土は細砂粒を少し含む程度で、焼成良好で黄褐色を呈する。

9号祭祀土壙 (第99図) SD9

溝5の北東隅角部に検出した。そのほとんども溝に削平されている。プランは細長く、長径4m、短径0.8m前後である。深さは0.5m程度であろう。本土壌に伴なうと思われる土器、溝に削平されているためか小破片ばかりである。

土器 (第182図) 1・2・4・5は甕の破片である。1・2は口径31.8cm、35cmに復原される。3は壺の底部であろう。

10号祭祀土壙 (図版45、第100図) SD10

9号祭祀土壙と直交方向に掘られている。大半を溝5と7号住居に削平される。プランは長く不整形長方形で、長軸6.5m、短軸0.75m、深さ0.56m程度である。底面から浮いた状態で破砕された土器が、土壙西半部一面に検出された。

土器 (図版115・116、第183図) 1は筒形器台で4ヶ所の方形透し孔の上縁以下は残存しない。おそらく、この部分で打ち欠いて別々に複数の祭祀土壙に埋められたものであろう。口径12.6cm、現存高7.9cmである。胎土は精選され、焼成良好で丹塗磨研される。2は口径11.4cm、器高2.6cmを測る丹塗磨研された短頸壺の蓋である。2個一組で2ヶ所に計4個の穿孔が認められる。胎土は精選され、焼成良好である。3は口径8.5cm、器高7.5cmの丹塗磨研されたコップ状の土器である。砂粒をほとんど含まず、胎土は精選され、焼成は良好である。4は鉢で口径17cm、器高9.6cmを測る。底部付近にハケ目調整時の痕跡として僅かな稜が残る。口縁部はヨコナデ、他は全面ナデ調整を行う。胎土は砂粒をかなり含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈する。6は口径31.1cm、器高11.2cmを測る甕の蓋である。口縁部はヨコナデされるが、外面はハケ目調整され、他はナデ調整である。胎土は砂粒をかなり含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈する。7は口径23.5cm、器高28cmを測ねる高坏で丹塗磨研される。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で生地は明茶褐色を呈する。

11号祭祀土壙 (第100図) SD11

1号周溝墓の西部に位置し、北半部を9号住居に切られ、南端部は調査区外に延びる。プランは不整形長楕円形で長径3.4m、短径1m前後である。北側は階段状に三段掘りになっており、深さは最深部で0.93mである。土器は底面から浮いて二段目の掘り方より上層で検出した。

土器 (図版116・117、第183・184図) 1は甕の蓋で形が歪んでいる。口径33.8cm、器高12cmである。口唇部はヨコナデ、外面はハケ目調整、他はナデ調整を行う。砂粒を多く含み、焼成良好で淡明茶褐色を呈す。2は筒形器台で、4ヶ所の方形透し孔の上縁以下は残存しない。10号出土例と同様に、この部分で打ち欠いて別々に複数の祭祀土壙に埋められたものであろう。口径14.3cm丹塗磨研される。胎土は精選され、焼成良好である。3～5は鑑先状口縁の壺で丹塗磨研される。最も残りのよい3は口径32.7cm、現存高26.3cmである。3・4は頸部に口唇状突帯を巡らし、4は胴部にも2条の口唇状突帯を巡らす。3・5は胎土は精選されるが、4は

砂粒を多量に含み、ともに焼成良好である。6・7は同一個体の壺だが互いに接合しない。口径36.2cm、器高は35cm程度であろう。頸部直下に三角突帯を、肩に口唇状突帯を巡らす。頸部外面は幅2.4cm～2.7cmの縦位のへら磨きを6ヶ所に配する。ほかは、ナデ・ヨコナデ調整である。胎土は精選され、焼成良好で褐色を呈する。8は口径35.8cm、現存高17.5cmの開口壺で、丹塗磨研される。胴部上半に口唇状突帯を巡らす。胎土は精選されて砂粒をほとんど含まず、焼成良好である。9はほぼ直立する口縁の壺で口径16cm、現存高19.5cmを測る。10は壺の底部で横位のへら磨きを行う。胎土は精選され、焼成良好で黄褐色を呈する。11～14は甕で、いずれも底部を欠き、14を除いて丹塗磨研される。頸部のやや下に口唇状突帯を巡らし、残りのよい11・12は胴部中位にも口唇状突帯を巡らしている。口縁部の平世面には暗文を入れ、同端部は12を除いて刻み目を施す。頸部の突帯との間は縦位のへら磨き（11・13）、ハケ目調整（12）を行っている。口径は小型の13が20.8cm、大型の12が31cmである。胎土は精選され、焼成良好である。15～17は同形の甕であろう。小型で完形の15は口径26.2cm、器高25.2cmである。口縁部はヨコナデ、他はナデ調整である。16・17は胴部下位に突帯を巡らす。16は口唇状突帯が1条、17は断面が台形の突帯が2条認められる。ナデ調整さけるが16の底部は工具による擦過痕がある。

12号祭祀土壺（第100図）SD12

11号住居の下層で検出し、1号層溝の東溝に切られる。長径1.2m、短径0.9mの不整長円形を呈する。二段掘りで深さは0.55mほどである。削平され土器の出土量は少ない。

13号祭祀土壺（第101図）SD13

17・18号住居の下層に検出した。二段掘りで長径1.6m、短径0.8m程の楕円形を呈し、深さは0.3mである。甕の破片が出土した。

14号祭祀土壺（第101図）SD14

16号住居の下層に検出した。長径1.35m、短径0.9m程の楕円形を呈し、深さは0.25mほどである。削平された土器の出土量は少ない。

15号祭祀土壺（第101図）SD15

溝5を挟んで4号円形周溝の東側に検出した。長方形に近いプランを呈し、長辺2.3m、短辺1.2m程で、深さは0.5mである。

16号祭祀土壺（図版46、第101図）SD16

33号住居の下層に検出した。長径1.75m、短径1.1m程の楕円形を呈し、深さは0.95m程で深い。削平された土器の出土量は少ない。

土器（第185図） 筒形器台で丹塗磨研される。口縁部外面は縦位に6条一組の暗文を入れている。方形透し孔の上縁部で打ち欠かされている。口径14cmである。胎土は精選されてあまり砂粒を含まず、焼成は良好である。

17号祭祀土壌 (第101図) S D17

溝5の東、15号祭祀上縁の南に存在する。二段掘りでプランは長方形を呈し、長辺1.3m、短辺0.8~0.85m、深さ0.4mである。

18号祭祀土壌 (第101図) S D18

17号祭祀土壌の南に掘られ、西半部を溝5に切られる。甕を検出した。

19号祭祀土壌 (第101図) S D19

34・35号住居の下層に検出した。削平されて遺存状態は良くない。土器も小破片が若干量出土しただけである。

20号祭祀土壌 (図版46、第102図) S D20

37・38号住居に切られ、1号竪穴を切っている。長径1.35m、短径0.95mの楕円形を呈し、深さは0.45m(本来は1mほどであろう)である。37・38号住居の削平をまぬがれた部分から、割って埋めた状態で土器を検出した。

土器 (図版118、第185図) 1は筒形器台で口縁部~脚上半部を欠く。脚部径39cm、現存高32cmを測る。外面はハケ目調整後に丹塗磨研される。内面の脚部付近にハケ目を残すか縦方向のナデ調整を行い、強い指ナデ痕が残る。胎土は精選され、焼成良好で生地は明茶褐色を呈する。2は口径47.6cmを測る甕で、頸部直下に三角突帯を巡らす。外面はハケ目がよく残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、黒斑がある。

21号祭祀土壌 (第102図) S D21

中央部を溝6に切られる。楕円形のプランを呈し、長径2.55m、短径1.33m、深さ0.5mを測る。土器は甕の破片と鉢が出土している。

土器 (第186図) 1は口径12cm、器高5.5cmに復原される鉢で混入品である。2は口径18.4cm、器高8.9cmを測る鉢である。外面にハケ目が残る。砂粒を多く含み、焼成良好で淡黄色を呈する。

22号祭祀土壌 (第102図) S D22

52号住居の下層で検出した。削平され遺存状態は良くない。楕円形のプランで長径0.85m、短径0.68mを測る。甕を検出した。

土器 (第186図) 口径35.3cm、器高37.2cmを測る甕である。外面は黒漆を塗ったように見受けられる。胎土に砂粒をやや多く含み、焼成良好である。

23号祭祀土壌 (第102図) S D23

51・52号住居の下層で検出し、西半部を溝6に切られる。長径1.65m、短径0.65m不整形のプランを呈し、二段掘りで深さは0.45m(本来は0.8m程度)である。甕が出土しているが、住居の竪穴部を掘る際に削平されて、大部分が失われている。

24号祭祀土壌 (付図1) S D24

45号住居の北西隅に検出した。浅くて詳細は不明ながら、若干量の土器が出土した。

25号祭祀土壌 (第102図) S D25

49A・B号住居の下層で検出した。西端部を49B住居の主柱穴に切られる。プランは長方形に近く、長辺は1.7m程度と思われ、短辺は東側で0.8mである。削平されて浅く、深さは20cm足らずである。若干量の土器が出土した。

26号祭祀土壌 (第103図) S D26

16号廃棄土壌の床面に検出した。長径1.5m程である。遺存状態が悪く、若干量の土器が出土したのみである。

27号祭祀土壌 (第103図) S D27

72・73号住居の下層に検出した。長径1.7m、短径1m程の略台形状を呈する。深さは削平されて浅くなり、30cmに満たない。遺存状態が悪く、若干量の土器が出土しただけである。

28号祭祀土壌 (第103図) S D28

73号住居の下層に検出した。長方形に近いプランを呈し、長辺1.8m、短辺1.3m程である。削平されて浅くなり、深さは30cmに満たない。遺存状態が悪く、少量の土器が出土しただけである。

29号祭祀土壌 (第103図) S D29

73・74号住居の下層に検出した。長方形に近いプランを呈し、長辺2.5m、短辺0.9m～1.1m程である。削平されて浅くなり、深さは30cmに満たない。土器は若干量残っていた。

土器 (第186図) 筒形器台の脚掘部の破片である。脚掘部径37cm、現存高17.4cmである。ハケ目調整後、丹塗磨研される。その後、方形透し孔を4ヶ所に配する。脚掘部付近はヨコナデ、内面ハナデ調整を行う。胎土に細砂粒を含むが精選され、焼成良好である。

30号祭祀土壌 (第103図) S D30

72号住居の南東壁に切られる二段掘りの土壌である。プランは長径は不明であるが0.9mまで遺存し、短径0.85m、深さ43cmである。土器は若干残っていた。

31号祭祀土壌 (第104図) S D31

72号住居の南東で、30号祭祀土壌の東に位置し、30・32号祭祀土壌と主軸がほぼ直交する。南側は後にビットが掘り込まれている。プランは不整長方形を呈し、長辺1.7m～2m、短辺1m程度である。二段掘りでは深さ0.8mである。かなりの量の土器が出土した。

土器 (図版118、第186) 2個体しか図示できなかった。1は丹塗磨研された壺である。胴部最大径の部分に口唇状の突帯を巡らす。2は環部が碗状の高坏で脚部を欠く。全面を丹塗磨研する。口径15.4cmに復原され、残存高8.7cmである。1は胎土が精選されるが、2は砂粒を多く含み、焼成良好である。

32号祭祀土壌（第104図）SD32

大半を79号住居の西壁に切られる。プランは長方形に近く、二段掘りで長辺1.9m、短辺0.8m、深さ0.6m（本来は0.9m程度）である。土器がかなりの量出土した。

土器（図版118、第186図）1は口径34.3cm、現存高11.5cmを測る壺である。口縁部はヨコナデ、他の部分はナデ調整を行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～明茶色を呈する。2は壺の蓋で反転復原図である。口径32.6cmに復原され、現存高5.6cmである。内外面をハケ目調整し、口縁部はヨコナデを行う。3・4は壺でともに外面はハケ目がよく残る。3は口径31cmに復原され、現存高21cmを測る。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色～茶褐色を呈する。

33号祭祀土壌（第104図）SD33

79号住居の北壁際の床面下層で検出した。プランは不整形円形を呈し、二段掘りである。長径1.2m、短径0.72mで本来の深さは0.9m程度であろう。土器が少量出土した。

34号祭祀土壌（第104図）SD34

北端を78号住居に、南判を81号住居に切られる。プランは楕円形に近く二段掘り、長径1.8m、短径0.9m、深さ1.15m程度である。かなりの量の土器が出土した。

土器（第187図）1は短頸壺の蓋であろう。天井部を平たく作る。口径19cm、器高4.2cmである。器面が風化して調整が不明瞭だが、一部にハケ目残る。細砂粒を含み、焼成良好で、明茶褐色を呈する。2～4は壺で完全形品の4は口径32.2cm、器高35cmを測る。ともに外面をハケ目調整するが、4はハケ目の下にタタキ目が部分的に残る。砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈する。5は坏部が楕形の高坏で、図上で完形に復原される。脚部内面を除いて全面を丹塗磨研する。口径は13.7cm、器高16.2cmに復原される。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で生地は黄褐色である。

35号祭祀土壌（付図1）SD35

34号祭祀土壌に西接して掘られた不整形の土壌である。祭祀土器の破片が出土している。

36号祭祀土壌（付図1）SD36

75号住居の西南壁際に検出した。祭祀土器が顔を出していたが、不幸なことに掘り忘れてしまった。

37号祭祀土壌（図版47、第108図-15参照）SD37

15号廃棄土壌の北側の底面に検出した。廃棄土壌に削平されていたが、土器の残りはよかつた。全て破砕して埋められたものである。

土器（図版119、第187図）1・2は丹塗磨研された筒形器台の破片である。1は口縁部かに頸部にかけての破片で、意識的にこの部分で切り放したようである。口径12.2cm、現存高10.8cmである。4ヶ所に方形透し孔を配する。2は脚部部の破片で脚部径35cm、現存高15.5cmを

測る。4ヶ所に透し孔を配する。ともに砂粒を若干含み、焼成良好で生地は明茶褐色を呈する。3は小型の壺で、口径14.7cm、器高15.4cmを測り、胴部中に三角突帯を巡らす。底部は若干上げ底である。外面はハケ目が僅かに残り、内面はナデ消されて工具の跡だけである。胎土は精選され、焼成良好で明茶褐色を呈する。4・5は甕の蓋である。5は口径33.4cmである。ともに外面はハケ目調整される。胎土は砂粒をやや多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。6・7は甕で、6は口径30cmに復原される。ともに外面はハケ目調整される。胎土に砂粒をやや含み、焼成良好で黄茶褐色を呈する。8・9は器台で口径11cm、器高16cmである。口縁部、裾部はヨコナデし、外面はハケ目調整を行う。胎土は精選され、焼成良好で黄褐色を呈する。

38号祭祀土壘 (第105図) SD38

南側を84号住居に切られる。プランは長楕円形で底面の中央に浅いピットがある長径2.6m、短径0.8m前後、深さ0.6m程度である。かなり多量の土器が破砕されて出土した。

土器 (図版119・120、第188図) 1は直口壺で口径19.5cm、器高32.6cmを測る。外面は黒色顔料を塗布しているように見受けられる。頸部に三角突帯を巡らし、外面の底部付近はヘラ状のものでナデている。口縁部はヨコナデ、他の部分はナデ調整を行っている。細砂粒をかなり含み、焼成良好で生地は黄褐色を呈する。2は無頸壺で口径14.9cm、器高14.8cmを測る。外面は丹塗磨研される。細砂粒をかなり含み、焼成良好で生地は黄褐色を呈する。3は口径18.3cm、器高10.3cmの鉢である。外面は摩滅しているがハケ目が残る。口縁部はヨコナデ、内面ナデ調整を行う。細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。4・5は器台で口径10cm、器高15cm前後である。調整も酷似するが4の口縁部・裾部の外面はナデにより、ハケ目が消えている。砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。6は甕の蓋で、口径34cm、器高12.6cmを測る。外面はハケ目調整されるが口縁部はヨコナデ、天井部外面はナデによりハケ目が消えている。砂粒を多く含み、焼成は普通で暗褐色を呈する。7は甕で、口径30cm、器高38.2cmを測る。口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケ目調整され、内面はナデ調整を行う。細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。8は甕の底部片である。外面煤が付着する。

39号祭祀土壘 (第105図) SD39

西側の大半を83号住居に切られる。不整楕円形の二段掘りの土壘である。長径3m、短径1m程度で、深さ0.9mである。若干量の土器が出土した。

土器 (図版120、第189図) 頸部から口縁部を欠く、注口土器で注口部を欠失する。外面は丹塗磨研される。胎土は精選され、焼成は良好である。

40号祭祀土壘 (第105図) SD40

39号祭祀土壘に平行してすぐ北に掘られている。プランは楕円形で底面の西半部は傾斜している。長径2.3m、短径0.95m、深さ0.65mである。若干量の土器が出土した。

土器 (第189図) 高坏の脚部で丹塗磨研される。坏部を欠き、脚部径11cmである。胎土は

精選され、焼成良好である。

41号祭祀土壙（第105図）SD41

104号住居の下層で検出した。楕円形のプランを呈し、三段掘りである。長径2.06m、短径0.8m前後、深さ0.7mである。土器は検出していないが、土壙の形状から祭祀土壙と考えた。

42号祭祀土壙（図版47、付図1）SD42

85・86号住居の下層に検出した。掘り方はほとんど遺存せず、土器と壙底が僅かに残っていた。

土器（図版120、第185図）1は甕の蓋で口径31.4cm、器高12.5cmである。外面の上半部はハケ目が残るが、下半部はナデ消される。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、黒斑がある。2～4は甕で残りの良い3は口径31.5cm、現存高28.5cmである。口縁部はヨコナデされ、外面はハケ目調整を行う。内面はナデ調整される。ともに細砂粒を多く含み、焼成良好で、黄褐色～暗褐色を呈し、3・4は煤が付着する。5・6は器台で作り、調整とも酷似している。1は口径10.5cm、器高15.6cm、2は同10cm、15.6cmである。口縁部・裾部はヨコナデし、外面はハケ目調整、内面はナデ調整を行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。

43号祭祀土壙（図版47、付図1）SD43

84号住居のカマドと83号住居に切られる。土壙の遺存状態は良くないので図示していないが土器が多く出土した。

土器（図版120、第185図）1は鉢で、底部を欠失しており、脚が付くかどうか不明である。口径21cm、現存高9.8cmを測る。細砂粒を多く含み、焼成良好で赤褐色を呈し、黒斑がある。2・3は甕である。2は口径32cmで、外面はハケ目調整、口縁部はヨコナデ、内面はナデ調整を行う。3も調整は2に準ずる。細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈し、外面に煤が付着する。4・5は作り、調整とも酷似している。口径10.8cm、器高15.3cmである。胎土は精選され、焼成良好で黄褐色～暗褐色を呈する。6はテズクネ風の器台で器高13cmである。砂粒を多く含み、赤明茶褐色を呈する。

44号祭祀土壙（付図1）SD44

6号祭祀土壙の東に検出した不整形の土壙である。土器が少量出土した。

土器（図版120、第189図）1は黒塗りされた壺で、口径29.2cm、現存高25cmである。胴部に口唇状突起が2条巡っていたようだが、剝離して遺存しない。口縁部はヨコナデ、他はナデ調整をしている。胎土は精選され、焼成良好で生地は褐色である。2も壺だが口縁部・底部を欠く。器面は摩滅しているが内面に僅かにハケ目が残る。砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を呈する。

7 廃棄土壌

溝2以南において18基(程)の廃棄土壌を検出した。1～7号廃棄土壌は当初、この部分の地山面が他よりも低く、大溝だと誤って調査を行い、土壌と認識していなかった。一定程度掘り下げた時点で土壌が多数切り合っている事に気付く、その時は切り合い関係を確認することができる状況ではなかった。よって、この部分では、掘りあげた後の遺構の状況から7基程の廃棄土壌が存在しそうだ、という程度のごとで、数基の増加があるかもしれない。しかし、出土土器は、切り合っている2～5号住居に関係する土器を除けば、8世紀頃のものである。

この遺跡の調査区内では、廃棄土壌と同時期頃の遺構の存在が僅かしか確認されておらず、その性格については、“廃棄土壌”としたが、なお検討の余地がある。確かに、この種の土壌では、焼上・灰・壊れた土器等の実生活に密着した人口遺物(廃棄物)等が出土している場合がほとんどである。現象的側面から見れば、確かに“廃棄土壌”であろう。しかし、これらのモノを廃棄する行為の過程を考える時、現在の私共が現象論的に認知し得る背後の状況は古代人の奥深い情念を痛切に感じさせる。しかし「ソノ時ノ人」の精神の軌跡までここで考察することは至難の業で、“廃棄土壌”にはなお検討の余地がある、ということの問題提起しておきたい。

この遺跡の調査区内だけで判断すれば、廃棄土壌は一定程度のまとまりがある。大きく分ければ、ひとつは1～13号の北半部に検出されたグループ、ふたつ目は14号が鍵となり、調査区西側に展開が想定されるグループ、みつつ目は15～17号を含めて調査区の西側に展開が想定されるグループ、よつつ目が18号から東側に展開が想定されるグループである。広く調査する機会が今後あれば、それらに伴う遺構も明らかになろう。

1～7号廃棄土壌(付図1) HD1～HD7

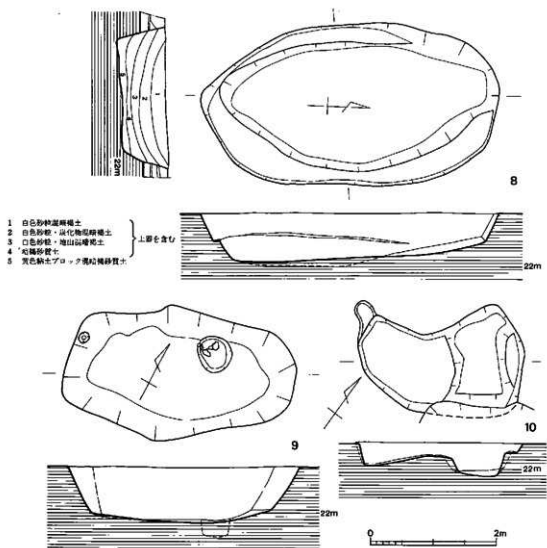
調査経過が上述のようで、説明できない。

土器(第190図)6・7号廃棄土壌の土器を1点ずつ図示した。両者とも甕の口縁部で内面の頸部直下から強いへう削りを行う。口縁部はヨコナア調整を行う。胎土に細砂粒を若干含み、焼成良好で明茶褐色を呈する。

8号廃棄土壌(第106図) HD8

21・22号住居を切っている。プランは楕円形を呈し、長径4.7m、短径2.55m、深さ0.7m程である。土砂の地積状況は、最下層(5)が自然に堆積した後、生活廃棄物を捨てている。

土器(第190図)1・2は甕でともに小片である。3はカマドの支脚に使用された可能性が強い小型の甕である。ともに胎土に細砂粒を含み、焼成良好で明茶褐色を呈するが、3は外面に煤が付着する。



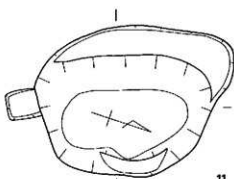
第106図 廃棄土坑実測図① (1/60)

9号廃棄土坑 (第106図) HD 9

23・24号住居を切る。不整楕円形のプランを呈し、長径3.65m、短径2m前後、深さ0.85m程度である。多量の土器が出土した。

土器 (第190図) 1・2はよく似た甕である。内面の頸部直下より下はへら削りされ、口縁部はヨコナデを行う。砂粒は若干量含み、焼成良好で淡褐色を呈する。3は須恵器の坏蓋である。光景14.5cmである。4は土師器で口径15.2cmで、焼成良好で茶褐色を呈する。5は土師器

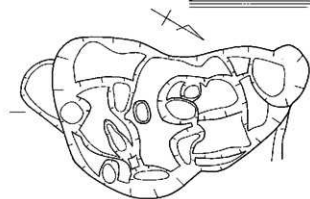
- 1 焼土粒埋戻茶褐色土
- 2 焼土粒埋戻灰茶褐色土
- 3 焼土粒埋戻灰褐色土
- 4 焼土・黄褐色粘土ブロック埋戻茶褐色土
- 5 焼土・黄褐色粘土ブロック埋戻灰色土
- 6 褐色粘質土
- 7 黄褐色粘質土
- 8 黄褐色・褐色土ブロック
- 9 灰色・褐色粘土粒埋戻黒土
- 10 灰色・褐色粘土粒多含黒土
- 11 黄褐色粘土
- 12 淡黄色砂質土



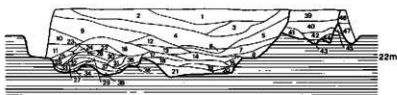
11



22m



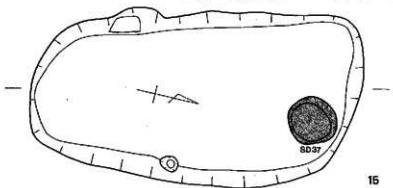
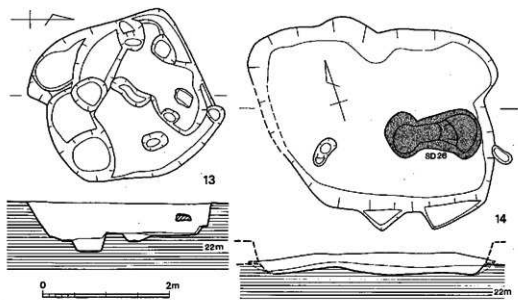
12



22m

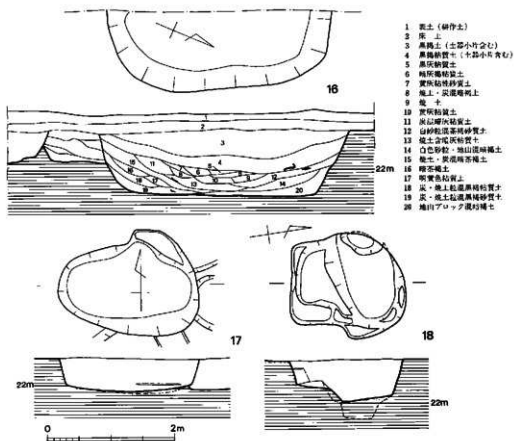
- 1 焼土粒埋戻灰褐色土
- 2 焼土埋戻灰褐色土
- 3 焼土ブロック含灰褐色土
- 4 焼土粒埋戻灰褐色土
- 5 焼土埋戻灰褐色土
- 6 焼土・黄褐色粘土埋戻灰褐色土
- 7 焼土・黄褐色粘土埋戻灰褐色土
- 8 黄褐色粘土ブロック
- 9 灰褐色土
- 10 褐色灰褐色土
- 11 黒土
- 12 黄褐色粘土ブロック含灰褐色土
- 13 褐色黒土
- 14 黄褐色粘土ブロック多含灰褐色土
- 15 黄褐色粘土粒埋戻灰褐色土
- 16 黄褐色粘土粒埋戻灰褐色土
- 17 黄褐色粘土粒多含灰褐色土
- 18 黄褐色粘土粒多含灰褐色土
- 19 黄褐色粘土ブロック埋戻灰褐色土
- 20 黄褐色粘土ブロック埋戻灰褐色土
- 21 黄褐色粘土ブロック多含灰褐色土
- 22 黄褐色粘土ブロック多含灰褐色土
- 23 黄褐色粘土ブロック多含灰褐色土
- 24 黄褐色粘土粒埋戻灰褐色土
- 25 黄褐色粘土ブロック多含灰褐色土
- 26 黄褐色粘土ブロック多含灰褐色土
- 27 黄褐色粘土粒含灰褐色土
- 28 褐色粘質土
- 29 黄褐色粘土ブロック多含灰褐色土
- 30 黄褐色土
- 31 黄褐色砂質土埋戻灰褐色土
- 32 褐色灰褐色土
- 33 黄褐色土
- 34 黄褐色砂質土埋戻灰褐色土
- 35 黄褐色粘土ブロック埋戻灰褐色土
- 36 黄褐色粘土ブロック埋戻灰褐色土
- 37 黄褐色粘土ブロック埋戻灰褐色土
- 38 黄褐色粘土ブロック埋戻灰褐色土
- 39 黄褐色土
- 40 黄褐色土ブロック
- 41 黄褐色粘質土
- 42 黄褐色土
- 43 黄褐色土・黒土埋戻灰褐色土
- 44 黄褐色土
- 45 灰褐色土
- 46 黒土
- 47 黄褐色粘土ブロック埋戻灰褐色土

第107図 鹿棄土坑実測図② (1/60)



1 黑褐色土(赤褐色粘質土粒混入) 2 暗黑棕色土(赤褐色粘質土粒混入) 3 暗黑褐色土(赤褐色粘質土粒混入) 4 暗黃褐色土(赤褐色粘質土粒混入) 5 暗黑棕色土(赤褐色粘質土粒混入) 6 暗黑褐色土(赤褐色粘質土粒混入) 7 暗黃棕色土(赤褐色粘質土粒混入) 8 暗黃棕色土混入暗褐色土(赤褐色粘質土粒混入) 9 暗黃褐色土(黃白色粘質土粒混入) 10 暗黑綠色土混入黃褐色粘質土 11 暗黑褐色土(赤褐色粘質土粒混入) 12 暗黑褐色土(暗黃褐色粘質土粒混入) 13 暗褐色土(黃褐色粘質土混入) 14 暗褐色土(黃褐色粘質土混入) 15 黃褐色粘質土混入暗褐色土 16 暗褐色土混入暗黑褐色土 17 暗黑褐色土(暗黃褐色粘質土混入) 18 暗黑褐色土混入黃褐色粘質土 19 暗褐色土(暗黃褐色粘質土混入) 20 暗灰褐色土 21 暗褐色土 22 暗褐色土(暗黃褐色粘質土混入) 23 暗灰褐色土混入暗褐色土(暗黃褐色粘質土混入) 24 暗灰褐色土混入暗褐色土 25 暗黑棕色土

第108圖 鹿棄土擴充測圖③ (1/60)



第109図 鹿棄土壙実測図④（1/60）

の坏で口径16cmに復原される。胎土は精選され、焼成普通程度で明茶褐色である。6・7は支脚に使われた甕の破片であろう。口縁部付近は摩滅している。8は丸底の大型の鉢であろう。口径37cmに復原される。外面に煤が付着している。9はほぼ平底に甕で、口径23.4cm、器高32.2cmである。内面の頸部以下はダイナミックにヘラ削りを行う。口縁部内面・胴部下半部に煤が付着する。

鉄製品（図版54・55、第117図-9・22）9は長さ11cmで断面が正方形を呈し、先端が細くなる。上端は錆のため形状は不明である。用途は不明。22は直径4.3cmの紡錘車である。中央の円孔は錆のため不明である。

18号鹿棄土壙（第106図）HD18

9号鹿棄土壙のすぐ西に接して掘り込まれている。不整形の土壙で、長径2.6m、短径1.3m、深さは最深部で0.6mである。出土資料は9号鹿棄土壙と同様であり、図示していない。

11号廃棄土壌 (第107図) HD11

28号住居・3号円形周溝を切っている。西側に深さ35cmほどの段が付き、プランは不整形円形を呈する。長径2.8m、短径2.35m、深さ1~1.15mである。埋土は西から流れ込んだ状況を示し、灰・焼土等が土器とともに捨てられている。

土器 (第191図) 1~4は須恵器である。1は坏蓋の小片である口縁部はかなり退化している。1~4は坏身の小片である。これらは胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で灰色~青灰色を呈す。5・7・8は支脚に転用された甕で胴部下半は二次加熱を受けて変色する。完形に図上復原される7は口径13.4cm、器高12.3cmを測る。6は甕の小片で、口径24cmに復原される。9は甕には小さく、把手付の甕であろう。10は上げ底風の底部の破片で全形は不明である。5~10の土師器は、6・8は砂粒を多く含むが他は砂粒の混入が少なく、焼成は良好で明茶褐色を基調とする。

12号廃棄土壌 (第107図) HD12

30号住居の中に掘り込まれ、不整形プランを呈する。あるいは複数の土壌が切り合っている可能性がある。長径4m、短径1.6m~2.5mで、底面は凹凸が激しいが深さは0.8~1.1m程度である。埋土に灰・焼土等カマド関係のものや地山の粘質土が含まれ、これらとともに土器・石製品が出土した。

土器 (第191図) 1・2は須恵器で、2は生焼けである。1は口径15cm、器高2.7cmを測る杯蓋である。砂粒をやや多く含み、焼成は普通程度で白黄色~明茶褐色を呈する。2は口径12.6cmに復原され、器高4.2cmを測る坏身である。白黄色である。3~5は皿で図上で完形品に復原される5は口径22cm、器高3.5cmを測る。これらの皿は胎土にあまり砂粒を含まず、焼成良好で黄褐色~明茶褐色を呈する。6は甕の小片である。口径26cmに復原される。内面の頸部以下はダイナミックにヘラ削りを行う。

石製品 (図版62、第122図-16) 粘板岩かと思われる石材で作られている。刀の柄のような形状をしている。残存長7.1cm、幅3.4cm、厚さ2.2cmである。

13号廃棄土壌 (第108図) HD13

33・39・40号住居を切っている。不整形の土壌でピットが多数存在する。長辺2.5m、短辺2m、深さ0.5m程度である。焼土・灰・砥石等の生活廃棄物が出土した。

14号廃棄土壌 (第108図) HD14

55号住居の西隅を切り、26号祭祀土壌を削平している。プランは不整形で長辺3.5m、短辺2.7m、深さは30cmほどだが、本来は60cm程度はあったろう。焼土・灰等の生活廃棄物に混じって土器・石製品が出土した。

土器 (第191図) 1・2とも須恵器である。1は坏蓋の小片で口径17cmに復原される。2は平瓶で底部にヘラ記号がある。

石製品（第124図-40）砂岩製の粗砥の破片で、両の表・裏面を使用している。

15号廃棄土壌（第108図）HD15

83号住居のはば中央に掘り込まれている。略楕円形を呈し、長径5.25m、短径2.75m、深さ0.7m程度である。37号祭祀土壌を削平し、墳底に僅かに残る。埋土は他の廃棄土壌と同様に、焼土・灰・粘土等の生活廃棄物とともに、土器・土製品・鉄製品を検出した。

土器（第192・193図）須恵器（1～7・10～12・20・21）と土師器を多量に検出した。図示したのは極く一部である。1～3は坏蓋で完形で小型の2は口径13.7cm、大型の3は18.9cmである。4～7は坏身で完形の6はゆがんでおり、口径11.2cm～14.8cm、器高5.8cmである。7は高台の付かないもので、体部を薄く作り、内湾する。口径14.7cm、器高4.5cmに復原される。これらの坏身・蓋は胎土に細砂粒を含み、焼成良好で灰色～青灰色を呈する。8・9は土師器の坏で小片である。10・11は高坏で、11の坏底は極端に浅い。細部に若干の作りの相違が認められる。10は口径20.7cm、器高9.5cmに復原され、砂粒を少しふくみ焼成良好で灰色～黒灰色を呈する。11は口径21.4cm、器高7.9cmに復原され、砂粒を少し含み焼成は悪く生焼けて、灰黄色を呈する。12は壺の口縁部の破片で口径13.6cmに復原される。砂粒をやや含み、焼成良好で青灰色を呈する。13は“埴”に関係する土器で、小片のため反転復原図である。口径9.8cm、器高5cmほどに復原される。テズクネ風で内面に工具の跡が残り、外面はナデている。胎土に細砂粒を若干含み、焼成良好で淡茶褐色～赤褐色を呈し、二次加熱を受けている。14は把手付きの甕の破片で、口径11.3cm、器高8.7cmを測る。細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。15はカマドの支脚に転用された小型の甕である。16は甕の羽口片である。この土壌から鉄滓も出土している。17～19は甕の破片で、口径25cm前後である。砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、17は煤が付着している。20・21は須恵器の大甕で、21は口径20cmに復原され、現存高44cmである。ともに砂粒を多く含み、焼成良好で灰色～暗灰色を呈する。22は把手付きの甕で口径27.2cm、器高23.8cmを測る。作り・調整はダイナミックで荒く、器形もゆがんでいる。胎土に砂粒をやや多く含み、焼成良好で明茶褐色を呈し、底部に煤が付着している。

土製品（図版52-53、第116図-9）9は大型の土製模造鏡の破片である。直径7.5cm～8cmほどである。紐は高さ2cmで荒い作りである。紐孔は径3mmである。鏡の表面にあたる部分は刺離し、表面はナデ調整し、ハケ目が残る。胎土は精選され、焼成は普通程度で淡茶色を呈する。図版53の遺物は不整形の粘土（普通の土器の胎土と同じ）を焼いた（焼けた）もので、用途・性格は明確でない。

鉄製品（図版54、第117図-13）鉄鎌の茎片であろう。現存長4.3cmで断面は長方形を呈する。

16号廃棄土壌 (図版48、第109図) HD16

86・87号住居を切り、土壌の半分は調査区外に延びる。プランは楕円形を呈し、長径3.5m、深さ1.05mである。埋土には焼土・灰・炭等とともに、土器が多量に出土した。

土器 (第194図) 1・2は須恵器である。1は高坏の、2は坏身の破片で、焼成が悪く褐色～黄褐色を呈する。3～6・9は甕で完形近く復原される9は、口径23.6cm、器高31.7cmほどである。これらは胎土にあまり砂粒を含まず、焼成良好で黄褐色～明茶褐色を呈し、6・9は黒斑がある。7は甕の口縁部片であろう。8は把手付きの甕か甗になろう。

17号廃棄土壌 (第109図) HD17

16号廃棄土壌の東に検出し、86・87・89号住居を切っている。楕円形のプランを呈し、長径2.25m、短径1.5m、深さ0.5mほどである。須恵器・土師器が若干量出土した。が、図示していない。

18号廃棄土壌 (第109図) HD18

99号住居の南隅に検出した。場合によれば、方形と楕円形の2基の土壌が切り合っているのかも知れない。出土品は他の土壌と同様であり、図示していない。

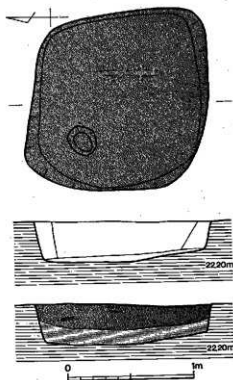
8 土 壌

単に土壌としたが、性格の不明な遺構を3基検出した。

1号土壌 (図版48、第110図) D1

2号住居のすぐ北に検出した。1.2m四方のほぼ方形のプランを呈し、深さは30cmである。上層に炭化米が、下層に焼土を検出した。炭化米は、他の土を混じえずにピッシリとははいており、焼土との分層も容易であった。土壌内から弥生時代中期の鉢を検出したが、調査区内の遺構から、この土壌の性格を判断するにはやや資料不足である。

土器 (図版195) 焼土層から出土して、ほぼ完形に復原される鉢で、口径28.4cm、器高16.3cmを測る。細砂粒を多く含み、焼成良好で淡黄褐色を呈し、外面は煤が付着している。また口縁部には黒斑がある。



第110図 1号土壌実測図 (1/30)

2号土壙（付図1）D2

51号住居の西壁に切られた状態で検出した。プランは楕円形で長径1m以上、短径0.8m、深さ36cmほどである。土器は遺構検出面から埋土上層で検出した。

土器（第195図）口径31cmに復原され、器高15.7cmを測る壺である。口縁部は“く”字形に近い。内外面にハケ目が残るが、ヨコナデ・ナデ調整で多くは消えている。胎土は細砂粒を若干含み、焼成良好で褐色を呈し、煤が付着している。

3号土壙（付図1）D3

50号住居の北西壁際で検出し、住居を切っている。プランはほぼ長方形で、長辺1.7m、短辺1.2m、深さは26cmほどである。土器は遺構検出面から埋土上層で検出した。

土器（第195図）1は二重口縁の壺の口頸部で、口径19.4cm、現存高7.3cmを測る。頸部内面に指圧痕が残る、他の部分はヨコナデされる。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を呈する。2は反転復原図で口径14cm、現存高27cmに復原される。口縁部内面、胴部上半外面にハケ目が残るが、多くはヨコナデ・ナデ調整により、消えている。細砂粒は多く含み、焼成良好で褐色～茶褐色を呈する。

9 落とし穴状遺溝

調査区中央部以南で5基の落とし穴状遺溝を検出した。この種遺溝は一般的に長方形に近いプランを呈し、壙底中央に円形のピットがある。本遺跡例の2・4号では壙底中央の円形ピットは検出してない。地山を少し掘り下げたにも関わらず、ピットは検出できなかった。3号は壙底にピットがあり、落とし穴状遺溝の中央のピットと考えていたが、この土壙だけから土器が出たし、壙底の計上が祭祀土壙と共通する部分があり、上述のように祭祀土壙の可能性が高い。当初、落とし穴状遺溝と考え、掃岡を組んだので、ここで説明する。

1号落とし穴状遺溝（図版49、第111図）O1

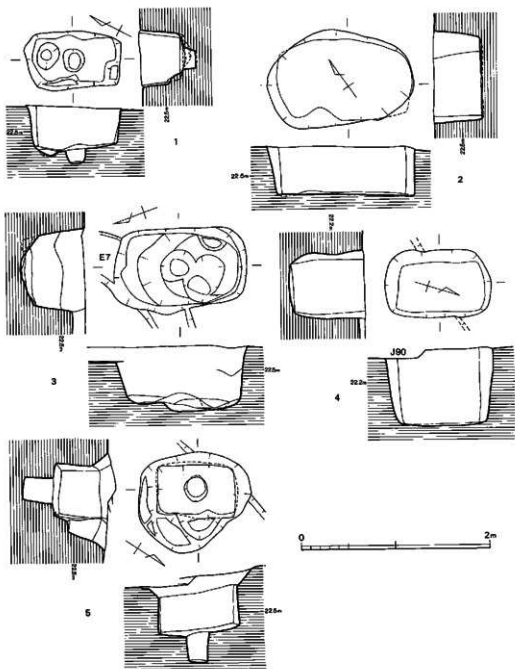
30号住居の東隅に検出し、4号円形周溝に切られる。略長方形プランを呈し、壙底中央に直径25cm、深さ15cmのピットがある。規模は長軸1m、短軸0.6m、深さ0.45mである。出土遺物は皆無である。

2号落とし穴状遺溝（図版49、第111図）O2

52号住居の東に検出した。周壁が崩落したためか、楕円形を呈する。長径1.57m、短径1m、深さ0.52mを測り、底面は平で、中央のピットはない。出土品はない。

3号落とし穴状遺溝（図版49、第111図）O3

7号円形周溝の南に検出し、周溝に切られている。隅円の長方形に近いプランで、壙底は二段になっている。長径1.4m、短径0.88m、深さ0.7m程度である。埋土上層から祭祀土壙から出土するものと同様の土器を検出した。



第111図 おとし穴状遺構実測図 (1/40)

土 器 (第195図) 1・2は壺で、完形に復原される1は口径34cm、器高31cmを測る。頸部の下半に1条の三角突帯を巡らす。胴部内面にハケ目が残るが、口縁部はヨコナエ、他の部分はナエ調整されている。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、外面は黒ずんでいる。2は丹塗磨研され、内面に丹が垂れている。胴部分中位に口唇状突帯を巡らす、摩滅している。胎土は精選され、焼成良好である。3は甕の蓋で天井部を欠くが、口径33.3cmに復原され、器高13cmほどである。外面はハケ目調整され、内面も口縁部にハケ目が残る。丹塗りされている。胎土に砂粒をあまり含まず、焼成良好で生地は白黄褐色を呈する。4は甕の底部である。砂粒を多く含み、焼成良好である。

4号落し穴状遺構 (図版50、第111図) O4

90号住居の北西壁と3号整穴に切られた状態で検出した。長方形に近いプランを呈し、長径1.1m、短径0.7m、深さ0.8mを測る。墳底は平坦で、中央にピットは検出されなかった。出土遺物は皆無である。

5号落し穴状遺構 (図版50、第111図) O5

93号住居の主柱穴に切られた状態で検出した。主柱穴はこん土壌の中央から東側に掘り込まれていた。本来のプランはほぼ長方形を呈し、墳底は平坦で中央に径25cm、深さ30cmほどのピットがある。規模は長辺1m、短辺0.7m、深さ0.6m程度である。93号住居の主柱穴に伴なう土器片以外の出土遺物はない。

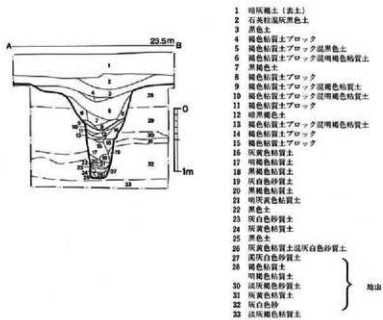
10 溝 (付図1)

B地区では、太平洋戦争時の戦機機の誘導路(調査区南の105号住居～4号周溝墓～76号住居の部分を通る)に関するものを除いて5条の溝(M2～M6)を検出した。なかでも、溝2・5は、本遺跡のどの時期に共存するのか、出土遺物に時間幅があり、出土品相互の時期的並行性から判断できる状態ではない。よって、出土遺物の示す時期幅とそれに重なる時期の遺構の面的拡がりとの関係を考慮して判断しなければならないだろう。

溝2 (付図1、第122図) M2

1号住居の南で検出し、西南西～東北東に走る。1号住居との切り合い関係は、層位的に把握できなかった。が、住居はカマド出現前のもので、溝の埋土上層で6世紀後半以降の須恵器が出土していることから、結果的に溝2が1号住居を切っていると判断する。溝の断面は幅の細いU字形を呈し、幅1.2m、深さ1.4m～1.5mほどである。土層図(122図)の10～27は故意に埋め戻されたような状況である。土層断面を切った部分で杭等の痕跡を土層で検出することはできなかったが、故意的に埋め戻された状況は杭等が立っていた可能性を示唆する。溝の下半部は細く、よって全面を発掘しなかったが、下層から弥生土器・古式土師器片も出土している。この溝は上述の須恵器の出土から、7世紀ころ埋ったと考える。

溝3 (付図1) M3



第112図 2号溝土層図 (1/60)



溝2の南に検出した。東側は溝2に接続する。幅50cm、深さ10cm程度である。石鍋の破片が出土している。

溝4 (付図1) M4

溝5の北側に検出した。南端は溝5に接続し、北端は溝2の東部を斜断して調査区外に延びる。幅1m、深さ5m程度の浅いもので、途中で途切れている。摩滅した土器小片が若干量出土しただけである。

溝5 (付図1) M5

調査区北半に検出した。9・10祭肥土壌が存在する部分で直角に屈折し、“L”字形を呈する。幅は1m前後、深さは50cm前後である。溝の南北部分は屈折部から南へ46.5mを検出し、その南側は調査区外に延び、溝6と交差すると思われる。屈折部から西は14mを検出し、その西側は調査区外に延びる。この溝は多数の遺構と切り合っている。ほとんどの場合、溝が切っているが、7号廃棄土壌に切られる。よって、この溝は6世紀後半～8世紀の間に掘られたものと考えられるが、細かい時期決定は出土遺物からはできない。

溝6 (付図1) M6

調査区南半を斜断してほぼ南北に走る溝で、両端は調査区外に延びる。この溝は重複する遺構を全て切っている。よって、溝から出土する遺物は、切り合い関係がある遺構のものを含んでおり、弥生時代中期～奈良時代までのものが多い。しかし、51号住居と切りあった部分で中世の土器を検出した(図版27-中)。よって、溝6は中世のある時期に埋ったと考えられる。

土器(第194図) 底部を欠くが、口径46.6cm、器高18.8cmを測る大型の鉢形の土器で、鍋として使用されたものであろう。口縁部の平坦面は工具による施文なされ、体部外面はハケ目調整痕が明瞭に残り、内面は上半はハケ目が残るが下半はナデ調整により、ハケ目が消えている。胎土に細砂粒・粗砂粒を若干含み、焼成良好で褐色を呈するが、煤が内外面に付着しており、全体に黒っぽい。

11 その他の出土遺物

各遺構から出土した遺物の中で、その遺構と直接関係しない遺物についてここで簡単に説明する。

縄文時代の出土品(図版59・71～74、第120図-1～4)

1はサマカイトの縦長削片を素材としたスクレである。一側縁には自然面を残し、その反対側には、片側面から調整剥離が施され、緩やかに外湾する刃部が作出される。摩滅はなく遺存状態は良好で、風化との度合から縄文時代に属するものと考えられる。

その他に、石鋸・石斧・凹み石等が出土している。それらの出土遺構については極く一部を図示しただけで、ほとんど写真図版に掲載している。

2は83号住居の覆土中から出土した偏平打製石斧で、全長13.6cm、幅8cm、厚さ1.1cmである。偏平打製石斧は9号住居の霸土中からも1点出土している。3は86号住居から出土した摩製石斧で、全長17.2cm、幅6cm、厚さ3.9cmである。太型蛤刃や偏平の摩製石斧は他に、12・52・68・73号住居、4号廃棄土壌、溝5からも出土している。4は凹み石で表採品である。長径18.5cm、短径13.5cm、厚さ7.8cmである。表・裏面が凹み、四側面は打ち欠いており、重石としても使われたようである。凹み石は他にも多量に出土しており、大小様々ある。擦り石も数点出土している。

縄文時代の石製品はかなりの量が出土しているが、土器は一点も出していない。

弥生時代の出土品（図版52・63）

投弾と石庖丁が出土している。石庖丁はすべて破片で、主に住居の覆土中から出土している。

古墳時代以降の出土品（図版65・70・75・76）

磁石・軽石製不明品・瓦片・滑石製石鍋片・陶磁器等が出土している。

磁石（図版65）は仕上磁が多く、石材は砂岩である。住居・円形周溝・溝等から出土している。すべて混入品である。

軽石製不明品（図版70）は住居と廃棄土壌から出土している。12号廃棄土壌品は円形の凹みがある。人工遺物であろうと考えるが、用途については不明である。

瓦片（図版75・76）は4号廃棄土壌から出土した（写真の注記は旧遺構名）。平瓦の破片で、斜格子のタタキが見られる。

滑石製石鍋片（図版75・76）は30号住居と溝3から出土した。ともに小片で煤が付着する。

陶磁器（図版75・76）はピットや住居から出土しているが、住居出土品も霸土中に掘り込まれたピットに含まれるとのであろう。

以上が遺構の説明の項で取り上げなかった出土品である。土器についても出土量が多く、整理期間に限りがあったため、割愛したものが多い。

表1 竪穴住居跡計測表

番号	図	主軸方位	屋内上壁	ベッド状遺構	竪穴部面積	床面積	ベッド比率	出土遺物	備考	ISNo
1	6	N-3°-E	無	-	15.4	-	-		溝2に切られる。	104(107)
2	9	N-68°-E	(A)	(A)-	(20.0)	-	-	礫1 礫石1		90
3	10	N-60°-E	(A)	A-	(19.9)	-	-	礫先1	主柱抜き後に、主柱穴に礎を埋納する	93-106
4	付図1		A	(A)-	-	-	-			92
5	付図1		?	(A)-	-	-	-	礫先1		110
6	12		?	?-	-	-	-			
7	12	N-73°-E	(A)	A(11.8)	22.5	(10.7)	52.4	礫先2 礫石1 石屑丁1		88
8	12		?	?-	-	-	-			108
9	13	N-64°-E	A	A(10.5)	22.4	(11.9)	46.9	石屑丁1 礫石石片(礫?)1		87
10	14	N-38°-W	?	(A)-	(5.1)	-	-			89
11	15	N-46°-W	無	無-	(18.6)	-	-			83
12	16	N-38°-W	無	無-	8.2	-	-	礫石1 礫石1 瓦片(礫)1		86
13	17	N-44°-E	無	無-	(18.5)	-	-	石礫2		82
14	18	N-20°-W	無	無-	(10.1)	-	-	鉄線?片1		81
15	18	N-48°-E	A	?-	(16.9)	-	-	不明鉄器1 投擲1		80
16	19	N-25°-W	無	無-	(13.8)	-	-	鉄線等?1 礫石1 礫先製品? 投擲1		78
17	20	N-66°-E	無	A(10.6)	(21.8)	(11.2)	48.6	投擲3		79
18	20	N-52°-W	無	無-	(10.1)	-	-			91
19	21			?-	(12.3)	-	-			96
20	22	N-40°-E	A	無-	(14.6)	-	-	礫1 礫石1		77
21	23	N-18°-W	無	無-	(28.5)	-	-	礫石1	カマドを有する。古墳時代後期。	76
22	25	N-79°-E	A	A((16.9))	(39.7)	(22.8)	42.6	礫石1 投擲1	主柱穴は右廻りである。	94-84
23	付図1		?	?-	-	-	-			95
24	26	N-44°-W	A	A((14.3))	(27.3)	(13.0)	52.4			85
25	27	N-55°-E	?	?-	(26.8)	-	-			75
26	27	N-55°-E	?	?-	3.1 (+)	-	-			74
27	27	N-45°-E	?	?-	8.3 (+)	-	-			73
28	28		?	?-	13.3 (+)	-	-			97
29		N-25°-E	?	?-	-	-	-	土製紡輪車1		101
30	30	N-61°-E	A	C(22.8)	53.2	30.4	42.9	礫1 凹み石1 投擲1	主柱抜き後に、主柱穴に礎を埋納する。	66
31	31	N-26°-E	無	A((10.9))	(17.0)	(6.1)	64.1			63
32	32		A	無-	(12.1)	-	-			105
33	32		無	無-	(31.1)	-	-	七五1		69
34	33	N-54°-E	B	無-	(13.4)	-	-	石屑丁1 不明礫石1		64
35	33	N-52°-E	A?	無-	(8.7)	-	-			103

注 ①屋内上壁のA・Bは第2図を参照。 ②ベッド状遺構のA-Dは第11図を参照されたい。 ③床面積は竪穴部面積からベッド状遺構の面積を引いた面積を示す。 ④ベッド比率は竪穴部面積に占めるベッド状遺構の比率を示す。 ⑤出土遺物は土器を除く。

番号	図	主軸方位	屋内土境	ベッド 状遺構	壁穴部 面積	床面積	ベッド 足跡	出土遺物	備 考	HNa
36	34	N-61°-E	A	無-	(14.7)	-	-	磁石 1		61
37	34	N-39°-E	A	無-	(17.2)	-	-	磁石 1		60
38	35	N-30°-W	A	B(18.0)	45.2	27.2	39.8	土製紡織車 1 凹み石 1		62
39	36	N-39°-W	無	無-	-	-	-	滑石製紡織車 1	カマドを有する。古墳時代後期以降に属する。	71北
40	36	N-57°-E	A	?-	(13.7)	-	-			71
41	36	N-40°-E	無	?-	(26.1)	-	-	鉄線 1 積み礫 1 石礫 1		72
42	37		無	A	(7.4)	-	-			115
43	37		無	A ?-	(16.5)	-	-	すり石 1		100
44	37	N-13°-E	無	?-	(15.2)	-	-	書留片岩紡織車 1 磁石 1		116
45	38		無	無-	-	-	-	石燈丁 1	カマドを有する。古墳時代後期。46号に切られる。	98
46	38	N-50°-W	無	無-	(25.5)	-	-		カマドを有する。古墳時代後期45号を切る。	67
47	40	N-39°-E	?	?-	(27.2)	-	-	石燈丁 1 凹み石 投弾 1		68
48	40	N-61°-E	?	?-	(27.3)	-	-	錐 1 磁石 3		114
49A	40	N-38°-W	無	無-	-	-	-			
49B	40	N-38°-W	?	?-	-	-	-			
50	付図 1		無	無-	-	-	-	投弾 1		99
51	41	N-92°-W	無	無-	(17.0)	-	-	鉄線 1	カマドを有する奈良時代の住居。	65
52	42	N-93°-W	A	B((13.4))	(32.4)	(19.0)	41.4	磁石 1 磁石 1 石燈丁 1 石片(礫) 1		37
53	43	N-80°-W	A	C((15.1))	(31.4)	(16.3)	48.1	鉄線 1 不明鉄器 1 紡織車 1	主柱穴掘り方が布掘り的である。	47
54	43		?	?-	-	-	-			
55	44		?	A ? (13.3)	(27.7)	14.4	48.0			78(134)
56	45	N-39°-E	無	A(8.7)	20.4	11.7	42.6	石燈丁 1	主柱穴は布掘りで、主柱を立てる時に要を要する。	46
57	46		?	?-	10.3	-	-			48
58	46	N-38°-E	?	?-	(20.6)	-	-	石燈丁 磁石 1		49
59	47	N-15°-E	A	A ? (12.6)	(25.0)	12.4	50.4			57
60	47	N-89°-E	?	C ?-	(36.3)	-	-	銅型(磁石) 1 磁石 1	遺骨 2 本柱の壁穴部の状況であるが、特異な主柱穴の形状から 4 本柱と見られる。	35・57
61	48	N-49°-W	?	A ? (18.0)	(20.7)	(12.7)	38.6	石片 1 磁石 1		36
62	49	N-90°-W	無	無-	11.2	-	-		カマドの痕跡あり。	38
63	付図 1		?	?-	-	-	-			45
64	付図 1		?	?-	-	-	-			33
65	付図 1		?	?-	-	-	-			
66	50	N-55°-E	A	? (13.0)	(22.4)	(9.4)	58.0	土製紡織車 1 不明鉄器 1		32
67	51	N-50°-E	A	?-	(25.9)	-	-		上層を解体しない状態で拡張したと考えられる。	39
68	52	N-85°-E	A	C(16.8)	34.6	17.8	48.5	鉄線瓦? 1 凹み石 1 不明鉄器 1 石片(礫) 1		31
69	53	N-88°-E	A	D(15.8)	25.2	9.4	62.7	凹み石 1		30
70	54	N-39°-E	A	無-	(14.3)	-	-	石片 1 投弾 1		34

番号	区	主軸方位	屋内土質	ベッド状遺構	竪穴部面積	床面積	ベッド比	出土遺物	備考	IBNo
71	55	N-40°-E	?	A? (16.8)	(33.7)	(16.9)	49.8	投弾1	西壁に小規模な張り出し部をつくる。	58
72	56	N-50°-E	A	C((15.8))	(29.5)	(13.7)	53.5	石剣1 石盾丁1		29
73	57	N-53°-E	?	A? ((9.2))	(21.0)	(11.8)	43.8	石斧(縄)1		51
74	58	N-39°-W	無	無-	(43.4)	-	-	縄2 石剣1 石盾丁2 スクレーパー1	4本柱の住居である。	52-55
75	58	N-39°-E	無	無-	(39.7)	-	-	土製銅線車1 砥石1	4本柱の住居である。	54・56
76	59	N-56°-W	無	A? (7.3)	(16.7)	(9.4)	43.7			44
77	60	N-2°-W	無	無-	(14.2)	-	-		カマドを有する奈良時代の住居。	130(58)
78	61	N-83°-E	A	? -	(31.8)	-	-	砥石3 扁平石斧(縄)1	張り出し部を持つ。	28
79	62	N-0°-E	無	? -	(22.0)	-	-	不明砥石1		27
80	63	N-57°-W	無	無-	(25.3)	-	-	土玉1 縄糸1	カマドは遺存しないが、古墳時代後期の住居である。	16
81	64	N-44°-W	無	無-	(21.0)	-	-	土製銅線車1 縄糸1 石盾丁1 石玉1	カマドを有する古墳時代後期の住居である。	17
82	66	N-35°-E	無	A? ((9.7))	(17.7)	(8.0)	54.8			53
83	68	N-5°-E	A	無-	43.0	-	-	石盾丁1	4本柱の住居である。	41
84	69	N-44°-W	無	無-	(15.8)	-	-	扁平石斧(縄?)1	カマドを有する古墳時代後期の住居である。	42
85	70		?	?	-	-	-	鉄刀1 石剣1 すり石1 不明砥石1	住居廃業後に大量の土器を投棄する。	59
86	70	N-61°-E	B	C((23.5))	(46.4)	(22.5)	46.7	鉄線1 釜1 葉先1 石盾丁1	張り出し部をもつ。住居廃業後に大量の土器を投棄する。	58(131)
87	70		?	? -	-	-	-			40
88	71	N-73°-E	無	A((10.2))	20.2	(10.0)	50.5	土玉1 石盾丁1 鉄線2		19
89	72		無	無-	(10.2)	-	-	砥石1		20
90	73		無	無-	(7.7)	-	-			18
91	74	N-77°-W	A	無? -	(26.3)	-	-		4本柱の住居である。	113
92	76	N-87°-E	B	C((24.9))	(52.8)	(27.9)	(47.1)	鉄線1 葉先1 石盾丁1 投弾1	7柱住居後に土器を遺棄する。住居廃業後に大量の土器を投棄する。	130-135
93	78	N-83°-E	無	C((14.0))	(25.8)	(11.8)	54.3	投弾1 鉄線先1 すり石1		13
94	付図1		?	? -	-	-	-			104(135)
95	79	N-80°-E	?	? -	(5.7)	-	-			6
96	80	N-36°-E	A	A((11.2))	(27.7)	(16.5)	40.4	鉄刀子1 砥石4		2
97	付図1		?	? -	-	-	-			1
98	付図1		?	? -	-	-	-			8
99	81	N-39°-E	?	A-	(21.0)	-	-	土鉢1		9-10
100	82	N-3°-E	?	A((12.5))	(23.8)	(11.3)	52.5	不明鉄器1 縄糸製品? 1		11-12
101	83	N-41°-E	A	A((5.0))	(9.6)	(4.6)	52.1			15
102	84	N-28°-W	無	無-	(19.5)	-	-		カマドを持つ古墳時代後期の住居である。	21
103	85	N-85°-E	A?	C(9.6)	(23.9)	(14.3)	40.2	葉先1 葉先0? 1 石盾丁1		21-22
104	付図1		?	? -	-	-	-			
105	付図1		?	? -	-	-	-			
106	付図1		B	? -	-	-	-			

第4章 おわりに

本章までに報告した遺構は、弥生時代後期末～古墳時代初期の集落遺構が量的に中心を占めるが、本遺跡で検出した全遺構の時期幅は、縄文時代に属すると考えられる落し穴状遺構を最古として、歴史時代にまで及んでいる。また、出土遺物は弥生時代後期末～古墳時代初期を中心とした竪穴住居跡から出土した土器は十分には整理しきれないほどの膨大な量であり、縄文時代の石製品・弥生時代中期の祭祀土器・弥生時代後期末～古墳時代初期の鉄製品や石製品等図示できないものも残った。土器編年については、その能力がないので割愛する。以下、調査・整理時に感じたいくつかの問題点について、簡単に触れてまとめかえる。

1 祭祀土壌 (付図1、第113図)

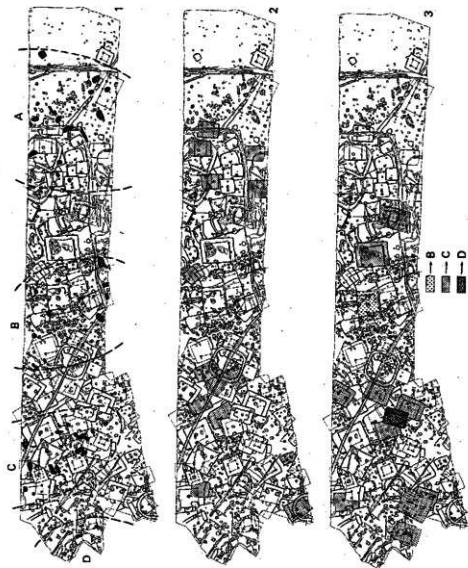
B地区全体にわたって検出したが、大きくA～Dの4グループに分けられそうである。竪穴墓は調査区内では検出していないが、本遺構跡の西側約100mの地点で竪穴から2口の甕が発見されている(註1)。よって、調査区の西側に墓地が展開すると考えられ、遺構の分布状況から墓地と祭祀土器を廃棄する場所が明確に区分されていたと推測される。祭祀土壌の平面プランと規模は多様であるが、その配置は一定の規則性が認められるものがある。土壌の主軸が並行するもの、直交するもの、の二つが目立つ。これらは、互いに意識の内において掘られたものであろう。最後に、各祭祀土壌出土土器の相互の接合関係については検討していない。祭祀土器を意識的に割って廃棄したと思われる資料が多々あるので、今後、祭祀土壌相互の出土土器の接合関係の検討は重要な要素を占めてこよう。

2 竪穴住居跡の出土遺物

竪穴住居跡には種々の生活廃棄物や祭祀遺物が含まれている。これらは、

- ① 住居に伴なうもので、住居廃棄時にそのまま放棄されたもの。
- ② 住居の個別遺構(例えば主柱穴やカマド)に伴なうもの。
- ③ 貼床下層で検出され、住居を建てる時に他の遺構を破壊して偶然的に混入したもの。
- ④ 住居廃絶後に住居内に投棄されたもの。

というように、大きく見れば四つの性格の遺物が竪穴住居跡から検出される。後世に掘り込まれたピットをそれと認識せずに、住居の覆土と一緒に掘り上げる場合も考慮すれば覆土中の遺物についての価値判断は細心の注意を要する。本遺跡では、出土遺物をかなり検討して取り上げたつもりだが、出土遺物の竪穴住居跡との関係については、一部、不明確な部分を残した。



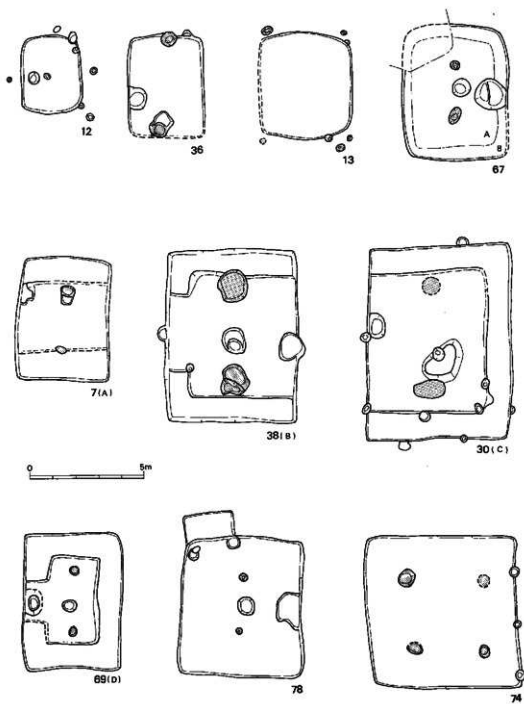
第113図 遺構配置図(1—第1世紀土壌のグルーズ、2—A型ベッド状遺構分布図、3—B~D型ベッド状遺構分布図)

本文中でも触れたが竪穴住居跡に伴う出土遺物は極めて少なく、伴う土器にも検出場所によって時間差を認めなければならない。例えば、56号住居のように主柱を立てる時に主柱穴に埋納された土器は住居建築時のものである。が、3・30・92号住居のように主柱除去後に主柱穴に埋納された土器や、住居に伴わない床面上で検出される遺物等は厳密には住居廃棄時のものである。両者に土器論上の形式差は無い場合が多い。そこに、また別個の問題を含んでいる。すなわち、耐用年数とは別の問題で竪穴住居の営続期間の問題である。それは、単に技術的な問題ではなく、極めて政治性を帯びて集落論に関わるものであり、内容が深く大きく、ここでは論及することができないので、後日の課題として残しておく。次に、廃棄された住居への生活廃棄物（土器・土製品・鉄製品・石製品等）の投棄の問題がある。出土量は土器が圧倒的に多いが、鉄製品がかなり含まれることは、今後、竪穴住居跡出土の鉄製品を考える時、細かい検討を要求されることを示唆している。まず、土器については、投棄された土器と住居に伴う土器との間に形式差を認めることが困難な場合が多い。また、住居が切り合う場合でも、各々の住居に伴う土器の間に形式差を認め難い場合が多い。しかし、出土状況は明らかに異なり、竪穴部内の覆土を細かく検討しても、住居に伴うものはほとんど床面に潰れた状態で検出され、間層を挟んで投棄された土器がほぼ完形のまま丸ごと出土する。壁際と住居中央で出土する投棄土器はほとんど完形品である。また、時として、1個体の土器を割ってそれらの破片を廃棄された別々の住居に投棄することもあったようである。このような、土器の出土状況を考える時、竪穴住居跡の営続期間とともに、竪穴住居跡の同時併存を検討する上で極めて困難な状況である。少なくとも現在、本遺跡では土器の形式論から集落を考えていくことは難しく、現在の土器編年で考えれば、形式の中に十数軒～数十軒の住居が含まれるだろう。よって、土器の細かな相違と竪穴住居跡の形状や配置から、およそそのことを想定するしかなかろうと思われる。次に鉄製品についてであるが、調査の段階から考えて自信を持って竪穴住居跡に伴うと言えるものは無い。接合すれば完形品となるものがあるが、そのようなものでさえ、捨てている。再利用は考えてなかったのではなかろうか。集落遺構として本遺跡は拠点集落の可能性も残すが、鉄製品の捨て方は異常である。

本遺跡では、出土遺物について日頃考えていたことを考慮して取り上げたつもりである。が先述のように不明確な部分も存在し、出土資料を十分に報告できない面もある。竪穴住居跡の出土遺物についての検討は、単に遺構の所属時期や土器編年の問題を越える大きな問題点が存在することを提起して、この項を終える。

3 乙隈天道町遺跡の竪穴住居跡（第113・114・115）

カマドを持つ住居を除けば、本遺跡の住居の竪穴部の形状は規模の相違を別にすれば竪穴部のプランは、およそ集成模式図（第114図）に示すように集約される。本遺跡の初期の住居はベッド状遺構を伴わないで、竪穴部のプランは12・13・36号住居のように、長方形・方形に近

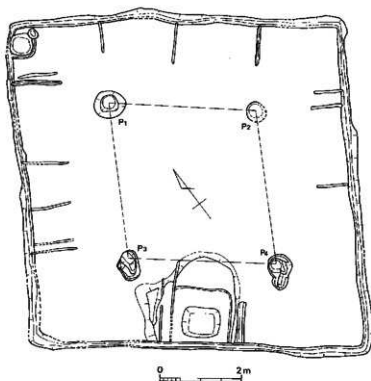


第114図 竪穴住居跡竪穴部集成図 (A~Dはベッド状遺構のタイプを示す。)

い形状を呈する。これらの住居は通常見られるように竪穴部内に主柱穴を配置せず、36号住居が両短壁際に主柱穴を配置する他は、竪穴部外に求めざるを得ない。12号住居の場合は竪穴部長壁の外にある一對の小ピットを、13号住居柱穴の場合は竪穴部隔の外にある小ピット（一つは検出してない）が主柱穴であろうと考える。主柱穴配置を竪穴部に想定すれば、住居の拡がりは相当広く考えなければならないだろう。住居の竪穴部外への拡がりを推測し得る資料として「張り出し部」（註2）の存在（71・78・86号住居）、屋内土壌の竪穴部壁外への張り出し例（34・38号住居）、竪穴部外に想定される補助柱穴の存在等があげられる。張り出し部の規模や補助柱穴の配置状態から、竪穴部外への住居拡がりは、少なくとも壁から1mの範囲を想定することができる。このことを具体的に示唆する事例として67号住居がある。この住居は前章で説明したように柱を立てたまま拡張されたと考えられる住居（第114図-67、A→B）で、30cm～65cm幅で外側に拡げ、床を貼りかえている。住居の広がりや竪穴部外に相当程度なれば不可能な作業である。このように竪穴住居の場合、範囲は明確にし難いが、竪穴部外へ相当広がるようである。

本遺跡は弥生時代終末前後を中心とするため、ベッド状遺構を伴う竪穴住居跡が多く認められる。これらはA～Dの四つのタイプに分けられる（第114図）。屋内の土壌Aの位置とベッド状遺構の関係からは、形式的にはA→Dへの発展（竪穴部内でのベッド状遺構の占める割り合いが増加する）が考えられる。どのタイプも基本的には2本の主柱で上屋を支える。数的にはAタイプのベッド状遺構を持つ住居が多く、ほぼB地区全体に存在する。Bタイプは38・52号住居の2軒で、大型の住居に認められる。Cタイプの明確な例は30・53・68・72・86・92・93・103号住居の8軒でB地区の南半に存在する。Dタイプは69号住居の1軒だけである。Aタイプは弥生時代後期半頃の土器を出土し、Dタイプは庄内式の新しい段階の土器を伴っており、本遺跡では上記の4タイプのベッド状遺構は弥生時代後半後半～古墳時代初期の間に採用されていることが分かる。これらのベッド状遺構は地山削り出しのものではなく、全て客土して造られている。その際、ベッド下層は溝状に掘り込んでいる。微高地上に営まれた時期の集落の場合、ベッド状遺構の構造は上記のようなものが一般的である。

ベッド状遺構を持つ時期の住居の竪穴部の平面プランは長方形を呈し、主柱は2本が一般的である、しかし、この中から正方形に近いプランの竪穴部が出てくるようで、ベッド状遺構は不明確ながら78号住居はその過程にあると考えられている。しかし、まだ2本柱の段階である。78号住居とほぼ同一のプランを呈する91号住居は4本柱であり、本遺構では91号住居の段階でベッド状遺構がなくなり、一般的に見られる4本柱となる。それ以降、74・83号住居のようにほぼ正方形に近いプランとなり、4本柱となる。ここで、60号住居が問題となろう。この住居は第47図のように、正方形プランを志向する過程にあると考えられ、主柱は4本であったらうと推測した。主柱穴の掘り方が通常の2本柱のそれと異なり、竪穴部の短壁に平行に土壌墓状



第115図 甘木市宮原遺跡C地区3号竪穴住居跡

に掘り、その両端の底面を掘り下げて、各々2本計4本の柱を立てていたようである。このように、本遺跡では、2本柱から4本柱への移行と、竪穴部平面プランの正方形への志向は軌を一のしているようである。4本柱で正方形プランの竪穴部が確立した段階をやや過ぎた頃、本集落は断絶する。それは初期須恵器が出現する直前、5世紀初頭頃だと考えるが本集落ではまだ屋内土壇

が残る。ほぼ同時期の甘木市宮原遺跡C地区3号竪穴住居跡(註3)では、竪穴部が菱形に近い正方形の平面プランを呈し、4本柱の配置も壁に平行で、二つの屋内土壇(A・B)を持っている。また、周壁に直交する多数の間切り溝が存在している。この住居は種々の重要な問題を含んでいるが、天道町遺跡との関係で当面する問題として、所属時期の近時性・方形に近いプランと4本柱・屋内土壇があげられる。本遺跡のこのタイプの住居は屋内土壇Aはあるが同Bは持たないが、上記3点については共通点が多い。屋内土壇周辺の土器出土状態も木蓋が腐食して土器が転落したような状態を示している。さらに、宮原遺跡でもこの時期で集落は一度断絶する。吉井町塚堂遺跡(註4)例ではこの直後の竪穴住居跡にカマド付設される。初期須恵器の出現も上記竪穴住居跡からなる集落の断絶直後頃であろう。このように、天道町遺跡では、須恵器の出現期の少し前に一度集落が途絶え、次の古墳時代後期(6世紀後半)まで集落遺構は見られない。橋口達也氏の説くように、「低地における聚落の爆発的増大ともいえる現象が5世紀初頭から前半にかけて急激に衰退する。これは聚落を山際や丘陵上に押しやり低地の聚落跡を水田化し生産性をあげるという手段であった。これと対応して地域の盟主的首長墓である、前方後円墳はその立地を変え、一般的共同体の首長墓である、小方墳・円墳の造営はほ

ば時期を同じく終焉している。これらの現象は強権力による規制としかいいようがなく、又北部九州における普遍的な現象であることから考えてもこの強権力こそまさに中央権力によるものであったと断言できよう。」(註5) という言葉を背景に考えれば、本遺跡の集落が遅くとも5世紀初頭には途絶えることは、個別天道町遺跡だけの問題ではなく北部九州全体の政治・社会状況と密接に関わっていたことが理解できよう。

以上、乙隈天道町遺跡の問題点のうち、出土遺物と竪穴住居跡について簡単に触れたが、考えなければならない問題が山積している。ここで、各問題について詳述しかねるので、機会を改めて考えてみたい。

- 註 1 井上俊男・柴田泰典・渡辺正気 「福岡県三井郡小郡町大字乙隈発見の二口の銅戈」
(『九州考古学』14 所収) 1962
- 2 児玉 真一 「竪穴住居跡に関する覚書 ー主に床面構造からの検討ー」(福岡県立小倉高等学校創立八十周年記念 『まがたま』 福岡県立小倉高等学校 考古学部 1988
- 3 福岡県教育委員会 『宮原遺跡』 I (九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告ー14ー) 1988
- 4 福岡県教育委員会 『塚堂遺跡』 I～V (一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告) 1983～1988
- 5 橋口 達也 「聚落立地の変遷と土地開発」(『東アジアの考古と歴史』中 岡崎 敬先生退官記念論集) 1987

県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告 3

乙限天道遺跡

福岡県文化財調査報告書 第86集

上 卷

平成元年3月31日

発 行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7-7

印 刷 惣西日本新聞印刷
福岡市中央区天神1丁目4番1号

福岡県行政資料

分類番号	所属コード
JH	2133051
登録年度	登録番号
63	5